
もふもふ帝国犬国紀

鵜 一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もふもふ帝国犬国紀

【Nコード】

N7489T

【作者名】

鵜 一文字

【あらすじ】

大陸西方に存在する大国、リグルア帝国の騎士クレリアは罫に嵌められて冤罪を被せられ命からがら魔物達の世界である魔王領へと逃亡する。

『氷の女神』と呼ばれ、冷酷非情と国では考えられていた彼女の本性は病気なほどの『可愛い物好き』だった。

そんな彼女が命を助けてくれた二足歩行のわんこ種族、コボルトと共に国を作っていくお話です。

o d e . s y o s e t u . c o m / n 5 3 1 2 y / に投稿します。
1 1 / 1 5 外伝投稿 日常的な話はこちら <http://nc>

『小さな飯屋の繁盛記』さんとの企画物のお知らせ

いつも読んでいただき有難う御座います。

私の知り合いである『小さな飯屋の繁盛記』を書いておられる大原雪船さんからモフモフ帝国とのコラボを書いて頂けるといいうお話を頂きました。

以下が予告になります。

それは・・・変態の起こした事故が原因だった。

「あっ！？この陣の数字が間違っている。となると・・・どこに行った？」

「……はど……？」

少年が飛ばされたのは異世界。戸惑う少年は突然何者かに連れ去られる！！

その行き先は -

「犬さん拾ってきたよ。」

「犬じゃないよ、コボルトだよ。」

「わんわんしゃん」

「犬・・・ですかね？えっと・・・とりあえず何か食べます？けど、犬って何が駄目なんでしたっけね。」

小さな一軒の飯屋だった。

「僕の名前はモフモフ帝国皇帝シバです。」

犬耳尻尾の癒し系！！コボルト族の魔王候補兼モフモフ帝国皇帝シバ。

「これはご丁寧に。ヒノモト王配のセイヨウと申します。ここではマサハルと呼んでください。」

定石無用の腹黒系！！飯屋「良庵」店主兼ヒノモト国王配マサハル。

「うわぁ、シバちゃんってモコモコだね。」

「もかもこのふかふか。」

可愛い物好きは女の子の常識。マサハルの娘、ミコト&アスカ。

店での出会いは、楽しい一時の始まりのように思えた。
しかし・・・

「シュテン童子？？それって確かオオエ山の大妖じゃないですか。」
伝説の妖魔、シュテン童子復活。その矛先は大きな魔力を持つシバに向けられていた。

「僕のせいで、この国の人達に迷惑が……。」

「仕方ありません。倒しに行きましょう。」

突如襲い掛かったヒノモトの危機に二人は討伐を決意する。

「兵が使えないのですか??」

「そんな……」

まさに孤立無援。しかし、彼らには心強い味方がいた!!

「もふもふこそ天が与えた……コホン。シバ様の前に立ち塞がるものは私が倒す!!」

もふもふ上等!!もふもふを汚す者に生きる価値なし。モフモフ帝国大元帥クレリア・フォンベルグ。

「主、戦か!!楽しくなってきたぞ!!けどその前に腹ごしらえだ。」

「バトル上等!!三度の飯も好きだが戦いも大好き。『良庵』店員がウ。」

そして待ち受けるは伝説の鬼。

「我が名はシュテン童子。人間どもよ、我に全てを献上せよ。」

「たかが、四人でこのわしを倒そうとは片腹痛いわ!!」

「父様、シバちゃん。無事に帰ってきてね。」

「父しゃま……」

この戦いの末に待っているのは??

ヒノモト・モフモフ帝国の運命は如何に！！

そういうわけで、他の方が書いて下さる作品になります。

もふもふ帝国の外伝、あちらの話としても外伝の位置づけになるかと思っています。

実力のある方ですので、期待できる作品になる……と、個人的に楽しみにしてます。

<http://ncode.syosetu.com/n9381t/>

『小さな飯屋の繁盛記』はこちらになります。

今後ともよろしく願います。

一〜二章までの舞台、死の森の地図

友人のKさんから頂きました。

絵で見るとわかりやすいですね。本当に有難う御座います。

> i 3 2 9 4 9 — 4 1 8 9 <

死の森の九つの地域の内、現在の舞台になっている部分の地図。
南はターフェ達エルキー領、北東部の北は別の中立部族の住む山地
になっています。

この地図より西はオーク領。

今後の話で出てくることになります。

一章の戦争などもこちらの地図で場所を確認しつつ想像していただければ幸いです。

位置関係などもわかりやすいかもしれません。

文字で全て表現したいのですが中々難しいですね。

建国の章 プロローグ

——コボルトとは。

魔物・獣人族の中の犬人科に属する生き物である。コボルト族は自身を狼人だと主張しているが、身体的特徴からそれを認めることは難しい。彼らは非常に愛嬌のある顔をしている二足歩行の犬である。

主に彼らは森や森に近い草原に群れを作って集落を形成しており、人間より多少小柄で非力ではあるが手先の器用さと俊敏さを利用して小動物の狩猟や採集、簡単な畑を作って生活を営んでいる。

また、特に織物を得意としており、その技量は『鍛冶のドワーフ、織物のコボルト』と称されるほどである。が、不幸なことにこの技術のことを知られるのは、殆どの地域で彼らが奴隷として乱獲され、絶滅した後であった。現在彼らが住んでいるのは、魔王領のみだと考えられている。

彼らは総じて人間並みの高い知性を持ち、個体によっては精霊魔法を扱う上位種もいる。

上位種は他の種族の上位種と同様に人に近い容姿を持っている。何故上位種になるほど人に近くなるのかは学者の間でも長年議論されているが答えは出ていない。

性格は臆病だが温厚、そして礼儀正しい。人を襲うことはまず無い。魔物であるのに、時に天敵であるはずの人間やハーフェルフの捨て子をきちんと教育して育てていたり、森で迷ったと旅人を助けたりといった行動すら報告されている。

これらのエピソードでもっとも有名なのは『氷の女神』と呼ばれている元人間、クレリア・フォンベルグがコボルトに命を助けられたというものだろう。ある上位種のコボルトが彼女の命を助けたことが人間と魔物の関係を大きく変えたのは間違いなく、この事件はコボルトに関する最も有名な歴史的事件の一つである――

『魔物の生態・一章 ライオネル・ワグ著 より抜粋』

「ここまで……か……」

顔に掛かる銀色の髪をわずらわしそうに払いながら、鎧を着込んだ美しい女性は大木の下に座り込んで葉の間から漏れている日の光を浴びながら自嘲まじりに力無く呟いた。

もし、誰かがこの光景を見ていれば一枚の絵画のようだと思っに違いない。彼女はそれだけの……神から与えられたと言われても信じられる程に整った美貌を持っていた。

例え彼女が血に塗れ、赤く染まっていたとしても損なわれない程に。

彼女の名前はクレリア・フォンベルグ。『氷の女神』の異名を持つ、大国であるリグルア帝国でも剣技、集団戦共に国で有数の実力を持つと言われた『元』騎士である。

彼女は国の貴族と同僚達に罠に掛けられ、売国奴の烙印を押されて戦いながら逃げ回り……そして今、死の淵にあった。

彼女はその目立つ容姿が災いして、国外に逃げようとして失敗し、負傷し、追い詰められて魔物の巣窟である魔王領の入口、『死の森』に逃げ込み、そこで魔物とも戦い続けた。

負傷しながらも二日間生き延びることが出来たのはひとえに彼女の實力故だろう。

そんな彼女もついに疲労に伴うミスにより、致命傷を負ってしまったのである。

クレリアは巨大な木の根元に座り込んで運命を受け入れ、静かに最期の時を待っていた。

何故このようなことになったのか。

彼女が嵌められた理由は多数ある。一流の芸術品と称される程の美貌を持っていたこと、平民出身であること、男社会の騎士の中で女性なのに有数の実力を若くして持っていたこと、内心が表情に出ず、無口で誤解を受けやすかったこと、そして直接の原因となった大貴族の求婚を丁重に断ったこと。

多くの嫉妬を買う土壌があったところに、最後の事件が起爆剤となり……恥をかかされた貴族の仕返しに仲間であるはずの騎士団まで協力する事態になってしまったのである。

クレリアは貴族の求婚を断ったことや、かつての同僚と闘うことになった事を全く後悔していなかった。例えそれが自分の死に繋がるものであったとしても。

彼女は理想を曲げながった自分に満足していた。

氷のような冷たい美貌を持ち無口で自分を語らず、国中の誰からも恐れられ畏敬されてきた彼女の本当に求めるもの。理想。高位の貴族の求婚を断った理由。

（年上なんて有り得ない！ 年下のかわいい子がいいっ！）

……クレリアは可愛いものが大好きであつた。

彼女がそんな危ない、もとい、少女趣味になつてしまったのには原因がある。そもそも、彼女は騎士にはなりたくなかったのだ。

傭兵の団長の両親を持つ彼女は、人形遊びの代わりに剣を振らせれ……普通の少女に憧れる子供時代を過ごしてきた。

成長するに連れて彼女は強く美しくなつていったが、背も高く可愛さとは無縁の雰囲気へと成長してしまい……根底には劣等感が強く残つてしまつていたのである。

「あ、逃げる前に部屋処分するの……忘れちゃったな。うう、恥ずかし」

その結果、代償を求めるように可愛い人形を買い漁り……誰もが恐れて踏み入らなかつた彼女の部屋は様々な人形が占拠する桃色の

空間になっていた。

あの部屋を他人に見られるのは間違いない。追われることには後悔していないが、この件に関してだけは時を戻して欲しいと彼女は心底願う。

ま、しょうがないか……と呟いて、クレリアは木の根元に座り込みながら微笑む。

結果はこうなってしまったけれど、何だかんだで自分の思うままに生きることが出来た。最後まで自分を曲げずに貫けた。

だけど願わくばと、彼女は木に背中をもたれさせて木々の葉で隠れている天を見る。

（可愛い男の子と可愛い動物と……仲良く平和に暮らしてみたかったなあ）

諦めて目を閉じ、死を受け入れようとしたその時、正面の草むらごがそごそと動いてその中から人影が現れた。彼女の目はもうぼやけているが……その姿が彼女が追い求めていた理想の少年に見えた。何か耳が頭の上に付いている気がするけれど。

「ああーっ！ みんな、人間だ！ 怪我してるっ！ うっ、どうしようっしょっ！」

犬耳が付いた少年と可愛らしい二足歩行のわんこが慌てている光景を見ながら、クレリアは最後に神様が願いを叶えてくれたのかな……と、満足して意識を放棄した。

第一話 騎士の誓い(?)

パシャツ……ポタ……ポタ……。

小さな水の音が耳元で聞こえる。私は死んだはずでは、とクレリアは困惑しながら眼を開ける。家の中のようなうだ。さらに薄い毛布の上に寝ていることに気付く。

帝国の家と違って粗末な作りで屋根は木と枯れた植物で出来ているが、ちよつと丸っこい感じがして不思議な温かみがある気がする。ここはどこだろう。

魔王領である『死の森』であんな怪我を負った以上助かるわけがない。けど今、自分は森の中ではなくどこかの家にいて生きている。

「あ、人間さん起きたっ！ よかった！ 間に合ったんだ！」
「……？」

仰向けに寝ながら顔だけ横に向けると褐色の肌の清潔そうな白い服を着た、犬のような耳を頭に付けた可愛らしい少年が邪気のない満面の笑みで、桶に入れた布を絞っていた。

他にも同じような服を着た背が低くてまるっとした二足歩行のわんこが側に並んでちよこんと座り、クレリアを心配そうに見ている。彼女は現状を理解すると……ふう……と息を吐いて微笑んで呟く。

「ふ……なんだ、天国か」

「お姉さん、生きてますって！ その一応……ごめんなさい！」

身体に痛みはない。少しでも身体起こして周りの様子を窺うと、家の入り口には近くに座っているわんこ達が怖々と外からこちらを覗いていた。

クレリアは何故かびくびくと震えながら謝っている少年だけが人間に近いことを不思議に感じつつも聞き返す。

「何故謝る。私は致命傷だったはず。助けてくれたのだろうか？ 礼を言わねばならん」

「う……怒らない？ 怖いことしない？」

泣きそうな顔で少年が俯き、近くのわんこ二人が震えながら抱き合う。クレリアは必死に込み上げてくる抱きしめたくなる気持ちを抑えながら必死に歯を食いしばっていた。

そんな表情を見て、彼女が怒っていると思ったのか、さらに少年が涙目になる。

自分の失敗に気がつくと、クレリアはなるべく努力して微笑みながら少年を見る。

「私は命の恩人に八つ当たりするような礼儀知らずではない。説明してくれ」

「あの怪我だと絶対に治療が間に合わないから、僕の眷属にしちゃったんです」

「眷属？」

聞いたことのない言葉に思わず首を傾げる。すると、あわあわとどう言ったらいいかわからずに慌てている少年に変わって、抱き合って震えていたわんこの内一匹がコホンと咳払いをして説明してくれた。見かけによらず低くて渋い声だ。

ニヤニヤしそうになるのを我慢して真剣に聞く。

「人間殿、魔王という存在はご存知かな？」

「聞いたことはある。魔物達の王だろう。人間には不干涉だと聞いている」

こくりとわんこが頷く。愛らしいふさふさな小型犬の顔を上下に何度も動かし、彼(?)は続ける。ぷにぷにの肉球の付いた小さな手を大袈裟に振り上げながら。

「本来魔王は魔王を倒した者が引き継ぐのじゃが、今回の引継ぎでは……なんと相打ちになってしまったのですじゃ！」

「ふむ……するとどうなる？」

「魔王になる資格を持つ全族長が一時的に不老となり、魔王候補となるのじゃ。そのうち一つが我らが狼人……対外的にはコボルトと呼ばれておるのじゃが……狼の血を引く一族なのじゃ。そこにおられる若様はコボルト族唯一の上位種、魔王候補にあられる狼の中の狼ですじゃー！」

クレリアは突っ込みたくなるのを必死で我慢する。冷静冷静……犬じゃない……狼……狼に見えなくも……無理無理。どうみても彼らは犬……しかも愛玩犬……。

笑わないように力いっぱい拳を握って笑いの波が去っていくまで顔を下に向ける。

こういうときは、どんな風に考えていても表情には出ない自分の顔に感謝する。

そんな彼女を見ながら声の洪いわんこの言葉を少年が引き継いだ。

「眷属っていうのは魔王候補の能力で魂の一部を分け与えて、そのなんといいますが、自分の部下にしちゃう能力なんだ。僕の影響が強く出ちゃうし、僕が死んだらお姉さんまで巻き込んだじゃう」

「一心同体にしてしまう。君が死ねば私も死ぬということか」

「はい。それだけじゃなくて、お姉さんの身体にも影響が出ちゃってます」

言われてみて立ち上がり、クレリアは自分の身体を確認する。

肌の白さはそのままだけど銀色の髪の毛は彼と同じ茶色い髪の毛になり、全体的に細くなっていた。無駄に高かった背も目の前の少年くらいまで縮んでいる。

胸に手を当てると、ここも小さくなっている。

極めつけは耳とお尻。耳の位置が頭の上に代わり、お尻には尻尾が付いているようだ。

これはもしかして私が望んでいた可愛らしい容貌じゃないだろう

か！

彼女はそう感じて嬉しさを隠せずに、少年にお礼の意味を込めて微笑む。

「随分素敵に変わったようね」

「ごめんなさい！ 僕もこんなことになるなんて知らなくて！」

「いや、いいんだ」

「許せないかもしれないけれど、僕のことならなんでもしますから」

本当に怒ってないのに……そう見えるのかな、と気落ちしながらも何度も謝る少年の顔をまじまじと見る。健康そうな褐色の肌、ちよつとやんちゃやそうに見える顔立ち。

それでいて庇護欲が沸き上がる優しいような知性を感じさせる蒼い瞳。可愛らしい耳やふさふさの尻尾も好感触だ。ドキドキと胸が高鳴るのを感じる。

少年は人間ではない。もしかして……。

「君は子供か？」

「え、成人ですが」

クレリアは眼を閉じる。やった！ 私大勝利！ と、拳を握り締め、爆発するような歓喜を内心で感じながら、あくまで少年に対してはそれを見せずにじっと彼を見て……そして静かに微笑む。

「私は君を許す。魂をわけてくれたのだ。恨む道理はない」

「あ、有難う御座います！」

「礼を言わねばならぬのは私の方なのだがな」

心底安心したような笑顔を見せる褐色の少年と、万歳しているわんこ二匹を温かい気持ちで見つめながらクレリアは彼等に助けられたことを神に感謝した。

同じ種族であるはずの人間というより心が休まる不思議な生き物……彼等との出会いを。

「若！ 仲間達に紹介しましょう」

「ここは……村が何かなのか？」

可愛らしい高い声を上げたもう一匹のわんこがクレリアの問いかけに頷く。よく観察すると服装が男二人よりちよっとお洒落な刺繍が付けられていた。

そんなわんこは、少しだけ哀しそうに俯いて言った。

「ここはコボルト族最後の村です。他の村は……散り散りでみんな大丈夫かどうか」

「何故そんなことに……ああ、戦争か」

魔王候補とやらは彼以外にもいるのだ。魔王になるために勢力争いをしていてもおかしくない。

若と呼ばれたクレリアを助けてくれた犬耳の少年は、彼女に申し

訳なさそうな……そして覚悟を決めた顔を見せて頭を下げる。

「お姉さんには謝らないといけないんです。またすぐ死んじゃうかもしれない。僕は仲間のために逃げる時間を稼がないといけないんです。僕達は弱いから」

家の外に出ると粗末な家が立ち並んでいて、渋い声と可愛い声の二匹のわんこと同じ、二足歩行する背が低くてまるっこいコボルト達が、平和そうに生活している。

族長らしい唯一人間に近い容姿を持つ彼はそんな光景を大事そうに見つめつつ、そう呟いた。

クレリアはそんな自分と同じ目線の高さになってしまった少年を真っ直ぐに見つめる。

可愛いだけじゃない……族長としての責任感もある……か。そして可愛い。

「少年。君の名前を聞かせて欲しい」
「え、シバだけど」

族長であるシバが出てきたからか、ワイワイと辺りからコボルト達が集まってくる。そんな中、彼女は膝を付き、彼の右手を取って軽く口を付け、下から困った顔の彼を見上げる。

「騎士、クレリア・フォーンベルグはシバ様を主と認め、永遠の忠

誠を誓う。我が剣と与えられた命は貴方の為に捧げる。貴方を守り……敵がいるならば、全てを打ち破りましょう」
「えっ？ えっ？」

混乱しているシバに微笑みかけ、クレリアは立ち上がると周りに集まっているコボルト達を見渡した。誰一人として自分を特別な眼で見ずに仲間として受け入れてくれているように感じていた。

魔物とは思えないお人好しさ……それが、この魔王領以外でコボルトが滅びた理由。

「私は戦闘の専門家だ。貴方達に戦う術を教える。シバ様を助ける為に協力して欲しい」

静かな口調でそう伝えると周りのコボルト達から歓声が上がった。彼らもまた族長であるシバを大切に思っているんだろうと彼女は不敵に微笑む。

コボルト達はそんな自信に溢れている彼女を尊敬の瞳で見つめていた。

「折角手に入れた私のモフモフ理想郷。誰にも潰させてたまるもんですか」

そんな彼女の私欲たっぷりな小さな呟きは幸いにも誰にも聞こえなかった。

第二話 もふもふ村戦力把握

コボルトの族長であるシバに人間の世界で集団戦の経験があることを告げた彼女は正式に彼からコボルト族を守るように命令を受けた。

この光景を見ていた族長付きの執事、コリーは後にこう手記に記している。

同士クレリアは優れた能力を持っているにも関わらず、謙虚で独断に走らず、重要な事柄は必ず命令を受け常に族長を尊重していた。

だが、当人同士のやり取りは、

「えっと、じゃあクレリアさん。お願いします」

「違う。呼び捨てで。命令で」

「えええええ！ ク、クレリア。お願いします」

半泣きで真つ赤になっているシバをクレリアは、はたから見れば冷静に見つめながら、内心は蹲ってごろごろと地面を転がらんばかりに喜んでいた。

新しく手に入れた尻尾を動かさないように苦慮しつつ、重ねて彼に告げる。

「命令で。これは大切な」

「う、うん。クレリア。皆を守れ」

「了解です。シバ様」

クレリアは涙目の彼を見て蕩けそうになるくらいの高揚感を感じながら、未だかつてこれほど情熱を持って命令をこなそうと感じた事があっただろうかと思う。

彼女は命令を受けることに喜び、生まれて初めて騎士であることに感謝していた。

こうして彼女は自分の理想郷を全力で守るために動き始めたのである。

彼女がまず着手したのは自分の身体の確認だ。かつては女性としては高い背と男にも負けない膂力を持っていたが今は身体が全然違う。

髪は銀から茶色くなっているし、背は低くなっている。シバの付きの渋い声のコボルト、コリーに剣と鎧を取ってきてもらったが、鎧は使えそうになかった。

剣も片手で使っていた剣を重く感じ、両手で扱わなければならなかった。使えないよりはいいが、現状では昔ほど戦うことは不可能そうだ。

やはり、自分だけでは難しいことを再確認する。が、

「理想の身体を手に入れた代償と思えば安すぎるかな」

クレリアはあんまり気にしてはいなかった。

次にクレリアはコボルト族の生活手段や住んでいる場所の地形、技術、武器、食料、産業などを確認する。集団戦では補給が重要となる。戦争と考えたとき、これらを活用できなければ勝利は難しい。しかしこの点は彼女の想像以上であった。

食料、産業に関しては簡易な農業の知識を持っており、織物に関しては人間以上に精巧な技術を持っている。

戦いの役に立ちそうな技術としては、小型の獣を取るための弓を作る技術をコボルトは持っていた。投石の腕もなかなかのもので、力は弱い。手先は器用であることがわかった。

彼女は仲間を率いて狩りにいつているシバに変わって自分に付いてくれているコリーに矢と石を集めて置くように頼み、同時に彼に聞く。

「どうして、これで負けるかな」

「我らはこの近辺では恥ずかしながら一番力が弱いですよ」

コリーはそう力無く俯く。その姿を見ながら、クレリアは平和そうな種族だからなあと思いを付しながら空を見た。森の中なので見えにくい。僅かに差し込む光で眼を細める。

「戦いを決めるのは力だけじゃないわ。ここを襲いそうな魔物は何？」

「貪欲な魔物、ゴブリンですよ」

ふむ……と、クレリアは考える。初戦としてはやりやすい相手だ。騎士団にいた頃に何度も戦ったが大した相手ではない。問題は増えるのが早いことか。完全に殲滅するのは至難かもしれない。

「相手の巢は判る？」

「む、探せないことはないのじゃが何を？」

「守るだけでは勝てない。散らばったわんこ……じゃない、コボルトを集めるためにもコボルト族の勝利を宣伝しなければ」

「おお、同胞を救えるとおっ！」

クレリアは感涙の涙を流すコリーの頭を撫でながら、シバの話を思い出す。

彼によるとコボルトは一つ一つの部族で毛並みが違うらしい。長いモフモフ、短いモフモフ、巻き毛のモフモフ、想像するだけで彼女のやる気は燃え上がっていた。

彼女の思いは一つ。私のモフモフコレクションを完成させる！という欲望だけだった。

「うつつ！ 我らが同胞の事まで考えていただけるとは！ このコリー、感激ですじゃ」

「今は私も同胞だ。でも、巢を壊すのは大変。いい方法思いつかない？」

コボルト族は数が多いとはいえない。それに貴重なモフモフを失

うのは大きすぎる損失だ。

彼女はなるべく被害を出さずに相手に勝つことを考えていた。コリーはうつむと唸っていたがやがて、ぽんと手を叩いた。

「聞いたことがあるですじゃ。魔王候補に降伏した魔物は逆らえなくなるとか」

「え、そうなの？」

「悲しいことじゃが、降伏した我等の同胞がゴブリン共に使い捨てに」

こんな可愛い虐めるなんて許せない！ と彼女は考えつつ、騎士としては冷静に事実を受け止める。自分の部族を守るのは種族の族長としては当然の選択だからだ。

「ん？ 近くにゴブリンの魔王候補がいるの？」

「今、そいつはオークの手下として好き放題しておるのじゃ」

コリーの答えに少しだけクレリアは眉を寄せる。彼女が考えている構想を実現することが容易ではないことを思い知らされたからだ。魔王領にもなんだか複雑な上下関係があるらしいということを、コリーの言葉から理解していた。

「私のモフモフ帝国を作るのは簡単ではないな」

「は？ 何かいいましたかな？」

「なんでもない」

情報も集める必要があるが、まずは攻めてくる相手を返り討ちにするところからか……とクレリアは判断し、どう安全に守るかを考えながらそのための準備を始めた。

第三話 建国！ もふもふ帝国

コボルト族は雑食性で肉だけでは無く、野菜も食べる。

調味料が少ないため、人間の料理と違って味は薄いがクレリアにとっては一緒に食事を取っている犬耳の少年、シバの食べ物を頼張る幸せそうな顔が最高の調味料だったため、味は全く気にしていなかった。

クレリアの住む家もシバの家に決まり、部屋も用意してもらっていたが、護衛のためと称して毎日理性を失わないように気を付けつつシバと添い寝している。

一番危ないのが彼女であるのはいうまでもない。

防衛のための準備も進み、後は訓練をすればある程度の戦力が相手であれば守りきれ目処が付いたある日のこと、食事中にシバの執事である渋い声のわんこ、コリーが慌てた様子で家に入ってきた。彼は飛び込んでくるなり嬉しそうに大声で叫んだ。

「クレリア殿！ コボルト族の皆はモフモフ帝国に賛成のようですよー！」

「なにそれ」

木製のフォークを器用に使って食事をしていたシバが、きょとんとしてクレリアを見る。

彼女は内心、もしかしくなくてもあれを聞いていたのか？ と困惑

しつつも、コリーを静かに見つめた。

勿論彼女はコリーに頼んだわけではない。

「コリー。全員ですか？」

「我やポメラを始め、コボルト族全員ですじゃ」

「私はまだ頼んでいないのですが……」

いや、それ以前に君達はそんな名前の帝国でいいのか？ という疑問も一瞬だけ湧いたが、そこはまあ可愛いしいつか、と彼女はあつさり流していた。

彼女が不思議に思っただのはここまで手早くコリーが動いた理由だ。恐らく族長付きのメイド、ポメラも彼を手伝ったのだろう。全員の賛成を集めるために。

「我らは皆、今日を生きることしか考えていなかったのじゃ。しかし、クレリア殿は先の先、新しい国を作ることまで考えておられた！ モフモフ帝国！ 実にいい！」

「ふむ……私としては問題ありません。シバ様。如何しますか？」

問題はない。何せクレリアとしては堂々と私のモフモフ帝国だ！ と高らかに宣言出来るのだ。それに帝国を名乗ることは将来、村を発展させる上で役立つかもしれない。

彼女はそう考えつつ、シバを見た。彼は全く悩んだりせず、からっと笑っていた。

「みんながそれでいいならいいよ。クレリア。どうすればいい？」
「シバ様がよろしいのでしたら。明日の朝、皆を集めて集会を行いましょう。それから……」

多分、呑気に可愛らしく笑っているシバは帝国を作ること
がどんな意味を持つかわかっていないだろうとクレリアは考えてい
た。

帝国を作れば当然に皇帝はシバである。それはいい。彼女の可愛
いものヒエラルキーのトップに位置しているのはシバだからだ。ま
さに皇帝に相応しい。

むしろ神。最高神である。

問題は名前だ。シバという名前はクレリアにとっては神聖で素晴
らしいものであるが皇帝としては威厳に欠けてしまう。

変えたくない、だが、変えないのも困る。彼女は悩んでいた。

「シバ様。帝国を作る際に重要になることがあります」

「へーそうなんだ。クレリアは物知りだね。何が必要なの？」

「有難う御座います。それは名前です。コボルトにはファーストネ
ームしかありません。シバ様は不老ですが、本来皇帝というものは
引継ぎをしていきます。引き継ぐための名前……セカンドネームが
必要なのです」

なるほどねーとシバはうんうんと頷く。

「でもさ。どんな名前にすればいいのかな？」

「難しいです。シバ様ご自身で考えていただかなければ」

内心泣きそうなのを我慢しながら彼女はシバに進言する。
可愛いのにシバって名前……。

「僕はクレリアに考えて欲しいな」

「私……ですか？」

「よくわからない僕が考えるより素敵な名前を考えられると思うんだ。駄目かな？」

邪気のない一片もない瞳をキラキラと輝かせながら、シバは彼女を間近から上目遣いで見つめた。彼女はその表情を見るや尻尾をパタパタ忙しなく動かし、顔を真っ赤に染めながら、

その顔は反則！ 駄目！ もう負けていいかな？

と、混乱しつつ顔だけはなんとか冷静さを保って彼に頷いた。

クレリアにとってはシバが自分に任せると言った以上、彼女が考える彼に似合う最高のセカンドネームはこの世にたった一つしか存在しない。

「わかりました。それでは、フォーンベルグと」

「え、でもそれってクレリアの名前じゃ？」

きょんととして小首を傾げ、シバが不思議そうな顔をする。クレリアは嫌がっているわけではないことにほっとしつつ続ける。

「私とシバ様は魂で繋がっています。名を共にすることで、絆はさらに強靱になります」

「クレリアはそれでいいの？」

「はい。剣も命も名も……私はシバ様と共にあるのですから」

クレリアは私って天才ね！ と思いながらも胸に片手を当て、礼儀正しく一礼して微笑む。シバは嬉しそうな笑顔を彼女に向け、感動してちよつと泣きそうな顔で頭を下げた。

「ありがとう……クレリア。僕はそう名乗らせてもらうよ」
「わかりました」

これで名実ともに夫婦ですね……という、今の彼女の可愛らしい外見には似合わない黒い想いには、シバは全く気がつくことはなかった。

翌日の早朝、村の小さな広場には村に住む102名、全てのコボルトが集まっていた。

前に立つシバ、クレリア、コリー、ポメラの四人を見ながら残りのコボルト達は一糸乱れることなく、私語もせずにピシッ！ と整

列している。

クレリアはそんな光景をずっと眺めていた衝動に駆られたが、コリーに始めますじゃと促され、仕方なく話を始めた。

「先日、私が提案した帝国の建国案をコボルトの皆が賛成してくれたと聞いた。まだ、新参者である私の提案を受け入れてくれたことにまずは感謝したい。ありがとう」

コボルト達はクレリアを熱っぽい眼で見つめながら、真剣に話を聞いている。それを感じた彼女は彼らの真剣さに気付いて感動し、心を引き締めた。

「今はこの小さな村のみの名ばかりな帝国だが、私はこの帝国には希望が詰まっていると思う。コボルト達、そしてこの先仲間になる者達と共に帝国を発展させていきたい」

クレリアはシバを見た。今日はポメラが彼のために徹夜で作った刺繍の多い豪華な服を身に付けている。前に出た彼は今は緊張で身を固くして震え、服に着られている感じがした。

だけど、そのうち王として成長し、服も着こなすだろうと彼女は思った。

シバは臆病だけでも、心が広くて勇気も持っている。

「みんな、僕達は今まで逃げることはかりを考えていた。だけど、それじゃ駄目みたいだね。クレリアは非力なはずの僕達は強いって

言うんだ」

いつもの調子で彼は話している。彼やコボルト達はどうしてそこまで自分を信じてくれるのだろうか、クレリアは少し不思議にも思う。勿論嬉しいことであるけれど。

だからこそ、彼らの信頼に応えないととも。

「僕達は支配したいわけじゃない。仲間になる人は種族に関わらず受け入れたい。だからこそその帝国……そうしていきたい。他がどうでも僕達らしく。どうかね？」

コボルト達はヒソリとも喋らない。

だけど空気で彼を肯定していることが誰にでも判る。シバは笑って頷いた。

「それじゃ……クレリアを戦闘の責任者、大元帥に任命する」
「謹んで拝命します」

完璧な騎士の儀礼に則り、一礼する。
身体が小さくなくても彼女の儀礼の美しさは変わらない。

「次、書記長にコリーを任命する。帝国のこと書いてね」
「了解ですじゃー！」

執事のコリーが感涙を流しながら大きく頷く。

「最後、事務長にポメラを任命する。クレリアとみんなの連絡役ね」
「りよ、了解です！」

可愛らしい声で囁みながら、シバ付きのメイド。ポメラも必死に頷く。

「今日をモフモフ帝国歴元年の初日とし、皇帝、シバ・フォーンブルグの名においてモフモフ帝国の建国を宣言する！ みんな、がんばろうね」

帝国歴元年　モフモフ帝国建国の経緯

コボルト族の族長シバ、クレリア・フォーンベルグを眷属とし、魔王継承戦争への参加を決断。魔王候補として魔王領に名乗りを上げる。

同年、クレリア・フォーンベルグ、モフモフ帝国の建国を提案。族長シバ以下、全102名のコボルトがこれに賛成。族長シバ、シバ・フォーンベルグと改名し皇帝に就任。

皇帝シバ、クレリア・フォーンベルグを大元帥に任命。書記長に
コリー、事務長にポメラを任命。建国の志を高らかに謳い上げ、
『死の森』平定に向けて行動を開始す。

『モフモフ帝国建国紀——建国の章—— 初代帝国書記長 コリー
著 より抜粋』

第四話 帝国の初陣

なんとなく勢いで帝国を作ってしまったクレリアはシバに用意してもらった狭い部屋で一人、執事兼書記長になったコリーから分けて貰った紙に調べた情報を細かく書きながら現在の状況について考えていた。

本当ならずつとシバに付いていたい。だがそれをするとか将来的に彼が危険になってしまう。今の状況では……クレリアは、はあ、と悩ましげな溜息を吐いて自分で書いた紙を見る。

帝国の現状がその紙には箇条書にされている。

人口…… 102名。 戦闘可能な人数は約60名（防衛時）
戦闘…… 近接は不向き。 遠距離はそこそこ。
武器…… 木製、石。 鉄は自分の武器だけ。
食料…… かなり溜め込んでいる。 心配なし。
生産…… 織物、木製品。 技術は高い。
地形…… 小川が近くにある。 鉱山無し。 逃げやすいようにか高所にある。
近隣…… 北と西にゴブリンの集落（敵対）。 南はエルキーの集落（中立）。 東は人間領。
士官…… 戦闘指揮出来るのは現在自分だけ。
政務…… 適格者0。 急務ではないがそのうち必要。
商業…… 旅商人が廻っている（物々交換。 紙などの仕入れ）

シバの能力……精霊に力を借りての土木工事。戦闘には不向き（精霊が協力しない）

クレリアの最大の悩みは深刻な人手不足だった。防衛メインの今なら問題無い。

だが、自分達から戦う必要が出来たとき、戦闘指揮が出来るのが自分だけでは心許ない。

それに政治と商売……これらに関する知識が彼女は自身に欠けていることを知っていた。

自分に出来ないことを出来る人材もモフモフ帝国を発展させるために必要になる。自らの帝国とシバのためにも解決しなければと彼女は拳を握り締めた。

とりあえず、この問題は簡単にはいかないため、クレリアは当面必要になる防衛準備を進めていた。彼女が考えた防衛準備……それは、シバの能力とコボルトの技術を利用した村の簡易の要塞化。

敵が入ってこれる場所を限定し、さらに中からは投石と弓で狙いやすいように村の周囲を作り替えてしまったのである。

石や矢も大量に村の中に用意し、敵が来たときにすぐに準備できるように訓練も毎日行っている。コボルトは集団行動は得意なようにクレリアはその点は安心していた。

数名のコボルトに周囲の探索と逃げて散らばった生き残りのコボルトの搜索を頼んで置くことも忘れない。コボルトの真面目で働き者な性質を考えれば、彼らの人口を増やせばそれだけ楽になる。彼女の精神的な意味でも。

そして、忙しい日々が続き……帝国の建国を宣言してから一ヶ月。

ついにその時が来る——帝国の長い戦いの始まり。ゴブリンの襲撃である。

「クレリア様っ！ 探索に出ていたヨークから報告です！」

その報告が届いたのはクレリアがゆつくりとシバと二人、昼食を取っている時だった。

何時も通りに幸せそうにほむほむと食べている彼をガン見しながら、彼女は幸せに食事を楽しんでいたが、飛び込んできたポメラの必死な表情を見るや気持ち切り替えて立ち上がる。

「来たか？」

「はい。ゴブリン15匹！ 北からです！ ヨークは防衛準備の連絡に行きました！」

「わかった。ポメラもヨークを手伝って準備を」

ポメラに指示を出すシバの方を向き、クレリアは片膝を付いて彼の顔を見上げる。

耳を寝かせて心配そうにしているシバに彼女は安心できるように微笑み掛けた。

「心配ありません。皆、優秀ですから。さあ、シバ様……ご命令を」

「うん。気を付けてね。クレリア、村を守れ」
「了解しました。お任せを」

クレリアはシバに頭を下げて命令を受け取り、剣を手にとると暖かい家から出て、彼女にとっては久しぶりになる戦場へと向かって行った。

戦場ではコボルト達が防衛時の守備配置に付き、村の外に集まっているゴブリンと睨み合っていた。クレリアが戦場に着くと全員の視線が彼女に向い、そんな彼女に小走りでコリーが近づいて頭を下げる。

「コボルト投石隊41名、コボルト弓隊30名。準備できておりますじゃ」

「敵は15名と聞いたけど」

「正しくは18名。少し増えたですじゃ」

この一ヶ月の間に、生き延びたコボルト達が十数名程モフモフ帝国に入国している。

長毛だったり巻き毛だったりする彼等は一様に疲れ果てた顔をしていて……まだ、様々な場所に潜んでいる仲間達を村に迎え入れることの重要性を彼女は感じていた。

クレリアはコリーに黙って頷くと唯一、村の中に入る道が作られている狭い門の前に移動する。一番危険な場所。そこが彼女の守る場所だ。

自分の腰くらいの長さになってしまった元々は片手用のブロードソードを両手で軽く地面に突き刺し、良く通る高くて大きな声を張り上げた。

「勝つ準備はできている！ 同士達よ……臆するな！ モフモフ帝国の初陣だ！」

おおーっ！ と、彼女に応える明るい声があちこちから上がる。率いている数は人間の時の一割にも満たず、純粋な戦力としてはそれ以下だ。彼女自らの身体もまるで子供のように縮んでいる。にも関わらず、クレリアは人間の時以上の自信を持って相手の動きをじっと見ていた。

こちらが恐慌状態にならず、冷静なことに驚いているのかゴブリン達は中々動かなかったが、意を決して棍棒や錆びた剣などの武器を持って彼女が待つ坂になっている道を駆け上がる。

クレリアは右手を上げ、相手が迫ってくるのを待ち構えて……ギリギリまで引きつけ、

「撃てっ！」

右手を振り下ろすのと同時に、ゴブリン達に石と矢の雨が降り注ぐ。

威力が弱く、殆どが外れているが中には腕や足に矢が刺さった者もいて、予想外の抵抗に驚いたのかゴブリン達は一度下がっていった。

クレリアの前に残されたのは三匹ほどの重傷のゴブリンだけだ。守備についているコボルト達からザワザワと戸惑いの声上がる。自分達がやったことに驚いているのだらうと彼女は思ったが、止めはしなかった。

ゴブリン達は攻めるのが難しいと判断したのか、二度目の攻撃に中々来ない。クレリアは村の入口に仁王立ちし、氷のように平静な表情をしながらも内心、眉をひそめる。

ゴブリンにしては知恵が回る……。

しかし、守れば大丈夫と判断して待つ。こちらからは攻められない。

悩みながら待っていると一匹の錆びた剣を持ったゴブリンがゆっくりと近付いてきた。

「そのコボルト！ 貴殿が総大将とお見受けする」

「む……ゴブリンが喋った？」

クレリアは動揺を見せずに静かに見つめ返しつつ驚く。後ろに控えていたコリーはその言葉を聞き、おお！ そういえば！ と声を上げる。

「人間だったクレリア殿と我らが何故か喋れておりますじゃ！」

「シバの眷属になった御陰かな。これはいいね」

お陰で彼等だけでなく、まだ見ぬモフモフ達とも恐らく喋ることができる。シバに助けられてよかった……その想いをクレリアは更に強くしながら喋るゴブリンに言葉を返す。

「モフモフ帝国大元帥 クレリア・フォーンベルグだ」

「拙者はゴブリンの『剣聖』キジハタ！ 貴殿に正々堂々一騎打ちを申し込むっ！」

コボルトより少し大柄で暗褐色の肌を持つ、いかつい顔の魔物が芝居がかった古臭い言い回しで叫び、錆びた剣をビシッとクレリアに向けた。

ゴブリンといえば「ゴブゴブツ」としか言わないという先入観があった彼女は、しばらくポカンと惚けていたが、はっ！ 返答しない！ と我に返る。

「私が出る意味がない。キジハタ。君達是我々には勝てないのだから」

「長引かせると仲間が死んでしまう。拙者が負けた場合には無条件で全員降伏する」

キジハタと名乗ったゴブリンはそう宣言し、投石の届く射程圏内まで歩いてきた。騎士としては、彼（？）のような潔い戦士は嫌いではない。

もしかして、ゴブリンというのは話すことが出来ればみんなこん

なのなんだろうか。

クレリアは頭を痛めて深刻に考え込むことになった。だが、彼の条件は悪くない。

彼女はコリーに手を出さないように指示させると目の前に刺していた剣を抜き、キジハタが待つ場所へと足を進めていく。

クレリアの茶色の長い髪が西に傾き掛けている日を反射して薄らと赤く輝き、風でさらさらと流れた。彼女はキジハタの前に立つと両手で剣を構える。

「いいでしょう。『剣聖』を名乗るに相応しいか、確かめさせてもらおう」

「臆病なコボルトに貴殿の様な者がいるとは。気が乗らぬ戦いだ、が収穫があつたわ」

「気に入らない？」

キジハタはふん！ と鼻を鳴らすと警戒しながら剣を構えた。見た目はただのゴブリンにしか見えないが意外と隙がない。

「拙者に勝ち、他の者に聞け。言葉は最早無粋！」

「そうさせてもらおう」

先手を取ったのはキジハタだ。ゴブリンの身軽さを生かして一瞬で懷に踏み込んで上段から剣を振り下ろす。クレリアはその剣を受け止めながら、相手の剣の重さに驚く。

ただのゴブリンと思わないほうがいいな。

彼女は痺れる両手を気にしながら、その気を引き締める。自身が小柄なコボルトのようになって弱っていることを考えなくてもこの強さは侮れない。

それに……力任せだけの剣でもない。

「防いだか！」

「くっ！」

クレリアも驚いていたがキジハタも驚いていた。連続で放つてきた剣も防ぐ。剣の長さから近づくのは不利と判断した彼女は、近づいたキジハタを足で蹴って距離を取る。

相手にダメージは無い。非力な身に彼女は不便を感じないではないが、距離は取れたことに満足する。キジハタは蹴られるとは思っていないかったのか、警戒しながら彼もまた距離を取っている。クレリアの狙い通りだ。

「剣での戦いに蹴りを使うとは」

「親の教育が悪くて。今からは正規の剣で行く」

非難するような声を上げるキジハタに彼女は上段から切りかかる……が、簡単にかわされる。だが、これは振り下ろす速度を落としたりフェイント。

振り下ろす以上の速度で振り上げた。狙いは剣を持つ右手！

「なっ！」

「これで終わり」

剣の平で右手を叩き、パシーンと軽い音を立てさせて相手の剣を飛ばすと今度はもう一度振り下ろし、キジハタの肩を剣の平で思い切り叩いた。

痛がっているが折れてはいないだろう。だが、勝負はついた。

クレリアは油断せずにキジハタの首元に剣を突きつける。

「降伏か死か」

「殺せ……と言いたいが約束だ。降伏する。全員武器を捨てろ」

潔いキジハタに感心しながら、クレリアは他のゴブリンを見る。彼等は顔を見合わせると武器を捨てた。どうやら、彼をリーダーとして認めているようだった。

後はシバを認めさせれば魔王候補の能力で逆らえなくなるだろう。

「まさかゴブリンなのに正規の剣術を修めているとは思わなかった」
「拙者もお主のような強者がコボルトにいるとは思わなかったわ」

いかついゴブリンの表情は慣れないクレリアには分かりにくかったが、彼の声の調子からどこか満足したものを感じていた。

「コリー。怪我人を治療してあげなさい」

「はいですじゃ！ 治療班、こっちじゃ。いそげいそげーっ！」

怪我をしているゴブリン達を四人掛かりで運んでいく。キジハタは治療を断り、全員が武器を捨てて降伏するまで責任を持つと言い、その場に残った。

クレリアは全員武器を捨てたことを確認すると全員に向けて力強く宣言した。

「同士達よ！ モフモフ帝国の初勝利だ！」

「おおおおおおおおおおおっ！」

腕を振り上げると、村中のコボルトたちが大歓声を上げた。あちこちでクレリアが愛する可愛いわんこ達が抱き合って泣いている。

彼女はその光景を見ながら微笑むとキジハタについてくるよう促し、泣きながらこちらを見ているシバの元へと歩いていった。

第五話 新しい仲間達

戦いの終わったモフモフ帝国中央広場……と呼ぶことに決められた小さな広場では武器を捨てたゴ布林達が座り込んでいた。その周りではコボルト達が取り囲み、勝利の余韻からかざわざわと嬉しそうに騒いでいる。

正面には皇帝であるシバが緊張した面持ちで立ち、その隣ではクレリアが油断せずにゴ布林達を伺いながら、全員集まったことを確認する。

彼女にとって可愛いわんこであるコボルトを全員覚えることなど容易いことだ。

クレリアが手を上げるとコボルト達のざわめきがピタッと止まりピシッと整列する。

次に上に挙げた手を手のひらを上に向けながら横に伸ばすと、ザツとコボルト達が一分の無駄なく動き、男女交互に整列した。

彼女の訓練の成果である。主に軍事目的よりもちょこまか動いたり、整列してるもふもふ可愛いという欲望に突き動かされて施した訓練であった。

想像以上に彼らの覚えが良かったため彼女は調子に乗って不必要な事まで仕込んでいる。

「ぬっ、見事な動き。拙者達が破れたのも頷けるっ！」

「当然。私が彼らのかわい……いや、能力を可能な限り引き出したのだから」

しかし、残念な事にそんな彼女を止める者は現在存在しなかった。

「ところでキジハタさん。僕が言うのもなんだけど、降伏して良かったんですか？」

「後悔はない」

困ったように耳を垂れているシバは心配そうに降伏したキジハタに声を掛ける。だが、キジハタの方は目をしっかりと見開きながら座り込んで黙っていた。

その潔さが余りにもクレリアの知っているゴブリンとイメージが違いすぎて、シバの隣で彼女は苦虫を噛み殺したような顔をして困惑している。

「いや、でも、僕達はゴブリンとも闘うことになります」

「覚悟の上……いや、寧ろ進んで協力したい」

え？ と、シバは首を傾げる。ゴブリンと闘うことは自分達の仲間と闘うということ。それを進んでという彼のことシバには理解出来なかったのである。

彼にとっては仲間というのは家族だから。シバの不思議そうな顔を見て、キジハタは説明が足りていないことに気がついたのか話を続ける。

「拙者達はお主達と違い、部族同士でそれ程仲が良いわけではない。それに有力部族の腰抜けがオークに従ったお陰で拙者達少数の部族は人質に取られて脅迫される有様」

キジハタは悔しさに身を震わせて、拳を握り締める。

「このまま戦士の誇りを汚され続けるならいっそ……！」

「うーん、でも、人質が……大切なんだよね。クレリア。何とか出れない？」

「え……あ、はい。大丈夫です」

クレリアは急に話を振られて、ビクツと身体を震わせたがなんとか答える。

彼女は実のところ全く彼らの話を聞いていなかった。

先程の戦闘中、彼らの会話が人間の言葉ではなく、意識されて聞こえていることに気付いた彼女は試しに彼ら本来の音声を楽しんでいたのである。彼女の耳には真剣な表情で向かい合っている彼らの会話も、

「わぁーんゝわんわん……くうーん？」

「ゴブゴブ」

「わうーん。わんわんお！」

「ゴブ……ゴブゴブ。ゴオブゴオブゴブゴブ。ゴブゴブゴ！」

「わーん……クレリア……わーん？」

こんな風に聞こえてしまい、あまりの微笑ましさに和んでいたのである。シバにはちゃんと答えたものの彼女には彼の質問の内容がわからない。

クレリアはほんと咳払いすると、内心冷や汗をかきながらキジハタに顔を向ける。彼は立ち上がっていた。

「本当かつ！ 仲間を助けて頂けるのか！」

「シバ様の命令とあらば」

クレリアはなるほど、そういう話かとキジハタが自分から話してくれてよかったとほっとする。悩んでいたシバもクレリアの返答を聞いて、ようやくいつもの柔らかい笑顔を見せた。

ゴブリン達の降伏はちゃんと魔王候補のシバにはわかっていたらしく、ゴブリン達はすぐに解放され、みんなで仲良く食事を開いていた。

ちなみにシバに降伏したことがわかった理由をクレリアが確認したところ、

「あ、なんか僕、少しだけ魔力が上がったみたいなんだ。仲間が増えるともっと上手く精霊さん使えるようになるかも」

ほんわかとした笑顔で一杯開拓できるね！ と彼女にそう答えてシバは喜んでいた。

それはさておき、基本的に明るくてフレンドリーなコボルト達がゴブリンと親睦を深めている間、クレリアはキジハタと共に人質になっている彼の部族の仲間たちを救出する方法を検討していた。

「ふむ、集落に監視が付いているか」

「数は多くないはず。拙者の見張りは降伏したから大丈夫だ」

クレリアは考え込む。キジハタの集落に残っている人数は32名動けない者も数名いるらしく、非戦闘員も多い。戦力としては考えられない。

そして、キジハタの村を監視している者が彼の降伏を知ってしまったと、間違いなく見せしめに攻められる。

この人数とキジハタ達、そしてコボルトのみんなで要塞を築かずに防衛するのは被害がかなり出るはず……無理だ。厳しい。相手の数が多ければ全滅すら有り得る。

キジハタの村は食料の蓄えも少ないらしい。拠点としては……。

「キジハタ。貴方の村を放棄する」

「なっ！」

「モフモフ帝国に全員迎え入れる。済まない。村は守りきれない」

クレリアは頭を下げる。彼女の指揮官としての頭脳は、彼の村を守ることに益は無いと答えを出してきた。残酷だろうけれど……とそう思いつつも彼女の立場では諦めざるを得ない。

キジハタはむむつと唸っていたが、項垂れて頷く。

「拙者は族長失格だな」

「その言葉を使うのは何も出来ずに死ぬ時。この借りは必ず返すことが出来る」

胸を張って自信に満ちた態度でクレリアはキジハタを微笑みながら見る。キジハタは、まだ若干落胆していたが、わかったと首を縦に振った。

「よし、キジハタ。貴方はゴブリンの半分と狩人コボルトを15名連れて、残ってるゴブリンをモフモフ帝国に案内しなさい。私は残り半分のゴブリンを率いて見張りを倒す」

「了解した。拙者がコボルトを率いてもいいのか？」

クレリアは剣を握むとキジハタの肩をポンと叩く。

「シバ様が信じると言ってたから。さて、行くよ」

「……承知！」

この日、新たにモフモフ帝国にキジハタを始めとする50名のゴブリンが加入した。彼らの加入はモフモフ帝国に新しい可能性と問題を提起することになる。

そして翌日。

「クレリア。眠たそうだね」

「はい、シバ様……眠いです……」

先日の夜、今日に行う式典のためにクレリアはキジハタから彼の剣を預かっていた。彼の剣は他のゴブリンが使う剣と同じように錆びてはいたが……近くで見ると他の剣と違うことに彼女は気付いたのである。

正規の剣術を習得していたことを思い出した彼女は、彼から剣を預かり……そして徹夜するはめになった。だが、彼女はモフモフの為ではないのに満足していた。

一応彼女も戦士だからだろうか。

透き通った小鳥の声が響く、穏やかな朝の小さな広場に昨日と同じように全住民が集まる。コボルトもゴブリンも混ざって楽しそうに雑談しながら。

慣れてきたのかシバの緊張癖も少しずつ治っており、雰囲気も柔らかく、寝惚け眼のクレリアを見て笑っている。

そして、今日の主役が中央に出てくると全員が口を閉じて彼に注目した。

キジハタは肅々とシバの前まで歩くと、彼の前で膝を突く。どこで習ったものなのか作法もしっかりしたものだ。クレリアは心の中で驚いていた。

他の者達も、おーと、少しだけどよめいている。

「シバ様、拙者の民を受け入れて頂き感謝する」

「これからは仲間だね。これからは帝国の仲間の為に、君の剣を振るって欲しいんだ」

非力なシバは両手でキジハタの剣の柄と鞘を持って、彼に渡す。

「抜いてみて。昨日クレリアが研いでくれたんだ」

「これが……拙者の剣っ！」

錆だらけだった剣は一片の錆も欠けもない、美しい剣に生まれ変わった。彼の持っていた剣は、所謂『本物の剣』だったのである。

クレリアは何とか眼を開けてキジハタに説明する。

「元々誰の剣かは知らないけど業物だった。錆びていたのも表面だけ。それが貴方に剣を教えた者の持ち物なら、キジハタにはそれを錆びの無い心で伝える義務がある」

「クレリア殿……拙者は……いや、わかった」

キジハタは堂々と胸を張って剣を納め、深々と一礼する。
その様子を見て微笑んでいたシバが大きな声でみんなに聞こえるように告げる。

「『剣聖』キジハタを帝国軍士官、帝国軍剣術師範に任命しますっ
！」

「謹んでお引き受けする」

——ゴブリンとは。

魔物・鬼人族の中の小鬼科に属する生き物である。世界で最も数の多い種族と言われておりゴブリン族、それ一つで他とは類似性の存在しない一つの種族だと主張する学者の説も有力に主張されている。その説の根拠として世界中のゴブリンが同じ姿をしていることを彼等は挙げている。

どの地域のゴブリンも小柄な体と暗褐色の肌を持ち、人に近い容姿ではあるが頭髪はなく、犬歯はむき出しになっており、目は真っ赤で常に見開かれている。まず人と間違うことはない。

ゴブリンは世界中の至る所に存在しており、人の住んでいないところには何処にでも存在している可能性がある。戦いを生業にしているものであれば、戦ったことが無い者はいないほど見かける事の

多い魔物である。

食性は雑食性で主に動物を狩って暮らしているが、人里に降りて畑を荒らしたり人を襲うこともある。また、生活道具を略奪していることもあり、農村などではゴブリンの存在は死活問題となっていることが多い。

幸い彼等は一匹一匹は人間の大人よりも力が弱い。ただ、集団で行動する性質と粗末ながら武器を所持している場合があるため、素人は戦いを避けたほうが賢明であろう。

また、ゴブリンの上位種も存在する。彼等はゴブリンとしては体格が大きく、魔法を操る場合もあるため、専門の戦士でなければ勝つことは難しいと言われている。

ただ、ゴブリンに関しては人間の姿に近い上位種は確認されていない。だが魔王領には存在しているのが確実であると考えられている。

一般的にゴブリンの知性は低く会話は出来ない。病人や子供を狙い、喰らうなど残虐な性質もあり、人間に対しては敵対的である。彼等に出逢えばまず戦いは避けられない。

だが、非力であり戦いを生業にする者にとっては良い訓練相手である。

ただ、魔王領のゴブリンは大きく異なる。有力説が通説とならない最大の理由が彼らの存在だ。過去から現在に至るまでの長い間、学者達の間で彼等はゴブリンに近い別の何かであり、区別するべきだとの討論が行われているが外見はどう見てもゴブリンであるために結論は出ていない。詳しくは『第五章 魔王領の魔物達』で解説する。

『魔物の生態・一章 ライオネル・ワーズ著 より抜粋』

第六話 内治と外交

ゴブリンの『剣聖』キジハタが加入し、彼に防衛戦のやり方と集団戦の心得をある程度教えたことでクレリアの戦闘面での負担はある程度は軽減した。

だが、彼女の悩みがそれだけで全て解決したかというところではない。

クレリアはモフモフ帝国が抱える様々な問題に常に頭を痛めていた。

休憩しよ？ と、シバが用意してくれた水を彼と二人で飲んだり、食事を一緒にしたり、添い寝をしたり、尻尾の毛繕いを一緒にしたりしなければ……彼女は慣れない問題を抱えて精神的に潰れていたかもしれない。

その中で最大の問題となっていたのは……食料問題である。

戦えるゴ布林達と一部の志願したコボルト達はキジハタの指導の元、戦闘訓練を積んでいたが人数が増えた分は食料の消費がやはり増えてしまう。

彼等はコボルトが狩れない大型の獣も狩ることが出来るため、まだ良かったのだが……。

他の戦いに向かないゴ布林達はコボルト達ほど器用ではないために仕事も無く、元人間であるクレリアも、問題に感じた事が無か

ったキジハタもいい案が思いつかずに苦慮していた。

養う臣民が増えればそれだけの仕事と食事が必要となるのである。獵にばかり頼むのも、動物という資源は有限なため、狩りすぎると危険な上に安定しないのだ。

この大問題を解決したのはシバだった。彼はクレリアの悩みを食事中に聞くと、しばらくがうーっと唸っていたがやがてポンっと手を叩いて彼女に笑いかける。

「お芋畑を僕の力で広くできるかもしれない。成長も早められるかも。どうかな？」

「しかし、耕したり手入れする者に負担が」

「ゴ布林さん達に手伝ってもらおう？ 何だか仕事させろーっていつてたし」

ふむ、とクレリアはシバのほんわかした顔を幸せそうに眺めながら提案を検討する。

シバの能力にも使える限界がある……が、人口が増えている現状であれば、防衛や帝国の拡張だけでなく、そちらに力を割くことは出来るかもしれない。問題はない。

仮にシバの発案が実行可能であれば、食糧事情はましになるかもしれない。

クレリアは頷いてシバに微笑むと考えをまとめて彼に答えた。

「農作業の得意なコボルトを何人か政務官に任命し、指導してもらいます。これからは帝国臣民も増えるため、今回の件は良い練習になるかもしれません」

「そう。僕もみんなも慣れてないけど上手くいくといいね」

よかったよかったと食事を再開しようとして……彼は肉を掴もうとした手を止めた。そして、曇の一つもない空のように明るい瞳をクレリアに向ける。

「クレリア。一人で抱えちゃダメだよ。みんなの国だしみんなで考えていこうね？」

「わかりました」

ならよし、とシバは天使のような笑みを浮かべて食事を再開した。ぽーっと見蕩れていたクレリアが叱られたのだと気付いたのは、しばらくした後だった。

一ヶ月後、子コボルトが蝶々を追いかけてぴょんぴょん飛び跳ねている、そんな暖かい陽気の溢れるある日、シバの家ではキジハタと数名のコボルト達が集まっていた。

部屋には布に『帝国会議』と書記長のコリーが達筆で書いた物が飾られている。

そんな会議場には新しく政務官に任命されたブドルとダックスとチワ一の三人の姿もある。

ブドルは元々モフモフ帝国の住人だがダックスとチワーは滅ぼされた他のコボルト村で農業をしていた人物（？）で、それぞれ長毛わんこと短毛わんこのコボルトである。

それぞれの村のやり方を三人で話し合って考えようという狙いだ。

今回みんなが集まっているのは、これまでクレリア一人で事務長ポメラの報告を聞いていたのをみんなに聞いてもらい、彼らにも帝国のこれからを考えてもらうためである。

シバに言われたのが彼女がそうした理由だが、狭い部屋にたくさんコボルトが集まることになるので、クレリアはこれはこれで楽しくていいかもと考えていた。

みんなが集まり、席に付いたことを確認するとポメラが報告する。

「それでは、報告します」

人口……コボルト132名、ゴブリン64名

戦力……ゴブリン戦士隊30名、コボルト弓隊40名、投石隊は守備のみの予備隊

食料……農場を整備中。来季には収穫可能

生産……織物、木製品、石の鋳加工（長毛種技術）

士官……『剣聖』キジハタ、『隠密』ヨーク

政務……ブドル、ダックス、チワー（農業）

シバの能力……人口が増えると能力が上がる。農地整備技術獲得

「続いてヨークの探索隊からの報告ですが、帝国南西でオーク軍とエルキー軍の大規模な戦争があったそうです。エルキーが勝利し、オークは撤退しています。継続して調査中です」

ポメラの命でずっと探索していた黒わんこのヨークは探索が気に入ったのか、数名を率いる探索の責任者になっていた。クレリア発案の黒い装束を身に纏った彼はキジハタと仲が良く、彼に二つ名を付けてもらっていてそれを名乗っている。

そんな彼からの報告にふむふむ、とみんなが揃って頷く。

エルキーは帝国南部に住む、コボルトとは中立の関係の種族である。彼等は非常に長寿で魔法と薬の扱いに長けており、個体としては『死の森』においては屈指の強さを持っている。

また他種族の支配には興味がなく、閉鎖的で自領を守ることに終始していた。

モフモフ帝国に戻ってきたコボルト達の多くは、エルキー達の領土に逃げ込んだ者達である。彼等は支配に興味がないため、害のないコボルトに対しては興味を持たなかったのだ。

中には保護されて治療してもらった者もあり、帝国では好意的な者が多い。

クレリアは男女ともに人間に近く、整った容姿を持つという彼等に全く興味はなかったが、もふもふを保護したことは最高級に評価しており、いい関係を築ければと考えていた。

「私が挨拶に行く。協力関係を築かないとエルキーは負ける」

「ふむ、ヨーク殿の報告では少数の被害で撃退したようだが」
「長寿の種族は出産数が少ない。他種族も使わないから戦力は増えない」

クレリアの説明になるほど、とキジハタは頷いた上で、腕を組んでうつむと唸る。

「ただ、エルキーは孤高の種族。難しいのでは？」
「無理な場合は……厳しい」

咄嗟にはいい考えも浮かばず、クレリアが俯く。
そんな彼女を気遣うように皇帝であるシバは明るく笑った。

「その時はまたみんなで意見を出し合って考えることにしようよ」
「無理でも拙者達が勝手に助ければ良い。気楽に考えよう」

キジハタもそう言って笑った。他の士官達もうんうんと頷く。
クレリアはそんな様子を見て吹き出すように笑い、そうだねと呟いた。

「じゃあ、報告を続けますね。ビリケ族が数名近々帝国を訪れるそうです」
「ビリケ族？」

クレリアが聞き返す。彼女以外は知っているからか、特に反応していない。

「あ、そうでした。人間さんには縁ないですね。いろんな物を交換しながら旅をしている種族です」

「ああ、コリーが言ってた商人かな」

「はい。我々コボルトの生産した物も良く交換して頂いています」

ふむふむとクレリアは頷く。商人と聞くと彼女は人間時代の経験から抜け目のない奴ら……という偏見があつた。

善良なコボルトなら一瞬で身ぐるみが剥がされ、愛玩犬にされてしまいそうである。

彼女としてはそんなことは許せない。彼等の愛らしさは自由であつてこそ輝くものだから。

「私も取引に立ち会う。構わないか？」

「わかりました。連絡しておきます」

商売下手そうなコボルト達が心配……ということもあるが、旅をする商人のような種族……という彼等にクレリアは純粋に興味を湧いたのだ。

商売の駆け引きが出来るなら味方に引き込みたい。そんな思いもある。

様々な問題が山積みだが、モフモフ帝国は力を合わせて徐々に力を蓄えていた。

第七話 交易の拡大

モフモフ帝国はキジハタが攻めてきた後もたまに少数のコボルトやゴブリンが攻めて来ていたが彼等にはあまり戦意がなく、要塞の存在と防衛体制を見るとすぐに降伏したりさつさと逃げたりと割と平和な日々を過ごしている。

本格的な戦争が起こらないのは外的な要因が多いのだが……。

そんなとりあえずの平和が訪れているモフモフ帝国に前回の会議から一ヶ月ほど経ったある日、近々来ると報告されていたビリケ族がようやく訪れていた。

ビリケ族は人間の子供くらいの身長の種類で牛の頭を持っている。肌は黒く、体付きはどちらかというと丸っこく、筋肉質というよりはぶよぶよそうである。

ただ、そんな体でも力は強いのか自分の体より大きな荷物を包んだ布製の袋を軽々と背中に背負って、魔王領の様々な場所取引を行いつつ旅をしている。

クレリアはシバと一緒に数人のビリケ族が広場で荷物を広げて準備を行うのを見ながら、小さいけどあんまり可愛くはないなあと、こっそり残念に思いつつながら彼等の様子を伺っていた。

すると、広場の準備を一番初めに行っていた一人の牛頭……ビリケ族が二人が見ている場所へと歩いてきた。彼か彼女かどちらかは

外見では見分けられない。

そんなビリケ族の牛頭は彼女達の前に立つと軽く頭を下げて笑った。

「シバちゃんっ！ 久しぶりー。元気いー？」

「お久しぶりです。ブモーさん」

クレリアはピクツと小さく反応する。低めの声だが、彼女のセンサーは目の前のぼっちゃり二頭身牛頭が女であることに気付き、警報を鳴らしていた。

何度も会ったことがあるような好意的な様子に警戒しつつも、帝国のためにシバの隣で彼女との会話をしっかりと頭に入れる。

「いやいや、参った参った。オークの野郎は私達まで支配しようとするんよ。あいつら私等襲って荷物奪おうとするとかまじありえんっしょ！」

「ああ、今回は来るのが遅いなんて思っていたんですよ。大丈夫でしたか？」

「くうくうそんな優しいこと言ってくれるのシバちゃんだけやつ！」

大袈裟に泣き真似をしようとして抱きつこうとして……ブモーと呼ばれた彼女は間に割り込んだクレリアを抱きしめてしまう。

クレリアの氷のように冷たい蒼い瞳を間近で見たブモーはうおっ！ と叫んでクレリアを離して飛び退き、牛のような顔を強ばらせ、

用心しながらまじまじとクレリアを見た。

「ああーびっくりしたあ。あんた見たことないけど誰や？」

「クレリア・フォーンブルグ。シバ様の護衛です。よろしくお願いします」

あくまで表情を変えず、クレリアは一礼する。一瞬ブモーはぽかんとクレリアを見ていたが、彼女は気を悪くした様子もなくからからと笑って肘でシバを突つついた。

彼女の腕は短いため届いてないが。

「なんや。シバちゃんも隅に置けんなあ。こんな美人さん捕まえて」
「うん。クレリアは凄い優秀だし格好いいんだよ」

からかうようなその言葉に、邪気の欠片も感じさせないきらきらした瞳でシバは返していた。そんな彼にブモーは自分の顔を両手で覆う。

「あかん！ シバちゃんは眩しすぎる。ま、いいや……私はビリケ族のブモー。よろしくな。魔王領で今は物々交換しながら旅しとる。主に『死の森』周辺が中心やな」
「こちらこそよろしく」

手を差し出してきた彼女とクレリアは握手する。愛嬌に溢れてい

るのは相手に警戒心を与えないためだろうか。そんな風に冷めた心で彼女は考えていた。

彼女基準で可愛くない相手にはクレリアはとことん冷静である。

「そつえば先程オークに襲われたとか」

「ん、ああ、そうやけど……って、ああ！ 思い出した。最近この村が身の程知らずにも帝国名乗ったって噂があつたなあ。あんたの名前も噂に聞いてたわ！」

ブモーは愉快愉快と大笑いし、クレリアの肩をパシパシ叩く。ブモーの手は蹄っぽい堅いものが手の表面にあつて痛むため、彼女は少しだけ顔を顰める。

「ああ、ごめんごめん。今のこの村みたら本氣つてわかつたわ。あんたも可愛いコボルトとはとても思えん迫力もあるし。ああ、そうそう。襲われた話やったな」

早口で喋るだけ喋るとブモーは牛頭をコクコクと動かし、説明を始めた。

「語るも涙。聞くも涙な話でなあ」

魔王が死に、後を継ぐべき魔王を倒した魔物も相打ちで死んでし

まうと魔王領には魔王が存在しなくなってしまった。そのため次代の魔王を狙って様々な種族が争いを始めてしまう。

それまでの秩序は失われその結果、様々な悲劇が起こったのである。

クレリアが来るまでのコボルト族のように。

元々、様々な部族間の生産物を売買したり物々交換することで、裕福に生きていたブモー達ビリケ族も真っ先に色んな勢力から狙われてしまったのである。

彼等の多くは自分たちの生命と荷物を守るために、各地域で最も強い勢力の支配を受けてしまった。それを嫌がった者たちは強力な種族の存在しない地域に四散することになる。

そのうちの一つが『死の森』周辺を廻っているブモー達の一団らしい。

しかし、最近『死の森』もオーク達の勢力が強くなり、今回も彼らの仲間に襲われて逃げ回りながら遠回りをしてしまったために遅れてしまったらしい。

そこまで説明すると、はああああと牛頭のブモーは大きな溜息を吐いた。

「ここからエルキーの領土までは安全なんやけど」
「オークの領土も廻らないの？」

クレリアがそう聞くと、ブモーはとんでもないと首を横に振る。

「無理無理。一回行っただけど荷物守って命からがら逃げたわ。あんの強欲共！」

「今は他はどこを廻ってる？」

「この織物とエルキーの薬を持って、北のガルブン山地に持っていくんや。あの辺は巨龍ガルブンが魔王戦に不介入で睨みも効かしてるさかいにここより安全でな」

ふむ、とクレリアは考える。取引をしている物やコボルト達の様子を見ると暴利を貪っているとかなそういうのは無いようだ。貨幣を使っている様子もない。

「交換して……どうするの？」

「昔は魔王様が石で貨幣を作ってたけど、今じゃ重石くらいにしかならんしね。交換して余った分はみんな隠れ家に置いとるわ」

やれやれと大きなお腹をぼんぼんと叩いて頭を横に振る。

「さつさと平和になって欲しいもんや」

「なるほど。それじゃモフモフ帝国の北を抑えれば、行動しやすくなる？」

「ん、ああ。今のところ『死の森』東部を南北で歩いとるからな。他は危険やし」

クレリアの質問の意図がわからないのかブモーが短い首を傾げようとしてバランスを崩し、こけそうになる。おっとっとと倒れそうになるのをクレリアは支えた。

「ブモー。貴女に頼みがある。貴女にも益はある」
「伺いましょ」

クレリアはブモーの牛っぽい瞳に利益を求める商人のような光が浮かんだのがわかった。

「我が帝国に積極的に協力して欲しい」
「具体的にどうしろと？」
「取引されているものを見ると鉄製品とかも混じってる。その取引量を増やしたい」

うつーむ。と短い腕を組んで……届いていないが、組もうとしている仕草をしながら彼女は首を横に振る。

「そら難しいな。あんた達だけ特別扱いはできんわ」
「ああ。だから、取引する物の種類を増やしたり付加価値を上げていきたいと思ってる。幸いコボルトは手先が器用だし、人口も増える。それともう一つ」

ほう……とブモーは興味深そうにクレリアを見る。

人間のように騙して足元を見て……というのは無いようだが、こういう自分の利益に敏感なところはブモーは人間の商人達に似ているとクレリアは思っていた。

利益になることであれば、妥協点を探りながら交渉を仕掛けてくるだろうと。

「貴方達からの依頼があれば安全を確保する。報酬は貰うけど」

「報酬として多めによこせてか。姉さん本当にコボルトか？」

黙って二人は見つめ合う。はらはらして慌てているシバが何とかしようとしている中、時間だけが流れていき……ブモーが声を上げて笑った。

「シバちゃん、もし帝国さんが大きくなったら私たちの扱いどうするんや？」

「え、え？ ブモーさん平和になったら商売するんじゃないんですか？」

いきなり振られて訳も分からず、素直にシバが返事する。彼が本気でそう言っていることはクレリアにもブモーにもはっきりとわかった。

「要するに、勝つ気であるって訳か。たまげたな」

「大きな商売をする気なら投資も必要。受け売りだけど」

なるほど、でかい儲け話ね……当たれば……とブモーは小さく呟く。

そしてしばらく考えて縦に首を振った。

「まあ、私達の立場として協力出来るとは残念やけどいえん」
「はあ、やっぱりそうですね」

ブモーの返事を聞き、シバが耳を寝かせてしょぼんと俯く。しかし、彼女はわざとらしく明後日の方を向いて続ける。

「だけど、いい商品があれば高めに引き取るし、仕事は頼むかもしれないなあ。それに必要な物の注文も取れるかもしれない。うっかり計算間違え……とかもしてまうかも」

「ふふっ……うっかりなら仕方ないな。多めにもらった分は、利子を付けて返す。それと……商品の付加価値を上げる案だが、適任の者を紹介してもらえないか？」

「ここにおるもんは無理や。まあ、北で他のもんとも合流するし聞いたく」

ぽかーんと、意味が分からず惚けているシバを置いて、クレリアとブモーは二人で顔を合わせて性格の悪そうな笑い声を上げていた。

第八話 少数部族の取込 前編

旅する商売人の魔物、ビリケ族のブーモが訪れてから二ヶ月ほどの時が流れた。

これまでコボルト達は自分達が作った物を集め、全員に分配してそれぞれ生活に必要な物を購入していた。だが、人口が増えるとそのやり方も考えなくてはならない。

ビリケ族が行商しにくる物は戦いを左右するほどの価値がある鉄なども混じっているからだ。ガルブン山地に住む、ドゥーケン族という魔物が鉄の精錬技術を持っており、ビリケ族は彼等と様々な物を交換することで鉄製品を手に入れている。

当面、モフモフ帝国では全生産物を一度集め、そのうち三割を帝国の運営の為に預かり、残りを職業別に臣民に分けている。現在戦闘する物は食料調達や農業もこなしているため、生産専門の者より多めに渡しているのである。

貨幣が現在使うことができないためのクレリアとしては苦肉の政策であった。

皇帝であるシバを始め、お気楽な住人たちはあんまり気にはしなかったが。

定例となっている会議は前と違って新しく建てられた平屋の大き

な建物で行われている。シバの家では手狭になってしまったからだ。中央には大きな机が置かれ、前には大きなボードに『帝国会議』と達筆の文字で書かれた布が全員から見えるように堂々と飾られている。

上座の中央に座ったシバがにこにこ微笑みながら全員揃ったことを確認すると、隣に座るクレリアを見て頷き、彼女がメイド兼事務長であるポメラに始めるようにと促す。

「それでは、報告します」

人口……コボルト族142名、ゴ布林族66名、ビリケ族3名
戦力……ゴ布林戦士隊30名、コボルト弓隊40名、投石隊は守備のみの予備隊

食料……農場運用開始。経過は順調

生産……織物、木製品、石の鋸加工、革の加工（ビリケ族技術）

政務……モーヴ（産業）

防衛……帝国の住居を広めに拡張予定。防衛線の変更計画必要

「私からは以上です。えっと、続いて農業担当のダックスさんから」

毛がふさふさで少しだけ固めのポメラが、さらつとした長めの白い毛を持つコボルトに顔を向ける。ダックスは余所から命からがら逃げてきた長毛種のコボルトだ。

違うのは毛並みくらいで真面目で可愛いコボルトらしさは同

じ……だけど、毛並みが綺麗でちよつと上品そうに見えるというのが、クレリアの評である。

ダックスの報告は農場の広さと管理、ゴブリンに対する技術指導。ただ、これ以上広くするなら水がもっと必要になると彼は報告していた。

「続いてモーヴさん」

モーヴはモフモフ帝国の産業を発展させるために牛頭のビリケ族から派遣されてきた青年（？）でコボルトの手先の器用さを活かす方法を考えている。

後はビリケ族との折衝にも当たっている。

「とりあえず、うちの加工技術を覚えてもらおうかと思ってる。この村でも猫はよくやってるみたいだし、まずは無駄を無くすところからやなあ。後は早めに安全な道を整備して欲しいな」

身体のぽっちゃりした牛頭のモーヴは身体に似合わない小さな低めの声でそう報告し、慌てない慌てないと全員を笑顔で見回して呟いた。

「次はキジハタさん」

「ああ、そうであった。今回は拙者も報告する」

ポメラに振られて、ゴブリンのキジハタがこほんと咳払いする。
慣れない事であるため、少しだけ緊張した面持ちで彼は立ち上が
って説明を始めた。

「まず一点、拙者が剣を教えたコボルト達だが、些かただの戦士に
するには勿体無い。防衛施設の作り方など、ゴ布林には無い知識
もある。上手い活用法を考えて欲しい」

「了解した。私も考えるが案を思いついたら教えて欲しい」

軍事に関しての総責任者であるクレリアがそう答えるとキジハタ
は頷き、次の話に移る。クレリアはこういった報告のやり方も最近
ではキジハタに考えさせていた。

ゴブリンとしては賢い彼は彼なりに気づいたことを報告している。

「続いてビリケ族からの頼みである交易路の確保なんだが、まずは
ビリケ族に書いてもらった地図を見て欲しい」

そういつて、彼は布に『死の森』全体の地図を書いたものを机に
広げる。

全体は九つに分割されていて、中央から見て東にモフモフ帝国の
位置を表す木製のコボルト人形をコトツと置く。

続いてデフォルメされたエルキー人形を中央から見て南と南東に
置き、それ以外にオーク人形を置く。そして小型のオーク人形をモ
フモフ帝国の近くに置いた。

「モーヴ殿と探索に出ているコボルト族の『隠密』ヨーク殿の報告でわかった勢力図だ」

キジハタがそう説明し、彼の話を受けているクレリアとモーヴ以外の全員が難しいなあと首を捻りながら必死に理解しようと頭を乗り出して説明を聞いていた。

クレリアはそんな光景を微笑ましい視線で見つめながら、珍しく真面目に今後どうするかを一緒に考えていた。

彼女は元々騎士であって、戦うことには慣れていたが戦争の目的などを考える戦略の知識は、机上の学問しか知らなかったからである。

キジハタは更に……と、説明を続ける。

「オークの支配が比較的弱い北東部、東部では怪盗ロシアンなる者が、横暴なオークや我らゴブリンに執拗に嫌がらせを仕掛けている……という状況らしい」

説明を聞いてみんながうんうん唸る中、初めに声を上げたのは皇帝であるシバだった。

彼は初めは立ち上がって好奇心溢れる目で地図を見ていたが、はっと気付いたように椅子に座った。そんな彼の様子をじっと見ていたクレリアは彼に問いかける。

「シバ様、どうされましたか？」

「うん、僕達の近所にも僕達みたいな力の弱い種族がいるから、大丈夫かなって」

自分達の住む東地域にある小さなオークの人形を見て、しょんぼりした様子のシバはそう返した。クレリアは説明を求めるように、物知りなコリーに顔を向ける。

会議の様子を記録していた彼は頷くとゆっくりと渋い声で説明を始めた。

「我々の住む地域はコボルト、ゴブリンの他にも様々な種族が住んでいるのですじゃ。その中にはシバ様のご友人たるブルー様もおられるのですじゃ」

「その友人もコボルト？」

外見は興味なさそうにクレリアはコリーに顔を向ける。内心、絶対に捕獲……もとい、保護すると心に誓いながら。

「いや、彼等は虎の血を引く獰猛な種族、ケットシー族ですじゃ。ま、彼等は強かな連中じゃし、そう簡単に捕まったりはしないと思うですじゃ」

「ケットシー族は僕らと同じくらいの身長に猫の頭をもった種族なんだ。楽器とかが凄く得意で、ふらっと現れるブルーの笛をみんな本当に楽しみにしてたんだよ」

コリーの説明をシバが引き継ぐ。クレリアは彼等の話からケット

シーの姿を想像した。

人間の世界では聞かない魔物だ。身長は同じくらい……見られている理由がわからず首をかしげているコリーの頭を猫に置き換える。

その二足歩行する猫達が楽器を鳴らし笛を吹いており……そんな彼等の近くではシバやわんこ達が笑顔で手を叩いて音楽を楽しんでいる。わんわんにゃーにゃーと。

「何その天国」

「は？」

思わず呟いてしまったクレリアをキジハタが訝しげに見る。

「いや、何でもない。シバ様、モフモフ帝国の防衛体制は私かキジハタが残れば完璧です。ここはまず東地域の平和を取り戻すのは如何でしょうか」

「そんなこと出来るの？」

不安そうなシバにクレリアは自信を持って頷く。彼女にも特に確実な自信があったわけではなかったが、どんな困難でも乗り越える気迫だけはあった。

クレリアに続くようにキジハタも立ち上がる。

「シバ様。拙者も出来ると思う。小さな部族に順番に協力を求めれ

ば帝国の仲間が増える。仲間が増えればシバ様が強くなる……恐らくクレリア殿も。動く時かもしれませぬ」
「みんなはどう？」

シバが顔をぐるっと見渡すとみんながシバを見て頷いていた。彼は頷くとじっとクレリアの顔を見る。彼女は頷いた。

「キジハタは防衛を。私は剣を使えるコボルト達を連れて少数部族を訪ねて回る」

「承知。お気を付けて」

会議が終わると心配そうなシバをクレリアは抱きしめて、可愛さ成分を補充し、剣を持って新しいもふもふを求めて『死の森』東部の少数部族を廻る旅を始めた。

第九話 少数部族の取込 中編

キジハタに剣を学んだ堅い雰囲気のコボルト達に案内されながら、クレリアは東地域の集落を順番に回っていた。中には家が壊されたり燃やされた後が残っている集落も多く、オークやそれに協力する者達の侵攻の酷さを感じさせる。

「ぐるる……」

「遅くなってごめんね。もう大丈夫だから」

廃墟のような場所でやせ細りながらも生き残っていた者達の中には、大人もいたが子供が特に多かった。大人達に逃がされていたのかもしれない。

クレリアは汚れた彼らを抱きしめ、噛み付かれたりしながらも優しく声を掛け、落ち着いたら食事を与えてコボルトを付けて帝国へと案内させていた。

クレリアは彼等が生き延びていたことに喜びながらも疑問に思っていた。彼等が何ヶ月も生き延びるのは大変だ。食料の蓄えも無かったはずだ。

「これだけ生き延びるには子供には大変なはず……誰が……」
「お姉ちゃん、さっきは噛んでごめんなさい」

頭を胸に埋めて泣いている子供のコボルトにクレリアは微笑む。

「いいのよ」

「怪盗ロシアンが……みんなを助けてくれたんだ。だけど、もらった食べ物も全部無くなっちゃって……えぐっ……どうしようかと……」

頭を撫でながらクレリアは報告書にもあつた怪盗ロシアンという魔物について考えていた。彼女がこういう廃墟で怪盗ロシアンの名を聞いたのはここだけではない。

オーク達に滅ぼされた集落はコボルトもゴブリンも分け隔てなく彼とその仲間を名乗る者に助けられている。彼等は一様に怪盗ロシアンに感謝していた。

多くの者を助けながらオーク陣営への破壊工作も行っているという、怪盗ロシアンにクレリアは興味を持っていた。可愛ければいいなど……ついでに優秀なら仲間にと。

オーク達に降伏した戦意ある集落は後に残しておき、一度帝国に帰還して案内をさせたコボルトと合流すると、クレリアは残るケツトシーの集落を目指した。

彼らの集落はその殆どが巧妙に隠されているらしく、後でも大丈夫だと判断したのである。シバ達も親友であるケツトシー族のブルイがいる集落しか知らなかった。

コボルトに案内してもらいながらクレリアも森の中を駆けていく。人口が増えるに連れて彼女の身体能力は上がっており、当初の人口の倍以上になった現在ではコボルト達と同じ獣のような身軽さを身に付けていた。

そんなことより彼女は力が戻っても身体が大きくならないことに心底ほっとしていたが。

コボルト達にクレリアが案内された場所は、普通に木が生え、草が生い茂った辺りと変わらない何の変哲もない森だった。

案内していたコボルトの中の年長わんこは立ち止まるとクレリアに到着を告げる。

「クレリア様。ここです」

「ただの森に見えるけれど？」

「少々お待ちを……ブルー殿っ！ シバ様の遣いのシュナウザーです！」

他のコボルトよりちよつとだけ凛々しい彼が渋い声で叫ぶと周囲の木々が、がちやつと開く。クレリアは木の中をくり抜いて家にしているのかと感心していた。

「彼等は森に偽装しているのです」

「なるほどね……彼等がケットシー族……虎の血を引く部族」

木々の中からは三十名程の色々な毛並みのちよつとふつくらした身体、猫……もとい虎の頭を持つ愛嬌ある二足歩行の獣人達が集まっていた。

楽しみにしていた彼女にとっては予想以上の破壊力であった。クレリアは幸福感に包まれてぼんやりと彼等のことを見ながら彼らのことをよくよく観察する。

コボルトとケットシーは頭部を除けばそっくりなのだが、性格は随分違う。

コボルトは質素で素朴、実用的で動きやすい服などを好んでいるが、ケットシー達はお洒落な服を好んでいる。一匹一匹服装が少し違うのだ。

それぞれ自分の毛並みに合うように考えているようだ。虎縞、三毛、ふさふさ……わしゃわしゃ……虎……狼と虎……にゃんことわんこ……。

理性を完全に失い、好奇心に目を輝かせながら近寄ってきた大きな帽子を被っている子猫ケットシーを思わず抱きしめそうになったが、隣にいるシュナウザーから声を掛けられてはっと我に返る。

「クレリア様、大変です！ ブルー殿は村に残っている男達と一緒にオークに攫われた子供を助けにいったそうです」
「それはいつ？」

無意識に近くの子猫の頭を撫でながら、大人のふさふさ毛なケットシーに声を掛ける。彼女は小鳥が囀るような綺麗な声で……だけ

ど、泣きそうな顔で言った。

「お昼前に外で遊んでた子供がオーク達に見つかって……それで……」

クレリアは空を見上げる。太陽は真上を少し過ぎていた。それほど時間は経っていない。

「オーク達が向かった方向を教えて欲しい。倒してくる」
「え、えええっ！」

ふさふさケットシーが驚きの声を上げる。おかしいことを言うただろうか。と、彼女は懐いている子猫ケットシーを眺めながら首を傾げる。

モフモフを……しかも子供もふもふを虐めるなど、彼女の価値観では万死に値する。

人間の時には氷と呼ばれていた彼女は今、かつてないほどの怒りに震え、萌え……いや、燃えていた。

「シバ様の友人なら助けるのが当然。大丈夫。助けてくるから」
「ありがとうございます！ 私が案内しますっ！」

ふさふさケットシーな彼女にクレリアは頷き、オークと戦うこと

にぶるぶると武者震いしているコボルト達にも頷く。彼等も覚悟を決めたのか全員揃って頷いた。

ふさふさケットシーに案内された、オークが子供を攫った後に向かったらしいゴブリンの集落はあちこちに強力な魔法の跡らしき穴が空き、吹き飛ばされたらしい縛られたゴ布林達が気絶していた。魔法を使った何者かは手加減したのだろう。

「これは……ケットシーって強いよね」

「ブルー様だけです。あのお方は魔王候補ですから」

驚くクレリアに彼女……シャムが誇らしげに説明する。シバは攻撃に魔法は使えないがブルーというケットシーは使えるらしい。他の魔王候補達も使えるのかもしれない。

多くの領土を持っているオークを倒すのは容易じゃないなとクレリアは考えていた。

シバの魔法は地味だが魔力は強大だ。ケットシー族のブルーも彼の部族以外支配していないはず。それなのにこの穴だらけの惨状だ。

オークには油断させておく必要がある……そう判断していた。オークの魔王候補は間違いなく彼以上の強さを持っているだろうから。

そうして、村の様子を伺っていると三毛の柄の頭を持ったケットシーがクレリア達に慌てた様子で近付いてきた。

「シャムっ！ なぜ来た」

「シバ様のご友人が加勢してくださると」

「おおっ！ 感謝する……ブルー様が子供を人質にされて捕まってしまったのだ」

三毛柄の青年、カールの説明によるとケットシーはコボルトと同じく、正面から戦えない種族らしくカール達が数人で陽動を行い、唯一戦うことができるブルーが切り込んだのだが、もう少し……というところで子供を人質に脅されてしまったらしい。

クレリアは身を隠して集落の様子を伺いながらどうするかを考える。

「まずは子供とブルーを助けることね。場所はわかる？」

「二人はわけられて捕まっています。見張りはゴブリンが子供の方に一人、ブルー様に二人。私共の戦い方は見抜かれているので、何をやっても離れようとしません」

それぞれ捕まっている建物を指さして三毛柄のカールが説明する。
なるほど、とクレリアは頷く。

「何故すぐにブルーを殺さないのかしら」

「その……見せしめにするつもりかと……私共は色々と派手にやっていたので」

ケットシー達は得意の攪乱、罾などを使ってオーク達の邪魔を行っていたということをカールはクレリアに説明する。

「聞くことは次で最後。ブルーはどんな容姿？」

「ブルー様はハイケットシーです。背丈は同じくらいですが人型で……」

「よしっ！ あ……いやいや。作戦が決まったのでな」

思わず声を上げてしまったのを誤魔化し、緩まりそうになる顔をキリっと引き締めて周りに集まっているコボルト達とケットシーたちを見回す。

「私が正面から大きな音を立てながら堂々と入る。その間にケットシー達はコボルト達の案内。コボルト達は三人と六人に分かれて見張りを倒しなさい」

「了解！」

「え、え！ 危険ですよ！」

話を聞いていたシャムが大声を上げるが、クレリアは自信あり気に微笑んで頭を撫でる。コボルト達も緊張しつつも剣の確認を行っていた。

「ここにいるコボルト達は闘う事を心に決めたコボルト達なの。そして私は」

クレリアは細やかな装飾の施されたブロードソードをふさふさケツトシーのシャムに見せた。

手入れをしなくとも錆びることのない『永遠の銀』から作られた逸品である彼女の剣は戦わない者が見てもただの芸術品でないことが理解できる。

シャムは魅入られるようにその美しい刀身を見つめる。

「モフモフ帝国大元帥、クレリア・フォンベルグ。帝国最強の剣士なのよ？」

危険など無いわ。とクレリアはそのまま集落に向かって耳をピンと立てて堂々と歩いていく。

子供くらいの身長彼女が放つ迫力にケツトシー達は啞然としながら彼女を見送った。

コボルト達はクレリアに尊敬の視線を向けて拍手していたが、彼女が歩いていくとケツトシー達と共に隙を伺うため、人質の捕まっている小屋を目指して移動していった。

第十話 少数部族の取込 後編

集落に入る木製の扉を蹴り開けてクレリアは中をゆっくり歩いていく。

ぼろぼろの家が多いが壊されたりした様子はない。この集落はオーク達にすぐ従ったのだろう。彼女は周りの様子を伺いながらそう考えていた。

「だけど、戦意のあるゴブリンはあまりいない。嫌々って感じね」

彼女の周りでは既に二匹のゴブリンが、クレリアに剣の平で叩きのめされて地面にうずくまって呻いている。それを見た他のゴブリン達は怯えたように遠巻きに見ていた。

歩みを止めずに襲ってきた二匹を打ち倒したのだ。殺してはいないが彼女が殺す気になればどうなるかは想像できたのだろう。

クレリアは一度立ち止まると、退路を確認しながらゴブリン達を見回し、彼等に隠れるように立っているオークの方を見る。

オークはゴブリンより二回りくらい大きな猪の頭を持った魔物だ。体付きもがっしりしていて力も強い。クレリアは人間の時に何度も戦ったことがあるが、目の前にいるオークはそんな通常のオークよりも一回り大きい気がしていた。

自分の身体が小さくなったことで大きく見えている……というわけでもなさそうだ。

「は、早く囲めっ！ 捕まえろ！」

流石に十数匹のゴブリンとオークが一度に来ると危ない。クレリアは冷静に判断しつつゴブリンに喚いているオークを見て嗤う。

「大きな身体をして私が怖いのか。ゴブリンの勇者、キジハタは一騎打ちを申し込んで来たぞ？」

ゴブリン達がざわめく。同族だけあってキジハタの事は良く知られているのだろう。あれだけ強く、変わっているのだから当然かもしれないが。

「誰も来ないか。賢明ね。私も出来れば殺したくはない」

クレリアはオーク達から距離をとって足を止め、剣を鞘に一度収めてビシッと指を突きつける。

「私はモフモフ帝国、クレリア・フォーンブルグ。このゴブリンの集落を解放しに来た」

「お前が報告にあったコボルト族に力を貸した女か！」

相手の問い掛けには応えず。ニイツ……と嗤う。

解放という言葉聞いてゴブリン達がさらに騒めいたのを見て、クレリアは彼らも降伏したからといって、いい扱いを受けているわけではないようだ判断していた。

一向に動かないゴブリン達に痺れを切らしたのか焦げ茶色のイノシシの頭を持つオークがゴブリンを退け！ と殴りつけながら前に出てきた。

「たかがコボルト一匹。俺の槍で串刺しにしてくれる！」

ほう……コボルトもゴブリンもオークに勝てないわけだ。と、クレリアは眼を細める。

目の前のオークはその巨体に鉄製の鎧を身にまとい、巨体に相應しい臂力を持っているのか巨大な槍を軽々と振り回していた。

非力なコボルトやゴブリンでは数人がかりでも相手にならないに違いない。

身体の小さい者に負けたこともないのだろう。嗜虐的な笑みを浮かべている。

「降伏するなら命は助けてやるぞ。貴重な上位種のようなしな」

「私は貴方のような男を何度も血祭りに上げてきたわ」

人間の世界だけでなく魔物の世界でもこういう男がいるのかと、心底呆れるようにクレリアは溜息を吐いた。昔はお陰で何度自分の容姿を恨んだかわからない。

彼女は一度鞘に入れた剣を引き抜き、油断せずに構える。

クレリアは彼女にとっての最高の身体を手に入れたばかりの頃よりも、両手で持っている剣が軽く感じられていた。

魂がシバと繋がっているため、彼の能力が増すと自分の力が増す……というのがシバの説明だったが、彼女はシバと一緒に戦ってくれているのだと考えている。

この方が自分が強くなったと考えるよりも、身近にシバが感じられる分、強くなることへの嬉しさが大きかったのである。

「死ねえええええええええつ！」

「悪いが無理」

オークの持っている武器は槍。さらに背も高く、腕も長い。

ただの臆病者かと彼女は考えていたが、力任せとはいえその豪腕から繰り出されてくる槍の速さと慣れた扱いに戦い慣れてはいるようだと考えを改める。

膂力には差がありすぎるため、クレリアは自分の速さを生かして最小限の動きで槍をかわし、剣で受け流す。時折オークが入れるフエイントは無視し、逆に利用して切り込むが、その攻撃をオークは槍で受け止める。

クレリアは槍の両断を狙っていたがオークの槍の柄が鉄か鋼で補

強しているらしく、断ち切ることは出来なかった。懐に入った彼女をオークは槍を斜め上から振り下ろして柄で打とうとしたが、クレリアは屈んでかわし、後ろに大きく跳んで距離を再び取る。

二人の攻防に周りのゴブリン達から感嘆の声が上がった。

「ぶはあー！　ぶはあー！　素早しっこい奴だ！」

「大体わかったし、そろそろ終わらせるか」

だが、二人の様子は随分異なっていた。体の大きいオークは肩で息を切らせているが、クレリアの方は小さな身体に付いている尻尾をゆらゆら揺らしながら平然として立っていた。

「な、な……終わらせるだと！　死ぬのはお前だ！」

「ククッ。心配するな。すぐ首だけにしてやる」

クレリアはオークの慌てた顔を見て薄笑いする。そこには何の気負いもなく、警戒するように距離を空けたオークに向かって無造作に歩いていく。

余裕がはったりでないことに気付いたのかオークは怯えたように後ずさった。

「自分より強い相手と戦ったことは無いらしい」

「う、うるさい！　ゴブリン共！　この小娘を囲え！」

顔を見合わせて悩んでいるゴブリン達に、目の前のオークはクレリアを警戒しながら、うわ擦った声で叫ぶように更に命令する。

「勝てないと思ったら部下を呼ぶ……か、悪くはない」

「お前ら！　びびってんじゃない！　やらなければお前らも後で皆殺しだ！」

指揮官としては猪よりはましかもしれない。と、彼女は思い、そういう相手は猪だった……と、自分の例えに思わず笑ってしまった。

「クスクス……」

ゴブリン達はオークの怒号を聞いても悩んでいたが、クレリアの低い笑い声を聞くと、ビクッ！　と震えるように反応し、怯えながらも全員で攻撃するべく周りを囲み始めていた。

「潮時かな……」

眼を細めて周りを見て、クレリアは呟く。

これだけ引きつければ人質の監視は甘くなっているだろう。逃げるに徹すれば獣の素早さを身に付けている自分に追いつけはしない。

クレリアが逃げようと思ったその時だ。大きな爆音と共に集落に笑い声が響いたのは。

全員の動きが止まり、視線が笑い声のした方向を向く。
その視線の先には、一軒の家の屋根の上に一人の少年が腕を組んで立っていた。

背丈はコボルト達やケットシー達と同じくらいの身長。青い髪に三角形の耳、口元はマスクで隠しており、金色の刺繍の入った派手な服に黒のマントを羽織っている。

「悪党共っ！　そこまでにや！」

「何者だ！」

「可愛い少年！」

槍を突きつけていたオークが屋根の上に立つ少年に向かって叫ぶ。
クレリアは急展開にばかんとしつつも、屋根の上に立っているのが可愛い少年であることをその眼力で見抜いていた。

屋根の上の少年は大袈裟な仕草でオークを指差すと、芝居がかった口調で名乗り出す。

「悪党共に名乗る名はにやいが、冥土の土産にや！　吾輩の名は怪盗ロシアン！」

「何い！　お前が俺達の邪魔をしているあの怪盗ロシアンか！」
「そのとおり。お前の悪行も今日までにや！　とっつ！」

クレリアはあれがケットシー族の族長か！。と身も蓋もなくシュ
タツ！ と軽やかに飛び降りた少年の正体を看破していたが、口
は出さなかった。

動きが可愛らしいし、子供っぽいし気づかない振りをしないと泣
いてしまうかも……と悶えながら心配していたのである。

「怪盗ロシアンを捕まえれば褒美が出るぞっ！」

「ふふん、甘いじゃ！」

彼はマントをはためかしてにやつと笑うと腕を振り上げる。その
腕には光が集まっていき……それを見たゴ布林達が後ずさる。

「あれは……魔法」

「喰らえにやつ！ 精霊ハウルンよ。暴音を奏でよっ！」

彼が現れた時に鳴っていた音だろう。轟音が集落中に鳴り響き、
ゴ布林達が逃げ惑う。だが、彼等が怪我をしている様子がないと
ころを見ると、音だけのようだ。

オークはゴ布林達を呼び戻すべく、必死に叫んでいる。そんな
混乱の中、怪盗ロシアンはレイピアを引き抜いてオークに走り寄っ
ていた。

状況を把握すると、クレリアは少し考えて頷く。

「馬鹿っ！ 音だけだ。ええい逃げるな！」

「おやすみ」

「グアッ！」

クレリアは混乱しているオークにこつそりと近づくと全力で跳び、剣の平で思いつき後頭部を殴りつけた。オークは勢いのある一撃を受けてドサツと倒れ込む。

まだオークに意識があることに気付くとクレリアはそのまま剣を突きつける。

「な、何が……ヒッ！」

「降伏か死か」

「こ、降伏する！ 降伏しますっ！」

自分の中に意識を向け、彼の降伏が本心からのものであることを確認すると、今度は怪盗ロシアンの方を向いた。

彼はまだレイピアを抜いたままだ。瞳は怒りに燃えていて、殺気に満ちている。

クレリアは今の自分より少しだけ背の高い、猫耳の付いた細身の人間っぽい少年に頭を下げると正面から見つめる。

「協力ありがとうございます。怪盗ロシアン様。決着は付きました」
「美しいお嬢さん、悪いけど退いて欲しいにや」

今、オークにとってクレリアの命令は絶対だ。魂をわけられている彼女にも魔王候補としての命令権がある。生かすも殺すも彼女の手の中だ。

「子供は生きてましたか？」

「生きてたにや。だが、子供を誘拐して脅すなど許せないにや」

ふう……と、クレリアは安堵の息を吐いた。

辺りを見渡して探すと、子猫ケットシーはロシアンが降りてきた屋根の上にケットシー族の大人達と一緒に様子を伺っているようだ。

「子供に血生臭いものは見せたくありません」

「……」

「怪盗ロシアンは子供達に夢を与えないと。そういうのは私のような騎士の仕事」

「わかったにや。オークよ！ 悪さしたら怪盗ロシアンは何時でも現れるにや。覚えておくにや。さらばっ！」

しばらく怪盗ロシアンは悩んでいたが、剣を納めると子供の方を向き、芝居がかった口調で高らかに宣言すると、家の屋根を飛び跳ねながら集落の外へと去っていった。

怪盗ロシアンが去った後、残ったゴブリン達もクレリアに降伏を

申し入れた。

ケットシー族の族長であるブルーは怪盗ロシアンの派手な変装を解いて、白いシャツに群青色の半ズボンの格好で子供の無事を喜んでいる。

その光景をクレリアは微笑ましく見守っていた。

ブルーはケットシー族の上位種で、シバと同じく人間の少年のような姿だ。青い髪の前には猫の耳らしき物が付いていて、ほっそりとした尻尾がお尻には付いている。

凜々しい雰囲気的美少年でシバとはまた違った可愛らしさを持っていた。

だが、彼女の的には惜しいことに彼には可愛い中にも一人でも生きていける力強さがあり、こう、甘やかさなそうな雰囲気だなあ……と、クレリアは考えていた。

ベタベタに可愛い少年を可愛がりたい彼女としては、シバの方が高得点であった。

ブルーにとっては幸いなことに。

まず、戦後の処理として彼女はオークにケットシー族の子供に謝罪させた。強制的に。

子猫ケットシーは許すー。と快く言ったため、オークも許されることになった。

だが、ただで許すわけにはいかない。

「そういえば、私は貴方の名前を知らない」

「あ、姐さんっ！ 俺の名前は……」

「うるさい。お前の名前はこれからタマだ。命令だ……フフ……可愛いだろっ」

クレリアは地に頭を付けさせたままのオークの頭をグリグリ踏みながら、嗤う。

コボルト達とケットシー達はそんな彼女に尊敬の視線を向けていたが、ゴブリン達はドン引きであった。

この事件を境にケットシー族の者達はコボルト族に協力するようになり、各地に散らばる反オークの者達がモフモフ帝国に集まるようになる。

第十一話 もう一人の魔王候補

クレリアがケットシー達の集落から戻ると、すぐにケットシー達を歓迎するための式典が、帝国の中央広場で行われることになった。魔王候補であるブルーを丁重に迎えて、犬猫一緒にふもふ頑張ろう！ という趣旨のイベントだ。クレリア的には。

もちろん他のみんなは新しいゴブリン達もタマも無邪気に歓迎していた。

帝国中央広場は以前より大幅に拡張されている。帝国の人口が急激に増えたからだ。

中央付近にあったシバの家も現在では取り壊されてしまって、今では彼とクレリアは新居に移っている。その際、別に建てようという意見もあったが、警備上の理由と自分の建物より他の住人を優先するようにとの彼女の命により却下されている。

新居はクレリアの我侭も大分取り入れられており、新しい愛の巣に彼女はご満悦であった。表向きは無表情だが。

それはさておき、帝国の中央広場ではシバとブルーが帝国臣民全員が見守る中、握手をして話をしていた。会話は少ないが穏やかな雰囲気で、二人とも緊張している様子はない。

「シバ……久しぶり……」

「うん！ちゃんとブルーに会えて嬉しいよ」
「ん……助けてくれて……ありがと……」

嬉しそうに尻尾をブンブン振って抱きつかんばかりなシバと違って、ブルーはぼんやりした様子で猫耳をピコピコ動かしながら、ぼそぼそと話している。

怪盗ロシアンの扮装をしているときとテンションが大きく違うが、クレリアはどちらもいいなあとあまり気にはしていない。

犬と猫の少年同士のほのぼのした様子をクレリアもみんなも穏やかな気持ちで眺めていたのだが……急に二人を竜巻のような風が包んだ。

辺りからは悲鳴が上がり、クレリアは咄嗟に二人を助ける為に竜巻のような風の中に飛び込んでいく。だが、その風もすぐに収まってしまった。

クレリアは二人の無事な様子にホッとしつつも、怪我をしていないかを確認するために声を掛けた。

「シバ様、ブルー様……ご無事ですか？」

「ごめん……あんなになるとは……知らなかった。今は……僕……」

ブルーが眠そうな眼でクレリアを見て頭を下げる。猫耳が目の前に来て、触りたいのを我慢しながら彼女はブルーに何をしたのかを尋ねた。

彼は頷き、ゆっくりとした口調で事情を説明する。

「魔王候補の力を……シバに……譲った……」

「ええっ！ そんな！ ダメだよっ！」

ブルーの説明を聞いて、シバが驚きの声を上げた。だが、ブルーは首を横に振る。

「今のままだと……オークの魔王候補に……勝てないから……」

「ブルー……」

「シバなら……任せられる……みんなを……お願い……親友……」

耳をぺたんと寝かせ、髪の毛と同じ褐色の瞳を潤ませながら、シバはわかったよ。と頷いた。

クレリアは貰い泣きしそうになりつつ、ケットシー族は虎じゃなかったんだ……と、見当違いなことを考えていた。

ケットシーのブルー達の協力が得られるようになってから二ヶ月の時が流れ、定例の帝国会議に参加する者も前回よりも増えている。いつも通りに皇帝であるシバが全員の参加を確認すると開催を告げ、メイド兼事務長である、ふさふさコボルトのポメラに報告を始めるように促した。

「それでは、報告します。」

人口……コボルト族189名、ゴブリン族117名、ビリケ族5名、
ケットシー族42名、オーク族1名
戦力……ゴブリン戦士隊50名、コボルト弓隊60名、コボルト特
殊工作隊10名、ケットシー破壊工作隊20名、ケットシー諜報網
(東部、北東部、北部)
武器……鉄製武器の輸入、革製防具生産開始、農生産開始
交易……東部の治安改善、北東部ルート開拓中
食料……第一回収穫完了。人口増加により水路作成、農場拡張は必須
生産……楽器作成(ケットシー族技術)、罌(ケットシー族技術)
士官……ブルー(ハイケットシー)、シャム(ケットシー)、タマ
(オークリーダー)、カナフグ(ゴブリン)
政務……ソマリ(ケットシー・産業)、ワニギス(ゴブリン・農業)
、トラギス(ゴブリン・農業)
シバの能力……大幅な魔力増加、クレリアの能力増加、天候予測能
力取得

「私からは以上です。続いてクレリア様からの報告があります」

ポメラがクレリアの方を向いて頭を下げ、席に座る。クレリアは
頷くと、集まっている者たちの顔をゆっくりと見回し、現在得てい
る状況を説明するために立ち上がる。

「モフモフ帝国は東部、北東部の反オーク派の者達を仲間に迎え、
人口が増えてきている。まずは、異なる種族をまとめるために共通
のルールを考えたいと思う。これは各部族の代表で話し合うことと
する。代表は各種族、話し合って決めるように」

クレリアが皇帝であるシバとも話し合って決めたことだ。ただ、その中身に関しては部族の代表者達に話し合って決めてもらうことになっている。

人口の少ない内は問題もないが、魔王を目指す以上、異種族間の問題は起こってくるだろうと考えたのである。

「続いて私が拾ってきたタマからの情報」

全員の視線が一番末席で縮こまっている、イノシシ頭の巨体のオークに集まる。

コボルトやゴブリンにはオークには勝てないという意識を持っている者が多いため、あえてクレリアはモフモフ帝国に彼を加入させていた。

彼の仕事は主に、コボルト族やケットシー族、ゴブリン族の子供の世話と戦士達の訓練相手である。

クレリアから、「私に勝てれば解放してあげる」と言われてタマは彼女に挑み続けたが、魔王候補の能力譲渡、人口増加による能力増加と差は更に拡大してしまい、現在では完全に屈服し、彼女のペット扱いだった。子供達からは頑丈な遊び相手として親しまれている。

「モフモフ帝国の東に、オーク達の東部の拠点がある。人口は大体300人くらい。あと周囲に人口100人くらいの集落が三つ。これを落とせば東部は完全に安定する」

ここまでは大丈夫？ と全員を見渡すと、農業担当の長くて白い毛のコボルト、ダックスが緊張で震えながらビシッと手を挙げた。

「ちよちよま、ま、待ってください！ 今はしょ、しょ食料がたり、足りなく！ すいませんすいませんっ！」

震えながらもしっかり意見を言ったダックスにクレリアは微笑む。可愛いなあと。

「いいのよ。ここは話し合う場だから。みんなも疑問があつたら発言して欲しい。ダックスの指摘の点だけど、これからも人口が増えると思う。攻めるのは次の収穫後ね。大変だと思うけれど、農場を新たに整備しつつ、食料は余裕を持って蓄えて欲しい」

「りよ、了解です！」

農業関係の政務官達と魔法で土木工事を行うシバがコクコクと揃って頷く。

慌てずとも時間があれば東部に関しては有利になるとクレリアは考えている。とはいえ、オークと闘うエルキーの件があるため、あまり時間は掛けられない。

状況の変化に対応するには情報が必要でコボルト族の『隠密』ヨークの探索隊とケットシー族の諜報網の存在は、彼女にとって大きな助けになっていた。

定例の帝国会議も終わり、一緒に見回りをしようとしていたクレリアとシバは、ゴブリンの『剣聖』キジハタから呼び止められた。いつも落ち着いた行動をしている彼が走ってきたため、シバとクレリアは顔を見合わせて首を傾げ、立ち止まる。

「キジハタ。どうしたの？」

「いや……その……タマ殿が来てくれたお陰で対オークの訓練は順調に進んでいる。拙者も修行に身が入って助かっている」

「それは、報告で聞いた」

慌てた様子のキジハタに、クレリアは眉を寄せる。

何時も実直でキビキビしているキジハタはもじもじしながらも、覚悟を決めたように話し始めた。

「あー……その……クレリア殿が居らぬ間に……その……コボルト族のトイ殿と……恋仲になってな。出来れば嫁に……と」

クレリアの思考は止まってしまった。

え、え、それってありなの？ と内心混乱しつつ、シバを見ると彼の方は結構冷静で、話を聞いてもにこにこ嬉しそうに笑っている。

どう返せばいいのか彼女が迷っていると、一匹の小柄な短目の毛のわんこがキジハタに走ってきてきてぴたっと寄り添うようになってくつついた。

「あ、えっと……二人とも両思いなの？」

「うむ」

「はいっ！」

真剣な表情で二人とも頷く。

真面目な交際なんだと彼女が困っているとシバが微笑んでぱんつと手を叩いた。

「じゃ、お祝いしないかね。お祝いの音楽とかケットシー族に願いしょ？」

「おおっ！ シバ様！ お認めいただけますかっ！」

「うんうん。好き同士ならいいよ」

尻尾を振りながら軽い様子で笑っているシバを見て、クレリアは魔物は好き同士なら異種族でもいいんだ……と、感心していた。

ま、キジハタは悪い男ではないしいかと、クレリアも微笑む。

「なら、シバ様。ケットシー族に音楽を教えてもらってみんなで祝いましょう」

「あ、うん。それいいなあ。流石クレリアだね」

クレリアが提案すると、にかつと満面の笑みでシバは頷く。そして、彼はいいことを思いついたと言った感じにあああっ！ と叫び、

手を叩く。

「モフモフ帝国に参加してる種族みんなで楽器を引いたり一緒に歌お？ 僕が魔王になれたら……みんなで音楽したり歌ったりするんだ……楽しそうだね！」

そうですね。とクレリアは頷く。難しい目標だと思う。

だけど、クレリアは不可能だとは思わなかった。何より彼女の目標に近い。

もふもふオーケストラ。クレリアに新たな野望が生まれた瞬間だった。

ちなみに今日の話を後で執事兼書記長のコリーに話したところ、

「前代未聞ですじゃあああああ！」

と、叫んだかと思うと、彼はシバに掴みかかる勢いで説教をし始めてしまった。

まあまあ、と耳をぺたんと寝かせて苦笑いしながら、コリーをシバが宥めるという珍しい光景が彼等の新居の中で夜遅くまで繰り広げられることになる。

当たり前のことではないらしい。

クレリアは二人のやりとりを微笑ましく思いながらも、本当に大

丈夫なのかなあと、心配していた。

第十二話 エルキー族の医師

『死の森』東部を完全に抑える準備が続けているモフモフ帝国であつたが、勝利を確実なものにするために必要な条件は実は食料以外にも存在していた。

まず、オークの本国が本気でモフモフ帝国を落とそうとしないこと。もし全力で攻めてきたら相手の戦力にもよるが、厳しいことになる。

この点はエルキーに負けたばかりなこともあり、そこまで可能性は高くないとクレリアは考えている。

次に、東部制圧に動いている間、オーク達の本国から攻められないようにする必要がある。もし、攻め落としに掛かっている時に攻められたら軍を戻さなくてはならなくなる。

この二点が最も重要な点だが、もう一つ必要なものがある。それは医学と薬の知識だ。

勝利したとき、怪我をした者達を治療できる知識がなければ大きな戦いになればなるほど、本来助かる者が死んでしまうことになる。クレリアとしてはそれは避けたかった。

これらの点を解消する方法が彼女には思い浮かばず、帝国会議で相談したところ、ビリケ族から出向している政務官、モーヴからエルキーから買う薬の量を増やしたらどうかという意見が出たのである。

る。

モーヴの意見は薬に関する問題への解決法の提示だったが、重要な問題であるオークの足止めも出来るのではないかとクレリアは思い付き、薬の取引量を増やすのと同時に彼等と外交交渉を行うことを決めていた。

エルキーへの使者については皇帝であるシバが行くと言い出し、会議が紛糾したが、まずは様子見ということでクレリアがエルキーに助けられた二人のコボルトと共に向かうことに決まった。

「クレリア様、あそこですっ！ あそこが、ターフェ様の家です！」
「聞いていたエルキーの集落から、ちよつと遠いのね」

そして今、クレリアはお礼の品物を持って、お供をしている長毛わんこ二人を助けたエルキーの家を訪れていた。

お礼をすると共に、まずはその人からエルキー達の長老を紹介してもらおうと考えたのである。クレリアは、愛するもふもふを助けてくれたことを本心から感謝していたが、彼女はそこはそれ、と相手を利用することを割り切れる元人間であつた。

森の間に建てられた小さな家の扉をドンドンとノックすると中から、人間の女性と似た雰囲気の白衣を着て、眼鏡を掛けた女性が中から現れる。クレリアは一瞬何故人間が……と驚いたが、すぐに彼女が人間でないことに気付く。

眠たそうな顔で出てきた銀色の長い髪に暗褐色の肌を持った彼女は、明らかに人間とは異なる点があったのである。耳が人間よりも長く、尖っていたのだ。

鋭い目付きがきつそうな印象を与えるが、ターフェは相当な美貌の持ち主だった。髪の色のこともあり、かつての自分を思い出してクレリアは眉をひそめる。

相手も何か気に入らないものを感じているのか……と、値踏みするようにじいじと自分を腰を屈ませて見つめているエルキーの女性をクレリアは見つめ返していたのだが、

「ふむ」

と、エルキーの女性……ターフェは無表情で頷いて一歩近づくと、
「がばっ！」とクレリアを思いっきり抱きしめた。

いきなりの反応に流石のクレリアも回避できずに捕まってしまう。

「きゃー！ 何これっ！ 可愛いつ！」

「ちょ、苦しい！ は、放して！」

ターフェの腕の中でクレリアは混乱してじたばたと暴れるが、がつちりと彼女は掴んで放さない。にやけ顔で頬ずりまでされ、耳と尻尾の毛が逆立って力も抜けてしまいそうになるが……なんとか強引に引き離れた。

力づくで引き離された彼女はフッフッフ……と妖しく笑いながら、眼鏡を人差し指で位置を調整するように触りながら、呟く。

「グレンちゃんとスコティちゃんも可愛いけど……この、絶対懐かなそうな、彼女もいいわね……冷たい目で見つめられると、こう、ぐっ！ とくるわ。犬……じゃなかった、狼なのに猫っぽいところがまた……」

クレリアは、はあはあ……と荒く息を吐きながら、二人のコボルト……グレンとスコティの方を見ると、彼等は諦めたような表情で首を横に振っていた。

「貴方がターフェ殿ですか？ この度は同胞を助けて頂き有難う御座いました」

クレリアは内心、この女はとんでもない変態だ！ と憤慨しながら、それは表情には出さず、冷静に当初の目的を果たすべく、一礼して頭を下げる。

「動きが洗練されてるし……はっ！ あ、ああ、気にすることはない。私は医者だからな。怪我をしている者がいれば助ける。それだけだ。それに、可愛いし……」

誤魔化すように一度こほんと咳払いをして、ターフェは照れくさ

そうにうむうむと何度も頷いた。クレリアは冷めた目で、重症だな……と心の中で呟いていた。

中に案内されると、家の中は薬草とハーブの香りが漂っていた。調査台の側に置かれてる大きな棚には種類別で沢山の薬が置かれている。

「座りたまえ。足元には気を付けて」

「失礼します」

ターフェに勧められ、クレリアはテーブルを挟んで向かい合うように座る。

そして、ターフェはグレンとスコティに薬草茶を入れるように指示し、彼等も慣れた様子で水を汲み、湯を沸かしててきぱきと用意を行っていた。

「コボルトは実に優秀だな。助けたのは気まぐれだったのだが」
「そうですか」

クレリアはちょこちょこと動き回る彼らを微笑ましく見守りながら、彼女にそう短く返す。ターフェも二人の方をじーっと射抜くように見つめていた。

しばらくして、テーブルに人数分のお茶が置かれ、用意してくれた二人も脇に並んで座る。ターフェは二人に礼を言うと、クレリア

の方を真面目な表情で向く。

「君はコボルトでもハイコボルトでもないようだが？」

「わかるのですか？」

「ああ。微妙に違う……まあ、どうでもいいがな」

そう応えて、ターフェはフフ……と笑みを浮かべる。そんな彼女の笑顔にクレリアは何故か身の危険を感じ、背筋に寒気が走った。

帰りたくもなかったが、話をせずに帰るわけにもいかなかったため、本題を切り出す。

「今日こちらを伺ったのは、勿論二人を助けていただいたお礼もあるのですが、薬の取引量を増やして頂きたいと考えたからなのです」
「ふむ……何故かね。君たちの人口を考えると現状でも十分だと思うが。コボルト族は確か100名そこそこだろう？」

腑に落ちないといった感じでターフェは首を傾げる。

「いえ、現在モフモフ帝国は350名程の人口があります」

「ん？ モフモフ帝国？」

訝しげな眼でターフェはクレリアを見る。ふむ……と、内心クレリアは呟く。彼等は排他的な種族だとは聞いていたが、ビリケ族か

らも情報を取り入れていないらしい……そう考え、彼女はきちんと説明することにした。

「はい。コボルト達はオークに支配されることを良しとせず、立ち上がりました」

「うーむ。臆病なコボルト達が……意外だな」

急に見られたグレンとスコティがびくうつ！ と震える。

「魔王候補のシバを中心にゴブリンを撃退、ケットシー族の協力も得て、勢力を広げています。一年もあれば、東部はオークから取り戻せます」

「コボルト族だけでなく、ケットシー族も？」

「はい。帝国では種族の区別なく、平和に暮らしています」

うむむ……と、ターフェは唸り、俯く。葛藤があるようで悩んでいるようだ。信じられないのかもしれない……そう、クレリアは思っていた。無理もない。

「確かケットシー族の族長は、ハイケットシーだったな。会ったことはあるか？」

「ええ。ブルー様は協力してくれてます」

おおっ！ と声を上げターフェはテーブルに身を乗り出そうとし

て……もう一度椅子に座り直し、眼鏡の位置を直すと、睨みつけるような真剣な眼でクレリアを見た。

「その……ど、どんな容姿だ？」

「私より少しだけ背が高い、可愛らしい少年です」

ふむ……と、呟くとターフェはトントン……と、指でテーブルを落着かない様子で叩き始める。

「それで、モフモフ帝国はエルキー族とどんな関係を望んでいるのだ？」

「出来れば同盟を。無理ならオークを倒すまでは共闘を……それが無理でも、薬の仕入れの量を増やしていただければ」

そこまで告げて、クレリアは黙った。ターフェは目を瞑って黙り込む。しばらく凍ったような時間が流れ……彼女は目を開けると笑って頷いた。

「いいだろう。私から長老を説得しよう。同盟は難しいかもしれないが……共闘はなんとかなるだろう。我々は攻める気はないが、オークを放置するのは愚策であるくらいは誰もが理解している。但し……条件がある」

「伺いましょう」

クレリアは身構える。オークより遥かに強力な魔物で、かつ、長い寿命を持つ彼等が望むもの……それが予測できなかったからだ。帝国のためにも断るわけにはいかないが、あまりに無茶であれば受けるわけにはいかない。そうすると、エルキーとの関係は絶望的になる。

彼女の背中に冷や汗が流れた。

ターフェは視線をグレンとスコティに向け、微笑む。

「何、難しいことではない。私のモフモフ帝国への移住を認めて欲しい。私は自分で言うのはなんだが優秀な医者だ。役に立つぞ」
「よろしいのですか？」

思いがけない要求に、クレリアは首を傾げる。だが、ターフェは苦笑しながら頷いた。

「まあ聞きたまえ。私はな。最近まで実に無価値な生を営んでいたのだよ。何にも感動できず、ただただ無感動に生きていたのだ」

自分を落ち着けるように薬草茶を一口飲んで彼女は続ける。

「薬草学を学び、調合し……仲間が怪我をすればそれを癒す。それだけの日々だ。私は常に疑問を抱いていた。部族の中でも優秀と言われながら……それもむなしく感じていたのだよ。怪我をしたその二人が来るまでは」

ターフェはグレンとスコティを優しい目で見つめた。

「私は他の種族を短命で無能な種族だと思っていた。だが、彼らを助け、その働きを見ると考えが変わったのだよ。彼等は優秀な上、実に生きること必死で、その姿は私に初めての感動を与えたのだ」

そして今度は興奮したようにテーブルに身を乗り出し、クレリアの間近まで近付く。

「そして……私はついに世界の真理を知ったのだ」

「ふ……ふむ、その真理とは？」

ターフェは眼鏡を置いてテーブルに置き、立ち上がるとその秀麗な顔に自信に満ちた表情を浮かべる。エルキー族として、長い生を生きてきた中でようやく見つけたという喜びが表情から見て取れた。

「可愛いということは、感動を与えるのだということだっ！」
「なるほど、それは真理だ」

おお、理解できるか！ と、がしっ！ と勢い良く両手で手を握ったターフェに何を当たり前のことを……という、呆れながらクレリアは頷いた。

やっぱ、こんな変態にはあまり来て欲しくないなあと内心想いながら。

クレリアはこの時、気付いていない。

魔王候補であるシバを除き、彼女にとって最も長い付き合いとなる相手になることに。

モフモフ帝国元年　モフモフ帝国初年度報告

1月　クレリア大元帥、モフモフ帝国軍を編成。同時に防衛計画を策定し、

シバ皇帝と共に防衛体制を整える

2月　『剣聖』キジハタ率いるゴブリン軍が来襲。モフモフ帝国は防衛計画に従い、

ゴブリン軍を撃退。クレリア大元帥、キジハタを一騎打ちにて撃破

人質にされていたキジハタの集落を解放。モフモフ帝国に加入
キジハタ、シバ皇帝から剣を受け取り、忠誠を誓う。剣術師
範に

3月　『帝国会議』が設置される。人口増加による食料対策として
農業政務官が

任命され、農場の研究が始まる

『隠密』ヨークを主とするコボルト探索隊の設立

4月 ビリケ族との交易が始まる。ビリケ族の協力の元、産業開発が始まる

7月 人口増加によるモフモフ帝国拡張計画が策定される

交易による鉄製品入手、革製品の開発など、武装の強化計画が進められる

『死の森』東部地域、少数部族救出計画、治安回復計画が進められる

8月 ケットシー族、モフモフ帝国の一員に加入。ケットシー族の魔王候補ブルー、

シバ皇帝に魔王候補の能力を譲渡。

少数部族救出計画により、モフモフ帝国の臣民が大幅に増加
キジハタ門下のコボルトを中心にコボルト特殊工作隊創立
ケットシー族による破壊工作隊の創立
各地に散らばるケットシー族による諜報網の確立

10月 農場の成果を確認。将来の人口増を見越した農場の拡張が始まる

モフモフ帝国初の異種族間結婚が行われる
クレリア大元帥、東部制圧作戦を発表

11月 エルキー族との交渉開始。エルキー族の医師、ターフェがモフモフ帝国に加入

12月 エルキー族との間に共闘協定と技術交換協定が結ばれる。協定に従い、

コボルト族、ケットシー族各二名がエルキー族に、エルキー族から一名が

モフモフ帝国に派遣される

『モフモフ帝国建国紀——建国の章——』 初代帝国書記長 コリー
著 より抜粋

第十三話 初めての建国祭

帝国が建国されて丁度一年目となる記念の日、この日は帝国会議において建国祭が行われることが決められていた。シバとクレリアは開催準備には参加してはならないという決定が会議ではされており、二人はどんなことをするのか知らされていない。

今二人は自宅で、準備をしながら誰かが呼びに来るのを待っている。

「大丈夫でしょうか。シバ様」

「あはは、心配しすぎだよ。みんなを信じよ？」

はらはらしている様子で椅子に座っているクレリアとは対照的に、シバはのほほんとした笑顔を浮かべながら楽しそうに、複雑な刺繍が施された、真紅のふわふわスカートなドレスを着たクレリアの長い髪を櫛で梳いている。

今日はケットシー族の服飾を担当している職人が、コボルト族の職人と組んで二人のための衣装を用意してくれている。その際、クレリアが話した人間達の衣装に関する情報も生かされており、それを完全に再現した職人達の実力に、彼女は心底驚いていた。

「うん、こんなところかな。クレリア、すっごい似合ってるね！」

にこにこ笑顔で尻尾を振っているシバも今日は、短めの黒いズボンに白いシャツの上から黒を基調とした上着を着ており、蝶ネクタイを付けている。

こちらでも職人達がシバのために用意した服で、子供服っぽい感じで格好いいというよりは可愛らしいといった形容が似合う雰囲気だったが、クレリアの趣味にはぴったりとはいなかった。

クレリアは背中後ろで髪の手入れをしているシバの服装を思い出し、コボルト達とケットシー達の素晴らしい仕事っぷりに最高の賞賛を送りながら、微笑んでシバに言葉を返す。

「シバ様も似合っておられます」

「ほんとっ！ 実は似合ってないんじゃないかって、びくびくしてたんだ」

櫛をクレリアの身嗜みを整えるための道具を収納している棚に戻し、満面の笑みを浮かべながら、彼もクレリアの前に椅子を置いて座った。

「おい、クレリア。シバ様、用意できた……ぞ？」

しばらく二人で談笑していると、ドアをノックして銀髪に何時も

通り白衣を着た女性のエルキー、ターフェが二人に準備を終えたことを伝えに来た。

彼等の姿を見たターフェはピシッと硬直し、眼鏡を外すと、目元をこすり、もう一度眼鏡を掛けなおし、指で眼鏡を弄りながら、ふふ……と、妖しく笑う。

「頼みがあるのだが……抱きしめるぞ？ いいよな？ 誘ってるんだよな？」

「それは頼んでるとは言わない。皆が待つてるなら早く行く」

「うっ、冷たい……いやあ、そこもいいなあ」

うつとりしている残念な銀髪美女のターフェを放置し、クレリアはシバの手を取って行こうと促す。

シバはターフェが来た当初は彼女に怯えていたが、最近では慣れたのか、彼女を気にせずに頷き、クレリアと手をしっかりと繋いでみんなが待つ広場へと歩いていった。

帝国中央広場ではわいわいがやがやと、既に全員が集まっていた。モフモフ帝国の臣民は順調に増えており、流石のクレリアも顔と名前が一致しないもふもふが存在している。普段、こなしている業務がなければ覚えていただろうが。

その点、シバは全臣民の顔と名前をしっかりと覚えていた。元々の友人であるケットシー族だけでなく、ゴブリン達やビリケ族、オークのタマとも種族分け隔てなく積極的に話しかけているからだ。

広場に到着すると、二人は割れるような拍手で臣民達から迎えられた。

執事兼書記長であるコリーが右手をザッと上げると、その拍手がぴたつと止まる。

そして彼はよろよろと二人の前に出て、ごほんと咳払いをした。

「モフモフ帝国建国は今日で一周年ですじゃ！　まずは、皇帝シバ様から一言もらうですじゃ」

少しだけ緊張したように強ばりながら、コリーはみんなに聞こえるように大声を出し、用意してある台をシバに勧める。

シバは、え？　と驚いていたが、頷いて台の上に登った。

クレリアは台の上で照れているシバを眺めながら、なんだか嬉しそうだと思っていた。恥ずかしいけど、緊張している……というわけではないようだ。

「みんな、建国祭を開いてくれてありがとう。建国したあの日にいた仲間に、新しい仲間が加わって……賑やかになって嬉しいよ。来年はここにみんなと、また新しく加わってくれた人で楽しめるように頑張ろう。こんな感じでいいかな？」

微笑みながらシバはコリーを見る。少し皇帝らしくなったかな……と、クレリアは彼の挨拶を聞きながら、可愛くて格好良くなって

きて最高だなあと頷いていた。

「続いてクレリア殿、お願いしますじゃ」

「私も？」

コリーがうるうると瞳を揺らしながら彼女にこくりと頷く。

どうやらシバの演説に感動して泣くのを我慢しているらしい彼に台を勧められて、シバと同じように台に上る。

彼女は言葉を探す。クレリアには軍を鼓舞したり、何らかの狙いがある時以外に演説はしたことがなく、台の上に立って話す言葉が思いつかずに立ち尽くしてしまっていた。

「固まるクレリアかわいいい~~~~」

背が一人だけ周りに比べると少し高くて目立つエルキーの真顔での声援で力が抜け、苦笑いしながらクレリアは気楽にやろうと心に決め、全員が見えるように顔を上げる。

「今年は昨年以上に厳しい年になる。だが、私は皆の協力があればどんなことでも乗り越えられると信じている。明日からまた大変な日々が始まるが……今日だけは全てを忘れて楽しもう」

小声でクレリアはコリーに堅い話しか出来なくて悪いなと謝罪し

ながら、シバの隣に歩いて行こうとして……広場に集まる魔物の大人達を掻き分け、前に出てきた各種族の子供達に彼女は囲まれてしまった。

たくさんいる子供達の中にはクレリアに噛み付いたコボルトや、誘拐されたケットシーの子供の姿も見える。帝国に住むようになってから食生活が改善されたからか、彼らの毛並みも綺麗になり、ふつくと見えるようになっていた。

彼等はみんな誇らしげな表情をしながら、ぴよんぴよん飛び跳ね、

「クレリア様っ 屈んで屈んで！」
「屈んで〜」

と、クレリアに声を掛け、彼女は何かわからないが至福の喜びを感じながら屈む。

すると、ぱさっ……と軽い物が頭に乘せられたのがわかった。

「はいっ！ クレリア様。ぼく達からっ！」
「これは……花輪？ ふふ、ありがとう」

子供達が自分のために作ってくれたのだと理解し、彼女は彼等と目線を合わせて微笑み、お礼を言う。人間の時には下心ある者からは大輪の花束を送られていたが、もらった嬉しさは比べられないほど、その小さな花輪の方が大きかった。

子供時代は傭兵生活で剣の修行ばかりだった上、大人になったら子供には怖がられることが多かったのも、その嬉しさに拍車を掛けている。

わーっ！ と、喜ぶ声を上げて走り去っていく子供達を見ながら、彼らのためにももつとがんばろうと、更にクレリアは心に誓っていた。

「さて、今日は食事を多く用意しておるのですじゃ。ビリケ族から祝いの酒も届いておる。皆、楽しんで欲しいですじゃ」

コリーが最後にそう締めくくると、広場では再び歓声と拍手が湧き上がった。

同時にケットシー族の楽士達が笛を奏で、コボルト達が弦楽器を拙い手付きで弾き、ゴブリンがリズムを取りながら小さな太鼓を叩き、オークのタマが不承不承と行った表情で、だが、しっかりと練習したことを思わせる動きで大太鼓を叩く。

明るい雰囲気音楽が広場に響き、楽器を弾かない者たちは振る舞われた料理を食べたり、酒を飲んだり、音楽に合わせて一緒に手拍子を打って思い思いに楽しんでいた。

「うわぁ……すごいなあ。みんな練習したんだっ！」

シバはそうやって無邪気に喜んでいるが、クレリアはそんな信じ

られない光景に呆然としていた。だが、すぐに自分の理想の一端がそこにあることに気付く。

「シバ様。混ざりに行きましょう」
「うんっ！」

彼女はシバの手を引いて楽器を弾いている者達に近づき、手拍子をする。

みんながその光景を当たり前として楽しんでいる……それは奇跡に近い光景だった。

こうして、モフモフ帝国の新しい一年は始まる。

本格的な戦いの予感を肌で感じながら、それでも彼らは今を楽しんでいた。

第十四話 エルキー族との技術交換 前編

銀髪の美女のエルキー、ターフェが移住してから二ヶ月が経った。

ある日、クレリアが彼女の住んでいる家を訪れると、男のものと思われる怒鳴り声が家の中から聞こえてきて、ドアを開けようとした手が止まった。

しばらく部屋の外で固まっていたが、急ぎの仕事は山ほどある。急いで終わらさなければ、シバと夕食を一緒に食べられない……なんだかよくわからないが喧嘩如きで邪魔されてはたまらないと思い直し、ボタンと遠慮なくドアを開けた。

中にいた二人の視線がこちらに集中する。一人はターフェ。もう一人は、ターフェと同じ銀髪のエルキーの青年だ。入ってきたクレリアを見ると不機嫌そうに顔を背け、ターフェの方を睨みつける。

クレリアは記憶を掘り返す。男はシバしか目に入っていない彼女にとって、もふもふ以外の男の名前は中々頭に入らないのだ。

端正な中にも男らしさが混ざっている美形の青年だが、彼女のタ イプからは大幅に外れているため、男としては全く興味がなかった。

彼はモフモフ帝国との技術交換で来た青年で……確か、コーラル……だっけ？ と、彼女は首をかしげながら二人の様子を窺う。

「やあやあ、よく来てくれたね。私のクレリア」

「別に貴女のものではないのだけれど」

近付いて頭を撫でようとした手をクレリアは片手で受け止めて、ターフェを下から見上げる。

彼女は、はあ〜と大きな溜息を吐いてやれやれと、疲れたように首を横に振った。

「すまないね。ちょっとコーラルにコボルト達の真の知識……可愛いらしさを学ぶように、強く言い聞かせたのだが、見てのとおりなんだ」

「貴女に任せた私が愚かだったわ」

クレリアの本心からの罵りに対しても、恍惚とした表情を浮かべているターフェに心底うんざりしつつも、彼女は用件を伝えることにした。

性癖を除けばターフェは医者として、かなり優秀だ。長生きして御陰か様々な知識も身に付けている。助言は帝国全体の為になるものも多かった。

彼女にもらっている知識の分は、クレリアもエルキー族に還元したいとは思っているのだが……臣民ではないので干渉すぎるのも考えものだと、距離を置いていたのである。

コーラルは自身もコボルト達から学ぶものはない！と来た当初

から否定的な様子だったので、ターフェに説得を任せていたのだが、彼女は失敗したと頭を痛めていた。

可愛さを学べとか、全く何を考えているのか。

可愛さというのは学ぶものではなく、感じるものだというのが、

「コーラル。話は後だ……で、クレリア。何の用かな？」

「貴女が提案した助手の兼、帝国会議で承認されたわ。今、貴女を自主的に手伝っているグレンとスコティが正式に助手になる」

「ふふ……ふふふふ……ありがとう。クレリアっ！」

どさくさに紛れて抱きつこうとしたターフェから身をかわしながら、クレリアは話を続ける。

「次のが本題だ。戦場で応急処置の出来る看護隊の教育をして欲しい」

ふむ……と、ターフェの顔つきが真剣なものになる。彼女の医者としての顔だ。専門家としての彼女は、誰に対しても妥協がなく、常に真剣だ。

「おい、お前っ！ 我々の技術を戦争に利用する気か！」

「はいはい、若造は黙る黙る。血の気が多いんだから全く……」

ターフェがいきり立つコーラルを抑える。

彼女は殺気すらこもった彼の視線を軽く受け流しながら、クレリアに真意を問い返す。

「戦争は避けられない。ならば、戦死するものは少なくしたい」

「なるほどね。確かに応急処置が出来れば大きく変わる。だが、医者というのは命を助ける仕事なのだよ。戦争の道具にというのはやはり抵抗がある」

白衣のポケットに手をつっこみながら、屈んでクレリアを正面から見る。

高さの差が無くとも威圧感のあるその視線からクレリアはぴくりとも動かさない。

「私はなるべく無駄に死なせたくない。味方だけではなく、敵も」
「なるほどね……」

ふむ……と、頷いてターフェは立ち上がると、豊かな胸の下で腕を組み、悩むように目を瞑る。

「少し考えさせてもらおう。いいかい？」
「わかった」

用も済んだ。クレリアは踵を返して歩きだし……少しだけ進んだ

ところで振り返る。

ターフェは真剣な表情のまま、後が残りそうなほど強い力で、クレリアの肩を後ろから掴んでいた。

「私も頼みがあるのだが」

「何？」

決死の決意……そんな雰囲気は彼女には見える。

クレリアは簡単に返しつつも、あまりにも必死な様子にどんな頼みがくるのかと身構えた。

「ケットシー族のブルー君……彼を紹介してもらえないか？」

「……は？」

「初恋……そう……初恋だよ！ 彼のことを考えるだけで胸が張り裂けそうになって熱くなるんだ……まずは手紙のやり取りからかな？ なな、どうしたらいいと思う！？」

真面目に聞いて損した……と、クレリアは大きく溜息を吐く。

「今度、ブルーが帝国に戻ったら紹介する。後は勝手になんとかして」

「ほんとっ！ さすがクレリア……あ、手伝ってよね？ ね？」

やっぱりここには余り近づきたくないなあ……と、クレリアはげ

んなりしながら、すぐるように抱きついてくるターフェを引きはがしていた。

ターフェの家から出たクレリアは残る仕事をこなすために次の場所へと向かった。

彼女の仕事は多い。今日だけでも新たな防衛施設の建設予定地の視察と、生産物を作る技術者の視察とビリケ族との相談、訓練の視察が残っている。

さらに書類仕事も残っている。無計画に進めていくわけにはいかないためだ。

いろんな提案の中には実行して失敗する提案もある。それを次の計画に生かすには、何故失敗したかをみんなが知るための記録が必要となる。記録は書記長のコリーがコボルト語で付けているが、彼女はその全てに目を通し、正しいことを確認し、サインをしなければならぬ。

シバも協力できるようにと一生懸命学んでいるが、まだまだだ。

忙しいが、少しずつ理想に向かって進んでいる確かな手応えがある。

だから今日も彼女は足取り軽く、次の仕事先へと向かっていたのだが、今日は後ろからエルキーの青年がターフェの家からついてきていた。

何も喋るでもなく、ただ後ろをついてくるのが気になり、クレリアは立ち止まって振り返る。彼も足を止め、クレリアを不機嫌そう

な顔で見下ろす。

「ふむ……コーラル殿、何か用かな」

「今日はお前の後ろについて仕事を見るように命令された」

「命令？」

首を傾げる。命令した相手……というのはターフェに間違いないのだが、なぜ彼女が命令を……と、不思議に感じ、クレリアは彼に思わず聞き返した。

「彼女はエルキーの中でも偉いのかな？」

「……我々、エルキー族の中には十人の長老が全ての決定権を持っている。姉さん……いやターフェ様は……長老の一人だ。最年少のな」

なるほど。だから彼はここに送られたのだ。左遷と考えているのかもしれない。

恐らくエルキー族の中ではそれは正しいに違いない。

クレリアはおかしくなって顔を伏せて笑った。

「何がおかしいっ！」

「すまない。馬鹿にしているわけではないのだ。君は運がいいと思っ
つてな」

「運がいい？」

黙って頷く。帝国の良さを知って学んでもらえれば、エルキーの延命に繋がる。

ターフェも一応はちゃんと考えてくれていたらしい。クレリアは頷き、真っ直ぐに背の高いコーラルを挑戦的な笑みを浮かべて見上げた。

「まずは見てくれ。そして、質問して欲しい。私に不備があれば指摘してくれて構わない。ターフェは幾つも指摘していたが……君にも期待して構わないのだろうか？」

「む……当然だ。私はエルキー族なのだからな」
「よろしい。案内させてもらおう」

若いなあ……とクレリアは思いながら、胸を反らせている彼についてくるように促した。

まずは防衛施設の建設現場に向かう。

防衛施設といっても複雑なものではない。物見の櫓と、矢を防ぎ相手の侵入も防げるよう、木を十字に組んだ高い柵だ。人口が増え、住む場所を増やせば守る場所も増える。

ゴブリン達が木を伐採し、コボルト達が加工する。それをゴブリン達が組み合わせて指定された場所に運んでいく……そんな分業制だ。

これはクレリアが教えたわけではなく、彼等は自発的に考えてい

る。

私にぬかりある点を指摘するために、コーラルは私から離れ、仕事をしている者達の近くまで行つて一つ一つの作業を、かなりの時間を掛けて確認し戻ってくる。

「本当に心から協力しているな。コボルトとゴブリンが……異様な光景だ」

「何のための物かはわかる？」

コーラルは口に手を当てて考え込むような仕草を見せ、顔を上げる。彼の表情には馬鹿にしているような色は無かった。純粹に好奇心を刺激されているようだ。

そうでないと困る……クレリアは使えそんな奴だと彼の評価を少しだけ上げた。

「恐らく入口にあった、あの長くて深い溝……あれと組み合わせると柵は使うのだろう。その用途は……そうか。奴等は徒歩だ。溝と柵で防ぎ、弓で狙うわけか」

「後、石もね」

「近づけてもゴブリンに斬られるな。良く考えられている……はっ！ 一般論だぞ？ 別にお前達を認めたわけではない」

何故か悔しそうなコーラルにクレリアは気にもせず頷いて、次に行こうと促した。

第十五話 エルキー族との技術交換 後編

クレリアはエルキー族の若者（？）コーラルを背後に従えて、織物や楽器等、交易品を作っている職人達や農作物を作っている担当者を探るために歩いていたのだが、ふと立ち止まり、彼の生真面目そうな顔を見上げた。

コーラルは彼女に気圧されそうになり、背中を反らしたが、思い返して彼女を見下ろす。

「な、なんだ？」

「これから帝国の臣民達が作る生産物を視察に行くのだが、一つ思いついた。君は戦う上でもっとも大事なものは何だと思う？」

クレリアは問いを急かさずにじつ……と彼を見つめ、答えを待つ。魔物の世界には無い概念だ。彼女も正確な答えが返ってくるとは思っていないが、負けてなるものか！ と、対抗するような表情を見せ、悩み始めたコーラルを微笑ましげに眺めていた。

彼の若さを見ると良く訓練を付けていた騎士見習い達を思い出すのである。

「相手より強くなることだ」

「個人であればそうだな……まあ、間違いとは言わない」

クレリアは頷く。相手より強い……強者である彼の種族はそれだけで生きていけるに違いない。現に、オーク達よりも遙か少ない人数で、勝利している。

「君ならコボルト達を率いて、同数のゴブリンやオークと、どうやって闘う？」

「むっ！ そんなこと！」

出来るわけがないと言いかけて口を閉じる。それを曲がりなりにもやっているのが、目の前にいる小さな娘だということに彼は気付いたのだ。

「話を戻そう。まずは食料だ。『死の森』は食料が豊富だが、それでも食料が無くては長期間の戦闘には耐えられない。戦闘に出ている間は生産的な活動もやりにくい」

「……それをこれから見に行くってことか？」

クレリアは頷く。だが、まだまだ甘いと彼に微笑む。

「他にも必要なものがある。武装と訓練だ。我々の仲間は君達エルキーのように確かに強いわけではない。だが、少しでもそれに近づこうとしている。それも見せよう」

「なるほど。色々と考えているのだな」

「まるで他人事だな。戦闘で効率よく勝つにはもう一つ必要なものがあるのだ」

腰に右手をあて、堂々と背筋を伸ばしてクレリアは続ける。

「それはな……数だ」

「数だと？」

意味がわからないといった様子でコーラルは顔をしかめる。クレリアは当然、彼がそう考えるだろうと思っていた。彼が悪いわけではない。

彼がどれほど賢い者であっても気づくはずはないのだ。一瞬で理解したターフェの頭がおかしいのだと彼女は考えていた。

何故なら彼等は強いから。

「君が私を嫌っている理由は、聞いたからではないか？ エルキーが滅ぼされると」

「……そうだ」

クレリアは軍人であり、政治家ではない。回りくどい相手よりは、目の前の青年のような直情的なタイプを好んでいた。軍人としては、

殺気すら込めた自分の視線に全く怯まないクレリアに理解でき

ないものを感じ、コーラルの表情は徐々に困惑したものへと変わっていく。

「貴方は聞ける度量を持っている？」

「ああ！ 当たり前だ。聞いてやろうじゃないかっ！」

コーラルは戸惑いつつも足を一步踏み出して、クレリアを怒鳴りつける。

クレリアは頷くと、ちよこんと座り込んで一本の枝を手にとると地面に数字を書き始めた。言葉と違って文字は通じないが、数字ならなんとかなるだろうと思いつながら。

「1000人近くのオークがエルキーを攻める。300人のエルキーはそれを撃退する。オーク達は100人くらいの戦死者を出して逃走。エルキーは10人くらいか」

「ああ。詳しいな……無傷というわけにはいかなかった」

彼女の字が小さく、まるっこくて見にくいため、コーラルも地面に屈んで彼女の書く絵と数字を見る。

「生き残ってるエルキーは290人。そして、またオーク達は1000人で攻めてくる」

「おかしいじゃないか。あ……くそ、そういうことか！」

「む、やはり理解が早いな。彼等は仲間を作って増えていく。エル

キーは増えない。出産率も違うんじゃないか？ そちらは詳しくターフェに聞いたわけではないが」

クレリアは立ち上がると足で絵と数字を消す。コーラルは汗をかきながら、落ち着かない様子で自分の顔を触っていた。

「軍事に関しては、今日はこれくらいにしよう。本当は防衛戦術についてでも学んで欲しいことは沢山あるのだけれど……ここまで説明すればわかってくれるね？」

「なるほど……俺は運がいいか」

「ふふ、その通り。お願いね」

動きやすく、飾り気の少ない茶色の服とスカートを着た……子供にしか見えない少女の妖艶な笑みに、コーラルはなんだか騙されているような気持ちで頷く。

心の中には自分より遥かにかよわそうに見える少女への敗北感が渦巻いていた。

「何故だ。上位種とはいえコボルトに何故ここまでの軍事知識が」

「私は帝国の皇帝に命を助けられた元人間の騎士だからね。誰も気にしていないけれど」

悪い？ と、すっかり薄くなった胸を反らせてクレリアがコーラルを冗談っぽく睨みつけると、彼は呆れるように笑った。

「命の恩で勝ち目のない戦いに身を投じたのか？」

「違うわね。好きだからよ。彼等が」

主に可愛い男の子と、もふもふ的な意味で……という部分は彼女にとっては当然のことなので、口には出さない。出す必要が無いと思っっている。

だが、当然なことに、彼の受け取り方は彼女の発言とは違っていた。

彼はクレリアを少しだけ尊敬するように見つめ、彼女に問う。

「お前も人間なら人間の領土に親兄弟もいるのではないか？」

「両親を気にする時期はもう過ぎている。今はもう、帝国の住人だ」

コーラルはその返答に驚いていたが、彼女も内心驚いていた。

すっかり、傭兵をやっているはずの両親と兄妹のことを忘れていたのである。

彼に言われるまで、一年以上完全に脳裏になかった。すっかりである。

クレリアは内心の焦りを誤魔化しつつ、

「ほら、あそこだ。まずは農作物の出来と保存食料から確認しよう」

と、彼に顔を見られないよう、逃げるように前を歩いて目的地へと向かって行った。

コーラルにとって彼らの営みは、クレリアの言うとおり驚かされることばかりで、学ぶ事が多かった。防衛施設だけではない。人口増加を見越した食料の備蓄、交易を利用した装備の充実、必要な資源の補充。

特に驚かされたのはゴブリンやコボルト達の集団戦の訓練だ。

降伏したオークの士官を利用して、徹底的にオークを倒すための訓練を施していたのである。中でもゴブリン達の隊長、キジハタは辛勝ながら一体一でオークリーダーを打ちのめしていた。

生まれが全てだと思っていた彼には衝撃的な光景だった。

そして、その後にキジハタと戦ったクレリアの舞うような美しい戦いぶり……それは彼の価値観を変えるのに十分な感動と驚きを与えていた。

これまで、すぐに負けてしまうだろうと思っていたモフモフ帝国は本気でオークに勝つつもりだったのだ……このことを理解したとき、彼のクレリアに対する感情はすっかり変わってしまった。

クレリアと別れる際、彼は聞いた。

「お前たちはオークに本当に勝てるか？」

彼女は振り向いて自信を持って胸を張り、当然のように答える。

「五年あれば勝てる。最短ではない。最長でだ」

彼は心に誓っていた。この技術を故郷に持って返って生かすことを。

そして、今は自分を子供扱いしている彼女を振り向かせることを。

コーラルはターフェの家に戻ると、薬品の調合を続けている彼女に礼を言った。

命令ではあったが確かに得るものがあつたからだ。

「姉さん。ありがとう。確かに学ぶことは多かった」

「そうだろう。お前もようやくわかってきたようだな。あの素晴らしいさが」

彼女は仕事の手を止めずに笑った。いつも退屈そうにしていた姉はこちらでは、生き生きと仕事をこなしている。

笑顔もこちらに移ってから増えた……コーラルはそう思う。

モフモフ帝国の気風がそうさせるのかもしれない。

「特にクレリア殿は凄かった。彼女は素晴らしいな」

「そうだろう！ そうそう。彼女は実にいい。気品に溢れている」

天才と呼ばれてきた姉も、彼女のことを認めているらしい。
そう思うと何故か誇らしい気分になり、彼は微笑んだ。

「俺は彼女に実力を認めさせる。そして、いつか……手に入れてみせる」

「ふ……いい度胸だ。コーラル。ならばこの私を超えるがいい」
「言われずとも」

コーラルはターフェに背中を向けて言い捨てると、仕事を続ける
コボルト達を観察し、話をして学ぶために歩きだす。

彼はこれまで持っていた姉への劣等感を捨て……一人の男として
自分の道を歩もうとしていた。

コーラルが立ち去ると、ターフェは彼が去った扉を見つめながら
眼鏡を触り、独り呟く。

「やつも、もふもふ達の可愛らしさがようやく理解できたらしいが
……クレリアに目を付けるとは。あの気品と可愛らしさを兼ね備え
た至高のもふもふは私のものだ。あ、いや、でもブルー様も……む
う、甲乙付けがたい……っ！　なんて罪な生き物なんだっ！」

この姐弟が真の意味で理解し合う日が何時になるのか……それは
誰にもわからない。

第十六話 新しい可能性

数ヶ月近くの時が流れた。『剣聖』キジハタの部隊が東部の小集落をモフモフ帝国に降伏させて回っていたため、東部はモフモフ帝国と大きめの集落が三つ、オークの拠点が一つと随分整理されている。

オークがいる小集落の場合は、オークと戦わなくてはならないこともあり、キジハタ達はオークとの戦闘経験を順調に積んでいた。

お陰でクレリアはシバと二人、内政面の強化に力を入れることが出来ており、シバの汗を拭いたり、食事を食べさせあいしたりと至福の時を送っていた。

そんなある日のことである。

「お、こちらにおられたか。クレリア殿、シバ殿！ 探しましたぞっ！」

「何があった？」

「キジハタ、今日は明るいね。どうしたの？」

水路の拡張と堀の強化を終えたシバと、新しく増えた臣民達の振り分けを終えたクレリアが二人並んで木陰に座り、休憩していたところに珍しく慌てた様子のキジハタが走り寄ってきた。

「また、タマに勝ったの？」

「タマ殿のお陰で拙者の剣の道は進んでおりますが、そういうことではありませんせぬ」

ふむ……と、クレリアは首を傾げる。彼がこれ程、喜ぶこと……。

「拙者の息子が生まれたのだ！」

「え、本当？」

「わあ！ おめでとう。キジハタっ！」

にこにこと朗らかに笑っているシバと違い、クレリアはちょっと考えに耽っていた。ゴブリンとコボルトの子供ってどんなのなんだろうと。

ゴブリンはどちらかという醜い。キジハタは本人の性格がさっぱりしているおかげで、むしろそこがアクセントになっており、彼女はそのギャップが気に入っているのだが……。

他のゴブリン達にもすっかり慣れ、個性もあるし案外ゴブリンもおもしろいとか今では考えている。

だが、二人の息子となるとどうだろうか。ぶさかわいくなくなるんだろうか。

彼女は深い苦悩のうちにあった。

「今はターフェ殿が妻のトイを見ているのだが、やはり、シバ殿とクレリア殿には真っ先にお伝えせねばと思った次第」

「ふむ、早速行きましょう」

今後の異種族結婚の問題もある。結果は怖くても知らなければならぬ……クレリアは頷くとシバと手を繋いでキジハタの家へと急いだ。

キジハタの家に着くと、毛の短い種族のコボルト、トイが横になって幸せそうに笑っている。その側ではターフェがにやにやと愉快そうな笑みを浮かべながら、メモ帳らしきものに書き込みを行っていた。

中に入るとトイは寢床でクレリアとシバに頭を下げる。

「トイ。頑張ったね」

「有難う御座います。シバ様、クレリア様」

起き上がるとしたのはシバが笑顔で止めた。クレリアは何処に子供がいるのだろう……と、きよろきよろ探す。

トイの側にちいさな……ちょっと鼻が長い感じの、全体的にはトイに似た可愛らしいふかふかのもふもふが眠っていた。ほかの子供に比べると体は少し大きいだろうか。

しかし、ゴブリンの容姿は全く引き継がず、微妙にコボルトとも

違うが、どちらかというとコボルトに近い感じだとクレリアは感じた。

「む、可愛い」

「本当だね、名前はなんていうのかな？」

あまりの可愛らしさに飛び込んで抱きしめに行きたくなるのを自重しつつ、クレリアはシバと一緒にキジハタの嬉しそうな顔を見る。

「拙者も妻も悩んだ末に、シバ様とクレリア殿に名前を戴こうという結論に」

「うーん、そっかぁ。クレリアが決める？ 強そうな名前がいいかなあ」

キジハタの息子だしね。とニコニコと何度もシバは頷き、クレリアを見る。彼女はシバに言われるまでもなく、戦争の時よりも必死に頭を使っていた。

戦士戦士……と、考えて一人の男の顔を思い出す。

「ハーディング。私の知る限り、最強の戦士の名前」

「おおっ！ まあ、拙者は息子の道は自分で選んでもらうつもりなのだが……もし、戦士を選んでくれたらこれ以上の名前はない」

今は亡き、クレリアの祖父の名前だった。

結局、彼女は一度も勝てなかった祖父を……あの妖怪爺め……と、少し思い出して顔を顰め、こんなにかわいらしいもふもふには似合わないかなと、苦笑していた。

そこで、クレリアはターフェが余りに静かなことに気付いた。普段の彼女であれば、理性が崩壊して、暴走しているはずなのにと。

「ターフェ。何をにやにやしている？」

「いや、実に……実に夢が広がる結果になったなと思ってな」

メモを書き終えたのか、仕事道具の入った鞆にしまい、眼鏡をくいつと動かして彼女はに……と、邪悪そうに笑う。

「クレリア。異種族同士の交配はまあ、例がないわけではない」「そうなの？」

うむ、とターフェは頷く。今は医者としての発言なのか、顔付きは真剣そのものだ。

「本来なら、どちらか単一の種族の子が生まれる。だが、今回は違う」

「コボルトではないのか？」

くく……と、悪巧みするかのような笑みをターフェは浮かべる。

「冗談を言っているわけではなさそうだ……と、クレリアはターフエを見上げる。

「そんな目で見られたらぞくぞくするな。そう、コボルトではない。ゴブリンでもない。全くの新種だよ。これは新しい可能性だとは思わないかね？」

「原因の検討はついているわけか」

「クレリアは話が早くていい。その通りだ」

ターフエは頷いて、部屋をゆつくりと歩き……シバに抱きつこうとして、クレリアに手を叩かれる。

「酷いな。理由を説明しようと思ったのに。原因はシバ様だよ」

「魔王候補の力？」

「うむ、この村で生まれたコボルトには中位種のコボルトリーダーが増えている。他種族も中位種、上位種がちらほらな。おそらく彼が力を付けたことにより、影響が出ているのだろつ。彼の配下全体に」

つまり、異種族間でもコボルトの影響が……ん？

「つまり、他の種族とコボルトが結婚するとコボルトに近い新種が生まれるのか？」

「その通りだ。ふふふ……どうだ。夢があるだろつ。モフモフ帝国が大きくなれば、自然と異種族間の結婚も増えるはずだ。そうする

とどうだっ！ 天国ではないかつ！」
「なっ！」

クレリアは衝撃を受けた。彼女の言うとおりだ。

自分は現状で満足をしつつあったが、まだまだ一步踏み出した程度にしか理想郷は完成していなかったのだ。まだまだ、コボルトはその小さい体に無限の可能性を秘めていた。

果たしてどんなもふもふが私を待っているのだろうか。まさしく、夢は無限大だ。

それをこの変態に教えられるとは……そう思い、彼女は奥歯を強く噛みしめた。

「ターフェ殿。拙者の息子は新種と言われたが……無事成長するのか？」

キジハタが不安そうに、ターフェを見る。が、彼女は自信あり気に笑った。

「心配は不要。私は天才だ。お前は息子の育て方を考えておけ」
「承知」

キジハタはターフェに深々と頭を下げた。
医者としての彼女は圧倒的な迫力がある。恐らくなんとかするのだろうとクレリアは思った。

新しい可能性……新しい種族のハーディングの誕生を祝福し、その幸せそうな寝顔を見ながらクレリアは、彼の成長を楽しみにすることにした。

第十七話 死の森東部制圧戦 帝国会議

時は流れ、畑からの収穫を終えたモフモフ帝国の帝国会議室には、かつてないほどの重苦しい雰囲気の流れていた。

皇帝であるシバの表情も、今日はいつもの穏やかさが無い。

『剣聖』キジハタによる『死の森』東部集落平定作戦が終了し、食料も確保した今、次の目的は東部を賭けたオーク軍、東部駐留軍との決戦である。

今までのような小競り合いではなく、本当の戦争が始まるのだ。そんな緊張感に溢れる雰囲気の中、クレリアとターフェだけは平然としている。

前者は慣れているため……後者は戦争に興味がないために。

現在のモフモフ帝国に所属している幹部全員が室内に集まったことを確認すると、シバは帝国会議の開催を告げる。

まず、立ち上がって最初に口を開いたのは何時も通り、メイド兼事務長のポメラだ。

「政務関係の報告は前日の臨時会議で終わっていますので、省きます」

彼女は緊張で手を震わせながら、資料を読み上げていく。

「我が帝国は人口こそ増加していますが、戦力としては訓練が間に合っていない者も多く、劇的に増えているわけではありません。具体的な戦力は、ゴブリン戦士隊が60名、ゴブリン長槍隊が10名、コボルト弓隊が80名、コボルト特殊工作隊が15名、ケットシー破壊工作隊が20名、コボルト看護隊が10名となっております」

長い説明を終え、ポメラは一礼して席に座る。

彼女の話が終わると、口にはマスクをあてた黒い毛並みのコボルト、『隠密』ヨークが立ち上がる。彼はコボルト探索隊と、ケットシー諜報網を管理している情報の要だ。

普段は外で走り回っている彼に全員の視線が集中する。

だが、彼は動じずに淡々とした口調で報告を始めた。

「今回の目標の情報を報告します。まずは、モフモフ帝国の北東集落『サーゴ』。コボルト族40名、ゴブリン族50名、オーク族1名が暮らしております」

執事兼、書記官のコリーがわせわせと、重そうに運んできた大きな地図に目印の人形を置きながらヨークが説明する。

「続いて、東部集落『ゼゼラ』。コボルト族30名、ゴブリン族8

0名、オーク族3名。最後に東南集落『ベイカ』にはコボルト族40名、ゴブリン族30名、オーク族1名が暮らしております。これが、まず初期段階の目標となります」

全員が頷く。この時点でゴブリンの人数だけであれば既に、モフモフ帝国よりも多い。

クレリアは全員を見回す。体は大きいが、気は小さいタマは落ち着いた様子でそわそわしている。その点、キジハタは緊張が見えるものの、動揺することなくどつしりと座っていた。二人の性格がよくわかり、内心、小さく笑った。

シバは緊張で少し震えているから、後で抱きしめよう。そう彼女は考えながら、ヨークに続きを促す。これで終わりではない。

「最終目的地、東部奥集落『パイルパーチ』……この東部におけるオーク軍の拠点です。コボルト120名、ゴブリン170名、オーク5名、オークリーダー2名……ハイオーク1名。恐らく東部の責任者と思われます」

クレリアは大仰に首を縦に振り、ヨークを労う。

政務を担当しているものには厳しい状況に見えるだろうと彼女は思う。気の弱いコボルトの政務官は、今にも気絶しそうな表情でぶるぶるしている。

和む……いや、可哀想と思いながらも彼等も参加させたのには、彼女なりの理由がある。

本来、戦争とは大きな目的を達成するための一手段だ。現状は、クレリアの能力が際立っているために軍に偏っているが、いつかは軍務と政務のバランスを正さなければならぬ。

戦争の内情を知ってもらい、戦後の政策に生かしてもらおうと考えたのだ。

荒っぽい彼女は政治家ではなく、軍人であるために、その辺りのやり方がわからないのである。自分なりに考えるしかなかった。

「クレリア。作戦の説明を」

「了解です」

クレリアは立ち上がってシバに一礼し、地図に数頭の駒を置いた。この駒はそれぞれ、今回の戦いに参加する軍幹部を示している。

「まずは、『隠密』ヨークが報告した人数だが、非戦闘員も混ざっている。加えて相手は戦闘訓練もしていないし、装備も充実していない。同数であればまず負けることはない」

落ち着いた声で、クレリアは断言する。

彼女にとって兵士とは、訓練され、組織化されたものであり、今回の相手は無秩序な山賊のようなもの……そう考えていた。

『隠密』ヨークやケットシー達からの報告……という名の彼女の休憩時間で、その確証を得ている。モフモフ帝国の巨大化に感心を示さないのも、コボルト族に負けるわけがないという、ただの油断

だ。

だからこそ、今回の戦いは短期的に終わらせなければならない。オーク達が本気で警戒する前に。今回負ければ状況はさらに苦しくなり、おそらく打つ手がなくなってしまう。絶対に勝たねばならない。

彼女は表情にその決意を欠片も出さずに、淡々と話を続ける。

「また、ゴ布林族にはそれなりの戦意があるとは思いが、コボルト族にはおそらく殆ど戦意はない。扱いが良くない上に、こちらにはシバ様がいる」

「拙者達の元族長は降伏してオーク軍にいますからな」

キジハタが苦々しい口調でそう言って頷く。キジハタはその族長を余程嫌っているらしい。クレリアは会ったことがないが、複数の話から人望はなさそうだと判断している。

実際に会わなければ本当のところはわからないだろうが。

「結論として、実質的な戦力差は殆ど無いと言っていい。我々は相手の集落を各個撃破し、最終的に敵の拠点『パイルパーチ』を落とす」

「ちょ、ちょっと待ってください。姐さんっ！」

手をびしっと勢い良く上げたのはオークリーダーのタマだ。彼も

すっかり帝国に染まっており、何人もの子供に懐かれる子守姿が良
く馴染んでいる。

「オーク族だって馬鹿じゃねえ。一個集落が落ちたらすぐに対策さ
れますぜ！」

「いい質問だ……タマ。それが今回の作戦の重要な所だ」

クレリアは、ニヤリとタマに微笑み掛ける。

「タマの指摘のとおり、一つ集落を落とせば……他の集落に連絡が
行き、他の集落は『パイルパーチ』に合流して対抗するだろう。そ
うなれば流石に厳しい。だが……」

クレリアはそれぞれの集落の後ろを指差す。

「攻める予定の集落の背後に既に諜報網を展開させている。『隠密』
ヨークのコボルト特殊工作隊とブルーのケットシー破壊工作隊に、
それぞれ連絡に走った者を捉えてもらう」

なるほど……と、タマが地図に顔を近づけて唸る。彼は自分の長
槍隊が出来たことで、戦術への興味が出たらしく、貪欲に知識を吸
収しようとしていた。

クレリアの軍幹部に対する戦術講座には欠かさず参加している。

「もし、彼等が捉え損なっても、それがわかっていれば問題はない」
「え、どうしてですかい？」

「それは後で説明する。まず作戦だけれど北の『サーゴ』、南の『ベイカ』を同時に攻める」

コリーから棒を受け取り、とんとんと、集落を示す場所を叩く。
それを聞いたキジハタとタマは、首を傾げた。二人は理解できないといった風に顔を見合わせ、キジハタがこちらを向いて口を開いた。

「戦争の基本は戦力の集中では？」

「そう。そして、相手には戦力を集中させないこと。今回の場合、小さい集落は指揮官のオークを倒せば降伏させられる可能性が高い。全部を集中させるのは戦力過剰なの」

「なるほど。拙者達は、オークを真っ直ぐに狙えばいいわけですね」

クレリアは頷いて説明を続ける。

他の会議参加者はちんぷんかんぷんといった感じでぼかーんと、口を開いていた。ターフェだけは愉快そうに話を聞いていたが。

「北はゴブリン戦士隊から20名。私と共に北の『サーゴ』を落とす。危険だから志願者で構わない。ケットシー破壊工作隊には私に協力してもらう」

ざわ……と、会議室がざわめく。シバはクレリアを心配そうに見つめているが……彼女は声に出さず、微笑んで口だけ動かし、大丈夫と彼に笑いかける。

「残り全てのゴブリンとコボルトをキジハタが率いて南の『ベイカ』を落としなさい。こちらにはヨークのコボルト特殊工作隊を付ける」
「承知」

キジハタは短く応える。

そして、名前の上がらなかったタマの方は、がたと立ち上がった。

「あ、姉さんっ！ あっしは！ まさかお疑いですかい！」
「貴方には重要な仕事がある」

焦ったように声を上げたタマに、クレリアは座るように手で合図し、威圧感と殺気を込めて睨み付け、黙らせる。

「貴方には南の『ベイカ』にキジハタと一緒に向かう、シバ様の護衛をもらう」

「え……シバ様が、戦場にいくんですかい？」

本当ならクレリアは、自分がシバのことを守りたかった。だが、降伏した相手に確実に命令が出来るのはシバと彼女だけだ。

作戦で悩んでいたとき、彼が参加を申し出たのである。みんなが危険なのに、自分が安全な場所にいるわけにはいかない。

と。

皇帝としては問題はある。だが……。

「シバ様っ！　いくらなんでも危険ですぜっ！」

タマが声を張り上げる。本心から心配していることをクレリアは知っている。

オークリーダーである彼が不当な扱いをされないよう、一番心を砕いていたのは皇帝であるシバだったからだ。

「いいんだ。タマ。僕にはみんなの命に責任があるからね」

顔を青くしながらもシバは、タマに笑顔を向ける。

しかし！　となおも食い下がろうとしているタマに顔を向け、クレリアは首を横に振った。彼は結構、頑固なのだ。

「タマ。騎士には近衛騎士という存在がある。皇帝が信頼を置く者しかねない騎士だ。貴方は皇帝の期待に応えなさい」

「う……わかりやした。お任せを。絶対を守りきってみせます」

暑苦しく男泣きをし始めたタマにクレリアは頷くと、作戦の説明を続ける。

「北と南を抜いたら、両方の集落の降伏した者、全てを引き連れて中央を囲むわ。その前に、ビリケ族に中央に食料と物資を集めておいてもらう。モーブ。詳細は後で紙に書いて渡す。いいな」
「わ、わかりました」

荒事は苦手らしいビリケ族の青年が、緊張した面持ちで頷く。

「ふむ、中央の集落は数で押すのか」
「違うわ。キジハタ。相手の戦力は分散させて討つ。それが基本と言ったはずよ」

クレリアは微笑み、キジハタの答えを否定する。そして、彼女の説明を聞いたとき、ターフェ以外の全ての者が言葉を失ったように驚愕していた。

後にこの戦争は『パイルパーチの戦い』と歴史書に記載されることになる。

これから長きに渡って続く、モフモフ帝国の戦いの第一歩目として。

第十八話 死の森東部制圧戦 北と南

モフモフ帝国北東に位置する集落『サーゴ』の近くでは、クレリアと彼女が率いる20名のゴブリン達が最後の休憩を取っていた。

クレリアが考えた手はずはそれほど難しいものではない。全く警戒せずに油断している集落に対し、ケットシーの破壊工作隊によって攻める場所以外のところに意識を向けさせ、正面から最短距離で他には目もくれずにオークを仕留めるという作戦だ。

彼女に付いてきているゴブリンは、キジハタが鍛えた中でも最精鋭だが、緊張は隠せないようで、誰一人、ひそりとも口を開かない。

だが、クレリアだけは涼しい顔で彼等の真ん中に立ち、ケットシー達からの報告を待っていた。しばらくすると、木の上から三毛猫柄のケットシー族の少女が飛び降りてくる。

「ブルー様からの伝言です。いつでもいいと」
「ご苦労。さて、行きますか」

ケットシー族の少女の頭を撫でて、もふもふ分を補給するとクレリアはゴブリン達を一瞥する。ゴブリン達はそれだけで全員が揃って直立した。

「ゴ布林族の勇敢な戦士達よ。貴方達の力を見せなさい。だが、我々は無益な殺生は行わない。わかっているな？」
「承知っ！」

ゴ布林族はすっかりキジハタ色に染まっている。今では『戦士の誇り十六箇条』というもので出来ているようで、クレリアもなかなか愉快な種族だなと思っていた。

「よろしい。では作戦を開始する」
「了解っ！」

ゴ布林達の返事にクレリアは頷くと、木々が生い茂る森の中を、平野を駆けるような速さで走り出した。その後ろを皮の鎧を身に付けたゴ布林達が続いていく。

村に近づくと、攻め手の反対側でケットシー族が爆発音を鳴らし、そちらにゴ布林達が集まっているのが騒ぎ声で良くわかった。

クレリアは集落の入口の扉をミスリル製の剣で一撃で切り裂くと、混乱している村の中に突入していく。何が起こったのか理解できないのか、彼女達を捕まえようとするものは誰一人いなかった。

「あれね」

クレリアが猪頭のオークとそれを守るように立っている二十名程のゴブリンを確認する。

「全軍突撃。オークは私に任せなさい」

「了解っ！」

「な、なんだこいつらは！ お前ら！ 殺れ！」

オークはその声でクレリア達に気付き、慌てるような大声で周囲のゴブリン達に攻撃命令を出していた。だが、キジハタに鍛えられたゴブリン達はオークにも恐れず、なだれ込むように相手に切り込んでいく。

戦士隊はクレリアのための道を作ると、邪魔をされないように周囲のゴブリン達と戦い始めた。ゴブリン達の怒号が響き合う戦場で、クレリアは相手のオークと対峙する。

未だ状況がわからないといった顔で茫然としているオークを見ながら、彼としては理解しがたい光景だったのだらうとクレリアは思った。

自分より遥かに小さなゴブリンやコボルトに圧倒されるのは。そんな風に考えながら、彼女は静かに剣を相手に向ける。

「降伏か死か。選べ」

「何をいつてやがる。コボルト如きが！」

巨体のオークがクレリアを見下ろして睨みつけ、槍を振りかぶる……が。

クレリアは頷くと一瞬で相手の懐に飛び込み、流れるように右足を切断した。声を上げる間も無く、転けたオークの首に剣を無造作に突き立てる。

「タマの方が張り合いがあつたな。さて、名も知らないオークは討ち取った。武器を捨てるならば、命は取らない。治療もしてやる……降伏しろ」

クレリアの静かな、だがよく通る声がゴブリン達が闘う戦場に響く。

戦闘に参加していないゴブリンやコボルトが、戦っている者たちを呆氣にとられながら囲み、戦闘しているゴブリン達の戦いも、ぴたっと止まった。

「私はモフモフ帝国大元帥、クレリア・フォンベルグだ。私は皇帝シバに代わり、君達に食料と生活を保証する。それぞれの能力に見合った役割が与えられるだろう」

クレリアは剣に付いた血を払い、剣を収める。

茶色の髪の小さな少女の圧倒的な強さと威圧感に、戦っていたゴブリン達全員が武器を捨てた。

コボルト達はクレリアがコボルト族の族長、シバの眷属であるのに気がついたのか、嬉しそうに彼女に近付いていく。

コボルト族の瘦せた子供を抱きしめながら、クレリアは周りを確認し、北の集落にいる全員が降伏したことを確認すると、自分の部下を見た。

「看護隊に治療の連絡を。被害報告」

「戦死1名、軽傷2名！ 敵死者11名！」

「よし、軽傷の者はこの村の全員と共に、ビリケ族のモーブの待機地点に」

クレリアは敵味方の死者の埋葬など、全ての指示を出し終わると、ケットシー族の報告があるまで待機命令を出した。

仲間に犠牲者を出したことは辛いが、彼女は表には出さない。軍人として、指揮官としてはそうしなければならないのだ。

「戦士達よ。よくやった。まずは勝利だ」

「はっ！」

ゴブリン達は尊敬の視線をクレリアに向けていた。彼女は鷹揚に頷く。

しばらくして、ケットシー族のブルーから逃げようとしていた者達も全て捕まえたとの連絡が入ると、彼女は表情を引き締めて立ち上がった。

ここからが本番だと。

「よし！ 次の目標地点に移動する。この集落は予定通りに放棄する」

「了解！」

クレリアは看護隊を一名だけ村に残し、残りの者を率いてキジハタとの合流予定地点に向かって移動を開始した。

一方、モフモフ帝国の南東集落『ベイカ』周辺では『剣聖』キジハタを中心としたゴ布林族、コボルト族の混成部隊が最後の休憩を取っていた。

「拙者達は流石に警戒されているか」

「ああ。だが、連絡に向かったコボルトは俺達が捕まえた」

黒い布をマスクの様に巻いている、黒わんこの『隠密』ヨークがキジハタにそう報告する。

「キジハタ……どうする？」

「なるべくオークを早く仕留めて、戦いを終わらせるしかない」

そう呟いてキジハタはシバの方を見る。

「血なまぐさいものは、あまり見せたくはないが」

「シバ様を馬鹿にするな。あの方は我々の族長。覚悟は出来ておられる。キジハタは勝つことだけを考えておけば良い」

ヨークはキジハタの肩を叩いてにやりと笑うと、木を掛上り、枝を飛び跳ねながら森の奥へと消えていった。その機敏な動きを感じるように見ながらタマがぼつりと呟く。

「あいつはまるでケットシーみたいな奴だな」

「タマ殿。シバ様と……コボルト弓兵隊の指揮を頼む」

「わかってらあ。怪我させると姐さんが怖いしな。お前の戦士隊だけでいけるか？」

オークリーダーのタマは、キジハタに確認する。

心配しているわけではなく、ただ確認するといった風に。

「問題無い。それにタマ殿の長槍隊は守備で力を発揮するはず」

「まあ、状況見て判断するわ」

「うむ、頼む」

二人は頷き合い、作戦の確認を行うとそれぞれの指揮する兵の下へと戻り、南東集落『ベイカ』攻略作戦の開始を告げた。

集落に到着したキジハタの軍は、集落の前に立ち止まると、木を一本切り倒した。

枝を落としていく作業を眺めながら、タマは不安そうな表情のシバに話し掛ける。茶色い髪の少年のような皇帝は、顔を青くしながら立っていた。

「姐さんが心配ですかい？」

「ううん。北部はもう決着が付いたみたいだから……それは」

「嘘だろ。姐さんはどれだけ強いんだ」

俺、良く生きてたよなあ……と、タマは彼女と闘うことになったであろうオークに同情しながら苦笑した。と、同時に、疑問も沸き上がる。

「じゃあ、どうしてそんなに浮かない顔を？」

「戦争になれば、誰かが犠牲になるからね。僕もわかってはいるんだけど」

「俺は姐さんに任せときゃいいと思いますがね」

太い腕を組んで、タマはうんうんと頷く。だが、シバは首を横に振った。

「ダメだよ。クレリアに全部背負わせちゃ。彼女は優しいから全部やろうと思うけれど、少しは背負ってあげないと」

「姐さんが優しい……ねえ」

理解できないと首を横に振り、まあしかし……と、タマは笑った。

「俺はそういう臭いのは嫌いで勝てばいいと思ってやしたが、シバ様を見てると女に向かって格好つけるのも悪くないと思えるのが不思議でさあ」

「クレリアには内緒ね」

「わかってますとも。まずは俺とゴ布林達で門をぶち破りますが、その後は俺の後ろにいてくださいよ？ シバ様は戦闘には向いてないんですから」

了解、と笑ってシバが頷くを見て、タマはシバの側を離れて完成した丸太の真ん中を持った。長槍隊のゴ布林達もその丸太を掴む。

そして、タマはキジハタの方を見てにやりと笑った。

「キジハタ。何時でも行けるぜ？」

「承知。これより、『ベイカ』を攻略する。狙いはオークだ！」

「了解っ！」

関の声を上げながら丸太を持ったタマ達が、勢いよく門にぶち当たると、木で出来た集落の門は一撃で倒れ、そのタイミングに合わせて剣を抜いたキジハタ達が、集落の内部に突入していく。

「突撃っ！ 臆するな。拙者達はオークにも勝てる戦士だ！」

「よし、キジハタは行ったな。コボルト弓隊、キジハタを援護するっ！ 俺と長槍隊は弓兵の防御だ。キジハタ達に敵を近づけさせるんじゃねえぞ！」

タマがキジハタに続き、コボルト弓兵隊もその後が続いていく。そして、キジハタ達が戦闘状態に入ると少しだけ距離を開けて弓を構え、キジハタ達に近づこうとする敵に矢を放った。

前を阻むゴブリンの返り血を浴びながらも、オークを探してキジハタは進んでいく。

数の有利、練度の有利、装備の有利から圧倒的な差を見せながら。

「戦闘の勝敗は始まる前に決まる……か。さて、オークは見つけたが個人の勇を奮う暇はないな……タイメン、タウナギ。拙者に付いてこい。前方のオークを斬る！」

オークを守る兵士達を仲間のゴ布林達が抑えている間に、キジハタとその部下二名がオークに向かって駆けた。

「拙者はモフモフ帝国軍『剣聖』キジハタ！ 降伏するや否や！」

キジハタが大声で叫び、オークは無言で槍を構える。

「ならば打ち取るまで！」

正面からキジハタは恐れずに向かっていく。オークはキジハタに向かって槍を突き出したが、彼は左手に剣の鞘を逆手で持ち、滑らせるようにして、相手の槍を流しながら接近する。

「ゴブリン流剣術、流水槍破！」

そして剣で切り上げ、相手の左手を断ち切った。同時にタイメント、タウナギがオークの左右から剣を突き立てる。その攻撃で呻いたオークの首をキジハタは断ち切った。

「敵将は討ち取った！ 武器を捨てたものは殺さぬ。降伏しろっ！」

戦闘を続けていた者達はしばらく困惑していたが、倒れている首のないオークを見ると信じられないように、呆然と立ち竦んで戦意を失い、武器を投げ捨てた。

戦闘が止まったのを確認すると鞘に剣を収める。

オークを倒しても当然といったように堂々としているキジハタに、同じゴブリン達が驚きの視線を向けていた。

その様子を見ていたタマはシバに笑いかける。

「終わったようですね。シバ様」

「うん、怪我人の治療を急いで」

シバはタマにみんなから見えやすいようにと肩車をしてくれるように頼む。

彼は血の臭いで、攻めるときよりも顔色を悪くしていたが、それを我慢しながら味方と敵、全員の注目を受けていた。

「僕はモフモフ帝国の皇帝、シバ。えっと……みんなに食料と生活を保証するよ。とりあえずは、オークの支配を打ち破るために協力して欲しい。詳しいことは『パイルパーチ』を落としたら説明するからね。今後のことはキジハタが説明するから、良く聞いて欲しい」「ご苦労でさあ」

タマが笑って、小声でシバを労う。

彼はオークリーダーである自分が、こうしてシバに対して従順に協力していることを見せることが、彼が偉いのだとわからせるのに有効だと考えていた。

だから、しばらくこうしているのが良さそうだと判断し、弓兵隊のコボルトと看護隊のコボルトに指示を出し、シバを担ぎながら集落を廻る。

そんな彼らの姿は『ベイカ』の住人達に、新しい時代を印象づけるのに十分な光景だった。

全ての準備を終えると、キジハタは負傷していない者達に指示を出す。

「全軍、クレリア殿と合流する。目的地は『ゼゼラ』と『パイルパイチ』の間だ！」

「了解っ！」

作戦の第一段階は被害を出しつつも終了し、次の段階に移る。オーク達は連絡を断ち切られ、未だ、自分達の敗北に気付いていない。

第十九話 死の森東部制圧戦 各個撃破

モフモフ帝国東部集落『ゼゼラ』近郊では、ビリケ族と荷運びを行うゴ布林達が会議でのクレリアの指示に従って、作戦日の前日から準備を行っていた。

牛頭のビリケ族は全員全力で荷物を運び続け、ゴ布林達は現地に着くと物資を仕分けしていく。現場の指揮を取っているモーブなどは寝る暇もなく、物資の分配のための整理作業に没頭していたのである。

「こら大変だな。しかし、こんなことで勝てるのか。大体、戦闘向いてるのはおらんしなあ……攻められたらどうしようもないで。いや、大体北と南も本当に勝てるのか……」

整理されて積み残している二百人分の食料と、木の棒を眺めながらモーブは低い小さな声で呟く。彼がクレリアから命令された内容はこちらだ。

『ゼゼラ』近郊に物資の集積所を作り、北と南から来る住人達に食事と木の棒を与える。そして、彼等に食料の続く限り、大声で集落を揺さぶらせる。

相手が攻めてきたら引いても構わない。

これだけだ。ただ、クレリアは攻められないようにすると説明しており、戦いの苦手なモーブとしてはそれを信じて仕事を続ける他無かった。

クレリアとキジハタ達は合流すると、お互いの無事を喜びつつ、次の作戦の打ち合わせを行っていた。合流した場所は『ゼゼラ』と『パイルパーチ』の間、即ち、モーブ達とは集落を挟んで反対側である。

「モーブの方は本当に大丈夫ですかい？ 姐さん」

実際に効果があるのかとタマは不安そうにクレリアに問いかけ、キジハタもうゝむ、と腕を組んで唸っていた。だが、クレリアは冷静に返答する。

「ええ、『ゼゼラ』には北と南の住人を一人ずつ、壊滅したことを伝えさせている。東部のオークが余程の馬鹿か天才でない限り、その意味を考えるでしょう」

「余程の馬鹿だったら？」

「その時は『ゼゼラ』から落とす。『パイルパーチ』は辛い戦いになるわ」

戦争では何が起こるかわからない。だからこそ、コボルトやケツトシー達の情報集めが重要になってくる。作戦を成功させるにも変更するにも情報が必要なのだ。

彼女達は森に身を潜めながら、時を待っていた。
そして……。

「モーブより報告。『ゼゼラは動かず』。『ゼゼラ』から伝令のコボルトを確認」

黒わんこ、『隠密』ヨークが相手の動きを報告すると、クレリアは小さく息を吐き、シバは木の根元にへたり込み、キジハタとタマは頷いていた。

「予定通り、そのコボルトは通してあげなさい。帰りは捕まえるようにね」

「『ゼゼラ』のオークは普通だったようすな」

キジハタが安心したように笑い、クレリアも頷き……シバに跪く。

「シバ様。辛い戦いになります。必ず私かタマの側に」
「うん。ごめんね。クレリア……一番危険なことさせて」

申し訳なさそうなシバにクレリアは笑って首を横に振る。

「私はシバ様に生きる意味を与えていただきました。みんなが楽しく

暮らせる国を作るためにも、今は貴方の剣となって戦いましょう。
シバ様は、後でねぎらつてくれればいいのです」

彼女は心の中でねぎらい方の例を想像していたが、それを口から出していれば美しい光景に感動している周りの戦士達は、反応に困ったであろうことは間違いない。

クレリアは表情を引き締めた戦士達を見渡して命令する。

「全軍、『パイルパーチ』から『ゼゼラ』への援軍を殲滅する。タマはコボルト弓隊を指揮しなさい。ただ、一射目は私が指示を出す。先鋒はキジハタ。私は状況を見て判断する。ヨークは敵の移動経路を特定するように」

「わかったぜ。姐さん」

「承知」

「了解」

クレリアが今回の戦いで一番悩んだ点は『パイルパーチ』の戦力が多すぎることにあった。ハイオークを始めとする単体が強力なオークも多く、普通に攻めた場合、短期間で落とそうとすれば被害が大きすぎると考えたのだ。

かといって、集落を順番に落とせばオーク達の本国に連絡が行き、警戒されてしまう。そうなればモフモフ帝国は挟撃の危機に陥ることになる。

結局短期決戦を行うしか道はなかったのである。

そうなれば、なるべく被害を抑えなければならない。
彼女はそう考え、結論を出した。

その結果が今回の綱渡りのような作戦である。コボルト族とケツトシー族の諜報力……オーク達がひ弱だと考えている彼等の本領を活かすことに活路を見出したのだ。

『隠密』ヨーク達からの報告を受けて、相手の援軍が通る道特定したモフモフ帝国軍は待機位置で息を潜める。

援軍の数はオークリーダー1名、オーク3名、ゴブリン50名。
対してモフモフ帝国の戦力はゴブリンが63名、コボルト弓隊は80名。数の上で優位に立っていた。

クレリアにとって朗報だったのは、援軍にコボルトが混ざっていないことだ。オークには弓を使う習慣がないために有用性に気付いていなかったのである。

恐らく戦いが進めば敵も気付く。クレリアはオークを甘くは見ていない。今回以上に先の戦いは厳しくなる……彼女はそう考えていた。

目の前をオークリーダーを先頭に、援軍が通って行く。
クレリアはオークリーダーが通り過ぎたのを見計らって、命令を下した。

「撃てっ！」

「ぎゃあああああっ！」

矢が放たれ、ゴブリン達が悲鳴を上げて倒れていく。コボルトの矢は決して強くないが、鉄の矢じりは確実にゴブリン達を負傷させていった。

突然の横からの攻撃に、オーク側のゴブリン達が混乱する。

コボルトの射手達は木々にまぎれているが、平常ならゴブリン達も見つけて反撃に移っただろう。だが、彼等は敵が東部集落を攻めていると思っていたため、不意の攻撃に対応出来なかったのである。

先頭を歩いていたオークリーダーが事態を把握し、大声を上げた。

「全員退却だっ！ 立て直すぞ！ 今は逃げろっ！ くそっ！ 卑怯な……っ！」

「全軍突撃っ！ 一人も逃すなっ！」

長槍を振り回しながら、命令するオークリーダーの声をかき消すかのように、キジハタが叫んで、オークに切り込んでいく。

クレリアはオークリーダーの方にタマが向かったことを確認すると、キジハタの援護をするべく、オークに狙いを定めて駆けて行った。

「な、お前はルートヴィツヒ！」

「誰だそりゃ。俺はモフモフ帝国軍のタマってんだ。降伏してくんねーか？」

タマは真剣な表情で鋼の槍をオークリーダーに向ける。

「くく……情弱なコボルト如きに降伏したお前が何を言うかと思えば」

「昔のよしみだ。カスバル……出来れば殺したくねーんだ」

「断る。裏切り者め。コンラート様に首を届けてやる」

カスバルと呼ばれたオークリーダーは、馬鹿にするように笑うと問答無用とばかりに、踏み込んで鋼の槍をタマに向かって叩きつけた。

「残念だ。本当によ！」

だが、タマはあっさりと弾き返すと、距離を空ける。

「種族には長所と短所があるんだ。俺達は確かに強いが、それだけじゃいけねえ」

「ふん、強い奴が支配する。当たり前だろうが」

タマが突き、それをカスバルが払う。槍を振り、力と力でぶつかり合う。

コボルトやゴブリンとは比較にならない膂力を持つ二人が槍を振

り回し、ぶつかり合っているため、他の者は近づけない状況を作り出していた。

「じゃあ、今の状況はなんだってんだ。負けてるんだろうがよ」

「俺達が臆病なコボルトに負けるわけが！」

「負けんだよ。勇敢なコボルトに」

互角の勝負を続けていた二人だが、徐々にカスパルの息が上がり、タマの攻撃が相手の身体にかするようになっていく。

対して、タマは冷静にピタリと槍を相手に向けていた。

カスパルは理解できないといった様子で歯を食いしばり、タマを睨みつける。

「弱くて飛ばされたお前が何故……」

「俺は俺より強い頭のおかしいゴブリンと、化け物みたいな姐さんに鍛えられてるからな」

「認めん……俺は認めん……！」

我武者羅に突き掛かってきたカスパルの槍をタマは柄で逸らす。そして、驚愕するカスパルの首に槍を突き刺した。

カスパルの巨体がどす……と、大きな音を立てて横たわる。タマはふん、と鼻を鳴らすと戦闘を終えた仲間達の元へと歩いていった。

タマが相手のオークリーダーと戦っている間に勝敗は既に決まっていた。相手が混乱していることに加え、オークの三名のうち、二名が早々に討ち取られたからだ。

「味方被害戦死者1名。負傷者2名。敵は戦死12名、降伏20名。オーク1名を含め残りは逃走」
「十分ね」

ヨークからの報告を聞きながら、クレリアは呟き、タマの方へと近付く。

「タマ。ご苦労様」
「……姐さんが労うなんて珍しい」

ぺしつと腕を叩いて声を掛けたクレリアにタマはおどけたように笑顔を向ける。

「貴方は頑張ったから」
「姐さん……ありがとうございやす」
「ただ……化け物？」
「頭がおいしいゴブリンって誰だろうか？」

正面の無表情なクレリアの静かな圧力と、背後からの殺気にタマ

は敵より味方の方が余程怖いと痛感することになった。

「さて、クレリア殿。これからどうする？」

負傷者の治療が行われている中、キジハタはクレリアに確認する。ここから先はクレリアもまだ説明していない。状況の変化で取る策を変えていくつもりだったからだ。

「ヨーク。捕まえたコボルトは『ゼゼラ』に報告させたわね？」

「はい。報告したあとは逃げるようにと」

ヨークに頷くと、クレリアは全軍に命令を下す。

「負傷者、コボルトは待機。他はタマを先頭に全員で『ゼゼラ』の

“援軍”に向かう」

「本当におっかねえなあ」

「タマ。今度はオークも降伏させる。一人も死なせない」

「了解」

味方と勘違いしてクレリア達を引き入れた『ゼゼラ』の集落は中心であるオーク達が入質になったことにより、あっさりと陥落することになる。

降伏した中でも戦意のある者を加え、編成しなおしたモフモフ帝

国軍は『パイルパーチ』近郊に布陣した。

だが、『パイルパーチ』にはまだ、まとまった戦力が残っている。東部制圧戦の最終局面、『パイルパーチ攻防戦』が始まるうとしている。

第二十話 死の森東部制圧戦 パイルパーチ攻防戦 前編

クレリアは『パイルパーチ』の様子を探索専門の黒いコボルト、『隠密』ヨークからの報告を聞き、攻め方に悩んでいた。

オークは基本的に戦いを好み、個人の強さへの強いこだわりがあり、強さこそが正義と謳っているような種族だが、決して集団戦が苦手なわけではない。むしろ、タマのように集団戦も得意にしている者が多い種族らしい。

コボルト達を人質に取るかとも彼女は考えていたが、オークリーダーのタマは相手のオークがその手を使うことは有り得ないと断言していた。

そんなことをすれば、オークの信望を無くすと。

「じゃ……あんたは？」

「いや、あの……俺だって子供は解放するつもりで……ま、まあ、昔のことはいいじゃないですかい！」

話し合いの席でタマはクレリアとケットシー族のブルーから、じいつと見つめられ、慌てて縮こまった。彼を助けるようにシバがまあまあと間に入る。

そしてシバは確認するように全員を見回し、最後にクレリアを見た。

「それで、本当に『パイルパーチ』に攻めるの？」

「はい。攻め落とさなければ後がありません」

クレリアの言葉に、キジハタとタマが頷く。彼等もここを落とせなければ相手の本国に東部の現状は伝わってしまうと考えている。

向こうの魔王候補に、配下が減っている場所が東部だと断定され、攻められる前に落としきり、防衛体制を整える必要があるのだ。

「敵の将、コンラートも侮れませんな。拙者達の奇襲で気付いたのでしょうか」

「ええ。敗走した者達の話から、遠距離攻撃の有効性に気付いたのでしょう。それを活かす為に、矢よけの柵を家を取り壊して急いで用意したようだし、弓と投石も用意しているらしいわね。矢じりは木だろうけど、上手く攻めないと守りきれられるかもしれない」

クレリアは話しながら大体の地形を書いているヨークの絵を確認する。『パイルパーチ』は、もふもふ村の地形と同じく、少しだけ高くなっている場所に作られている、比較的に攻めにくく、守りやすい地形だ。

その地形に、まだ多くのゴブリンとコボルト、そしてハイオークが籠っている。

時間稼ぎはさせたくない。相手はどう考えているか……そんな風に悩みながら、クレリアは考え込んでいた。

そんな彼女に青い髪猫耳の少年、ブルーが静かに近付いて話し掛ける。

「……クレリア……挑発……は？」

「ふむ……相手が出てきてくれれば有利かな」

ブルーは出しゃばったことを恥ずかしがるように、赤面して後ろに下がった。

挑発して出てきたハイオークを切れれば最善だが……出てこない場合も考えておかなければならない。

「よし、まずは挑発する。部隊は分ける……正面の指揮は私。タマと降伏したゴブリン達、長槍隊。側面の指揮はキジハタ。ヨーク、ブルー。貴方達はゴブリン戦士隊と自分の部下と共に彼の方に。コボルト弓隊は半分に分ける」

「了解！」

「そしてシバ様……いえ……」

クレリアは皇帝であるシバを見る。彼女は躊躇する……彼に戦争を手伝わせることを。そのことに気付いた彼は、クレリアの頭をぽかっと叩いて笑った。

「ダメだよ。クレリア。僕も頑張るから……覇者は駄目」

「う……はい。シバ様はキジハタの方に。作戦は……」

クレリアは作戦の要旨をモフモフ帝国の幹部達に説明する。
その説明を聞いた彼等は真剣な表情で頷いた。

『パイルパーチ』西側……相手の正面の近くでは、クレリアを中心にタマの長槍隊が10名、コボルトの弓隊が40名、そして降伏したばかりでも戦意のあるゴブリンが20名……彼等は小さな剣と大きめの盾を持たされて待機していた。

タマの説明ではここの指揮官は大雑把な性格の典型的なオークらしい。だが、クレリアはたった一日で防衛体制を整えた手際から、用心深さも兼ね備えていると判断している。

本当なら長期戦に持ち込み、じれさせたいのが本音だ。
だが、状況がそれを許さない。

面白いものだと思っただ。彼女が騎士の時は指揮官としては、目の前の相手に勝てば良かった。それが今では状況まで把握して考えなくてはいけない。

上司の消極的な作戦に不満を持つことも少なくなかったが、今は彼等の気持ちも何と無く理解出来ていた。

他人の命を預かる圧力というのはこれほどのものなのだ。

「タマ。罵詈雑言は任せた。私はそういうのは苦手だから」
「へっへっへ。お任せを……姐さん」

タマはケットシーから預かった大きな音が鳴るボールを一つ割って自分に注意を引き、弓の射程ぎりぎりまで一人で前に出て、大きな声で叫ぶ。

「おおいつ！ コンラートのへっぽこ野郎！ 臆病者のコンラート！ お前らなんてコボルトの足元にも及ばねえ雑魚だっ！ 怖くないじゃあ出てこいつ！」

しーん……と、戦場が静まり返る。敵も味方も一言も発しない。しばらく彼女達は待ってみたが何の反応もなかった。

「センス無い」

「いやあ、面目ない」

あまりの無反応さに、タマがしょぼくれた様子で仲間が待機している場所へと戻ってくる。流石にこれでは相手の反応がわからないため、クレリアはゴブリン達にも罵詈雑言を相手に投げかけるように命令した。

だが、相手側は少しだけざわめいたものの、自分達の集落から出ようとはしなかった。

クレリアは拳を握り締め、次の命令を出すべく顔を上げる。手には汗をかいていた。

一方、『パイルパーチ』の内部では、中央の広場でハイオーク、コンラートが愉快そうに鉄製の矢じりが付いた矢を弄びながら、配下のオークから報告を聞いていた。

報告しているオークは恐縮し怯えきっている。

この自分達の隊長が気分次第で自分に死が与えられることを知っているからだ。

ハイオークはオークリーダーと同じくらいの巨体を持つ、人型のオークの上位種である。猪の耳と褐色の肌を持ち、他の種族の上位種のように魔法を使うことはできないが圧倒的な膂力を誇っていた。

精悍な顔立ち、短い不精髭を生やした筋骨隆々の大男、コンラートはそんなハイオークの一人だ。彼は報告には応えず、矢を弄り続けている。

「そ、それで如何なされますか？。 奴ら雑魚共の口を閉じさせますか？」

報告したオークは自分達の指揮官が何も答えない事に不安になり、敵の挑発への対応を確認しようと跪いてコンラートの顔色を窺う。

彼はオークを見て、馬鹿にするように笑っていた。酷薄で自分の実力への自信を感じさせる……そんな笑みで。

「だからお前らは無能なんだ。俺が折角、殆どの勢力を落としてやったつてのによ……二年も掛けてコボルトを仕留められないどころか、逆にやられるとは」

「う……ぐ……」

「まあ、魔王候補のあの馬鹿が気に食わなくてさばって良かったぜ。お前らが無能なお陰で面白い戦いが出来るんだからよ。お前に刺さってたその矢を見る」

コンラートは地面に矢を投げ捨て、側に控えているオークリーダに持たせていた巨大な両手剣を取り、押し殺すように笑ってその巨体を震わせる。

「この戦いは時間を掛けて用意されたもんだ。挑発に乗れば間違いくなく負ける」

かつてない興奮をコンラートは感じていた。彼にとってはコボルトもゴブリンも、そしてオークも弱っちい蟻のような存在だと思っていた。

実力ある者との戦いを楽しみにしていた彼にとって南部のエルキ達との戦線から外され、弱い部族しか住んでいない東部に廻された苛立ちは相当なものであった。

だが、今、彼は追い詰められている。しかも最も弱く、最も臆病なコボルトに。

コンラートは初めて東部に廻されたことを、魔王候補に感謝して

いた。

「この戦いを考えた奴は強い。お前みたいな無能では何年掛けても倒せないくらいにな……何といったか。コボルト族の女」

「た、確か、クレリアとか」

ぶるぶると震えながらオークが答える。コンラートはそう、そいつだ！ と上機嫌に頷くと、声を上げて笑った。

「そいつは俺の知らない戦争を知っている！ コボルト族……逃げ
るばかりのつまらないやつらと思ったが……実に面白い……くくっ
……はははははっ！」

コンラートの上機嫌な様子に、奇襲から逃げ帰ったオークは跪いたまま、ほっと息を吐いた……が、急に頭に衝撃が走り、地面に思い切り頭を擦り付けられる。

頭を踏まれたのだ。起き上がろうとするが、相手の力が強く、動くことも出来ない。

「全員良く聞け。俺はお前達に結果を求める。コボルトもゴブリンも関係ない。实力を見せろ！ 勇気を見せろっ！ 俺の軍に臆病者と無能者はいらんっ！ コボルトだろうがゴブリンだろうが有能な奴は出世させてやるぞ！」

集落全体に響きわたる大声で、コンラートは笑みを浮かべながら叫び、

「そして臆病者で無能な奴はオークだろうが……こうだっ！」

あっさりと巨大な剣で逃げ帰ったオークを真つ二つに切り捨て、赤く染まった剣を敵のいる方向へと真つ直ぐに向ける。

「いいな。俺の指示を聞き漏らすな。奴等の挑発は無視しろ。奴等は絶対に攻めてくる。全員で歓迎してやれ。いいな！」

恐怖からか、それとも中央に堂々と立つ指揮官の絶対的な自信からか、『パイルパーチ』では闘う者全員が決死の覚悟で、クレリア達が攻め込むのを待ち構えていた。

第二十一話 死の森東部制圧戦 パイルパーチ攻防戦 中編

罵詈雑言に効果がないと判断したクレリアは、それを止めさせ、『パイルパーチ』の方を厳しい表情で睨みながら、考えに耽っていた。

当然、彼女は罵詈雑言の通用しない場合は考えている。むしろ、そちらの可能性が高いと考えての軍隊配置だ。

ただ、この場合……相手にそれ相応の指揮官がいるということになる。

敵は臆病ではない。それはタマの情報から明らかだ。

「動きやせんね……姐さん、どうすんで？」
「『本隊』と補給担当のモーブにはすでに伝令を出している。私達は囷として、援護に廻る。時間が掛かるかもしれないけれど、『パイルパーチ』は必ず落とす」

タマは黙って頷き、彼もまた、かつての上司が指揮を取っている『パイルパーチ』を、覚悟を決めた表情で見つめる。

「被害は出やすね。なるべく死なせたくないんですが」

「可能な限り減らす。任せておきなさい」

「……了解っ！」

タマは空元気を出すように笑い、クレリアの指示通りにゴ布林達に矢よけの楯を持たせていく。コボルト達も自分達の小さな身体を隠して矢を撃つための、簡単に立てられる薄い木の板を手にとった。

「全員に告ぐ。これより敵正面から攻撃する。先頭はタマ。彼が相手の集落の門を破壊すると同時に内部に突入する。指示を聞き漏らさないよう」

タマの長鎗隊が景気良さそうに、了解だ！と陽気な声を上げる。そんな彼らに釣られるように楯を持ったゴ布林達も戸惑いながらも頷いた。

「コボルトは私達の突入の援護。可能な限り近くから集落の射手を狙う。貴方達の腕前を見せてあげなさい。援護はお願いね」

40名のコボルト達は緊張するように身体を固くして直立しながらも、はいっ！と大声で彼女に返事を返した。

クレリアは剣を抜き……大きく息を吸う。
そして、引き抜いた剣を集落に向けた。

「『パイルパーチ』攻略戦を開始するっ！ コボルト射手隊っ……」

前進！」

「了解っ！」

クレリアの命令を受け、木の矢寄せを担いで相手に矢が届く位置まで走っていく。

「コボルト弓隊！ 援護射撃準備！ タマっ！」

「あいよーっ！」

巨大な鋼の長槍を担ぐように持ったタマが大声で返事をした。

コボルト弓兵隊の前進に気付いた敵は、矢よけに隠れた彼等に攻撃を始めている。

タマは先頭に立つと、集落の門に向かって緩やかな坂を駆け登っていく。

「うおおおおおおおっ！」

「全員続けっ！」

コボルト弓隊が柵の隙間を狙って矢を放ち、援護をするが相手の攻撃を完全に封じることが出来ない。木の矢じりの矢や石が無数にクレリア達を狙って放たれる。

当然、楯を持たない上に身体も大きいタマにはいくつもの矢や石が命中するが、彼は止まらずに門を槍の柄で打ち倒した。

クレリアは彼が空けた入口から真っ先に飛び込んでいき、入口を塞ごうとしたコボルトやゴブリンを冷静に切り捨てる。

「よしっ！ 全員敵射手を攻撃っ！ 絶対に深追いはするなっ！」
「了解っ！」

そして、クレリア自身はタマと並んで前面から押し返そうと集まってくるゴブリン達と剣を合わせる。彼女の遠目には、ゴブリン達から逃げ、距離を取ろうとしているコボルト達の姿が見えた。

その際にコボルト弓兵隊は集落の柵を逆に利用するように並び、援護射撃の準備を整えて行く。

コボルトを追いかけていたゴブリン達もクレリアと、タマの戦っている場所へと集まっていき、膠着状態になるうとしたその時、一番前に踏み込んでいたゴブリンが真っ二つにされた。

敵のゴブリンの攻撃も止まり、その真っ二つにした者を前に通すように場所を空ける。

一度戦闘を止めたクレリア達の前に褐色の巨大な人型のハイオーク……コンラートが両手剣を構えて凶暴な笑みを浮かべながら立っていた。

「お前がクレリアか？ 素晴らしい手際だな」
「勝負は既に付いている。降伏しなさい」

タマがクレリアを庇うように槍を構え、長槍隊達もゴブリン達の先頭に立って槍を向ける。だが、コンラートはクレリアの言葉にも向けられた武器も気にせず、タマに笑いかけた。

「おい、ルートヴィッヒ。お前、もう一度俺の部下になれよ。使えそっだ」

「生憎、あんたより姐さんの方が俺は怖いから遠慮するぜ」

「おう、言ってくれるじゃねえか」

コンラートは、げらげらと大笑いして両手剣をクレリアに向ける。

「お前を殺したらコボルト共は終わりだ。随分準備をしただろうに、最後はそんな少ない人数で攻めてくるお粗末さ。無数にいる雑魚共を壁に使えばいいのによ」

「その程度の考えで動く以上、貴方達オークは永遠に私には勝てない。コボルト達、撃て！」

それを合図として、コンラートは矢を弾きながら、クレリアを狙って剣を振り下ろす。

「く、早いっ！」

「ほう、かわすか。本当にコボルトにしとくのは勿体ない女だな」

コンラートとクレリアに巻き込まれるのを恐れた敵も……そして、味方も二人には近づけない。唯一タマだけがクレリアに加勢しようとしたが、視線で止められる。

「じゃあねえ。自分の仕事をするか。全員、敵を食い止める。コボルトは味方に矢を当てないように注意しろ。後は当初の取り決め通りだ！ 耐えろよ！」

乱戦になっていく戦場で必死に指揮を取りながら、数の不利を埋めるべく、戦闘に不慣れな新しい仲間を庇うように長槍隊を戦闘を続けながら配置し直して、じりじりと下がりながら戦闘を継続する。

「こつちに来たのはコンラートだけか。こりゃあ、まじいかな」

圧倒的な数の前に、内部に侵入したクレリア達は徐々に押し返されようとしていた。

「皇帝さん、キジハタ、ブルー……頼んまずぜ」

タマが祈るような気持ちで必死に倍近くの敵を相手に凌いでいる頃、側面のシバ達も既に行動を起こしていた。

「シバ様。クレリア殿は圀になると」
「みんな、向こうを早く助けるよ？」
「承知」

伝令のコボルトの報告を受けたシバは、覚悟を決めたように堂々と立っていた。

側にはケットシー族のブルーと『隠密』ヨークも控えている。

「モフモフ帝国軍はクレリアだけじゃない……よね？」
「当然」
「……ん」

皇帝であるシバの側にいる全ての戦士達は、シバの問いかけるような言葉に頷く。

コボルト族もゴブリン族もケットシー族も。

ここにいるのは、全て一年以上の時をクレリアと共に苦勞を重ねて来た者達だ。

実戦と訓練を乗り越えてきた自信と自負が彼等にはあった。

「じゃあ、それを見せよう。勝利しよう……僕達の国を作っていくために」

奇襲をしなくてはならないため、声は出せないがそこに立っている全ての者が高揚感を感じている。シバも彼等から立ち上る熱気で

そのことを理解していた。

「それでは、『パイルパーチ』を攻略する。僕の魔法は攻撃には確かに使えない」

全ての者が見守る中、シバの周りに魔王候補としての膨大な魔力が集められていく。

「だけど、土を動かすことは僕が一番得意とするところだからね」

シバは土の精霊に、攻め込む部分の柵の周りの土を移動させてくれるように頼む。いつもの土木作業と同じ要領で。

シバ達が待機している場所から柵を乗り越えることが出来るように、巨大な土の道が一瞬で完成する。これがクレリアに頼まれたことだった。

柵の後ろに遠距離攻撃が出来る部隊が籠ると攻めるのに危険。ならば、柵そのものの意味をなくしてしまえばいい。

クレリアが前面である程度の兵士を引きつけている今、邪魔もない。

予定通りにキジハタを先頭に、全ての戦士達が集落の中に突入していく。ケットシー族の破壊工作隊や、コボルト族の特殊工作隊も全て。

「全員、目指すは西側入口。中央を抑えて敵を挟み撃ちにする！
前に出てきているオークリーダー、オークは複数で当たるんだ。逃
げた者は追わなくていい！」

シバは武器を持っていない。身体も震えている……だが彼もまた、
必死に戦っていた。

第二十二話 死の森東部制圧戦 パイルパーチ攻防戦 後編

ハイオークのコンラートは、思わぬ強敵との一騎打ちに心踊らせながらも、何処か不自然さを感じていた。確かに目の前のコボルトは強い。気を抜くと一瞬で殺されそうなほどに。

（殺気はある。だが、何処か逃げてるような……臆病？ んなわけねえ。なんだ？ 気持ちの悪い戦い方だな。やる気がねえのか？）

両手剣で相手の攻撃を弾き、牽制しながら周囲の様子を冷静に観察する。

周囲ではクレリア達のゴブリンと部下のゴブリン達が戦っている……が、違和感を覚えてしまう。そう、まだ戦っている。

自分達の周囲で。

（何でこっちのが数が多いのに互角なんだ？）

相手に合わせてコンラートも時間を稼ぐ戦い方に切り替え、その違和感の原因を探る。

正面からぶつかっているゴブリンは普通。二匹が並んでこちらの部下の攻撃を必死の形相で防いでいる……が、その後ろに控えてい

る槍持ったやつは違う。

あれは別物だな。と、コンラートは判断した。

（それにあのコボルトの的確な援護射撃！　うちのも臆病な癖に頑張ってやがるが……まさか、こいつらも相当時間掛けて準備したのか。相手になってねえ。だが、負けはしないな。数が違う。いや、待てよ……）

打ち込んできた剣をコンラートは弾き、後ろに飛び下がって距離を取る。

「てめえ、まさか……」

「……」

表情は完全に殺しているが一瞬だけクレリアの動きが止まった。コンラートはその反応でクレリアのやったことをようやく理解する。彼は背中に、この戦争中で初めて冷たい汗を感じていた。

やはり強い……クレリアはハイオークと剣を合せながら、相手を打ち崩せずにいた。

彼女は相手が弱ければ、一気に決着を付けようと考えていたのだが……コンラートの実力が高すぎたため、その方法は諦めている。

（まるで傭兵）

型も技も何もない。だが的確に殺そうと襲ってくる。騎士や剣士ではない。

圧倒的な力と戦いのセンス、そして経験で戦っている相手だとクレリアは判断していた。

クレリアは傭兵出身であることもあり、そのような戦いにも慣れていたが、あまりにも力と武器のリーチに差がありすぎる。

かすただけでも死ぬかもしれない相手の攻撃を掻い潜りながら、クレリアは時間稼ぎに専念していた。幸い周囲のゴブリン達は効果的なコボルトの援護もあって善戦している。

リスクの高い戦術を選ぶ必要はない。後は仲間を信じればよい。そう判断し、彼女はハイオークを自分に引きつける。

が、今度は相手の動きが時間を稼ぐものに変わる。

付け込むように今度は逆に積極的に切り込んでいくが、防御に徹する相手を倒しきれない。

「てめえ、まさか……」

クレリアは少しだけ動きを止める。

だが、動揺はしなかった。なぜなら、彼がここにいる時点で既に

決着は決まっているからだ。そして、勝利は目の前にある。

クレリアは引きつった笑みを浮かべているコンラートを、静かに見上げる。

「戦争は一人でするものではない」

「何……？」

「それに」

用心深く剣を構えながら、クレリアは彼と対峙してから初めて笑みを浮かべた。

すでに相手の後方では、武器の打ち合う音と悲鳴と怒号が響きわたっている。

「軍隊に民間人が勝てるわけないでしょう」

「舐めすぎてたな。まさかこれほどの差があるなんてよ。参ったぜ……うちのオーク共じゃ止めることもできねえか。不甲斐ない」

東部の司令官、コンラートは剣を構えながら、からつとした笑みをクレリアに向けた。

彼は牽制するように両手剣をクレリアに向けながら大声で叫ぶ。

「降伏したいやつは降伏しろ！ 逃げる奴は北から逃げるぞ！ 殿はこの俺様がやってやる。早く逃げろ！ 挟み撃ちにされるぞっ！」「なっ！」

降伏するか逃げるかを迷うゴブリンやコボルトに紛れるように、コンラートはあっさりと逃げていく。

乱戦になると彼の武器は戦いにくいいため、広い場所に出るつもりだろう。

クレリアは追いかけることは出来なかった。

彼女が迷っているゴブリンを止めなければ、コンラートと一緒に付いていってしまうだろう。そうなれば、戦力を持ったコンラートの対策をするために、相当の労力が必要になってしまう。逃げた人数が多いほどその労力は増大してしまうのだ。

「クレリア、よく聞けっ！」

遠くからコンラートの大声が響く。

クレリアは追撃をしようとする味方を止め、コボルト達に看護隊を呼びに行かせ、治療を開始するように命令する。

「また戦場で会おう！」

まったく負の感情を感じない明るい笑い声を響かせながら、ハイオークのコンラートは集落から逃げ去っていった。

「姐さん、勝ちやしたね！」

「ええ。でも、まずいのを逃がしたかもしれない」

「大丈夫じゃないすかね。失敗したやつにはきつついですぜ？ オークは」

明るいタマと違って、クレリアは変な男に目を付けられたとげんなりしていた。

逃げ延びた『パイルパーチ』の北の森で、自分に従った少ない部下から詳細な報告を受け、コンラートは笑みを浮かべていた。

敗北の惨めさ、悔しさは感じていたがそれ以上に愉悦を感じていたのである。

彼は木の根にその巨体を預けて座りながら、無精髭を撫でる。

「結果的に北と南を一瞬で抜き、中央はすぐに攻めず、俺達の援軍を潰し、中央はその後か……最後はあのおかしいコボルトが自分を囿にして、本命は側面から奇襲」

「はい。オークリーダー、ディルク様は『剣聖』キジハタと名乗るゴ布林に。エーベル様もケットシー族の族長、ハイケットシーのブルーに打ち取られました」

コンラートの周りには10名前後のゴ布林と同じくらいの人数のコボルトが集まっていた。『パイルパーチ』から脱出した者達で

ある。

彼等は一様に自分達の主人の怒りに触れないかと怯えていたが、二名だけは怯えることなく、真っ直ぐに立っていた。解説しているのはそのうちの一人。

「お前の説明を聞く限り、勝負になってないな」

「はい。屋根の上から見ていましたが、相手は同じゴブリンとは思えない強さでした」

ハイオークを恐れることなく彼女は淡々と事実を説明し、戦いの様子を自分の主へと説明していく。客観的に。

だが、彼は納得できないように唸った。

コンラートが納得できなかったのは、彼女の説明ではない。

「お前の説明じゃ族長自ら来てたんだろ？　なんで逃げたんだ。お前」

「人間に与するような者を、族長とは認めておりません」

「人間？」

「はい、あのクレリア・フォーンベルグという女です」

なるほど、と彼女の話聞いてコンラートは納得した。

確かに見かけはハイコボルトだったが、どこか不自然な違和感を持っていた……それが、目の前のコボルトの説明で消えていく。

あの戦い方は人間のもの……そう考えれば理解出来る。
やつらは戦争が大好きな種族だから。いつか戦ってみたいもんだ
とコンラートは思った。

「お前、確か一日でコボルト共を戦えるようにした奴だったな。名前は何？」

「コボルトリーダー。バセットです。コンラート様。有効な動きが出来ず、申し訳ありません」

「付け焼き刃であれなら十分だ」

茶色と黒のまだら模様の頭を持ったバセットは深く頭を下げた。
コンラートは黙って立っているゴブリンにも目を向ける。

追撃を抑えるために殿に立っていたコンラートの背後で数名のゴブリンを率いて、最後まで残っていたゴブリンだった。

「お前は？」

「チャガラ。ゴブリンリーダー」

負けたが全てを失ったわけではない。
役に立ちそうな奴だけが残ったと思えばいいのではないか。

「物好きな奴らもいるもんだな……あいつらの戦い方はお前達、覚えてたな？」

「はっ！」

「あいつらより強い軍隊を作る。そして、あいつらに勝つ。俺の軍ではオークもゴブリンもコボルトもねえ。使える奴を出世させてやる。お前らが新しい軍の中心だ」

二十名ほどのゴブリン、コボルトの視線がコンラートに集中する。

「お前らは馬鹿な魔王候補の部下じゃねえ。『俺』の部下だ。俺を選んだお前らは絶対に最後まで面倒みてやる。付いてこい」

コンラートは新しい部下を見渡し、大声で笑った。

こうして『パイルパーチ』の攻防戦は幕を閉じた。

モフモフ帝国は『死の森』東部を完全に制圧し、オークに対抗する勢力として名乗りを上げることになる。

だが、同時にこの戦争はオークを目覚めさせるきっかけとなる戦争だった。

そのことを知っている者は、今はまだ少ない。

第二十三話 死の森東部制圧戦 戦後処理

『パイルパーチ』を制圧したクレリア達は落としたそれぞれの集落に住人達を戻し、戦後処理を行っていた。

落とした全ての集落の住人を合わせると、モフモフ帝国と同じくらいの人口になるため、モフモフ帝国の首都には入りきらない。それに一ヶ所に人口を集めすぎるのも問題がある。

そこで、東部の制圧をした場合には落とした集落はそのまま使うことを戦争前にクレリア達は決めていた。これにはこの先、東部以外の集落を落とした場合の運営をするための経験を積む意味も含まれている。

「キジハタ。ゴブリン戦士隊はどんな様子？」

「拙者の戦士隊は戦死者15名、負傷者23名」

今回の戦いで、ゴブリン戦士隊の半数近くの戦士が戦死、もしくは負傷した。負傷者は治療できるが、戦死はどうしようもない。

彼ら以外にコボルト達やクレリアの指揮したゴブリン達の死者もかなりの人数に上っている。被害はクレリアの想定よりも多かった。

「思った以上に被害を出してしまったわね」

「申しわけない」

「貴方のせいではない。それで戦士隊への希望者は？」

制圧した集落のゴブリン族は合計で270名程。コボルトもかなりの人数になる。彼等から新しく戦える者達を集め、訓練を施していく必要があつた。

「予想以上に多い。コボルト族は70名、ゴブリン族は150名」
「多過ぎるわね。半分に選抜を。後は統治を安定させながら増員する。コボルト達も同じ」

「了解」

キジハタは頷くと一礼し、自分の仕事をこなすために戦士の志願者達の所へと戻って行った。キジハタだけでなく、全ての者が忙しく働いている。

「一気に忙しくなっちゃったね」

「シバ様……」

一息ついたのを見計らい、シバはクレリアに駆け寄っていった。

彼も族長として各集落を飛び回ってコボルト達の取りまとめを行っていたが、ようやく、クレリアが戦後処理をしている『パイルパーチ』へと戻ってきていたのである。

クレリアは彼の笑顔を見ると、少しだけ気を緩めて微笑んだ。

お疲れ様」とシバはクレリアの頭を撫でると彼女は無表情なまま、ぶんぶん尻尾を振る。彼女にとっては何よりの褒美だ。

「降伏したオーク族はとりあえずタマに任せたよ。後は、それぞれの集落から何人か代表者を選んで貰ったんだけど……」

「はい。シバ様、ありがとうございます」

幹部が足りないというのは、現在のモフモフ帝国が抱える問題であつた。

降伏した集落もそのまま放っておくわけにはいかない。

そこで、クレリアはシバにコボルト達を取りまとめるのと同時に、集落の代表をゴブリン族、コボルト族の双方から選んでもらうていた。

人口100人前後の三つの集落はモフモフ帝国から政務官を派遣し、代表者達に幹部教育と技術指導、生産物の管理を教えていく……という手筈になっている。

モフモフ帝国の方はキジハタと軍を戻し、彼を中心に現状を維持してもらい、クレリアとシバ、護衛のタマはパイルパーチをモフモフ帝国の第二の都市にするための準備を行うことになる。

パイルパーチの準備は主にシバの魔法による来年のための農場の整備とクレリアによる幹部教育、ビリケ族の幹部を呼んでの産業振興が中心だ。統治の目処が付けば、今度は五つの集落を道で繋げることをクレリアは考えている。

正直、こういった統治は彼女にとって苦手なもので、出来れば誰か変わって欲しい思いが強かったが、愛するモフモフ達のためになることなので頭を抱えながらも彼女は頑張っていた。

「すごいなあ。流石クレリアだね……でも無理していない？」
「大丈夫です。問題ありません」

要所要所で皇帝であるシバはクレリアを労っていた。

彼女はどれほど大変な仕事山積みでも、シバと一緒に毛繕いをしたり、一緒に寝たりしているだけで精神力が回復する便利な性格をしている。

シバの皇帝としての最大の仕事はクレリアの世話なのかもしれない。

こんな風に忙しい日々を彼等は送り、二ヶ月ほどの時が流れ……
ようやく各集落は安定し、クレリア達もモフモフ帝国の首都に帰還することが出来ていた。

執事兼書記長のコリーとメイド兼事務長のポメラが喜んで泣きながらシバに抱きつき、クレリアは少年に抱きつくモフモフ達という絵に視覚的に癒されつつ、コリーとポメラがまとめてくれた報告書に目を通す。

「なるほど。ゴブリン士官のカナフグは、戦士以外のゴブリンにある程度の訓練をしてくれていたのね。政務の方はエルキーのコーラルが手を貸してくれた……と。何故彼は協力的なのかしら。有難いけれど。ん？ ターフェがケットシー族と対立？」

ちなみにクレリアはコボルト語の読み書きを習得している。人間の文字とは大きく異なるが、彼女にとっては簡単なことであった。

軍事と政務、内容で分けて見やすく作られた報告書の最後にはそれぞれの担当者の署名が書かれている。医者の方のターフェのところは問題だが……おそらく、ケットシー族にしつこく付きまとっただけだろうと、クレリアは判断していた。

「ケットシー族はコボルト族と違って、きまぐれで人見知りが激しい。ターフェは……まだまだわかっていない。彼らと仲良くなるには時間が必要なのに」

クレリアは一人、小声で呟く。だが、このとき彼女は気付いていなかった。

実はかなり大きな問題になっていることに。

それを知るのはまだ先のことである。

帝国歴二年 『死の森』 東部制圧戦 パイルパーチの戦い

モフモフ帝国が『死の森』の平定を目指す上で、東部の制圧は後方の安全を確保すること、国力を増大させること、ガルブン山地に住む部族との交易の安全を確保することの三点から、必須となるものであった。

モフモフ帝国大元帥、クレリア・フォーンベルグは以上の理由により東部の制圧を計画。大規模な戦争が始まる前に『剣聖』キジハタに命じてオーク族の支配に属している小集落をモフモフ帝国側の味方に付けている。

『剣聖』キジハタの作戦は大集落の『サーゴ』『ゼゼラ』『ベイカ』、そして東部におけるオーク族の本拠地である『パイルパーチ』を残して完了。この時点で、東部のみにけるモフモフ帝国とオーク族の人口差は無くなっていた。

この作戦と同時に、モフモフ帝国大元帥クレリア・フォーンベルグは『剣聖』キジハタの作戦を進めながら、『パイルパーチ』を攻略するための準備を慎重に進めている。

モフモフ帝国歴二年 秋 皇帝シバ・フォーンベルグは帝国会議において、『東部制圧作戦』の開始を宣言。皇帝自らが親征することとを全臣民に告げた。

モフモフ帝国大元帥クレリア・フォーンベルグによる『東部制圧作戦』に従ってモフモフ帝国軍は進軍し、『サーゴ』をクレリア大元帥が、『ベイカ』を皇帝シバが陥落させ、両軍は『ゼゼラ』、『パ

イルパーチ』の中間点で合流。『パイルパーチ』から『ゼゼラ』に向かう援軍を撃破。その後、『ゼゼラ』を陥落させる。

オーク族拠点『パイルパーチ』の司令官、コンラートは三集落での敗北から、集落で守備に専念することを選択。一方、モフモフ帝国軍には本国の守備に不安があり、短時間で『パイルパーチ』を陥落させる必要があった。

こうしてパイルパーチに置いて『死の森』東部を賭けた戦いが行われることになる。

コンラート率いるオーク軍は弓、投石を用いて激しく抵抗したが、大元帥クレリアによる陽動作戦により戦力が分散。側面より皇帝シバは突撃したため、オーク軍は総崩れになり、パイルパーチは陥落。東部司令官コンラートは逃走した。

パイルパーチの戦いはモフモフ帝国の初めての大規模な戦争である。

この戦いにおけるモフモフ帝国の勝因は複数あるが、最も大きい勝因はオーク族の油断であろう。

この戦争の後、オーク族は我がモフモフ帝国を対等の敵であると認識し、激しい戦いが繰り広げられることになる。

第二十四話 楽園の始まる場所

モフモフ帝国歴二年がそろそろ終わろうかというある日、モフモフ帝国では一年を締めくくる帝国会議が行われていた。一年の総決算である。

この会議が終われば、モフモフ帝国は建国祭に向けて準備をすることになる。

帝国会議には戦後に加わった集落の代表、幹部候補も参加しているため、前回までの会議より遥かに賑わっていた。

「欠席はヨークだけかな。じゃ、帝国会議を始めるよ」

周囲の情報集めに奔走している『隠密』ヨークを除いて全員が揃ったことをシバは確認し、いつも通りに会議の開催を告げた。

慣れている者は悠々と頷き、初めて参加する者達は緊張しながら頷く。

「まずは事務長、ポメラから報告かな？」

「はい。それでは現在の状況について説明します」

メイド兼事務長のポメラはまとめた資料を確認しながら、モフモ

フ帝国の軍事や政務などの説明を行なっていく。

新しい幹部達が参加する今回の帝国会議の開催が年末までずれてしまったことには、一気に臣民が増え、支配領土も広がったことも影響していた。

「……以上のように、モフモフ帝国とパイルパーチをビリケ族との交易拠点化する計画を進めています。また、農業に関しては次回の作付けまでに予定の50%程の整備が進む予定です。残りは来季に改めて計画します」

それぞれの担当者が、自分の部分の説明の時にはコクコク頷く。コボルト族もゴ布林族もケットシー族も……この会議では全ての者が真剣な表情で参加している。

「では、次にクレリア様お願いします」

全ての説明を終えるとポメラはクレリアに振った。彼女はポメラを労うと席を立てて今後の戦略についての説明を始める。

キジハタやタマなど、戦士として幹部になっている者達に一番関係のある話であるため、彼らの表情が一言も聞き漏らさないといった雰囲気になる。

「政務の者には負担を掛けてしまふけれど、来年はシバ様の能力を

農業に振り分けることは恐らく出来ない。だが、50%の収穫量があれば十分な余剰は出来る。すまないがよろしく頼む」

まずはクレリアは新しく出席している農業の政務にあたっているコボルトとゴブリンに頭を下げた。彼女はその上で……と、続ける。

「現在、シバ様には五つの集落を結ぶ道を作って頂いている。これはビリケ族との交易や、各集落との物資のやり取り、臣民の行き来などを考えて作られている。勿論、道が出来ることにより、攻められた場合の防衛には支障が出るのだが……」

そこまで、説明したところで執事兼書記長のコリーが大きな『死の森』全体の地図を用意した。その地図に集落を示す置物を置いていく。

「オーク領である『死の森』中央部の最前線は首都であるここ。要塞化してあるからそう簡単には落ちない。だけど、ここを本気で攻められれば農業や産業にも大きな被害を出してしまう。そこで……」

クレリアは新しい置物をモフモフ帝国の西、中央部に少しだけ入った地点と、モフモフ帝国の北東部に位置する集落『サーゴ』から真っ直ぐ北に行った辺り……『死の森』北東部に少しだけ入った地点に置いた。

「この二地点にある集落を利用して要塞化し、それぞれの地域の攻略の足掛かりとする……とは言っても同時には難しいから、まずは北東部から」

棒を受け取って地図を指しながら、説明を続けていく。

「首都に加え、それぞれの集落からも少しずつ人手を回して欲しい。そして、ある程度北東部の安全を確保した時点でこの拠点に通じる道を作る。道はエルキー達が治める南部にも引きたいのだけど……」

楽しそうにニヤニヤ笑いながら話を聞いているターフェに視線を向けると、彼女は首を少し傾げた。

「現状認めるとは思わないが、一応は伝えよう」

「……こちらが軌道に乗らないと難しいか」

「お互い信用しきっているとは言えないからな」

怜悯な顔に皮肉の込もった笑みを浮かべ、腕を組みながらターフェはクレリアに応える。クレリアも難しいということとはわかっていた。

だが、オーク族に勝つためには必要になる可能性が高いため、交渉していく必要があるのだ。

「そのことは、話し合っていくとして……結論を言つと次の制圧目

標は『死の森』北東部になる。ここもオークの本国からは遠く、統治が行き渡っているとは言えない。しかもここを抑えることで、ビリケ族達との交易はさらにやりやすくなる」

「拙者達は拠点が出来るまでは何を？」

『剣聖』キジハタが、軍事に関わる幹部達と顔を見合わせ、代表してクレリアに問いかける。

「新しい人員に訓練を。戦士としての心得をしっかりと教え込みなさい」
「了解」

軍事関係の幹部達が頷く。キジハタの鍛えたゴブリン戦士隊やコボルト弓兵隊からも新しい幹部を選出し、クレリアは今回の会議に参加させていた。

戦争時に動ける指揮官がいなければ作戦を立てても遂行することが出来ない。

実戦時に使える指揮官にするためにも戦略や戦術に対する知識を身に付けさせる必要があったのである。

クレリアが今後の方針に付いての説明を終えた後は軍事や政務のそれぞれの担当者が報告、提案を行い、話し合いが行われた。

そして、それらも終わり……。

「他に何か議題はあるかな？」

最近ではクレリアが何も言わなくても毎回、会議では激論が繰り広げられる。

今回も数時間話し合われ、皇帝であるシバも会議の参加者達もちよつとぐつたりとしていたが、それもなんとかまとめあげて終わらせ、シバが全員に確認する。

「すまぬのじゃ。儂から一つ」

手を挙げたのは皇帝であるシバの後ろで控えていた、執事兼書記長を務めているコリーだった。

「モフモフ帝国はパイルパーチも領土に加えたのじゃ。今はここをモフモフ帝国と呼んでおるが、ここに新しく名前を付けなければいけないと思うのじゃ。全部合わせてモフモフ帝国なのじゃから」
「なるほど……みんなはどう思う？」

大きく慌てるようにぶにぶにの肉球のある両手を振りながらコリーが力説する。

シバはそんな彼の様子を見て微笑み、会議の参加者達に確認した。

「いいのではないかと。案はありませんが」

「拙者も」

「いいんじゃないかねえか？」

反対する理由もないため、ざわざわと騒ぎながらも皆がどちらかという肯定している……そんな雰囲気になっていた。シバはみんなの反応を確認し、小さく頷く。

「コリーは何か案があるのかな？」

「もちろんですよ！ 『ラルフェルド』、コボルト語で『楽園の始まる場所』と言う意味ですよ！ ！」

おおー！ と会議室がどよめく。

シバも笑顔で頷き、クレリアもシバの隣で微笑んだ。

「モフモフ帝国首都『ラルフェルド』……いいかもしれないね」

「確かにここには相応しいかもしれない」

「皆はどうかな？」

シバが確認を取ると全幹部が頷いた。

「では、これからこの集落は『ラルフェルド』と改名するね」

皇帝であるシバが宣言すると、拍手が湧き上がった。

彼の宣言はある意味で、この小さな集落だけでなく、モフモフ帝国が『死の森』東部地域全体を指すことを示したものであった。

「じ、実はもう一つ報告があるのですじや」

盛り上がる会議場が落ち着くまで、コリーは少しだけ待ってから声を張り上げた。

「儂と嫁……ポメラは引退してシバ様の執事とメイドだけの仕事にしたいのじゃ」

「何故？」

クレリアは不思議に思い、ふさふさな毛並みのコリーをじっとみつめる。

彼やポメラの能力にクレリアは不満は持っていない。理由がわからなかったのだ。

「儂もポメラも、もう25歳を超えとる……いつお迎えが来るかわからんのじゃ。この一年の間に仕事は息子と娘……そして、有望そうな者に、もう引き継いでいるのじゃ」

「なるほど。コボルトの寿命は30年くらいだからな。彼等の仕事は激務……医者としても彼等の引退は認めて欲しいと思う」

ターフェが苦笑しながらも、コリーの引退に賛同する。クレリア

は医者としてはターフェを信じており、彼女の言葉が真実であると理解していた。

それに国家という体裁を取っている以上、次世代に引き継いでいく……というのは重要だろうと。クレリアは……シバの方を見た。

「シバ様」

「わかってるよ。コリー、ポメラ。大変な仕事を今までありがとう。それから、これからもよろしくね。クレリアを叱れるのはコリーとポメラくらいだし」

「勿論ですじゃ。クレリア殿の無茶を止めるのは死ぬまで僕の仕事ですじゃ」

「冗談めかしてシバは言い、コリーも自信満々に自分の胸を叩いて頷いた。

モフモフ帝国元年　モフモフ帝国二年度報告

1月　建国日に建国祭が行われる。建国祭は毎年行われる

『剣聖』キジハタ、ゴブリン戦士隊を率いて東部制圧作戦に従い、小集落の攻略を開始

7月 『剣聖』 キジハタによる小集落の攻略が完了。オーク側の集落は『サーゴ』『ゼゼラ』『ベイカ』『パイルパーチ』の4つとなる

8月 『死の森』 東部攻略作戦の準備が始まる

10月 農場からの収穫が終了。『死の森』 東部攻略作戦開始
パイルパーチの戦いに勝利。敵司令官コンラートは逃走。
モフモフ帝国、『死の森』 東部を完全に制圧

11月 モフモフ帝国の新しい集落から幹部を選出。モフモフ帝国の発展に参画する

産業振興と物資流通のために各集落に通じる道が作られる

12月 戦争で荒れた集落の立て直しが完了

モフモフ帝国首都が『ラルフェルド』と名付けられる

『モフモフ帝国建国紀——建国の章——』 初代帝国書記長 コリー
著 より抜粋』

建国の章 エピローグ

今年最後の帝国会議を終えた後、クレリアは新しく『ラルフェルド』と名付けられた集落の中をゆっくりと歩き回っていた。

彼女は集落の住人達の表情を見ていたのである。

モフモフ帝国の住人達は新旧関係なく馴染み、その顔色はそれぞれが自分の役割を果たしているという自信に満ちているし、明るい。

一方で、落ち込んでいる住人達もいた。

戦争で家族を失った住人達だ。

クレリアは彼等の一人一人と話をする。

コボルト族、ゴ布林族、ケットシー族……分け隔てなく。

そして、それが終わると肩を誰もわからないくらい僅かに落として家へと戻る。

そのまま部屋に戻ると、普段と変わらず事務官の用意した報告書の山に目を通して行き、サインを書き込んでいく。

彼女の手はよどみがなく、次々と仕事は進められる。感情などそこにはないように。

書類の残り枚数も後数十枚程度になったとき、クレリアの仕事部屋にノックの音が響き、それに続いてシバが木で作られた二人分のコップを持って中に入ってきた。

続けてメイド長のポメラが水桶と布を用意し、頭を下げて部屋から出ていく。

「クレリア。ターフェが薬草茶をくれたよ。一緒に飲も」

「はい、しかし、仕事がありますので後ほど……」

「だめ。命令」

彼女は断ろうとしたがシバは首を横に振り、どこにでも居そうな無邪気な少年のように、はにかんで笑う。クレリアは小さく息を吐いて頷き、彼と一緒に部屋にある小さなテーブルを挟んで座った。

「随分クレリアが疲れているみたいだったから、僕がターフェに頼んだんだ。疲れがとれそうなやつをとって」

「……私はいつもどおりです」

クレリアは否定したが、シバは手を開いて縦にし、ぴしつと軽くクレリアの頭を叩く。

「もうすぐ三年だからね。クレリアの嘘はわかるよ」

「申し訳ありません」

クレリアはうう……と、小さく呻いて下を向いた。

彼女のそんな姿を見て、シバは仕方がないなあ……と、苦笑する。

「クレリアが回っていたのは戦争で亡くなった家族のところだね」
「ご存知でしたか」

「……僕はクレリアが心配だったから。あの戦争から元気が無かったし……だからよく見てた。そしたらすぐにわかったよ」

両手でコップを掴み、シバはゆっくりと口を付ける。

「クレリアが責められないことを気にしてるって」

「私は……わからないのです」

クレリアは迷っていた。彼女は人間であつた頃に兵士を指揮したことがある。傭兵の両親を持っていたために率いていたのは殆どの場合が傭兵隊だった。

傭兵は金に対して命を賭ける。死んだとしても、それは仕方がないこと……彼女はいつもそう割り切って指揮を取っていた。

上からの命令に対し、最善の結果を出す。それが彼女の騎士としての戦いだ。

人間関係も希薄。淡々と仕事をこなしていたのである。

だが今は違う。責任を持つ立場として、自らが共に笑いあい、国を作る為に働いてきた仲間を戦わせること……その辛さに彼女は思い悩んでいたのである。

「僕達、弱い魔物にとっては生死は日常のことなんだ」
「え……？」

見た目の幼さには不似合いな達観した表情でシバはクレリアを見つめる。

「強い魔物の気分次第で僕達の生死は決まっていたんだよ。魔王がいても」

「そうなのですか？」

シバは頷く。悲観的な話ではあるが、彼の瞳には希望の色があった。

「僕達はそうでない国を作りたいね。僕もクレリアも辛いこともあるかもしれないけれど」

「……はい」

クレリアは微笑んで頷く。彼女が村に来たばかりの頃は、保護して上げているという感じだった二人の関係も、いつの間にかお互いを支えるようになっていた。

「でも三年前は、今みたいになるなんて想像もできなかったよ」
「コボルトには元々それだけの力があつたのです」

力が弱いとか手先が器用とかの身体的な面ではない。愚直なまでに他人を信じるところや、嘘をつかないところ、助け合うところ…。

他の種族からの信用が得られる資質が彼等にはある。
彼女はシバの穏やかな顔を見つめて言った。

「私はそう思います」
「ありがとう」

シバは笑って礼を言うのと立ち上がり、ポメラに用意してもらっていた水桶に布を浸けて絞る。クレリアは黙って後ろを向いた。

彼女の長い髪と尻尾の手入れをするのはシバの仕事である。
彼は族長という立場であり、初めはこのような手入れも慣れていなかったのだが、長い時間の中で手入れも上達していた。

「クレリア。ごめんね。本当なら家族のところに返してあげたいんだけど」
「私の剣はシバ様に捧げられていますから」

ぴんと上を向いた耳の後ろも丁寧に布で拭いていく。クレリアはそこだけは少し苦手で、くすぐったくて、ぴくっと反応する。
彼女としてはここを離れるつもりはなかった。もふもふだらけという彼女の理想の場所であるし、愛着も出てきている。

「そうじゃないんだ。僕がクレリアに居て欲しいから返したくないんだ」

「シバ様……」

「僕にとつてはクレリアは……その……運命の人だったんだ。逃げたばかりではなく、闘うことを教えてくれた。そ、それだけじゃないんだけど、えっと……」

髪の毛を手入れする手が止まったため、クレリアが後ろを振り向くと、シバの顔は真っ赤に染まっていた。褐色の肌なものにも関わらず、ひと目でわかるくらいに。

「……襲ってもいいですか？」

「え、え？」

「間違えました。私自身もここに居たいのです。楽しいですから」

親愛の情を示すように、クレリアはシバを優しく抱きしめる。彼もそれを嫌がらずに受け止める。

「クレリア。辛いのは僕と半分ずつだよ。今日みたいな時は僕が一緒にいるから」

「はい。楽しいことも、嬉しいことも……共に。魂と同じように」

シバが彼女と出会ったことを運命であると感じていたように、ク

レリアもまた彼に出会ったことを運命だと考えていた。人間であるのを捨てたことに後悔していない。

「辛いときはシバ様を頼ります。理想の国を作っていきますよ」

「うん。これからもよろしくね。クレリア」

「はい」

二人は笑いあうと、お互いの髪や尻尾の手入れを再開する。部屋からは楽し気に語り合う二人の声が響いていた。

反撃の章 プロローグ

『死の森』 北東部攻略作戦について。

大きく分けて九つの地域に分けられる『死の森』東部を完全に抑えることに成功したモフモフ帝国だが、未だオーク族の六分の一度の勢力であり、正面からオーク族を倒すことは現時点では不可能であった。

また、モフモフ帝国で最も人口の多いコボルト族は防戦には向いているが、攻撃には不向きであり、その次に多いゴブリン族も訓練による質の向上は進んでいるものの、生来的な能力としてはオークに劣っているという問題を抱えていた。

これらの問題を正確に把握していたクレリア大元帥は『死の森』北東部の制圧を皇帝シバに進言する。その目的は次の三点である。

- ・ 北東部に住む諸部族を支配下に置く
- ・ 中立地帯であるガルブン山脈からエルキー族まで繋がる交易ルート の確保
- ・ オーク族の各個撃破

北東部には『死の森』では少数部族であるラウフォックスの集落

やバルハーピーの集落等も存在しており、彼等の生産手段、技術を取り入れることが帝国会議で検討されている。

また、交易ルートの確保は戦力増強策の一環であり、個々の強さではオーク族に劣るモフモフ帝国はガルブン山脈の良質な武器を必要としたのである。

クレリア大元帥は軍幹部、政務官双方に戦略の目的の理解を徹底した後、彼等自身に戦略の検討を任せている。この経験はモフモフ帝国が『オッターハウンド要塞の窮地』に陥り、危機に瀕した後に大きく活かされて行くことになる。

モフモフ帝国軍將軍キジハタは後に次の様に語っている。

“絶対的な一人を頼るのではなく、拙者達一人一人が誇りを持って帝国を支えるのだ”

『モフモフ帝国建国紀 —— 反撃の章 —— 二代目帝国書記長 ボーダー 著』

モフモフ帝国首都、ラルフェルドでは褐色の長い髪の少女が、同じ色の短髪の少年の対面に座り、薬草茶を楽しみながら話をしていった。

二人とも人間に近い容姿をしているが、頭部に生えた三角の耳とふさふさな尻尾が人間ではないことを主張している。

少女は無表情だが、少年は気にすることなく彼女が求める話を続けていた。

少年には長い付き合いのお陰で少女が楽しんでいることが分かっていたからだ。

この二人は彼等が住んでいるラルフェルドの主であり、それぞれ皇帝と大元帥の地位に付いているモフモフ帝国の最高権力者であった。

最も、彼らの様子は子供のお茶会といった雰囲気で権力とは無縁そうではあったが……。

それは皇帝であるシバの雰囲気のせいかもしれない。

明るく天真爛漫で、悪意といった感情が殆どなく、真面目で誠実な典型的コボルトな性格である彼はまるでごく普通の少年のようであった。

対面に座る少女の方は、普段は堅い雰囲気であるのだが、彼の前では多少は繕っているものの自然体であるため、普通の女の子のよきな印象になるのである。

「それで、シバ様……北東部にはどのような種族がいるのですか？」

「そうだねー僕が知っているのはバルハーピーかな」

「バルハーピー？」

クレリアと呼ばれた少女は、聞き慣れない種族の名称に首を傾げ、少年……シバに聞き返す。そんな彼女に彼は楽しそうな表情をしながら何度も頷く。

「凄いんだよ。彼等は空を飛ぶんだ！」
「鳥のような魔物なのでしょうか」

クレリアは上手く想像できず、大きな鳥を思い描いていたがそれならシバは凄いとは言わないはず……と首を捻る。

「説明が難しいなあ。僕達と鳥が混ざったような感じ？」
「ふむ……なるほど」

クレリアは二足歩行する鳥を想像し……保留かな……と薬草茶を啜った。

「外にはご存知ですか？」
「うーん、あ、狐の種族、ラウフォックスって種族が……」

がたっ！　と、一瞬立ち上がるうとして椅子を鳴らし、何でもない様にクレリアは座り直す。シバは驚いて耳を立てていたが、何でもありませんとクレリアは落ち着いた声で彼に謝罪する。

モフモフ帝国の皇帝であり、魔王候補でもあるシバの腹心であり、

冷静沈着で優秀な女性であるクレリア・フォーンベルグは普段の彼女を知っている者には信じられないような趣味を持っていた。

彼女は無類の『可愛いもの好き』だったのである。

（狐……もふもふ……絶対に帝国に……保護……もとい、仲間に！
ああっ……早く会いたい会いたい……どんな子なのかしらっ！）

「クレリア？ 明日の予定は？ ……クレリア？」

「何でもありません。明日は朝から北部の要塞建築に向かいます」

「了解。一緒に頑張ろうね」

「はい」

天使の様な笑顔を見せるシバに、クレリアは小さく微笑み返し……
……内心では悶えて転がりながら抱きしめたい衝動を必死で我慢していた。

何年経ってもクレリアはある意味平常運転である。

平和な雰囲気の二人とは裏腹に、モフモフ帝国には生き延びるための次の戦いが直ぐ側まで迫っている。彼等はそれを知りながらも、安らげる僅かな時間を楽しんでいた。

第一話 要塞建築

『死の森』北東部の攻略の拠点はモフモフ帝国首都ラルフェルドと第二都市、パイルパーチの中間に位置する集落、サーゴの北に建設を進めている。

サーゴと要塞として再利用することに決めている廃集落との間には、ハリアー川と呼ばれているそれなりの幅がある川が東から西に向かつて流れており、要塞の背後にサーゴに向かうための臨時の簡易な橋が掛けられていた。

その橋を利用し、モフモフ帝国側から必要な物資や資材を運んでいるのである。

そんな要塞建築予定地では、頭を保護する木製の帽子を被ったコボルト達やゴブリン達、ケットシー達が木材を抱えて忙しく働いていた。

木材を叩く音や「わうわう」「ギャギャギャ」「にやにや！」と掛け合う声で辺りはかなり騒がしい。そんな様子を見ながら、クレリアは目を細める。

「け、計画ではよ、要塞がかかつ！」

「落ち着きなさい。貴方はよくやっている。レオンベルガー」

そんな中、責任者である短毛種のコボルトが尻尾を巻いて震えながら、クレリアとシバに説明を行っていた。

深呼吸して必死に緊張を抑えようとしているが、一向に落ち着く気配はない。

仕方なくクレリアは彼が話しやすいように助け船を出す。
本心ではもう少し見ていたかったのだが。

「役割を上手く分担しているのね」

「は、はいいいっ！ その……得手不得手がその……」

耳を伏せながらコボルトでも小柄なレオンベルガーはクレリアを見上げる。

彼はコボルト族で家を作るときに、集団を上手く指揮していたのをクレリアが発見し、今回の要塞の建築に抜擢したコボルトだった。勿論、原案はクレリアが作ったが、改良は任せている。

レオンベルガーの微笑ましい様子にクレリアは、名前は強そうなのになあと思いながら、彼のたどたどしい報告を聞いていた。

報告によると彼は制作班と運搬班、建築班、仕上げ班に分け、それぞれにコボルトやゴブリン、ケットシーを割り振ってテキパキと仕事を進め、彼女の想像以上に要塞の完成を早めている。

以前からある分業制を効率的に進化させたようだ。

「レオンベルガーすごいねー」

「あ、あ、ありがとうございます！」

シバは笑顔で彼を賞賛し、クレリアは驚きつつも、このコボルトの集団行動力は侮れない……可愛いしと頷いていた。

「それで、重大な変更点について聞かせて欲しいのだけど」

忙しいレオンベルガーが怯えつつも二人に声を掛けたのは、彼がクレリアの立てた要塞計画の変更を求めたからであった。

「と、当初の計画では廃集落をそのまま使う……という計画でしたが、倍くらいの敷地を確保したいとお、思っています」

「理由は？」

「その……物を置く場所の確保と、北東部から逃げてきた者の仮住居を建てるためです」

「設計図は出来ている？」

はい！ と今にも倒れそうな表情で彼は返事してクレリアに丸められた大きな紙を渡し、彼女はそれを広げてシバと並んでその設計図に目を通す。

そこには敷地を広げるだけでなく、それに伴った新しい防衛線の構築、修正された防衛計画書までが付けられていた。逃げ道がいっぱい増えているのは彼等らしいとクレリアは思ったが……。

「すごいねー。クレリアの書いたやつみたい」

「……コボルトの学習能力は素晴らしいですね。これ一人で考えたのかしら？」

「い、いえ、みんなが集まって相談しましたっ！」

「みんな？」

「コボルト族もゴブリン族もケットシー族もみ、みんなです」

恐縮するように縮こまってレオンベルガーは答える。

クレリアは三角形な自分の耳を掻きながら、魔物を理解したつもりで、まだ魔物達を侮っていたことを少し反省していた。

彼等も順調に学んで育っている……クレリアは小さく微笑み、必死に構造を理解しようと設計図と格闘しているシバの方を向く。

「如何なさいますか？ シバ様」

「うーん、守るときに問題は出ない？」

「はい。シバ様の負担は増えますが」

クレリアはシバの様子を伺いながら彼の返答を待つ。

あくまで彼女は部下であり、決定権は皇帝であるシバにある。

二人きりでない限り、彼女は周りに自分が下であることを常に示し続けていた。

シバは気にしていないが、組織としてはそうあるべきだと考えていたのである。

しばらくシバは唸りながら設計図を見ていたが、「おお」と、声を上げてほんと手を叩き、にこやかに笑みを浮かべた。

「僕がしんどいのはいいよ。やっちゃおやっちゃお」

「了解です。レオンベルガー、この通りに計画の修正を」

「はっ……はいっ！」

震えが止まり、ぱーっと明るい表情になって尻尾を振っている彼にシバの土木工事魔法が必要な場所を案内してもらいながら、クレリアは働くもふもふ達を眺めて和んでいた。

北東部要塞は北東部を攻めるための足掛かりであった。

モフモフ帝国にとって東部での戦いは自己防衛の戦いであったが、今後の戦いは侵略の側面も帯びてくる。

クレリアは要塞建築の一環でシバの魔法で堀を掘ったために出来た土砂の上に座り、周囲の要塞建築のために伐採された森を見ながら考えに耽っていた。

被害を少なくしつつ、勝つ。

軍人としては彼女がシバのために出来ることはそれだけだ。

明るい表情の裏で悩むものだろうけど、と、クレリアは苦笑する。だが、彼女が悩んでいるのはそこではない。彼女はシバを信じていた。

問題は別にあつた。

守るだけであれば、クレリアは難しくないと考えている。

一番恐れていたのはある程度完成する前に、全力でオークに攻められることであつたが、それもなく、堀が完成すればこの要塞は落ちない……と。

弓と投石の攻撃を受けながら川の水を引いた堀を渡り、その土砂で出来た段差を超えるのは困難だ。オーク族にはそれを攻略するのに必要な攻城戦の知識もない。

「また悩んでいるね。クレリア」

「はい。情報がまだ少ないので無駄だとは思つのですが」

木製の帽子を被つた泥だらけのシバが寄り添うようにクレリアの隣に腰を下ろす。

太陽は既に西に傾き初めており、二人の頬を赤く染めていた。

「ヨークの報告を待つて会議に掛け、攻める方法を検討します」

「じゃ、今日はゆっくり出来るよね」

悩みのないやんちゃな少年のように笑っているシバを見て、クレリアはハンカチを取り出し、頬に付いた泥を拭き取って微笑む。

「でもゆっくりする前にシバ様は身体をお拭きにならないと」

「ええっ！ そんなに汚れてる？」

「はい。尻尾の先まで泥だらけです。私にお任せを。綺麗にしますから」

「え！ 一人で大丈夫だって！」

ぴょん！ と逃げるようにシバは飛び上がり、照れくさそうに顔を赤らめる。

クレリアも追いかけるようにゆっくり立ち上がり、砂を払ってシバの手を取った。

「幸い水はたくさんあります。行きましょう」

「うっ、わかったよ」

シバはしばらく渋々といった様子で手を引かれて歩いていたが、突然「あっ！」と大きな声を上げて、立ち止まる。

「忘れてた。ここの要塞の名前……どうする？」

尋ねられたクレリアは少しかけて考えて微笑み、

「設計図を作った者達に考えてもらいましょう」

そう、彼に答えた。

後日、北東部要塞はこの要塞を建設した者たちによって『ウィペ
ット』要塞と名付けられた。

この言葉は『みんなの』という意味が込められている。

ウィペット要塞はレオンベルガーを中心に改良が続けられ、拠点
構築の見本として重要な位置を占めることになる。

第二話 『死の森』 北東部攻略へ向けて

帝国首都、ラルフェルドに戻ったシバとクレリアは『隠密』ヨークとケットシー族の族長、ブルーからオーク族に関する情報の報告を受け、具体的な今後の方針について話し合うため帝国会議を招集していた。

達筆で『帝国会議』と書かれた大きな布が飾られた会議上には、それを書いた初代書記長、コリーの姿はない。彼の席には二代目書記長であるボーダーが座っている。

洪い大声でよく論戦を繰り返していた老コボルトの姿が無いのをクレリアだけでなく、幹部達も寂しかったが、彼が残した後進の者達は彼に劣らず有能に育っていた。

全員の着席を確認し、何時も通りクレリアがシバを促す。

「さて、シバ様お願いします」

「うん。じゃ、帝国会議を始めるよ。それじゃ新事務長、司会をお願い」

「はい」

テンションの低い返事と共に、真っ白な毛並みのコボルトが立ち上がった。

「新事務長のマルです。よろしく。まずは、北東部のオークについて……タマ様、説明をお願いします」

明るい白色の毛並みなのに、彼女の声は平坦で暗い。

だが、この場に初めて立つのに緊張していないことに、クレリアは安心していた。

指名を受けたオークリーダーのタマは「あいよ」と返事をして席を立つ。

「情報は古いぜ。悪いな。北東部の上位種はハイオークが二名、オークリーダーが八名。何故、北東部に全部で十名しかいないハイオークを二名も配置しているかというのだ」

死の森の全体図に十個の駒を順番に置いていく。

東部に一名、北東部に二名、中央部に二名。

「本来俺達の魔王候補は東部にいたコンラートが最有力だと考えられていた。だが、結果的に魔王候補になったのは、フォルクマール。こいつが微妙な奴だな」

タマは苦笑しながら説明を続ける。

本来オーク族の魔王候補、フォルクマールは勇猛で強いことを重視するハイオークでは珍しい、どちらかというと慎重で臆病な性格

だった。

だが、魔王候補となったことで状況は一変。力を手に入れたことで性格ががらりと変わり、疑い深くなり、横暴さも目立つようになる。

多くのハイオークを含めオーク達は結果を出しているフォルクマールを支持しているが、全てがそうではない……そう、彼は説明する。

「コンラートは公然と嫌っていたからな。ハイオークが二名も配置されているのはモフモフ帝国を恐れているわけじゃねえ。コンラートの裏切りを警戒したんだ」

「呆れる理由ね。結果論としては正解だけど」

タマの説明を聞き、クレリアは苦笑した。

同時に安堵もする。魔王以外はあれよりマシらしいと。

「すまねえ。逸れたな。で、北東部を守ってる二人だが一人はアードルフ。腕っ節は強いが短気な奴だな。強者が弱者を支配するのは当たり前って感じの奴だ」

「もう一人は？」

「カロリーネって名前のすっぱえ美女だ。フォルクマールは振られやがった。はっはっは！　ざまあねえぜ……う……す、すんません」

全員の冷たい視線がタマに集中し、彼は縮まって全員に謝罪する。

「ごほん！ あー……そうそう。カロリーネは強い奴と闘うことしか興味ねえんだ。弱い奴は基本放置ってか、自分も含めて適当にやれって感じだな。支配に興味はないな」

「二人の仲は？」

「悪い。カロリーネの方が強いし優秀なんだが、認められないらしい」

なるほど、とクレリアは頷き、自分もそうだったな……と昔を思い出す。

聞きたいことも聞いたし、次の話を促すべく、彼女はマルに顔を向けたが、「はい！」と高い声を上げ、茶色と黒の模様が混ざったふさふさコボルトがおずおずと手を上げる。

「ひっ！ あ、す、すみません、シルキーです。タマさん……その……二人の住処……いや、きよ、拠点？ 拠点は同じなんですか？」

緊張しながら、たどたどしい口調でコボルトリーダーの少女がタマに質問する。

彼女は元々は生産活動に従事していたのだが、クレリアが半ば強引にパイルパーチの戦いを経験させ、士官に引き上げた少女だった。

彼女とクレリアとの出会いは一年以上遡る。

パイルパーチの戦いを控え、モフモフ帝国は生産活動に熱心に取組んでいた。

その熱心さたるや、真面目なコボルトが過労で倒れるくらいであり、シバがターフェの意見を取り入れ、定期的な休みを入れるまで延々と休みなしで働き続けていた程である。

そんな慌ただし、ラルフェルド……当時はそう呼ばれていなかったが……に、一名、しょっちゅう木の上で昼寝をしているコボルトがいることをクレリアは見つけた。

クレリアは木の上で寝てるコボルト可愛いと思いつつも、何度もその光景を目撃するので、ある日、事務長として一緒に仕事をしていたポメラに質問したのである。

真面目なコボルトにも不真面目なものいるのか……深い……とか、彼女は考えていたが、

「ああ、あのコボルトリーダーのシルキーですね。あの娘はちゃんと仕事していますよ」

「いつも寝ているのを見掛けるけど」

「はい。怠けるために、工夫をしているんだって言っていました」

ようは、仕事をさっさと終わらせて自由な時間を作り、怠けているのだ。

ポメラの話では今は織物だが他の仕事でも同様だったらしい。

クレリアが後日調べたところ、出来栄は並だったが確かに効率良く仕事を片付けていた……出来上がりの織物を見ながらクレリア

は考え……ぽんと手を打つ。

その翌日、クレリアは執務室にシルキーを呼び出した。

「く、く、クレリア様！ お呼びでしょうか！」

「堅くならなくていい。今後、貴女は織物をしなくていい」

「えええええっ！ で、でもお仕事しないと！」

茶色と黒のまだら模様の少女は、困っているような雰囲気を出しているが、耳と尻尾は嬉しそうにぱたと振られている。つくづく嘘が付けない種族だ……と、クレリアは溜息を吐く。

「貴女には別の仕事がある」

「ど、どんな仕事ですか？」

目が輝き、表情で楽な仕事、楽な仕事！ と訴えかけてくるようだ。クレリアは思い、思わずその可愛らしさに流されそうになったが、何とか打ち勝つ。

「軍士官。貴女には士官としてキジハタ達と共に私の軍事教育を受けてもらう」

「……は？ え……えーっ！ そんなご無体なあ。無理です！」

「シルキー。貴女の適職は他にない。そして、拒否もさせない」

膝から崩れ落ちるシルキーにクレリアは苦笑いする。

実際のところ、本当に向いているかはクレリアにもわからなかったが、彼女の推測が当たっていたことを指導しながら理解することとなる。

クレリアはシルキーの良さを殺さないように指導し続ける苦労……彼女にとっては楽しいことでもあったが……を思い出し、質問するため立った少女を見つめる。

「拠点は別のはずだ。同じ拠点何かにいたら殺し合いになるからな」
「なるほどっ！ わかりました」

彼女の質問の意味がわかったのは……キジハタだけか。と、クレリアは幹部達を見回しながら微笑む。経験を積みめば皆がわかるようになるだろうと、今の彼女は信じていた。

タマの説明が終わり、『隠密』ヨークやブルーのオークの情勢に関する報告が終わると、クレリアは今後の対応に関する説明を行い、そして最後に告げる。

北東部の情勢を聞いた時、クレリアにはある腹案が思い浮かんでいた。

その案は彼女としても賭けの要素が強いものであり、危険なものでもあったが……勝てば帝国の未来のための糧となるはず。そう彼女は信じていた。

クレリアは前もってそのことをシバと相談し……彼も決断した。

「最後にシバ様から命令がある。諸君らは、戸惑うだろう。この作戦は帝国の命運を握っているはずなのにと。だが、私は信じている。期待に応えよ」

そう締めくくって席に付き、代わりにシバが立つ。
少し緊張した面持ちで、だが、しっかりした声で。

「『剣聖』 キジハタを『死の森』北東部攻略の司令官に任命する！
副将はタマ、シルキー、クーン！ ウィペット要塞完成後、そこを拠点に。やり方は全て任せる。何かあれば連絡を出すように」

名前を呼ばれた面々は呆然とし、シルキーは「えー！」と露骨に嫌がっていたが、クレリアが黙って顔を向けると、口を抑えた。

キジハタは流石に驚いていたが、意味を理解すると立ち上がってシバに一礼する。

「承知。期待には結果で応えよう」

こうして中央部はクレリアを中心に防御に専念し、北東部の攻略をキジハタ達が担当することになる。

モフモフ帝国にとってクレリア抜きの大規模な戦いは初めてである。

このことがどのような結果をもたらすか、現時点では誰にもわからなかった。

第三話 絶対者のいない会議

北東部司令官を決めた帝国会議から二ヶ月が経過した頃、ウィペツト要塞の大まかな部分は完成し、新たに訓練を積んだ戦士達と共にキジハタ達四名はその拠点を移していた。

ウィペツト要塞には会議用兼司令部となる大きめの建物が中央より少し川沿いの位置に建てられており、その中では十名ほどの諸種族の幹部が話し合いを行っている。

「……当初の予定より多いな」

「はい、キジハタ様。事務官と『隠密』ヨークさんを借りておきました！」

キジハタの左側に座っている茶色と黒の斑模様のコボルトが明るく手を上げる。

コボルトリーダーであるシルキーは要塞運営の戦闘以外を主にキジハタから任されていたのだが、要塞の人口がこれから増えるという建前で、クレリアから数名の事務官を借り受けていた。

それぞれに食料担当、武器担当、建設物担当、民事担当と分担し、自分自身は彼等の報告を受けるだけという体制を作り上げたのである。

「レオンベルガーさんも居てくれれば楽なんですけど」
「無茶言うな。姐さんが倒れるぜ」

キジハタの右隣に座っているオークリーダー、タマが苦笑いしながら嗜める。

「んじゃま、はじめますかい？」

シルキーの隣に座っている三毛柄のケットシー、クーンがキジハタに窺う。

彼女は軍の幹部として派遣されてきたケットシーリーダーで、主にケットシー族の諜報網とヨークの探索隊の情報を纏める役割と、三人の補佐の役割を担っていた。

キジハタは黙って頷く。

彼はクレリアから一つの助言を受けていた。
総大將は堂々として、話をしっかり聞いておけばいいと。

そしてもう一つ、意見が分かれたとき決断をするだけでいい……と。

彼は自分が頭が良くないことを自覚しており、彼女からの助言を有難く受け取り、愚直に実行しようと心に決めていた。

クーンはキジハタが頷いたのを確認し、北東部の大まかな地図を

机に広げて、肉球の付いている手に細長い棒を持ち、芝居がかった仕草で説明する。

「そんじや状況を説明しやすぜ旦那方。オーク族の大きな拠点は二つ。西部にハイオーク、アードルフが治める『サーフブリーム』、東部にカロリーネの治める『コモンスヌーク』。最終的にこの二つを制圧するのが目標になりやす」

「どれくらい敵はいるんだ？」

大きな腕を組みながら説明を聞いているタマがクーンに尋ね、彼女は頷いて続ける。

「オークの人数は東西同数でオークリーダー4名、オーク20名。ゴブリンは『サーフブリーム』が戦闘員だけで200名。『コモンスヌーク』が150名くらいと報告を受けてやす。コボルトは戦闘員として考えられてないようですぜ」

「ようするに、どちらも『パイルパーチ』と同レベルというわけか」

「こちらの戦力は精鋭のゴブリン剣士隊が20名、ゴブリン戦士隊が50名、ゴブリン長槍隊が30名、コボルト弓隊100名、コボルト看護隊が10名。人数的には半分くらいです」

全員唸りながら地図を見つめる。

モフモフ帝国では生産を重視しているため、軍の人数は少なめになっていた。

その分選抜と訓練は施しているのだが……このウィペット要塞に

詰めている兵力は全体の約8割であり、敗北するわけにはいかなかったのである。

皆が黙り込んでしまったのを見て、キジハタは全員を見回す。

「誰か意見はあるか？」

「はいはい！ キジハタ様に許可もらってた件、報告します。ヨークさんが」

「サボるな馬鹿者。お前がやれ」

明るく返事しながらシルキーが『隠密』ヨークに任せようとしたが、苦笑いしながらそう返され、少ししよげながらも渋々立ち上がった。

「アードルフの治める周辺集落のコボルト族、ゴブリン族を中心にモフモフ帝国への参加を呼びかけています。効果は結構出ていて、まとまった人数が一時的に要塞で暮らしており、ラルフェルド、パイルパーチと受け入れの調整をしています」

「それで？」

「アードルフは怒ってるみたいです」

「そりゃ怒るだろ」

シルキーの話を聞いていたタマが呆れるように小声で呟く。

「何でアードルフなんだ？ カロリーネの方が少ないのに」

「あ、はい。それには理由があります」

ええつと……と、シルキーは説明を考えるように小首を傾げながらタマに答える。

「二人を同時に相手をすることは出来ません。これが一つ。北東部に置ける帝国の交易ルートはカロリーネの統治範囲を通過していません。刺激したくありません。これが一つ。後もう一つは……言っちゃっていいのかな？」

言いにくそうにシルキーは服の端を握りながらキジハタを見た。彼は黙って頷く。

「構わん」

「集めた情報とタマさんの話から、彼を罠に嵌める方が楽そうだからです」

「罠に……嵌める？」

胡散臭気にタマは首を傾げ、キジハタも苦々しく顔をしかめている。

戦いの得意な種族であり、戦士でもある彼等には、罠というのはあまりいいイメージではない。

だが、シルキーやクーンは力の弱い種族であり、狩猟にも罠を普段から利用している。

勝ち目のない力の強い相手に罫を張るのは寧ろ当たり前であった。

「一番楽なのはアードルフとカロリーネを戦わせることですけど、流石にそれは難しいと思います。ですから、彼等に協力させないことを一番に考えました」

「まあ、それはいいとしてだ。罫ってのは？」

「クレリア様の戦術を応用します。この要塞を利用して――」

シルキーは駒を使って、クレリアと相談しながら考えた戦術を説明していく。

彼女の説明が終わったとき、会議に参加している全員が納得の表情を見せていた。

「な、なんつー性格の悪いコボルトだ」

「ええーっ！ タマさん酷い！ 大体タマさんなんて『正面から倒せばいいだろ』って格好付けてたけど、そんなの無理無茶無謀ですー！」

「なんだと！ 小娘！」

「ふんっ、大きいからってなんですか！ 小娘なめんな！」

引き気味で嫌そうな声を上げたタマにシルキーは声真似をしたりして抗議し、そのまま口論に入りそうになったため、キジハタは咳払いすることで止めさせる。

シルキーはクレリアの影響を受け、さらに常に一番危ない最前線に連れて行かれるなどした結果、性格がコボルトにしては、すつか

り攻撃的に変わってしまったていた。

それでも、初めて会った頃はシルキーも普通のコボルトっぽく、巨体のタマに怯えていたのにな……と、キジハタはこっそり溜息を吐いた。

それが今では名物のように毎日のように口喧嘩している仲である。

「基本的にはシルキーの案を使う。『隠密』ヨークはハイオーク達の動きをよく見ておいてくれ。シルキー。他に注意することは？」

「あ、はい。オーク領の北部から干渉があるかもしれないので、大丈夫だと思いますけど一応注意をお願いします。援軍にこられたら流石に守る以外方法がなくなります」

「ヨーク、聞いたな。では、事務官達は新しい住人の方をお願いします。拙者達と戦うものは戦士として迎え入れる方向で考えておいてくれ」

キジハタはそうやって様々な指示を出していく。

（一人の戦士として、剣の道を極める……と思っていたが、どうしてこうなったのだろうか）

司令官を務めることに不満はないし名誉なことだ……だが……向いていない気がする。

最近ではコボルトの奥さんの助けを受けながら、慣れない書類仕事もこなしているゴブリンのキジハタはそう思い、心の中だけで大きな溜息を吐いた。

第四話 舞台の裏

モフモフ帝国の北東部攻略作戦決定から遡ること数ヶ月、女性のハイオーク、カロリーネが治める『コモンスヌーク』には二十名程の来客が訪れていた。

彼等は一様にボロボロの姿で、濃い疲労の色が表情から滲み出している。

ただ、先頭の三名は他の者と違う雰囲気を放っていた。

無精髭を生やした精悍な顔立ちのハイオーク、コンラート。

彼の後ろに控える茶色と黒のまだら模様の女性のコボルトリードー、バセットとゴ布林としては大柄な身体を持つ、寡黙なゴブリンリーダー、チャガラ。

『パイルパーチ』で敗北した彼等はこの集落まで落ち延びて来たのである。

彼等はハイオーク、カロリーネの住んでいる集落で一番大きな館に通され、椅子を進められる。カロリーネの側には護衛も兼ねているオークリーダーが二名、左右を固めていた。

彼女は自分より弱い護衛など必要無いと思っており、護衛の存在にうんざりしているが、魔王候補の命令なので渋々それを受け入れている。

「よお。カロリーネ。退屈そうだな」

「……本当に負けたのね。驚いたわ」

目の前の薄汚れたコンラートの姿を見て、黒髪を腰まで伸ばした大柄な、だが、愛嬌のある雰囲気を持つハイオークの美女、カロリーネは素直に驚いていた。

だが、コンラートはそんな姿でも萎縮することなく、ふてぶてしく、護衛達に外で待つ部下達を含め、全員分飲み物を用意するように命令し、堂々と椅子に座って笑う。

「完敗したぜ。言い訳のしようもないくらいにな」
「それにしても悔しくなさそうね」

すらつとした長い足を組み、興味深そうにカロリーネは目を細める。

東部の支配に関して彼女は特別な興味はない。

彼女にとって大切なのは強敵との戦いだ。

エルキー族との戦いから外され、退屈に過ごしていた彼女はコンラートの姿を見て、愉快なことが起こりそうな予感を感じていたのである。

「でも、信じられないわね。魔王候補が覚醒でもしたの？」

「違う。ある女がコボルト共をまとめ上げたんだ。そいつが何年も掛けて力を蓄え、コボルトやゴブリン共を鍛えたいらしい。気が付いたら勝ち目が無くなってたぜ」

「ふうん……どう負けたか詳しく聞いていいのかしら？」

「俺の部下に休める場所を提供してくれたら」

護衛のオーク達にカロリーネは迷わず手配するように指示をする。

「感謝する」

別に大した苦労でもない。自分と同じで強さにしか興味がなかったコンラートが部下の心配をし、頭を下げたことにカロリーネは驚いてはいたが、顔には出さなかった。

護衛達が命じられた仕事を行うために、館から出たことを確認すると、コンラートは北、中央、南の三集落とパイルパーチの戦いの顛末を詳しく説明し始めた。

カロリーネは楽し気にその説明に聞き入る。

そして、全ての説明を聴き終えると、カロリーネは秀麗な眉をひそめ、納得がいかないといった表情で唸った。

「……本当にこんなことが？」

「奴等は時を置けば置くほど強くなる。次はこの程度じゃないだろうな」

「ふふ。面白いことになりそうね。その女の名前は？」

心底愉快そうな笑みを浮かべて彼女は問いかける。
自分を楽しませてくれる相手の名前を心に刻むために。

「クレリア・フォンベルグ。見た目はハイコボルトだ」

「その子、賢そうだけど……強いのか？」

「俺と一対一で五分に戦えるくらいには」

「文句なし。最高ね」

どれほど心を躍らせてくれるのか。

カロリーネは間近に迫る戦いを想像しながら声を上げて笑った。

だが、彼女は気付かなかった。コンラートが不敵な笑みを浮かべていることに。

それから少し遅れ、ハイオーク、アードルフの集落『サーフブルーム』にも『死の森』東部の陥落の報は届いていた。

連絡のコボルトが怯えながら、粗暴な性格の上司を見つめる。

だが、彼は幸いに何もされずに下がるように命令され、ほっと一息を吐いた。

コボルトが下がった後、薄暗いが広い部屋の中でアードルフは顔を歪ませ、部下のオーク達を見て上機嫌そうに笑い声を上げる。

「くくつ……聞いたか。あのコンラートがコボルト如きに負けたそうだ」

「信じられません。いくらなんでもコボルトに負けるはずが……」

「あいつが無能なだけだ。オーク族の恥だな……く……はははは！」

彼は立ち上がり、堪えきれずに爆笑する。

アードルフはハイオーク特有の巨体を持ち、その強さはカロリーネと比べられることが多いが大きく劣るものではない。

事実北東部の制圧の際は、抵抗を続けるゴブリン族を少数で打ち破っており、部下達からは残酷だが勇猛な戦士との評価が殆どである。

戦士に対しては寛大だが、それ以外の者……特に弱い者は高圧的に扱っていた。

支配欲も強く、弱者は自分に平伏するべきだと考えている。

「東部を奪い返せば……当然俺の物だな」

獰猛な笑みを浮かべながら、そんなアードルフは一人、そう呟く。その時、一人のオークが駆け込んで着た。

「コボルト族がハリアー川を超えて廃集落を修復しております！」

「ふむ。雑魚共が無駄なことをしに来たか」

アードルフは得物の長槍に手を掛けようとしたが、オークは報告を続ける。

「もう一つ、こちらはコンラート様からの伝言……忠告だそうです」

掴もうと腕を止め、彼はもう一度伝言のオークの方を不機嫌そうに向いた。

「なんだ！」

「そ、それが、『今のうちに全力で潰さなければ、後悔することになる』とのこと」

怒りの表情を浮かべ、アードルフは無言でオークを殴りつける。オークの巨体が宙に浮かび、まるで軽いボールのように部屋の奥まで転がっていった。

周りの部下達も思わず息を飲む。

「負け犬が。コンラートに伝える。コボルト共の小細工など俺には通じんと」

「う……ぐ……は、はい……」

「聞いたな。コボルトなど放っておけ。全てが無駄だということを、後で教えてやる」

恭しく頭を垂れるオーク達を見ながら、アードルフは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

『コモンズヌーク』に滞在していたコンラートは、与えられた小さな家で伝令に出したオークからアードルフの反応を聞き、そのオークを労ってから、おかしそうに笑っていた。

側で彼の世話役としても細々と働いているバセットはそんな主が理解できず、質問する。

「よろしいのですか？ 恐らくあれは奴らの本拠と同じもの。完成すればまず落とせません。アードルフが負ければ、北東部そのものが危機に陥ります」

「やれやれだな。あいつもお前くらい頭がキレればいいんだが」

コンラートは肩をすくめておどけた振りをし、小さなバセットの頭を撫でた。

言葉と違い、残念そうな雰囲気は欠片もない。

「お戯れを」

「コボルトの怖さを知らしめるには必要なのさ。あいつという生贄が」

バセットの部下が差し入れてくれた果物を手で弄びながらコンラートは目を細める。

遠い先を見ているようだ……そう、彼女は思う。

コンラートはパイルパーチでの敗北後、性格が少し変わった。

優秀だが退廃的なものが見えていたのが無くなり、生気に溢れ、
気力に満ち、それでいて深く考え込むことが増えた。

また、穏やかになり、他の者に対して寛容になった。

それでいて以前以上の覇気を醸し出している。

バセットが考え事をしている間にコンラートは果実を半分に割り、
彼女に投げた。

「それで、奴らの鉄の仕入れについて調べは付いたか？」

「はい。ビリケ族を利用し、ガルブン山脈で仕入れた物をカロリー
ネの領土を通過して交易を行なっているようです。攻撃しますか？」

頭を下げ、果実を小さな口で齧りながら彼女は主に伺う。

だが、コンラートは首を横に振る。

「それをやれば俺は負けるな。短期的には苦しめるだろうが。他の
方法を考える」

「ならば我々もビリケ族と取引をすればいいかと」

「だが、俺達には取引する物がない」

無精髭を触りながらコンラートが考えるように俯く。

「いえ、あります」

「ほう………どういうことだ？」

興味深そうに唸りながらコンライトはバセットを見つめる。

彼は魔物を生み出した者は公平だと今では考えていた。

オークである自分は力は強いが、知性という点では恐らく目の前の茶色と黒の毛並みのコボルトリーダーの少女に敵わないだろうと。

力と知性を兼ね備えたあのクレリア・フォンベルグを打ち倒すには、それぞれの部族の特徴を完全に生かさなければならぬ。それが彼の考えた結論だった。

何もしなければ、間違いなくオーク族の魔王候補の首に剣を突き付けることになるだろう……彼はそう確信していた。

「一つは安全。彼等に手を出さない代わりに一部を要求します。もう一つは……東部での彼等の戦い方を考えると、まずはコボルト、ゴブリンの離反を誘います」

「………そういえばそうだったな」

「カロリーネの集落は緩いですが、アードルフの集落の収奪は過酷です。間違いなく……特にコボルトは集落を捨て、あちら側に走ります。そこで、彼等の残した生産道具を集めて売ります。我々の人数程度の武具は集まるでしょう」

なるほど、とコンラートは頷き、大笑いする。

奪うのではなく、残っているものを売り捌くというのはオーク族には絶対にならない発想だった。それでいて現在の手持ちの部下を危険に晒さず、実行が可能。

さらにアードルフを挑発することができるだろう。

「それでいこう。コボルトだけで行けるか？」

「はい。可能です。後、私もやりますがチャガラにもアードルフの領地に住む同族の勧誘を。余り目立つ訳にはいきませんが……」

「構わん。責任は俺が取ってやる。やれ」

了解です。と、バセツトは恭しく頭を下げる。そんな生真面目な彼女の姿にコンラートはからかうような笑みを浮かべた。

「本当にお前は使えるな。優秀な奴は俺は好きだぜ」

「……お戯れを」

様々な思惑が重なり、それぞれの主役達が舞台の準備へと動いていく。

一度は落ち着いた『死の森』北東部では、再び戦乱という演劇が開催されようとしていた。

第五話 反撃の狼煙

モフモフ帝国ウィペット要塞では、コボルトリーダー、シルキー主導の作戦の第一段階である、アードルフの領土で暮らしている住民の切り崩しが順調に進み、逃げ延びてきた者達で賑わっていた。

持つ物も持たずに逃げ出してきた彼等は、戦士になることを希望する者を除き、東部の各集落へとその居を移していく。それまでの短い期間を彼等はこの要塞で、不条理から解放されたことを喜んでいた。

とはいえ、モフモフ帝国にも労働はないわけではない。余裕を持って増築している建物が埋まるほどの亡命者が出たのはあまりにもアードルフの統治が過酷だったからだ。シルキーは考えていた。

「よう、シルキー順調そうだな」

「全部上手くいってるわけじゃないですよ。タマさん。それに喜べません」

事務官達と打ち合わせを行っていたシルキーに、部下への訓練を終えたオークリーダー、タマが声を掛ける。彼は鋼鉄で出来た槍を杖代わりに地面に付き、溜息を吐く。

「ま、そうだな。俺も複雑な心境だ。ここに来る連中は皆、怯えながらも俺に対して殺意を持ってやがる。相当だぜあれは」

「短気は起こさないで下さいね」

「はんっ！ どうかの小娘のせいで俺の気は長くなったからな。大丈夫だ」

そう大笑いすると手を上げてタマは会議室の方へと去っていった。元敵であるタマはこういうとき、恨みを一身に浴びることになる。

頭ではクレリアの教えてシルキーは学んでいたが、実際に見ると想像以上だった。

だが、彼はそれを気にすることもなく、常と同じに接している。

「伊達にクレリア様から信頼されているわけではない……か」

吹いている風で少しだけ乱れた毛並みを整えながら、彼女は彼の事を少しだけ見直していた。

「ちょっとだけ……ね」

シルキーは小さくそう呟くと、タマを追いかけて会議室へと駆けて行った。

ウィペット要塞会議室には既に幹部達が集まっていた。
その表情は様に堅い。ある二つの報告が『隠密』ヨークからもたらされたからだ。

「ラウフォックス族は中立の立場を取るそうだ。協力は出来ない……と」

「慎重だな」

アードルフ領に住む魔法を得意とする狐の一族、ラウフォックスはオーク族の侵攻の際、積極的に彼等に味方することでオーク族の支配からは免れていた。とはいえ、それも他の種族の集落に比べればではあるが。

キジハタの慎重という言葉に全員が頷いたのは、彼等がオーク族に味方をしない……そう宣言したことについてだった。敵に廻る可能性が高いと考えられていたのである。

「朗報じゃないですかい？」

「そう考えるべきだろうな」

三毛柄のケットシーリーダー、クーンにキジハタは頷いて同意する。

「続けるぜ。次の情報はもっと重要だ。『サーフブルーム』の様子が慌ただしい。恐らく……来るぞ。怒り狂ったアードルフが」

ヨークの言葉に全員が言葉を失う。

彼等全員にとってハイオークとは暴虐の象徴であり、かつて絶対勝てないと散々思わされた相手だった。コンラートには勝利したが、それもクレリア・フォンベルグという圧倒的な存在……個人の力が大きい。だが、今回彼女はいいない。

来るべき時が来た……それだけであることはわかっているにも関わらず、全員に緊張が走る。会議室の上座に座る司令官であるゴ布林を除いて。

司令官『剣聖』キジハタは立ち上がり、皆の不安を吹き飛ばすように一人笑う。

「拙者達の準備に怠りはない。喧嘩と戦争の違いを奴らに教えるぞ」
「了解っ！」「」

自信に溢れる、落ち着いたキジハタの言葉に全員が慌てて返事をする。

彼等の表情には、もう緊張の色は無かった。

「くく……それじゃ、俺は敵の具体的な人数を調べるぜ」
「任せる。後は打ち合わせ通りだ。タマ、シルキー、クーン。全員に戦闘が近いことを伝え、所定の準備を行え」
「わかったぜ。今回は暇かね。俺は」

「何言ってんですか。タマさんは壁になってください。無駄に大きいんだから」

「やれやれ、相変わらず仲のいいこって」

各々がキジハタに答え、何時も通りの展開にクーンが呆れ、それぞれ準備のために要塞のあちこちに幹部は散っていく。

最後にクーンは残り、会議室を出る前にキジハタの方に振り向いた。

彼女は彼を試すようにニイっとからかうように笑う。

「旦那のお手並み拝見……果たしてあの化物……ハイオークに勝てるのか」

「期待してもらおう」

席に座りながらキジハタが短くそう返すと、クーンは一つ頷いて彼女自身の準備を行うために部屋から出て行った。

彼女が出ていくと、キジハタは自らの剣を手取る。

「錆びの無い心で己の剣を伝える……か」

鞘から抜くと剣には錆一つなく、刀身は輝いている。
クレリアに剣の手入れの方法を教えてもらってから、彼がそれを欠かしたことはない。

この剣は彼の師匠である物好きな人間が死に瀕したとき、形見として手渡されたものだった。師弟といっても言葉は通じず、剣を通じてしか会話をしていない。

最期まで彼を理解することは叶わなかった。何故自分を殺さず、剣を教えたのか。

キジハタはクレリアの言葉を思い出す。

彼女は自分の剣を人間に伝わる正規の剣術だと言っていた。

弟子としてその剣を受け取ったならば、剣術とその心を伝える義務があると。

そして剣術とは……。

「努力によつて弱者が強者を打ち倒す術」

ならば、その心とは。

「生まれではなく、努力により全てが決まるということだ。拙者はそれを証明し続ければいい」

ただの『ゴブリン』であるキジハタは力強く頷くと、彼自身の部下への命令を下すため、会議室から外へと歩いていった。

数日後、『隠密』ヨークからの報告がウィペット要塞に届く。

彼の報告を受けるキジハタの前には要塞の全ての戦士達が整列していた。

それぞれの部隊の先頭にはリーダーである幹部が立っている。

「『サーフブルーム』が動いた。アードルフ自らの出陣だ。オークリーダー2、オーク10、ゴブリン100。約半分つてとこだな。舐められたもんだ」

キジハタはヨークに頷き、全員を見渡す。
整列している戦士達の表情は一樣に堅い。

戦争を初めて経験する者もいる。ハイオークの強さをパイルパーチで見たものもいる。オーク族に住処を逐われた者もいる。仇を持つ者もいる。

それぞれの想いを持って、彼等は上官の姿を見つめていた。

キジハタは全員の顔をゆっくり見回すと、口を開く。

「これから勇猛なハイオークが攻めてくる。だが、恐れることはない」

誰も一言も話さない。真っ直ぐにキジハタを見つめ続けている。

「彼等は諸君らのように、苦しい訓練を耐え抜いた戦士を相手にし

たことはない」

コボルト達が手に持った弓を強く握り締め、ゴブリン達が拳を作る。

「これまで我々はオーク族に敗北を続けてきた。しかし、クレリア殿はオーク族に勝利することができると教えてくれた……だが！」

キジハタは語気を強め、大きな声で叫ぶように声を出す。

「オーク族に勝てるのは彼女だけではない！ 今回の敵の攻撃はそれを帝国の同士にも、オーク族にも知らしめる最高の機会だ！」
「「「おおおおおー！」「」」

槍を地面に付いているタマが「上手いねえ」と呟いてにやりと笑い、シルキーとクーンは愉快そうに司令官の激励を見守っている。

歓声が収まるのを待ち、辺りが静まるとキジハタは剣を抜き放ち、逸る気持ちを抑えている戦士達に号令を飛ばした。

「全員配置に付け！ ハイオーク、アードルフを迎撃する！」

第六話 第一次ウイペット要塞攻防戦 前編

ウイペット要塞はハリアー川の水を利用した堀、土を固め、堀よりも高い位置に柵を張り巡らせた第一防衛線。

その後方に空堀を掘り、もう一段高い場所に第二防衛線が作られた防衛施設である。

第一防衛線から第二防衛線には、コボルト技師により道がわかっていたれば迅速に逃げられるように設計されており、例え第一防衛線内部に侵入されても第二防衛線に即座に移れるように作られている。

さらに背後から筏ですぐに東部へと逃げられるように作られている辺り、コボルトという種族の性格が出ているかもしれない。

そんな一面があるにせよ入口に掛けられた橋を引き上げれば、強固な要塞として機能するよう基礎設計図を作ったクレリアにより、考えられていた。

その要塞の中央、入口近くでキジハタとタマは要塞を囲む敵の様子を眺めている。

「キジハタの旦那。落ち着いてるな」

「今回はまともに戦えれば負けはない。人数が違う」

「なるほど……ま、そりゃそうか」

落ち着いたキジハタの言葉にタマは遠くの敵を見ながら頷く。
指揮官である彼らにとっては、この戦いはあくまで始まりであつた。

「戸惑っているようだが……さて。どう来るか」

「木を切っているな。まあ、そう来るわな」

「計画通りに行くぞ」

「ほんと、あの小娘きつつい作戦考えてくれるぜ」

タマは頷き、見張り台に立つコボルトを見上げる。

その顔には覚悟を決めた、真剣なものがあつた。

それは、彼だけではなく種族関係なく……全員が同様の表情を浮かべていた。

一方、アードルフは目の前のコボルト族の拠点の意図がわからず、部下のゴブリンに橋代わりにするための木を切らせながら、要塞を睨みつけていた。

『死の森』の集落は柵で囲む程度で、防衛施設としてはそれほど機能していない。

これはオーク族だけでなく、ゴブリン族もコボルト族も同じである。

「ふん……弱い者の小細工か」

川の水を引いて堀を作り、攻め難くする……理屈としてはアードルフも理解出来ているのだが、これまでの常識が素直に認めることを拒絶していた。

彼にとって戦いとは正面からぶつかり合い、相手を蹴散らすことだったのである。

「木を二本縛り付けた橋を十本、用意できました！」

「よし。オーク一名、ゴブリン共を十名を一組にする。アルノー、カスパル。リーダーはお前らだ。三組ずつ指揮をしる。残りは俺がやる」

「はっ！」

オークリーダー二人を副将として要塞の左右へと配置し、アードルフは中央から堀を超えて攻める準備を進めていく。

この時、アードルフの優秀な戦士としての直感は危険を訴えていた。

だが、相手はこれまで戦いにすらなかったことのないコボルト族とゴブリン族であったことが、自身のそれを疑う結果となった。

「相手はコボルトとゴブリンだ！ 中に入れば勝てる。行け！」
「おおおおー！」

自慢の槍で要塞の方を指し、アードルフは叫んだ。
普段通りの勝利を確信しながら。

昼過ぎのウィペット要塞左翼では、茶色と黒の斑模様のコボルトリーダー、シルキーが攻める準備を進めているゴブリンの姿を見ながら、薄らと楽し気な笑みを浮かべていた。

その笑みを見た戦士隊のゴ布林がびくっ！ と震える。

「落ち着いて訓練通りにやりますよ。いいのです」
「はいっ！」

彼女のゆっくりとした声に、弓を構えたコボルト達が頷く。

普段は可愛らしさが滲み出ている彼等の表情は一樣に引き締められており、敵を見つめる視線は鋭い。

「本当に大丈夫なんでしょうか」
「要塞を落とすには最低私達の三倍の戦士が必要です。心配ありません」

近くにいた不安げなゴ布林にシルキーは答えると、指揮棒を構える。

彼女は多少の魔法を使えるが弓は使えるものの得意ではなく、剣も苦手であるため、指揮に徹するようにクレリアから教えを受けて

いた。

「コボルト弓兵隊構え！　引きつけなさい」

アードルフ配下のオークリーダー、アルノーがアードルフの号令と併せ、ゴブリン達に木を持たせて突っ込ませ、要塞の柵を薙ぎ倒しながら橋を架ける。

シルキーは慌てず、コボルトとゴブリンを十名ずつの班に一瞬で分けた。

その橋を利用してゴブリン達はウィペット要塞に入り込もうとするが……。

「よく狙いなさい。容赦は不要……斉射っ！」

先頭の二名が針鼠のようになって堀に落ち、次の矢をコボルト達が準備している間に侵入を果たそうとした三名目は要塞で待ち構えていたゴブリンに切り殺される。

あまりの呆気なさにオーク族側の攻撃がぴたりと止まった。

「これで九名。見なさい。戦い方次第で私達は勝てる」

自分達のやったことに驚いている仲間達に、シルキーは微笑んだ。

彼女の守る左翼だけでなく、クーンが守る右翼、キジハタとタマが守る中央でも同じ光景が広がっていた。あまりにも一方的な結果に戦場は静まり返る。

「一旦引くようですね。次の攻撃が本番です。それまで橋を堀に落として待機」

淡々とした口調でシルキーは命令を出しながら、指揮棒を腰の鞘に戻し、オーク族の動きを一つも見逃さないよう、じっと見つめていた。

即座に一時撤退の指示を下したアードルフは、オーク達を集め、不機嫌な表情を隠さずにいた。そんな彼にオーク達は怯えながら、次の命令を待つ。

彼等は要塞を見たときに容易ではないと思っていたものの、ここまで一方的な展開になるとは想像をしていなかったのである。

コボルトが弓を扱うことは知っていたが、小動物を狩るための粗雑なものであり、鏃も木の先を尖らせただけの物を用いていた。

だが、ここを守るコボルトの矢の威力と精度は想像を超えていた。殆どを命中させ、確実に仕留めている。

一度の攻勢で二十名近くの死者を、アードルフ達は出していた。

「忌々しい犬共が……」

「こ、これは落とせないのでは……ぐっ！」

気弱な発言をしたオークをアードルフは無言で殴り飛ばす。

「腰抜けはいらん……お前はサーフブルームに帰れ。奴らが籠っているのは弱いからだ。中に入りさえすれば容易に崩れる。多少の被害など気にすることはない」

萎縮している部下を面白くもなさそうに見回し、静かに、怒りの込もった声でアードルフは命令を下した。

「一箇所から集中して突入する。準備を行え！ 皆殺しだ」
「はっ！」

オーク達は震えながら返事をし、殴られたオークは土まみれになりながら、憎々しげにアードルフを睨み付けていた。

「まずは予定通りだな」
「同じ失敗をするほど愚かではないでしょうね」
「やっぱそうですかい？」

一時的に引いたことを受けて、幹部達は一度集まり、小さな会議を行っていた。

日は暮れ始めており、オーク側はもう一度橋を作らなければならなかったため、攻めてくるのは明日になるとの意見で一致している。

現在は負傷者もいないため、戦士達には毛布と食事を配給して休ませていた。

「キジハタ様はどう思われますか？」

「アードルフは自分の強さを信じている。そうだな。タマ」

「あー間違いいねえ。一人でも突っ込んでくるぜ。それで恐ろしく強い」

言葉とは裏腹に、自信あり気にタマはにやりと笑い、キジハタは頷く。

「分散して失敗した。ならば、今度は集中してくるだろう」

「なら、罠を仕掛けるチャンスですね」

「被害を出さないためにも、シルキーとクーンはタイミングは見極めてくれ」

「了解ですぜ」

「了解」

短く返事をした二人は自分達の持ち場へと戻っていき、

「んじゃ、俺は少しだけ休ませてもらう。キジハタの旦那も休みなよ」

「承知」

タマも自分の持ち場で仮眠を取るために戻って行った。

去っていった彼等の背中を見送ってから、先程、一瞬の防衛戦を行った仲間達を見る。

新設された剣士隊はキジハタと共に小集落を攻め、あのパイルパイチの戦いにも参加し、戦いに慣れているがその他の隊の者は先程の戦闘が初めての者も多い。

特にコボルトは戦うこともできずに逃げ続けていた者が殆どであるため、戦いに慣れた者は殆どいなかった。

「若いな。戦争は初めてか？」

「は……はい……！」

キジハタはそんなコボルト達の一人一人に弓を離して座るように声を掛け、隊で一番若いコボルトの所で立ち止まった。

彼の友人である『隠密』ヨークに似た、黒い毛並みの少年。

成人したばかりの若い少年は、寒くもないのにカタカタと身体を震わせながら頷く。

「よく志願したな……いや、見覚えがあるな。ラルフェルド出身か」

「はい。僕は帝国が出来た時の感動は……忘れません。だから、クレリア様を守るって……」

「なるほど、帝国の民としては先輩だったか」

キジハタは笑う。初めは彼もクレリアと命を賭けて戦った。だが、少年はラルフェルドに元々住んでいた子供。自分とも戦った間柄なのだ。

「クレリア殿の助けになりたくば、何が何でも生き残り強くなることだ。コボルトならばシルキーをよく観察すればいい」

「僕は……キジハタ様みたいになりたいです！」

「物好きだな。戦が終わったら剣士隊の訓練に混ざればいい」

夕暮れの紅い光を受けながら、若いコボルトはきらめくような瞳をキジハタに向ける。

若いゴブリン達から受けるのと同じ種類の……。

（拙者の行動は常に見られているということか）

こうやって次の者が育っていくのかもしれない……キジハタはそう考えていた。

「お主、名は？」

「グレーです」

「よろしい。グレー。今日のところはその弓を離してゆっくり休め」

笑いながらキジハタはグレーの固まった手を弓から離してやり、地面に座らせた。

第七話 第一次ワイト要塞攻防戦 後編

翌朝早朝、日が昇る頃にはワイト要塞では全員が起床し、アードルフ側が橋を準備している中央付近で防衛の準備を行っていた。肌を刺すような冷たい風が微かに吹いているが、誰もそれを気にしている様子はない。

毛並みや肌のあちこちに土を付けながらも、直立不動で立っている。

「やはり強引に来るか」

「さっさと逃げてくれれば助かるんだがなあ」

相手に視線を向けているキジハタに身体を軽くほぐしながらタマガボやく。

「コボルト弓兵隊100名、迎撃体制完了しました」

「ご苦労。途中からのゴブリンの指揮は任せる」

前を向いたまま、キジハタはコボルト達の準備をさせていたシルキーに短く答えた。

彼女は頷いて微笑む。

「了解です。お気を付けて。タマさんはへましないように」
「おいっ！ その扱いの差はなんだよ」

軽やかに笑って去っていくシルキーにタマはわざとらしく怒り、その様子にキジハタがくつくと小さく笑った。

「一応気遣っているのだろう」
「まーそうなのでしょうがね……………来るか」
「やるぞ」

タマの表情が真剣なものに一瞬で変化する。
彼等の目には、要塞に向かっていくつもの木の橋を担いで走ってくるゴブリン達の姿が映っていた。

同じ頃、アードルフは必死の形相で走っていくゴブリンを見ながら笑っていた。
どう攻めるにしろ被害が出るのは彼にもわかっている。

「オークは全員中央に集まれ。ゴブリン共は前方、左右に配置だ」

彼にとって他人は道具、あるいは駒でしかなかった。

だが、それ故に彼は迷いなく、弱い味方を矢除けに使い、戦力を温存するという手段を取ることが出来たのである。

「全員後ろに下がるなよ。下がったゴブリンは殺せ」

「りよ、了解！」

これまでにない厳しい命令にオーク達が青ざめながら頷く。

苦戦という苦戦を知らないオーク達は、『戦争』になったとき、どういうことになるのかを理解していなかった。

そういう意味では要塞を落とすという目的を果たす上で、アードルフはオーク族の中では善悪を別として唯一、正しい意味で指揮官であつたに違いなかった。

「行け！ 巢に籠もる犬共を殺し尽せ！」

だが、彼は大きな間違いを犯していた。

相手の実力を過小に見積もっていたのである。

彼が指揮する戦士達にとって不幸なことに。

当然ながら戦力を集中すれば守る側の戦力も集中することになる。コボルト弓兵隊を指揮する二人の女性は、冷や汗を背中に感じながらも、何でもないことのように真っ直ぐ立ちながら、タイミング

を見計らっていた。

そして、先頭のゴブリンが半ばまで来たことを確認し……。

「斉射っ！」

「撃てっ！」

それぞれの部下に号令を下す。

左右から矢の雨を浴びせられたオーク族側のゴブリン達は次々に倒れ、堀の中へと落ちていく。100名からなる弓兵達の射撃は苛烈で、あちこちから悲鳴があがった。

「長槍隊、中に入れるな！」

「数はこちらが上だ。落ち着いて囲むのだ」

柵を押し倒し、何とか侵入した者も次々にゴブリン達に囲まれ、打ち倒されていく。

今度も楽勝……そんな空気が流れた一瞬……一気に状況が変わる。

「はっはー！ どけどけ雑魚共っ！」

「アードルフ。来たか！ 全員アードルフから離れろっ！」

「なんてやつ……」

アードルフのいる中央にもコボルト達の矢は届いている。だが、

彼には一切刺さらなかった。運が良かったわけではない。

彼は酷薄に笑い、味方のゴブリンの頭を掴んで文字通り矢よけに用いて振り回しながら内部に乗り込んできたのである。

訓練された戦士達もそのあまりの暴虐に絶句し、啞然とする。

オーク族の他の戦士達もアードルフが空けた穴から侵入し、場所を確保していった

アードルフは挑んできた二名の長槍兵を次々串刺しにすると、楯変わりに使っていた既に息絶えたゴブリンを投げ捨て、タマの方を向き、槍で肩を叩きながら笑う。

「おう、弱虫ルートヴィツヒじゃねえか」

「見間違いだな。俺の名前はタマだ」

あちこちでオークと……そして、ゴブリン同士の戦いが始まり、アードルフの前にはタマ……それと、見向きもされていないキジハタだけが残る。

「アードルフ殿とお見受けする」

「なんだこのゴブリン。見りゃわかるだろ」

目の前の小さいゴブリンを見たアードルフは馬鹿にするように薄ら笑いしながら、槍はタマの方に油断なく向ける。

だが、彼は今度の勘は信じていた。

(こいつ……違うな。何だ?)

「拙者は『剣聖』キジハタ。卑怯なようだがタマ殿と二名でお相手仕る」

「くくつ……ははは！ 冗談が過ぎるな」

「いやーこれが本気なんだぜ。女より弱いアードルフちゃん」

アードルフの正面にタマが立ち、キジハタが側面に立つ。

軽口を叩きながらも緊張した面持ちでタマが槍を構え、アードルフはキジハタを気にしつつも、野獣のようなしなやかな身体を何時でも飛びかかれるよう、重心を低く構える。

「馬鹿め。同郷の誼みだ。命乞いすれば命だけは助けてやったものを」

「馬鹿はお前だろ。そんな気ねーくせによ」

「ふん……死ねっ！ ルートヴィッヒ」

ガキンッ！ と鋼の槍同士のぶつかり合う音が要塞に響く。神経をすり減らす闘いの始まりの合図であった。

その頃、シルキーとクーンは役割を分担し、指揮を行っていた。クーンはコボルト全員の指揮を取り、第一防衛線から第二防衛戦

への移動を行っている。

一方シルキーは近接戦闘部隊の指揮を取り、アードルフを除くオークとゴブリンの相手を続けていた。

「第二防衛線に向けて、反撃しつつ徐々に後退。オークは囲んで訓練通り仕留める。司令官に敵を近づけないように注意して位置を取りなさい」

彼女はアードルフとの戦いを横目に見ながら、乱戦にならないように注意してじりじりと下がっていく。何度も訓練した行動で、ゴ布林達も仲間の邪魔をしないよう、ゆっくりと下がっていた。

タマ達もアードルフの攻撃を捌きながら、後退している。

（苦戦している『振り』をしなくては）

戦場の中、シルキーは一人冷静に考える。

彼女の考えている勝利はこの戦場にはない。

最終目標である北東部奪取のための一歩目でしかないのだ。

横目でキジハタとタマが無事、予定の場所まで辿り着くと彼女は、
「ばっ！ と指揮棒を上げる。」

「全員、第二防衛線へ撤退っ！」

彼女の命令を受けたゴブリン達が戦闘を中断し、後方へと逃げるように下がっていく。

「逃すなっ！ 追いかける！」

当然に、オーク達は追い掛ける。

それまで苦戦していた事実も忘れて、勝利は近いのだと信じて。

「さあ、こつから本気ですぜ。コボルト弓兵隊、斉射！」

「うわああああ」

第二防衛線となっている柵の向こうには100名のコボルト達が既に待ち構えて、弓の準備を行っていたのである。

狭い道から強引に攻め込もうとしたオークは、次々に囲まれて打ち取られ、残った者は進むことができず完全に立ち止まっていた。

「おつかれさん」

「疲れましたね。後はみんなにお任せです」

「いや、こつちを任せていいですかい？」

クーンが弓を握りながらシルキーを笑顔で労い、肩を叩く。彼女の後ろには数名のコボルトが弓を持って立っていた。

「旦那方の援護もせんかね」

「なるほど。タマさんが不安ですしね」

「気にしすぎ」

三毛柄のケツトシーはけらけら笑いながら弓の名手を連れ、キジハタ達が闘い続けている第二防衛線の別の道へと駆けていった。

「往生際が悪いぞ、ルートヴィツヒ」

「うつせ。はあ……はあ……タマだって言ってる」

じりじりと下がりながらタマはアードルフの槍を受け流し、受け止め、一方的な攻撃を耐え続ける。当然に無傷ではなく、あちこちの毛並みが赤く染まっていた。

だが、攻撃を続けるアードルフも余裕はなく決め手にもかいている。

必殺の一撃を繰り出そうとすると、上手く側面のゴブリンが牽制してくるのだ。

積極的には攻めてこないがその剣は鋭く的確で、とても油断の出来るものではない。

「ゴブリンの癖に……生意気な」

「アードルフ殿。周りを見る。もう決着は付いている」

アードルフは、はっとして辺りを見回す。

（いつのまにか戦闘の音が消えてやがる。それに、柵の向こうに射手）

「てめえ……ゴブリン。お前名前は？」

「『剣聖』キジハタ。モフモフ帝国北東部司令官だ」

「覚えたぜ。この借り、必ず返すっ！」

ハイオーク、アードルフは槍を引き、颯爽と身を翻して走り去っていく。

何とかといった様子で立っていたタマは座り込んで、顔をしかめてキジハタの方を向いた。

「本当に仕留めなくていいんですかねえ」

「判断が正しいことを信じるしかないな」

キジハタも厳しい表情で、アードルフが去っていった後を眺める。勝てないと判断すると相手は一瞬で判断し、躊躇なく去っていった。

強いだけではない……二人にはそんな思いが過ぎっていたのであ

る。

「ま、とりあえずは勝利だな」
「うむ」

タマは楽しそうに笑うと槍を大きく空に掲げる。

「ハイオークを退けたぞっ！」

彼の明るい大声に答えるようにウィペット要塞中から大歓声がある。

自分達だけで初めての大きな勝利に両手を上げて皆が喜んでいた。

クレリア抜きでの初めてのハイオークとの戦いになる、第一次ウィペット要塞攻防戦はこうして幕を下ろす。

だが、この戦いは北東部を巡る闘いの始まりに過ぎなかった。

——第一次ウィペット要塞攻防戦について

北東部攻略の拠点とするために創られたウィペット要塞。

これはクレリア大元帥の原案を元に、後に『要塞の父』と呼ばれることになる、レオンベルガーが設計したモフモフ帝国初の多重構造の防衛施設である。

拡張に拡張を重ね、自然に多重構造となった帝国首都『ラルフェルド』と異なり、初めから防衛を目的に多重構造に作られている。川の水を引いた堀を持つているこの要塞は多大な結果を残し、後に作られる要塞群に設計思想は受け継がれている。

そのウィペット要塞が始めて戦場となったのが、第一次ウィペット要塞攻防戦である。

ハイオーク、アードルフはオーク10名、ゴ布林100名で要塞に攻め寄せたが、北東部司令官『剣聖』キジハタは冷静に対処。コボルト100名、ゴ布林100名による連携により、少ない被害で撃退に成功した。

クレリア大元帥抜きでのハイオークとの戦いに置ける初めての勝利であり、この防衛戦は多くのモフモフ帝国臣民に希望を与えることになる。

だが、この防衛戦の勝因の多くはハイオークの油断にあった。モフモフ帝国の半数で攻めてきたことがその証左であろう。

この後、ハイオーク達の油断は無くなり、厳しい戦いが何度も続くことになる。

しかしながら、北東部参謀シルキーはそれすらも計算に入れているのである。

『モフモフ帝国建国紀』——反撃の章—— 二代目帝国書記長
ボ
ーダー 著

第八話 次の一手

アードルフの攻撃を防ぎきったウィペット要塞では、戦後の処理が始まっていた。

看護のコボルトがちょこまかと走り回り、コボルト語で『安全』と彫られた木の帽子を被った戦士達が倒れた柵の修復や荒れた要塞の整地を行っている。

それ以外の者達は戦没者を埋葬し、肅々と目を閉じていた。

そんな戦後慌ただししい要塞の居住区の一室。

「いたた！ 痛い痛い！ おい、もうちょい加減を！」

「うるさいですねータマさんが悪いんですよ。怪我なんてするから」
「無茶言っなよ……」

真正面からアードルフと闘う羽目になったタマは満身創痍の状態で、自分の仕事が無くなったシルキーから治療を受けていた。

彼女も指揮官として看護の知識も多少は身に付けている……が、
ほぼ素人である。

「何で俺だけお前なんだよ」

「看護隊は大忙しなので。タマさんの怪我、一つ一つは浅いですし」

大きな体に清潔な包帯をぐるぐる巻きながら、彼女は溜息を吐く。実際は自分の目で見なければ軽傷と信じられず、看護隊から仕事をもらっていたのだが、それは当然ながら口には出さなかった。

「悪運いいですねー。タマさん。てつきり駄目かと」

「わはは！ 俺は何故か強い奴ばかりと戦ってるからな。耐えるのは得意だぜ」

「ふん。褒めてないです」

最後の包帯を巻き終え、シルキーは苦笑しながら悪態を吐く。そんな彼女にタマは、真剣な表情を向けた。

「これからどうすんだ？」

「予定通りです。ラルフエルドに使者を送ってます。クレリア様が来てくれると思うのですが……向こうの状況がわからないのです」「投降者とあの件か……可能なのかね」

座りながら太い腕を組んだタマがシルキーに問い掛けると、彼女は不安げに俯く。

「五分五分……です。でもクレリア様なら……」

「暗い顔すんなって。失敗しても何度でも俺がハイオークを防いでやるから、お前は自信を持って悪巧みしてりゃいいさ」

明るく笑ってタマはシルキーの背中を叩く。

コボルト相手には力を入れすぎたのかシルキーは涙目でタマを睨んだ。

「痛いですね！ でも、たまにはいいことありますね」

「ふふん、見直したか」

「はい。次も盾になつてもらいますね」

戦争が終わってから始めて明るい笑顔を見せたシルキーにタマは少し安心しながら、彼女に対して冗談の混じった抗議をするために、口を開いた。

シルキーからウイペット要塞の防衛の報告を死の森中央部に建築中の『オッターハウンド要塞』で受けたクレリアは、一緒に仕事をしているシバと前線に詰めている幹部とで会議を行っていた。

中央部はゴブリンの魔王候補であつたハイゴブリン、ラインドラスの統治領域であり、彼がオーク族に全面降伏をしたため、北東部とは異なり、オーク族とゴ布林族の団結は強固で切り崩しが容易ではなく、その上、建築中に全面的ではないものの、様子見のための小さな襲撃が何度も起こっている。

そのたびにクレリアは訓練を積んだ熟練兵と未訓練の義勇兵を使い分けて防いでいたが、何時ハイオークの全面攻勢が起こるかわからない情勢にあつた。

だが、シルキーからの報告書には数日から一週間、クレリアに手伝って欲しいと書かれていたことから、会議に掛けられたのである。急作りのぼろぼろの会議室に数名の幹部が椅子に座って顔を見合わせていた。

「カナフグ。私がいなくても防衛は可能か？」

キジハタの右腕であり、パイルパーチの戦いでは、ラルフェルド防衛を担っていた古参の幹部であるゴブリンのカナフグは、クレリアの問いに黙って首を横に振った。

「ゴブリンならいける。ハイオークは無理。今の状態では持つて一日」

物静かで限界を弁えている彼は、物事の判断基準としてクレリアは重宝している。

彼は同じ問いをパイルパーチの戦いの際に受けたとき、三日と答えていた。

それはクレリアの予測に近く、安心して彼に任せたのである。

「ウイペット要塞ほど、戦士がない」

カナフグの言葉にクレリアは頷く。

死の森中央部は、北部にハリアー川が東から西に流れ、それが一気に西部で曲がって北から南に流れている。

オッターハウンド要塞が完成しても優位を取れるのは、川の東側のみであり、戦力の限界の関係もあってクレリアはこちらの方面を守備側と位置づけていた。

そして、攻勢側である北東部に少しでも戦士を回すため、こちら側は少数の熟練兵と新兵とで防ぐことに決めていたのである。

そんな中、話を聞いていた皇帝のシバはクレリアに不思議そうな顔を向けた。

「んー、クレリア。シルキーはどうしてクレリアを呼んでいるの？」

「はい。まずは投降者の帝国加入手続き……私達しか真実降伏したのかわかりません」

「そうだね」

ふむふむ、なるほど……と、シバは小さく頷く。

「もう一つ。こちらが私を指名している理由です。北東部のラウフオックスの集落に、モフモフ帝国への協力を求めて欲しいと。要職に付いている私から」

「え、どうして僕じゃ駄目なの？」

「敵地ですから。シバ様と私二人で行ければ最高……もとい、最善

なのですが」

東部を走り回った頃も危険ではあったが、現在の北東部の危険さはそれ以上である。戦闘力は高くないシバを送ることは、クレリアとしても帝国としても論外であった。

現実的には皇帝であるシバに、投降者の手続きを取ってもらう……それが限界だろうとクレリアは考えていた。

個人としては彼女はすぐにでもラウフォックスの集落に行きたい気持ちではあったが。

「だけど、シルキーも大変そうだし、何とかしてあげたいね」
「ふふふっ！ 私の出番だなっ！」

シバが困ったような表情をした時である。
会議室の扉を大きな音を立てて開き、銀色の髪に褐色の肌……尖った耳の美女が会議室につかつかと入ってきた。

「貴女はラルフェルドに居たのでは。モフモフ帝国初の受刑者として」
「マイダーリンから頼まれてね。状況は把握している」

クレリアのじと目を軽く無視して美女……エルキー族のターフェは不敵に笑う。

以前、彼女が引き起こした大問題……それは、ケットシー族の族長、ブルーを強引に（？）襲ったことだった。

ブルーが襲われたことを否定している以上は当人同士の問題であることもあり、クレリアは関わらないつもりだったのだが、それを隠さない彼女にケットシー族全体から猛抗議が上がり、仕方なく、ケットシー族が許すまでラルフェルドの自宅周囲からの移動を禁止したのである。

「恋愛は自由だ……そう、その皇帝が言っていた。問題あるまい」「うんうん。そうだね。恋愛なら問題ないよ」

「シバ様、甘いことを言っただけです」

「ふふ……冷たいクレリアも可愛いな。撫で撫でしていいか？」

ある意味クレリアは敵以上にこの舌舐めずりしている美女が苦手であり、目的を達成するためなら手段を全く選ばないその手口を警戒していた。

天才的な変態だと。現にブルーは同族から非難を受けていない。そこまで計算をしつくしているのだ。

「会議で決めたことを反故にしては、示しが付かない」

「そう怒るな。許しはちゃんと得た。条件として、皇帝の護衛を頼まれたのだ」

「貴女に任せるのは、敵地に送るより怖いんだけど」

「いやはや、狐のもふもふ……はやくこの手に抱いてみたいものだ」

くつく……と低く笑うターフェにこいつは重症だ……と、クレリアは改めて思う。

感情的にはともかく、理性としては確かに戦闘力もあつて機転も効く、最高の人選であるのが、彼女としては辛いところではあつた。

「じゃあ、ターフェ。悪いけど僕の護衛をお願いしていいかな？」
「うむ、可愛い少年の護衛だ。喜んで」

華麗な仕草でターフェはシバに対して一礼する。
それは一分の隙も無いもので、彼女の使う人間の礼儀作法を教えたクレリア以上に優雅な所作だった。

そんな彼女に見蕩れている一同を放置し、クレリアはターフェに近づくと小声で耳打ちをする。

「ターフェ。シバ様に手を出したら、首を撥ねるわよ」
「ふふ……心配するな同志。私はマイダーリン一筋だ」
「誰が同志だ。変態」

こうして、多分に不安要素を残しつつ、動きの取れないクレリアに変わって皇帝であるシバが暫くの間、工作活動に携わることになる。

結果的にこのことがどのような結果をもたらすのか、現時点では誰にもわからなかった

第九話 軍事と外交

ウィペット要塞に到着するとシバは投降した敵の戦士達に面会し、確認すると彼らの中でも北東部で戦いたい者、戦いたくない者に分け、命令を出した。

その後、シバはキジハタ達から詳細な報告を聞き、ターフェも交えて会議室で作戦の検討を行っていた。

クレリアではなく、皇帝であるシバが要塞に来たことに一同は驚き、困惑する。

北東部が現在危険であることを理解しているからだ。

彼は戦闘向きではないというのは、モフモフ帝国では常識なのである。

「くくっ……お前達は勘違いをしているな」

口々にシバに対して危険だと諭す幹部達に対してターフェは口の端を歪めて笑う。

「クレリアは交渉に関しては無能だ。だから、私が来たのだ」
「てめえ、姐さんを馬鹿にするつもりか！」

怒りの声を上げたのはタマだ。だが、彼女は笑みを崩さない。

「でかいの。まだ、お前の方が向いているな。怯えて何も言えない者になつて、本心で思っていない声を上げる。周りの者がよく見えていないと出来ぬことだ」

「ぐっ…… 本当、やなやつだな。相変わらず」

ターフェは一度言葉を切り、白衣の裾を直すと皇帝に頭を下げる。

「皇帝。彼女の話聞く限り、クレリアは万能ではない。それを覚えて置くといい。軍事における能力を100とするならば、政治は精々30。交渉は5と言ったところだ。彼女は軍人なのだから、それで当然なのだが……そして、彼女自身、そのことを理解している」

「ねえ、ターフェ。その基準で僕の交渉力はどれくらい？」

顔色一つ変えずにシバは微笑んでターフェに問い返す。

彼女はニヤリと笑って応えた。

「-500くらいだな。ただ、皇帝は今ままでいいと私は思う」

「そ、そうなんだ」

シバとしては、クレリアのことは理解していたが、自分の事に関

しては少しだけショックだったらしく、吃りながらも頷く。

「うう、私の作戦間違っていたんでしょか。楽そうかと思ってたのに」

ラウフォックス族の勧誘を考えていたシルキーがしょぼんと肩を落とすが、ターフェは首を横に振った。

「間違っているのは作戦ではない。クレリアを送り込んで勧誘しようとしたのが間違いなのだ。そして、奴もそれを信じる辺り、交渉を苦手としているのがわかる」

「では、どうすれば？」

「コボルト族は誠実だ。皇帝はそれでいい。だが、臣民たる我々はそれではいけない」

エルキー族の美女はくくく……と低い笑い声を上げ、慣れている皇帝やキジハタ、タマ、シルキー以外の者達を震え上がらせる。

「皇帝に危険なことをさせる必要はない。相手にここまで来させればいいのだ」

「しかしどうやって……前回の時も、結局中立を押し通されちゃったのに」

うつむ……と、シルキーは唸る。

だが、ターフェは事も無げに答えを言った。

「決まっている。脅すのだよ」

「お、お、脅す？」

「ふふ……力で脅すわけではない。現実を教えてあげるだけでいい。そう！ 真実という猛毒の一滴は彼等に決断を迫ることになるだろう。ふふふ、右往左往が目に見えるようだな」

ターフェの過激な発言に会議室が大きくざわめく。

「もうちょつとわかり易く説明してくれるかな。ターフェの言葉はどこまでが本当かわからないから。ブルーの事も嘘でしょ」

落ち着いた様子で座っているシバが微笑むと、ターフェは面白そうなものを見る目でシバを見て、小さく頷き、全員を見回す。

「まあ、言葉が過ぎたな。交渉とは戦争だ。ならば駆け引きが必要となる。我らが女神がそれを得意としない以上、誰かが身に付けねばならん。それはわかるな」

その言葉には全参加者が頷く。ウィペット要塞の幹部達は彼女に頼らずとも、自ら国を守るために戦えることを証明しようとしているため、理解は早かった。

「ただ頼むだけが交渉なのではない。粘り強く、ありとあらゆる手を用い、相手の譲歩を引き出すのが交渉だ。さらにその結果において、目的を達成しつつ、相手に恨みが残らなければ最善か……そこは皇帝のお手並み拝見というところだな」

「交渉についてはわかった。具体的に拙者達はどうすればいい？」

過剰な身振りをしながら説明しているターフェに、キジハタは落ち着いた口調で質問する。

「今回は私が行く。だが、私も忙しい。交渉が得意といえばビリケ族だが、彼等は商売人だからな。シルキーの計画のようなことには向くまい」

そこで……とターフェは続ける。

「今回はヨークとクーンに付いてきてもらおう。後はその結果から話し合っていけばいい。弟も貸そう。暇そうだからな」

シバは彼女の弟、生真面目なエルキー族のコーラルは戦後復興効率化の研究のためにパイルパーチでコボルトよりも真面目に働いていたような……と思ったが、不確かな記憶だったので口には出さなかった。

「じゃあ、僕は待ってたらいいのかな」

「ああ、ある程度交渉が纏まればヨークに手紙を持って走ってもら
う」

シバに対してターフェは頷き、こみ上げる笑いを押さえつけるよ
うに、くっくと喉を鳴らす。

「ふふ……はあ……今から可愛い狐達の涙目が目に浮かぶようだ……
いやいや、震えてその円らな瞳で私を怯えるように見上げてくれ
るのだろうか……」

「相変わらずとんでもねえ変態だな」

頭を掻いて呆れているタマにキジハタが同意するように頷く。

「だが、言っていることは理解できる。敵中でも彼女であれば、危
険はない」

「一応、ハイオークより強い……らしいですけど、本当ですかね？」

シルキーは看護の講義を受けているが戦闘に参加しているのは見た
ことはない。本人は医者から正面から戦ってどうする……と、説明
していた……が。

キジハタはうむ。と返事を彼女に返した。

「弟のコーラル殿が、屈指の強さだと言っていた。彼は嘘を吐くような男ではない」

「そんなもんですか」

そのコーラルとは面識のないシルキーは、ターフェの弟なら似たようなとんでもない変態なんだろうな……と関係ないことを生返事しながら考えていた。

「それじゃ、ターフェ。今回はよろしく頼むよ。ヨークとクーンは同行するように」

「ふふ……任されたよ。皇帝」

シバはターフェに命令し、彼女は恭しく一礼する。
その姿を見ながらキジハタは別の事を考えていた。

（彼女は長命……力も知恵もある。その強さを振るわないことには、意味があるに違いない。巫山戯ているのも擬態ではないか？ ……
皇帝もクレリア殿も何も言わぬ。どうしてなのか）

息子の出産にも立ち会ってくれている彼女を疑ってはいないが、もう少し知恵の廻る頭が欲しかった……そう、自嘲しつつもキジハタは、会議の終了が皇帝から告げられると、自分が出る事……仲間への訓練を行うために歩きだした。

全員が出ていくと、ターフェは交渉に出掛ける前にシバに問いかける。

「私のやり方をどう思う？」

「助かるよ」

シバはターフェに透明な、無邪気な笑顔を向ける。

彼女はそれを確認して笑うと、彼に背中を向け、ラウフォックスの集落を目指して駆けて行った。

第十話 交渉

ラウフォックス族は魔王領だけでなく、人間領においても広く分布している種族である。

草原、森林、山奥……その住処は様々だが、『死の森』に住んでいる者は少なく、魔王候補も『死の森』にはいないため、その勢力は弱かった。

だが、彼等は情勢を把握し、オーク族に与することで自らを守っていたのである。

「いやはや、コボルト族に似ているのに、実に強かではないか」
「似ていない。我らは狼だ。奴等は狐」

土を盛り、穴を掘ってそれを住処としているラウフォックス達の集落を見ながら嗤うターフェに、黒い毛並みの『隠密』ヨークは非難の声を上げる。

「ふふ……気持ちわかるが仲良くな」
「む……」

実のところ、コボルト族とラウフォックス族は仲が悪かった。

以前にシバが小部族にオーク族の侵攻を知らせ、避難するように伝えるために色々廻った際、捕まって売られそうになったからである。

その売られそうになった当人は相手が逃がしてくれたこともあり、全く気にしていなかったが、シバに付いていたヨーク達、お人好しなラルフェルド出身者もさすがに根に持っていた。

それだけでなく、何故か気が合わない。

このあたりは種族としての性格に関わることでもあった。

コボルト族はどちらかというと群れることを好むが、ラウフォックス族はどちらかといえば、同行しているクーン達ケットシー族の性質に近く、単独行動を好む。

また、似た種族でありながらコボルトが疑うことを知らないような真っ正直な種族であるのに対し、ラウフォックス族は賢く自分の利益になることを第一に考える種族であった。

「しかし、あれですねい。本当に可能なんですかい？」

「今回は恐らくな」

三毛柄のクーンの疑問に、ターフェは頷くと二人を連れて真正面からラウフォックス族の集落へと歩いていく。そして、籠を持って歩いているラウフォックス族の女性を見つけると、歩みを止めた。

「む……小さい、もふもふ、鼻が長い、毛並み綺麗。おお……尻

尾が大きいなあ……くくっ」

俯いて低い笑い声を上げるエルキー族の美女を見た、その女性は怯えて籠を取り落とす。

そして、逃げ出そうとして……ターフェに服を掴まれ、宙にぶら下げられた。

「実にいい。利口そうだ。コボルト達のようなのもいいが、これはこれで……」

「ななななな、なぜエルキー族が」

その問いにターフェは口の端を少しだけ持ち上げて笑い、答える。

「後ろの者を見ればわかるだろう。責任者のところに案内しろ」
「う、わかりました……」

ぱつと手を離すと、黄土色の毛並みを持つ狐の女性は涙目になりながら走り去っていった。それを確認し、ターフェは後ろの二人の方を向く。

「見たか。私はエルキー族。つまり、中立であるはずの我々が帝国に協力していることを理解させる。これだけで今後の対応において優位を取ることが出来る」

「むむ……なるほど」

ターフェは『死の森』を巡る情勢を二人に説明しながら対応法を例示し、教えこんでいく。

「優位にある場合には真実を告げたほうが良いこともある。ま、そうでもないときもあるから相手を見て判断するといい」

話をしながら待ち、しばらくすると先程のラウフォックス族の女性が戻り、集落の族長の下へと三人を案内した。

ラウフォックス族の族長は、黒い毛並みの初老のラウフォックスだった。

コボルト族と同じ程度の体格の彼は、屈んでいても背の高いエルキー族であるターフェを目をそらさず、しっかりと見上げている。

「族長のロルトだ。エルキー族の方、何用かな？」

「ご老人。まあ、少し話をしに来たのだよ」

ラウフォックスの土を掘った家は天井が低く、時折頭を打ちそうになったターフェはゆったりと干し草の上に腰を下ろして微笑む。

「さて……ご老人はコボルト族についてどう思われる？」

「真面目だが、悲しいかな力が弱い種族だ」

「そう、彼等は弱い。だが、実に誠実で恩義には報いる種族だ」

ふむ……と黒い狐の魔物、ロルクは髭を触り、腰を下ろす。

「信用に足ると言える。だからこそ、魔王の友である中立のエルキ―族はモフモフ帝国と盟を結んだのだよ。そして今、私はここにいる」

「エルキ―族がいなければ、東部を統治することは出来なかったのでは？」

「私達は一切手を出していない。帝国の独力と言っていいたいだろう」

多少のアドバイスはしたがね。と、ターフェは彼に説明したが、ロルクは半信半疑の様子で唸っている。そんな二人を、同行している二人は黙って見守っていた。

「重要なのはコボルト族が皇帝だということだ。彼を信じる様々な種族の者達が協力し、自分達の国を作る為に必死に戦っている。支配だけのオークとは違うところだな」

「結局支配するのは同じでしょう」

「そうなるかは、帝国の臣民達の心掛け次第だろう」

「何を言っても我々の答えは変わらない。中立だ」

ここでターフェは後ろに立っている二人を不意にみる。彼等はダメか……と諦めた表情をしていた。その顔を見て、彼女は爆笑する。

「はははっ！ 可愛すぎるぞ。君達。まだ『交渉』していないぞ？」

きょんとした二人にターフェは「ここからだ」と片目を瞑った。

「いやー悪いねご老人。まあ、話を続けよう。我々に協力したほうがいいことを伝えねばならんからな。中立を選んだのは、オーク族が勝つと思っているからだろ？」

「……そうだ。倍以上……いや、三倍以上の戦士がいるのだ」

「正直に言おう。君達がどちらに付こうが、モフモフ帝国は勝利する」

「なっ！」

驚くロルクをターフェは満足そうに見つめ、話を続ける。

「東部でのコボルト族とオーク族の差は、北東部の比ではなかった。それでも勝利したのだ。たかが三倍程度の相手に負けるはずがないだろう？ 一時は引かねばならぬ事もあるだろうが、最終的な勝者は明らかだ」

「油断していたのではないか？」

「ならば、最新の情報を出そう。ウィペット要塞にアードルフが攻めたのは知っているな。その結果は気にならないか？」

ロルクは腕に力を込めて震わせながら、硬い表情で頷く。

「オーク族、死者43名、投降15名。モフモフ帝国、死者4名、負傷者7名」

「え……？」

「くくつ……傑作だろう。半数以上失いながらアードルフは逃げたのだ。ああ、勿論私はいないぞ。首都で軟禁されていたからな。ま、調べてみるがいい」

事件を知っているケットシー族のクーンが呆れるような表情で頷く。

「信じられん……幾らなんでも……」

「中立というのは構わない。少ない一族を守らねばならないことも理解できる。だが、オーク族の味方をし、都合のいい時だけ中立と言って身を守る。お人好しの皇帝はともかく、帝国臣民の全てがそれを許すと思うかね？」

笑みを納め、ターフェは静かな表情でラウフォックス族の族長を見つめる。

「皇帝は君達を許している。君達はどうする？」

「……一日考えさせてもらってもいいだろうか」

「くく。いい返答を期待しよう」

がつくりと力無く肩を落としたロルクに、ターフェは小さく喉を鳴らして笑い、頷いた。

が、ターフェもそこが限界であった。

「ああ、出来れば泊まる場所は、ラウフォックスの子供がいる家がいいのだが……ああ、やはり最高だな。可愛すぎる。ガツクリ老人でも可愛い。駄目だ……抱きしめたい……限界が……」
「あー……うちらがちゃんと見張るんで」

必死で心の底から沸き上がる衝動を堪えて壊れたターフェの背中をクーンとヨークは押し、族長の家から出て行く。

翌日、ラウフォックス族は皇帝と話をしてから最終的な決断を下すことを決めた。

第十一話 準備期間

ウィペット要塞の会議室では『隠密』ヨークからターフェの手紙を受け取ったシバが、それを読み返し首を傾げていた。

すでに、ラウフォックス族との謁見は終了している。

「結局、来的时候に戦士を整列させて何か意味があつたのかな」

「拙者の私見ですが、使者は驚かれておりました。それが狙いでは」

疑問の表情を浮かべている皇帝に、キジハタが答える。

「オーク族では軍隊としての行動は行なっていないはず」

「まあ、そうだな。でもよ、あの女の本当の狙いは手紙の最後の方だろ」

タマが頭を掻きながら呆れるような声を上げた。

今回の会見で決まった事は、

- 1、ラウフォックス族はモフモフ帝国に全面的に協力する。
- 2、将来、ラウフォックス族の魔王候補と戦う場合、それぞれの選択に任せる。

- 3、次作戦終了後、安全のためにモフモフ帝国領への避難を行う。
- 4、モフモフ帝国領内では平等に扱う。
- 5、ラウフォックス族の優秀な若者を二名、幹部候補として東部で学ばせる。

であるが、二番は皇帝であるシバが考えて提示し、五番はターフエが手紙の最後で提案するように指示していたものであった。

「あいつ、私欲のために利用したんじゃないか？」

「交渉というのは目的を達成するためにある。ターフエは達成したわけだね」

シバはおかしそうに明るい笑い声を上げる。

宣言通りに誰にも迷惑を掛けず、恨まれず、目的を達成しつつ、自分の目的まで達成したターフエに他の幹部達一同は感心しているのか、呆れた方がいいのかわからず、微妙な表情で立ちすくんでいた。

「じゃあ、僕は疲れて眠っているターフエが目覚ましたら一緒に帰るから……お願いね」

「承知」

「おうよ、まかせとけ」

キジハタが短く返事をし、タマが威勢良く笑顔で返事をする。他の者も、それぞれ決意の表情で皇帝に対して頷いていた。

翌日、会議室には作戦会議を行うために幹部達が集まっていた。作戦の原案を作っている褐色と黒の毛並みを持つコボルトリーダ―、シルキーはラウフォックス族の動向に応じて複数の作戦を考えていた。

だが、今回ターフェがラウフォックス族を味方に付けてくれたことにより、細部を詰めていくことが可能になったのである。

彼女はコボルト探索部隊が制作した地図を細い棒で指し示しながら説明していく。

「次の作戦の目標は二つ。一つ目は拠点『サーフブルーム』の奪取。二つ目はハイオーク、アードルフを殺害すること……ですが、二つ目はもしかすると難しいかもです」

「もしかするとってこたあ、簡単だと思ってたのか」

顎の毛を触りながらタマはむむむ、と唸る。

彼はアードルフの強さを文字通り肌で理解しているため、流石にシルキーは強気すぎだろうと考えていた。

「強さの問題というより、知恵が廻る様子でしたから。判断もいいですね」

「オーク族では過小評価されてたつてところか。もしくは追い詰められて、目覚めたか」

「『サーフブルーム』の攻略は簡単なんですかい？」

三毛柄のクーンからの問い掛けには即座にシルキーが頷く。

「一度目の防衛戦の時にわざと第一防衛線を突破させ、アードルフ見逃したのはそのためです。まあ、第一防衛線は普通に、突破されたかもしれません」

シルキーは駒をウィペット要塞とサーフブルーム、ラウフォックス族の集落にそれぞれ置いていく。

「前回の攻撃からアードルフは少数では要塞を落とせないと理解しています。だが、諦めるとも思えません。次は前回以上の戦士を連れてくると思います」

「まあ、諦めるってのはないだろうな。そんで？」

タマの疑問にシルキーは頷き、説明を続ける。

「しかし、死んだもの、降伏したものは多い……前回以上の戦士を集めるのは非常に難しいです。恐らく、『サーフブルーム』に残す戦士は少なくなると予想しています」

「ふむ。ようするに拙者達はハイオークの留守を襲うわけか」

「そのとおりです。その方が楽ですから」

パイルパーチに籠もったコンラートを相手に、クレリアが賭けに出なければならぬほど苦戦したことを思い出し、キジハタは彼女の言い分の正しさを理解した。

「それでは詳しい作戦を説明します。作戦名は何にしようかな」
「先に説明しろよ。それで決めようぜ？」

先走るシルキーにタマは笑ってそう指摘する。シルキーはそんな彼に「うるさいですね」と憎まれ口を叩きつつも、説明を始めた。

その日の晩、会議が終わるとクーンは自分の寢所にシルキーを誘い、二人分の果実水と彼女秘蔵のまたたびを肴に話し込んでいた。

種族は違うが二人とも同性で、同世代である。
性格は大きく違うが仲は良かった。元々コボルト族とケットシー族は仲がいいのだが。

クーンは丁寧にもまたたびを切り分けながら楽しそうに笑う。

「シルキーお憑かれさん。今日のは最高のまたたびですぜ」
「コボルトはまたたびじゃ酔わないんだって。もう……」

呆れつつも、シルキーは微笑みながらそれを受け取る。

「しかし、ようあんな作戦思いついたなあ。私にはわからんわ。作戦名を考えたヨークのネーミングセンスもわからんけど」

「作戦名はまあ……クレリア様が、作戦はみんなが楽を出来るように考えなさいってね」

シルキーは昔を思い出し、目を細める。

自分が楽をすることしか考えていなかった彼女に、クレリアはそう告げた。

コボルトリーダーでありながら、弓も投石も苦手な自分が戦争に一番適正があると。

そのことをシルキーは半分感謝をし、半分恨みがましく思っていた。

「あの姐さんは私にはそんなこと言わなかったなあ。剣、弓、槍、ブルー様が担当しとる諜報、全部こなせるようにって……ほんと無茶言っわ」

「一人一人を見て考えているのよ。クーンは器用だから」

適材適所、それぞれが最大限の実力を出せるように。それが、モフモフ帝国が生き残る道。

クレリアは全ての幹部に共通してそれだけは徹底をしていた。

「ま、そんな硬い話はええ。もっと愉快的話をしよ」

「あんたが振ったんでしょ」

「せやな……あ！ あの作戦、またタマが危険っぱいけどいいんかい？」

「な、ごほっごほっ！」

ちびちび果実水を飲んでいたシルキーが咳き込み、クーンが彼女の首に腕を廻す。

「い、いってどういうこと？ 別に問題ないじゃない」

「いやー、仲良しやし？ きししっ！ お姉さんわかってるんすよ？」

「あんた酔いすぎ！ またたび禁止っ！」

わいわいがやがやと、夜は更けていく。

その日は遅くまで二人の話し声が絶えることはなかった。

一方、もう片方のハイオークの拠点『コモンスヌーク』では、コンラートとカロリーネが、アードルフに追放されたオークから戦争の報告を受けていた。

「そうか。アードルフは負けたか。しかし驚いたな」

「クレリアって娘いないのなら面白くない……と思ったから任せたのに」

二人には動揺は欠片もない。
あるのは、楽しそうな表情だけだ。

「総大将はキジハタと言ったか」

「ゴブリンリーダー？ ハイゴブリン？」

「いや、ただのゴブリンだ。オークリーダーを一对一で切り捨てた
そうだが」

猪の耳を持った美女、カロリーネは吹き出して笑う。

「なにそれ面白い。私も戦いたいわね」

「アードルフから手を出すと言われてるんだろ？」

「私には関係ないわよ。ま、でも、つまらないから上げるっていつ
ちゃったしね。どうしたものかしら。戦いたいんだけど」

コンラートは同意するように頷く。だが、内心では別の事も考えて
いた。

情報ではクレリア・フォーンベルグは中央部で確認されている。

ならば、的確に情勢を判断し、作戦を進めているのは別の者だと。
彼は戦いを好んでいたが、それだけではなかった。

集団戦……その知識を貪欲に欲していたのである。
彼を完敗させた女、クレリアに勝利するために。

「情報が全然足りないな。何か方法はないか……」

静かな戦争準備期間は刻一刻と過ぎて行く。
次の闘いの足音は間近に近づいていた。

第十二話 嵐の前

木を切る音、木材を加工する音、オーク達の怒声が森の中を賑やかに響きわたる。

オーク族拠点、『サーフブルーム』では、再びウィペット要塞を攻めるための準備が慌ただしく行われていた。

「何故だ！ 何故それだけしか集まらんっ！」

「そ、それが……モフモフ帝国とコンラート様の手が先に回っており……」

「ラウフオックス族は！」

「やつらは中立を守ると……」

立ち上がり、怒りに震えるアードルフに怒鳴られたオークリーダーが恐縮しながら頭を下げる。

現状でサーフブルームに集まったゴブリンは250名。生き残った者と、元々集落に待機していた者や集落から新しく徴用した者、周辺の集落から戦える者を全て掻き集めた結果であり、彼等はおもつと集まると予測していたのである。

しかも、本来は戦士として用いない、戦闘に不向きな者まで併せての数字であった。

「コンラートめ。こそこそ何かしていると思えば……それに、あの弓を防ぐための準備も遅れている……おい！ コボルト族は！ あいつらを動員してやらせる！」

「それが……コボルト族は残らず、帝国とコンラート様に……」

当然の流れであった。彼の領地で扱いの悪かったコボルト族は、殆どの者は魔王候補のいる帝国へ、残った少数は彼等を罰しないと約束したコンラートに付いたのである。

そのため、『サーフブルーム』に残っていた少数のコボルト達が、ゴブリン達に指示を出して不眠不休で作業にあたる羽目になっていた。

「くそ忌々しい……絶対に皆殺しにしてやる。コンラートもこの戦いが終われば……」

すぐにでも復讐に乗り出したいアードルフだったが、流石に何の準備も無しにあの要塞を落とせるとは考えていなかった。

時間はこうして掛かってはいたが、準備は着々と進んでいたのがある。

憎しみと怒りで身を震わせながら、彼はその時を想像し、表情を歪めて笑っていた。

「まあ、そんな感じだ。観察した感じでは後二日といったところだな」

会議室で茶色と深緑の迷彩服を着たヨークが一同に説明する。

この服は彼が探索中、どうすれば見つからないかを考えた結果、自作した服であった。

だが、基本的に質素ながらもお洒落なコボルト達には評判は悪く、実用的ながら評価は二分されている。

「恐らく弓に対する対応もしているな。」苦勞なことだ」

「こちらも準備はしています。色々と」

前回はこのウィペット要塞を落とせると勘違いさせるために、シルキーは落とされない程度に防備の手抜きを行っていた。

だが、今回の防衛は本気である。

守備隊が減る上に、相手の人数が増えるということもあり、シルキーとクーンを中心に戦争の方が楽、と戦士達から悲鳴が上がるほどの準備が行われていた。

「今回は避難民の協力者も募集しています」

「んー、でもそりゃ役に立つのか？」

「基本的には人数を多めに見せるためです……が、戦意は期待できると思っています。アードルフに石を投げたい方は沢山いそうじゃない

ですか？」

要塞の地図を示しながらシルキーが聞き返すと、タマは苦笑いしながら頷く。

「キジハタ様が今回は別働隊を率いるため、要塞側の大將はクーンにお願いします。タマさんは、アードルフと……ヘマするんじゃないですよ？」

「わかってら。任せとけ」

「了解了解。任せてねい」

クーンとタマが自信ありげに頷き、シルキーは微笑んだ。
そして、キジハタの方を向く。

「キジハタ様は最精鋭の剣士隊20名と奪取した『サーフブルーム』に配置する戦士隊5名。計25名を連れて明日、先に作戦行動を開始してください。後は任せます」

「拙者の判断で良いのか？」

キジハタは静かにシルキーを見つめる。

疑問というよりは確認。彼には不安の色はない。

「一番危険な役目です。タイミングを間違えば……私には……」

シルキーは顔を伏せる。彼女とてかなりの時間を割いて考えていたが、戦争は動き続ける。そこまでの自信を持つ作戦を作る事が彼女は出来なかった。

失敗すれば各個撃破されることになる。
キジハタを失うことは帝国にとって相当な痛手だ。

「危険だからこそ、成功した時は大きいということか」
「はい……」

だからこそ、彼女は怯えていた。だが、タマはからかうように笑う。

「馬鹿だな。お前は自信満々にやれって言つときゃいいんだよ」
「な、タマさんに馬鹿って言われるなんて心外です！」
「失敗したっていいんだよ。そんなときゃそんなとき考える。キジハタの旦那ならそれくらいできるさ」

陽気にタマは「なあ」と、キジハタを見る。
話を振られたキジハタは、薄らと微笑んで頷いた。

「拙者が美味しい所をもらえようだしな」
「俺もアードルフの野郎を殺りたいんだがなあ」

今ではキジハタも軍を率いているが、根本は剣士である。
彼の想いは一つ。

強者とやり合う機会を得ることができる。

作戦に対する不安よりも、その期待の方が大きかったのである。

「最後に作戦名ですが……本当にこれで行くんですか？」

「多数決で決まっただろ？」

「そうだ。今更」

涙目でシルキーは苦情を言い、タマと提案者であるヨークが抗議の声を上げた。

「恥ずかしいですよ。もっと可愛いのにしません？」

「おいおい、そりゃねえだろ」

『隠密』ヨークが提案した作戦名は、シルキーが提案した『サーブルーム奪取作戦』という散文的なものと、どちらが相応しいか口論になり、三対二の多数決でヨークの作戦名が採用されたという経緯があった。

「キジハタ様もキジハタ様ですよ」

「拙者は……まあ、そのなんだ。つい……な」

詰め寄られたキジハタは明後日の方を向いて誤魔化し、クーンはその様子を呆れるように傍観していたが、再び口論に入りそうなのを見て、苦笑して仲裁する。

「まあまあ、決まったものはないしょ」
「ううー」

唸りながらもシルキーは、しぶしぶと席に座る。
キジハタはごほんと、気まずそうに一度咳払いして全員を見渡し、
厳かに告げた。

「明日より、作戦名『ウルフフアング』を開始する。各員、奮闘を
期待する」

「了解！」

翌日、キジハタは準備を整え、ウィペット要塞を出発していく。
その日は風もなく静かな一日であった。

だが、その翌日には嵐が迫っていることを、要塞の誰もが覚悟を
決めていた。

——第二次ウイペット要塞攻防戦までの戦間期について

第一次ウイペット要塞攻防戦終了後、ハイオークの迎撃に成功した北東部司令官『剣聖』キジハタは、その実績を元にアードルフ領の諸部族に対する切り崩しを強めた。

その中で最も重要であったのは狐の一族、ラウフォックス族との交渉であった。

点在する集落の中ではまとまった人数が存在し、戦闘用の魔法を用いることもできるこの部族はこの時、オーク族ともコボルト族とも中立であるという立場を取っていた。

彼等がどちらに付くか。それは、第二次ウイペット要塞攻防戦、通称『ウルフファング』の成功の可能性に関わっていたのである。

ここで交渉の任にあたったのはエルキー族のターフェだった。彼女は中立を強く主張するラウフォックス族に硬軟取り混ぜた交渉を行い、協力を取り付けることに成功する。

これにより、『ウルフファング』は完全な形で進められることになった。

この時彼女はコボルト族に対し、交渉力の向上を計ることを提言している。

コボルト族の弱点である交渉術はこの先、ラウフォックス族とケツトシー族によって、磨かれていくことになる。

第十三話 ウルフファング作戦 前編

ウィペット要塞を出発したキジハタは、オーク族に見つからないよう、ヨークの部下のコボルトの案内でラウフォックス族の集落に移動していた。

集落には50名程の住人がおり、そのうち幼い子供や老人を除いた30名程が、キジハタ達の周りで作戦の説明を聞いている。

アードルフからの援軍要請は断っている。

もし、彼等が勝利すれば自分達に復讐することは明らかだ。

ここまで来ればラウフォックス族としても一連托生であり、その表情は真剣であった。

「ならば、我々は命を掛ける必要は無いと？」

「うむ。遠距離攻撃に集中し、自分達の安全を優先して構わない」

族長である黒い毛並みの初老の狐、ロルトにキジハタは丁寧にシルキーの作戦を説明していく。攻撃の魔法を使えるとはいえ、彼等は戦闘経験が少ない。

同士打の危険は避けたいという思惑がキジハタ達にはあった。

「もうすぐこの集落に『隠密』ヨークが報告に来る。それによって

作戦は変える」

「出来れば我らにとっていい知らせであって欲しいものだな」

苦々しく彼は口を歪める。

彼等にとつては自分達が平和を壊し、戦争に巻き込んだ者であることをキジハタは理解しており、その言葉には苦笑を返したただけであった。

「さてどうか……」

キジハタとしては複雑な心境である。

『サーフブルーム』の人数が少ないということはウィペット要塞に負担が掛かるということだからだ。頑丈な要塞だが、今回のような圧倒的な戦力での攻撃は誰もが未経験。

彼としては信じるしか道はないのだが。

「クレリア殿も今の拙者と似た気持ちを持っているのかもしれない」

ふと、別の場所で戦っているはずのクレリアのことを思い出して苦笑する。

現場で共に戦うことには不安はないが、少し離れると心配になる。

シルキーは賢いが臆病で即応力に欠ける。クーンは器用で何でもこなすが突出するものがない。タマは能力が高いし機転も効くが才

ークだということで味方からの偏見がある。

だが、キジハタはこうも思う。
クレリアから見れば自分達など不安の塊だろうと。

そんな彼女も自分は完璧ではないと常々言っている。
ならば足りない物があっても、あるものでなんとかしていくしかない。

若い彼らはなんとかしてくれるだろう。敵も完璧ではないのだ。

「拙者も最善を尽くすしかないか」

キジハタは目を瞑り、静かに報告を待つ。

しばらくすると、『サーフブルーム』を監視していたヨークが木の上から音も無く降りてくる。全員が緊張した面持ちで彼を見つめた。

「『サーフブルーム』の戦士は殆どがウィペット要塞に向かった。
残っているのは少数だ」

「……そうか」

キジハタは報告を聞くと重々しく頷き、ラウフォックス族と部下の戦士達を見渡す。

「ラウフォックス族は我等の援護に集中を。期待している」
「わかった。お主らの実力を見るいい機会だ。じっくり見させてもらおう」

ラウフォックス族の族長、ロルトは尖った鼻を鳴らし、若者達に声を掛ける。

「ラウフォックス族の若者達よ。我々は高みの見物だ。だが、役立たずだとは思われるなよ。我々に価値があることを示せ。それが我らを助けるだろう」

緊張を隠せない表情で色んな毛並みの若者達が揃って頷く。

「獲物を噛み砕く準備に向う！ 目標『サーフブルーム』！」

キジハタはそれを確認すると力強く宣言した。

その翌日、ハイオークのアードルフは持てる戦力を全て叩きつけてワイペット要塞を落とすべく、準備を命令しながら攻め方を考えていた。

この要塞の厄介な所は、コボルトが得意とする弓を生かすことが出来る構造になっていることであつた。中への侵入が成功しても、

道は狭く、数を頼んで攻めることも難しい。

「だが、この間のようにはいかん」

要塞を憎々しげに睨みつけ、アードルフは呟く。

彼は自分の敗北を受け入れられずにいた。

これまでと全く違う戦闘、その有効性を彼は理解していたが正面から戦わないコボルトらしい臆病な戦闘だと考えている。

「アードルフ様！ 橋の準備が出来ました」

「よし、オークを中央に。矢を打ってきても気にするな。楯でなんとか防げ」

「はっ！」

だが、今回はその小細工を防ぐための準備も欠かしていない。すぐに反撃に出なかったのも、一番厄介な弓への対策のためである。

アードルフは圧倒的な個人能力を持つが故に、このような準備とは無縁であった。

「コボルト共を今度こそ皆殺しにしろっ！」

それ故、慣れない戦いを強いて来たモフモフ帝国への怒りは大きかった。

森を揺るがすような重く、大きい声でアードルフは叫ぶ。

ウィペット要塞を前にしたアードルフの部下達は、その声から暴虐と略奪を想像し、興奮に包まれて沸き上がるような声を上げた。

前回、参加した者達を除いては。

「いやーすごい数ですねい。うじゃうじゃ」

「数字と実際見るのとで全然違いますね。なんかオークいっぱいいるし……」

ウィペット要塞側ではアードルフ側の数を見たシルキーとクーンが、250名近くの大軍の迫力に、顔を引き攣らせて苦笑いしていた。

「おいおい、お前らがそんなでどうすんだ」

「タマさんと違って繊細なんです」

「嘘付け」

そんな状態でも憎まれ口を叩く彼女にタマは呆れるような視線を向ける。

「やつらも馬鹿じゃないな。矢の対策もしてやがる」
「ゴブリン戦士隊と長槍隊の負担、ありそうですね」
「なあに、腕が鳴ってるだろうよ」

ぐはは！ とタマはわざとらしく要塞中に響きわたるような大声で笑った。

そんな彼に周囲の戦士達は、安堵の表情を向ける。

「何日持てば勝つ？」

一頻り笑った後、タマはシルキーに問い掛ける。
狼の下顎であるウィペット要塞の役割はとにかく耐えることだった。

守備側が優位ではあるが、接近戦になれば数の差は大きい。
圧倒的な実力を持つアードルフの存在もあり、守りきるだけでも
厳しい状況であった。

今後の戦いを考えるとなるべく被害は出たくないのだ。

「長くて三日」
「なるほどな。おい、クーン。気合入れるのは俺がやらせてもらう
ぜ？」
「任せますわ」
「よしよし！ 美味しいところは俺がもらいだな」

三毛柄のケットシーは目を細めてタマを見る。

（ほんとよう気が付く。相手を見ているのかね）

彼女はこのような戦士達を奮い立たせる演説は苦手としていた。タマは押し付けがましくならないように、役目を持って行ってくれたのだと彼女にはわかっていたのである。彼は無骨そうに見えて、そんな細かい気配りに長けていた。

「おい！ 全員よく聞け！ 懲りずにアードルフがこれから攻めてくる！」

だん！ と足を踏み鳴らし長槍を振り上げて、タマは楽し気に敵にも聞こえるくらいの勢いで腹の底から声を出す。

「だがしかあし！ 俺達の奴らをもてなす準備は完璧だ！」

弓を持ったコボルト達、剣や槍を持ったゴブリン達、ハイオークの過酷な統治に復讐するために石を投げることを決意した避難民。

暗さが全くない彼の言葉に全ての者が耳を貸す。

「奴等は俺達を簡単に倒せると思っている！ 果たしてそうか！ そんなわけがねえ！」

敵と同じオーク……しかも、オークリーダーでありながら、不思議と今、誰もそんな風には思っていない。頼りになる仲間……それだけだ。

クーンとシルキーも微笑みながら、彼の演説を聞いている。

「誇り高い帝国の戦士達！ お前達の強さは本物だ！ 勘違いをしているハイオークとその部下共を最高にもてなしてやれ！ 徹底的に叩きのめすぞ！」

モフモフ帝国の戦士達はタマの演説に応え、それぞれの武器を掲げ、怒号のような歓声と自信に溢れた笑い声を上げた。

第十四話 ウルフファング作戦 中編

ウィペット要塞を守る者達は相手が相手が弓の対策を取ってくることは予測していた。

彼等が次に考えたのはその対策である。

「よし、まずは相手の出方に合わせるぞ」

防衛側の背後には抱えられる位の太さの木を、ゴブリン三人分くらいの長さに切り、先端を尖らせたものが何本も置かれている。

「コボルト弓兵隊構え！」

それぞれの部署を守る幹部達の声が響く。

同時に堀を渡るための木の橋が勢い良く要塞に打ち込まれた。

橋を渡された部分の柵が打ち倒され、空いた穴から怒号を上げながら侵入せんと一斉にその上を楯を持った先頭のゴブリン達が駆けてくる。

「撃てっ！」

一系乱れぬ統率を見せるコボルト達が小さな弓から一斉に矢を放つ。

ががががつ！ と固い木に矢が当たる音が響きわたる。殆どが防がれているが何匹かのゴブリンには命中し、橋から転げ落ちて堀に落ちた。

同時に避難民達の投石も弓の合間を埋めるように相手に投げつけられる。

「こういう時はオークは目立っていかんわな。中央。木杭持ってい！」

一番の激戦になるであろう中央を受け持つタマがこの時のために準備している木の杭を戦士隊に命じて用意をさせる。

これは三人で抱えて狭い場所から侵入してくる相手に勢いを付けてぶつけるものだった。

多少高さのある要塞側から使うならば、楯を持っていたても効くだろうとの判断である。

「よし。敵に水浴びをさせてやれ！ 道を開けろ！」
「おうっ！」

殺傷力は実のところ微妙だ。先が尖っているとはいえ、倒せるのは正面の一名のみ。

重要なのは足場の悪い相手を叩き落とすことにある。

とはいえ、これを扱うには三名必要であり、守備の人数の関係から多用は難しい。

だが、効果は絶大だった。

「げえっ！」

「ぎゃあああああ！」

要塞に入ろうとしていたゴブリンが三人掛かりで勢い良く突っ込んでくる木の杭を避けて自分から堀に飛び込み、視界が防がれて気付かなかった二人目の腹を挟む。

勢いのままに川に落ちないよう、ウイペット要塞のゴブリン達は前にそのまま木の杭を放り投げ、それに押されたゴブリンやオーク達を堀に落としていった。

「いいぞ。どんどんやれ！ 出し惜しみするな！」

自分も鋼の槍で次々とゴブリンを叩き落としながら、タマは戦いの喧騒の中でも届く明るい笑い声を出し続ける。それが狂気と混乱に支配されている戦場で、味方に冷静な行動を取らせることに必要なことであると考えていたからであった。

コボルトもゴブリンもケットシーも本来は臆病なのだ。

精神的な支柱が必要になる……それがクレリアが彼に教えたことだった。

（幹部は何もわからなくとも、どかつと構えておきやいい……か）

戦場は既に敵味方の争いが激しさを増している。

弓での被害は前回よりも確実に抑えられており、ゴブリン戦士隊とゴブリン長槍隊が連携して防いでいるが、楯を構えているため敵を倒すというよりは叩き落とすことが多く、防いでいるが被害はそこまで与えられていない。

一進一退の攻防は続いていく。

アードルフはまだ動いていない。彼はじつと堀の向こうで、戦局を見守っていた。

「グレー。焦るのはわかる。落ち着け。落ち着いて狙え」
「は、はい！」

コボルト達も嵐のような攻防の中、恐怖を忘れて無心に矢を放っている。

これが二戦目になる弓兵隊の中で一番若いコボルトである黒い毛並みのグレーもベテランの白い毛並みのコボルトの隣で、懸命に戦っていた。

矢は直ぐに手に取れるよう、十本程地面に刺し、さらに大量の矢筒を柵に立てかけている。

彼の担当は端の方であり、激戦区である中央に比べればましではあるものの、近くでは橋を渡ろうとするゴブリンとそれを防ぐゴブリンが悲鳴と血をまき散らす激闘を繰り広げており、必死さは変わらない。

「で、でもマルさん、射たないと！」

「適当に射っても楯に当たる。剥き出しの足を狙うのだよ。よし、星二個目」

正面を向き、無造作に弓を射ちながら白い毛並みのマルと呼ばれたコボルトはふさふさな毛で覆われた口を歪めた。マルの黒い服には黄色い星の飾りが既に7個刺繍されている。

全ての戦闘に参加している彼が倒した敵の数だった。

「……それ良くないですよ」

「ふん。儂等の住む場所を破壊してくれたオークに組みする奴等だ。倒した数だけ仲間が浮かばれるってなもんだよ。お前も俺みたいな狂犬と仲良くしていると干されるぞ」

「僕は狼だから」

「はんっ！ お、命中した。やるな」

グレーの放った矢がゴブリンの首筋に命中し、橋から落ちていく。同時にマルもゴブリンの足に矢を命中させた。

「よし、これで記念すべき星十個目だ……ん……？」
「何かあった？」

弓を射る手を止めたマルに、矢を射ながらグレーは声を掛ける。

「……来やがる。コンラート……あいつと同じ奴だ。嗤ってやがる」
「え……」
「グレー！ 走ってタマに報告だ。急げっ！ ……あいつは儂のだ……」

狂気の色を瞳に湛え、口元に笑みを浮かべてマルは弦を引き絞る。
グレーはそんな彼の雰囲気不安を感じつつも走り……そして、
持ち場に戻ったとき、そこは戦況が一変していた。

「くくっ……弱い弱い……齒ごたえがなさすぎるなあ……！ くは
ははっ！」

守備側のゴブリン達が血を流して何名も重なるように倒れ、それを
踏みつけるようにしながら何本かの矢が肩や腕に刺さっているの
も構わず、アードルフが高笑いを上げている。

その後ろからは何名ものゴブリンが内部に侵入していた。

辺りは一面血の海で、それでも戦士達は彼を通すまいと牽制して
いる。

倒れている中にはマルの姿もあった。

からうじで生きてはいるようで、肩から大量の血を流しているが背中で這うように後ろに下がりつつ、憎しみに燃える瞳をアードルフに向けている。

「マルさんっ！」

「グレーって言ったか。白いおっさん拾って下がってろ」

長槍をアードルフに向けたタマがグレーに指示を出し、何名もの要塞の戦士達もアードルフが空けた穴を塞ぐために集まる。

その中をグレーは倒れているマルをずるずる引き摺って後方に下げた。

「ま、待て……グレー……突っ立ってる奴らを第二防衛線……あそこ……俺も……」

「マルさんは治療！」

「あそこで治療してもら……う……」

怒りながらもマルが言おうとしていることを理解したグレーは、今いる場所より高い位置にある第二防衛線を見上げ、自分達の近くにいたコボルト達に声を掛け、四名掛かりでマルを抱えながら移動する。

「ちきしょう……当てても怯みもしやがらないとは……力が足りな

い……」

「それだけ元気なら大丈夫ですね」

運ばれながらマルは呻く。だが、戦意と気力を失っていないことにグレーは安心する。

重症だが生き延びられるかもしれないと。

第二防衛線に辿り着いたグレー達五名はマルの治療を看護隊に任せながら、自分達から見れば下にいるアードルフ達を見下ろす。

「ここからなら……お前ら下手糞でも……狙える」

「こら！ 黙って治療されなさい！ 死ぬわよ！」

看護隊のコボルトに怒られ、清潔な布の上に寝転びマルは柵の間から敵を睨んでいた。

ここにも準備の際に矢や石が置かれている。

「グレー……お前がアードルフを……狙撃しろ。後の奴はゴブリンを……」

「わかった。もう、マルさん寝てて！」

返事もせずにコボルト達はタマを援護するために、指の皮が擦り切れる勢いで矢を放つ。

一番年若いグレーもまた、集中して弦を引き絞る。

黒い毛並みの少年の表情は不慣れな見習いから、戦士のものへと変わっていた。

第十五話 ウルフファング作戦 中編2

ハイオーク、アードルフの攻撃を受けた場所の担当であるクーンは状況を把握すると、タマの支援を利用し、防衛体制を一早く構築し直していた。

練度と士気に勝る防衛側も数的には不利の状況にあるため、一部の防衛網の決壊が全体の崩壊に繋がる恐れが存在したのである。

中央部を囿にし、薄くなった場所から侵入してくることはシルキーの予想には入っていない。

それでも取り乱さず、的確な指示が出来たのは自主的に最善の行動を取っていたコボルト達の存在が大きかった。

彼等の一部は第二防衛線へと移動し、その他の者は即座に迎撃に移っていたのである。

もし、それがなければ……クーンは冷汗を腕で拭い、タマに完全にアードルフを任せ、一息吐いてからタマの受け持ちである中央の指揮にあたる。

彼等も自主的に防衛を続けていたが、急にタマが抜けたことによる混乱が僅かながら起こっていた。それを沈めるためにも彼女は叫ぶ。

「大丈夫。守りきれるっ！ その石投げとるコボルトさんは走ってシルキーに連絡！ 反対側の第二防衛線に弓六移動！ 急いで！」
「は、はいっ！」

自身も弓を射ながらクーンは戦場全体を把握するために神経を尖らせ、自分ではハイオークをどうすることも出来ない悔しさを噛み締めていた。

「さて、これで止まるかね……ほんと頼む……」

ケットシー族に取ってタマは因縁のある相手だ。

種族のリーダーの一人であるクーンの心中は複雑であったが、一番危険な相手を引き受けてくれている彼を彼女としては認めないわけにはいかなかった。

「後はこちらもか……」

中央からタマが移動してアードルフを抑えている以上、中央はどうしても薄くなる。

だが、一番戦闘が激しいのは中央だ。

大量のゴブリンと巨体を持つオーク達。

現在は相手の狭い足場を利用して侵入を防ぎ続けているが、一つも気は抜けない。

そんな状況下の中、アードルフへの抑えとして移動していくコボルト達の背後から、ゴブリンの戦士が何名か中央に移動して来た。

「シルキーが気を利かせてくれたか……頑張らんと」

自分の場所の防衛よりも危険と判断したシルキーが、ぎりぎりの戦力を割いてくれたことをクーンは理解し、苦笑いしながら氣力を振り絞り、敵を射貫く。

いつ終わるともわからない攻撃を彼女はひたすら凌ぎ続けていた。

「またお前か。ルートヴィッヒ」

「俺もお前の顔を見るのはうんざりなんだがね」

二人のオークはお互いに似たような表情を浮かべている。その周りではゴ布林達がそれぞれの武器を構えており、威嚇し合っていた。

アードルフの足元には、彼に及ばなかった者達が横たわっている。必死に彼等が防戦した証にアードルフも無傷ではなく、小さな傷を幾つも負わせていた。

タマはそんな亡骸にちらりと視線を向け、一瞬だけ目を閉じて訓練を共にした同士達に心の中で別れを告げる。

「……俺も帝国の民ってわけか」

「わけのわからんことを」

アードルフは馬鹿にするように死体を蹴り、嘲笑する。
だが、タマは感情を露にせず、冷静に槍を彼に突き出した。

「あんにゃ……わかんねえよ」

「弱い奴の考えている事などわかりたくもないな」

その槍を軽く払い、アードルフはそう吐き捨てる。
弱者は全て強者に従う。彼は本心からそう信じている。

彼にとって敗者は価値がなく、ただ、自分の強さを証明している
ものであった。

タマ自身も以前はそれを信じていたのだ。
だが、彼は今、そのことに明らかな不快さを感じていた。

弱い者が抗う事は本当に困難なことだと。
そして、それでも諦めずに戦い続けることは尊いことなのだと。

平和に暮らす子供達の笑顔を見ることは楽しいのだと、彼は学ん
だのだ。

それを守るために闘うから……彼自身も槍を振るうことが出来る。

「その弱い奴にお前達は負けるんだよ」

「戯言を。お前だけで何ができる」

「俺だけじゃねえ。周りを見てみる、お前こそお前だけで何が出来
るってんだ！」

「俺がいれば後は問題ないだろ」

獰猛な笑みを浮かべたアードルフとタマが槍をぶつけ合い、荒れ
狂う暴風のような打ち合いが始まった。

突き、払い、薙ぎ、振るう。

アードルフが攻撃し、タマがそれを防ぐ。

モフモフ帝国のゴ布林達は必死にタマのためにアードルフを牽
制するが、アードルフ側のゴ布林達は見ているだけだ。

訓練と士気の差がここでは如実に出ていた。

それでもタマは押されている。圧倒的な身体能力の差がそこには
あった。

「また、頼るのか。オークの誇りはどうした！」

「そんなもん知らねえよ！」

「死ねっ！」

ゴ布林達の妨害を面倒そうに排除し、今度こそタマを仕留める
べくアードルフは彼に必殺の突きを見舞おうとして……片手を槍か
ら離して首筋まで上げ、顔をしかめる。

トスン……と、軽い音を立てて短い矢が彼に突き刺さっていた。
それを合図に、アードルフ達に矢の雨が降り注ぐ。

第二防衛線に移ったグレー達の射撃だった。

「首を狙ったか。さっきの目付きの悪い白い犬……生きていたのか」
「よそ見してんじゃないよ」
「ちっ！」

隙を狙いタマが攻撃するがそれは巧みに穂先を逸らされる。

だが、コボルト達の矢は連続で放たれ、それは自然と楯を構えるゴブリンではなく、アードルフに対しての攻撃に集約されていく。

楯で防いでいるゴブリン達も、タマ達の後ろからのコボルトの射撃もあり、ある者は倒れ、ある者は来た道を戻って逃げていった。

「で、お前だけ残ったがどうすんだ？ アードルフ」
「全く役立たずめ……まあいい。次は殺す！」

コボルト達の無数の矢を必死に弾きながらアードルフは、要塞の外へと引いていく。

彼の姿が完全に見えなくなると笛の音が響き、敵の攻撃は止んだ。相手が完全に引いたのを確認するとタマは地面に大きく息を吐いて座り込む。

「ふう……なんとか生き残ったか。次はどんな手でくるのやら」
「生きてた生きてた。悪運強いですね」

「おう、お前も無事だったか」

やれやれと、疲れた様子で頭を掻いているタマにシルキーは背中から声を掛けた。

彼は振り向かず彼女に応え、ゆっくり立ち上がる。

「どうだ？ もう一回くらいは来るか？」

「引いてくれたので、橋を落としました。もう昼も過ぎてますし、今日中には来ないと思います。今のやり方だと無理というのはわかっただろうし……」

「そうか……じゃ、死んだ奴を埋めてやろう」

「そうですね」

仲間達の亡骸を無造作に両手で担ぎ、のそのそと疲れた様子で要塞の内側へと歩いていくタマをシルキーは、言葉にし難い感情を抱きながら見送った。

そんな彼女に、今回責任者として防衛を受け持ったクーンが声を掛ける。

「ええ判断してくれたな」

「ごめんなさい。勝手して」

「いやー、あれで正しい。本当に助かったわ」

クーンは元々細い目を更に細め、タマが去っていった方向を見つめる。

「……繊細やねい……情が深いといつかなんといつか」

「だから、オーク族なのにみんな信用しているんでしょうね」

「シルキーもか？」

シルキーは苦笑しながらも頷く。

彼女達は仲間であるコボルト族やゴブリン族が死んでもそこまで悲しんではない。

既に生死に関わる感情は麻痺をしているのではないかと、彼女達は考えている。

弱い者達にとって悲劇は身近であり、明日は自分に起きるかもしれない出来事だから。

だから、タマの反応は彼女達には理解出来ないことであつたが……同時に羨ましさを感じていた。

「私達の種族も未来はああいう気持ちになれるといいですね」
「せやね」

クーンは短くそれだけ返事をし、片手を上げて仕事に戻っていく。やらなくてはならない事は山積みだった。

この日は結局、アードルフはもう一度攻めてくることはなく、翌日を迎える。

闘いの決着を付ける時が刻一刻とウィペット要塞に迫っていた。

第十六話 ウルフファング作戦 後編

夜が開けると両軍は堀と柵を挟んで睨み合っていた。
冷たい朝の空気もこの場では両軍の熱気で温まっている。

「昨日よりは随分少ないな」

「相手の被害はこちらより多いです。でも、被害はこちらも」

目を細めながら相手を見詰めているタマの呟きに、側にいたシルキーが答える。

視線の先には切り倒され、幾分すっきりした森が広がっている。

「今度は何を企んだのかねい」

「無策だと嬉しいんだが……そんなわけねーわな」

代理の要塞司令官であるクーンの表情は厳しい。

昨日の戦闘終了後、要塞から離れた森の中では遅くまで木を切り倒す音が響いていたからだ。それは、乗り込むための橋を作るのもあるだろうが……。

（前は失敗した後、戦力を集中した。昨日は集中した戦力を叵に端

から攻めてきた。今度もなんか考えている可能性は高い)

クーンはそう考えていた。無論、他の二人も同様である。

要塞は設計としては非常に防衛向きに考えられてはいるものの、実際に使用するのとは今回で二回目。攻撃側よりは要塞に関して熟知しているとはいえ、相手が取ってくる行動を一つ一つ予測するのは困難なことだった。

現状はモフモフ帝国側が優勢に立っているが、それは薄氷のものである。

帝国の弱点……それは圧倒的な強さを持つ者が少ない事にあった。

それを補うために彼等は一人一人の強さを底上げしているが、あまりにも相手が強すぎると、どうしようもない……というところがある。

「今、本当に姐さんの凄さを実感してるぜ」

「せやね」

「ですね」

今より不利な状況から勝利を、彼らから見れば簡単そうにもぎ取った自分達の上司を思い出し、三人は揃って溜息を吐いた。

一方、攻め手のアードルフも余裕があったわけではない。

数十名の手駒が一日で滅らされており、これで落とすことが出来なければ、彼は自身の破滅に繋がることを把握していた。オークも数名命を落としている。

良くも悪くもオーク族は実力主義だ。

魔王だけではなく、他のハイオークも無能には厳しい。

だが、彼は落ち着いていた。

周りの部下が見れば不自然なほどに。

怒気もなく、憎悪もない。

個人や種族への好悪の情は当然残っていたが……。

それ以上に強者と闘うことへの喜びと、純粋な闘争心がそこにはあった。

「アードルフ様。準備が出来ました！」

部下のオークリーダーからの報告にアードルフは満足そうに頷く。彼は今までにない困難を楽しんでいた。

だが、当然ながらアードルフ以外の者は楽しむ心境にはなかった。低い段差、狭い堀、簡素な柵……それだけなのに、何度も攻撃を弾き返すその要塞に対して、恐怖を感じ始めていたのである。

しかし、部下達はハイオークであるアードルフに逆らうことは出来ない。

意見すら出来ない。

絶望的な気分で戦士達は要塞を見上げていた。
攻め始めた頃にあつた熱狂は既がない。

彼等に出来るのはアードルフが要塞を落としてくれることを祈るだけだった。

両者に大きな差があるとすれば、それは戦争への希望の有無だろう。

そこには明確な差が両者にはあつた。

既にモフモフ帝国の三人の指揮官は既に持ち場へと戻っている。
中央で敵を待つタマは強い風に毛並みを乱されながら、真っ直ぐに相手を見据えていた。

「さて、やっぱ俺んとか。全員、来るぞ！ コボルト弓兵構え！
……そう来たか」

これまでバラバラに橋を掛けてアードルフは攻めて来ていた。
そうやって空けた穴から侵入し、要塞を落とそうと図つたのだ。

この場合守備側としては穴から入ろうとする相手を叩き落とすだけだよかつた。

射手も左右から狙いやすく、相手一名に数名で戦っている状態になつていたのである。

今度は少し様相が異なる。

全ての木を中央部に固め、一つの大きな橋を作ったのである。

それは他を捨てて完全に中央を突破する事を狙っている事を意味していた。

「おい！ 杭を用意しておけ！ 相手を中に一人も入れるな！」
「了解！」

タマは激を飛ばし、それに応じる威勢のいい声が周囲から上がった。

更にそれをかき消す程の声を上げながら、相手の全ての戦士達の中に入らんと必死に駆ける。

昨日と同じように射手の援護を受けながら、帝国のゴブリン達は奮戦し、相手のゴブリンを懸命に退けていた。

しばらく戦いは防衛側有利に進み、膠着するかと思われたその時、アードルフ達の本陣から地を揺るがすような轟音と共に、歓声がかかる。

「む、様子が……まじか。杭は中止だ！ 全員避けろっ！」
「おらおらおら！ どけどけっ！」

激しい音と共に中央の柵と逃げ遅れた者を強引になぎ倒し、土煙を上げながらオーク達の中に転がり込む。

彼等は太い木に縄を括り、持ちやすくした上で力の強いオーク達

でそれを抱えて突っ込んできたのである。その威力は杭など問題にはならない。

タマは完全に意表を突かれていたが、咄嗟に思い付いたことを笑いながら叫んだ。

「またお前か、ルートヴィツヒ。今度こそ……」

「お前ら！　うははははははっ！　戦士達よ！　敵が畏に掛かったぞ！」

適当である。だが、彼の戦場全てに届く力強い笑い声を、敵も味方も多くの者が信じた。

アードルフも一瞬、動きを止め、注意深く左右を見渡す。彼の部下達も同じだ。

強引な侵入した後、帝国側の戦士達が混乱している一瞬。その短い時間的優勢を利用することにアードルフは失敗したのである。

そして、タマの嘘で生じた隙をクーンとシルキーは活かす。

「ゴブリンは中央に加勢！　コボルト弓兵隊は第二防衛線へ！　上から矢の雨を降らせ」

「ゴブリンは中央に加勢です。挟み撃ちにしなさい。コボルト弓兵隊は半分はゴブリンの援護！　半分は上からです。奴らに止めを刺します！」

要塞の左右を守っていた彼女達は自分達の受け持ちに敵が来ないことを判断すると、状況を一瞬で見極め、中央に来る敵を挟み撃ちにするための指示を出した。

「降伏しろ！ 武器を捨てた奴は助ける！」

「はったりだ！ 押し切るぞ。やるな……ルートヴィッツ！」

アードルフが空けた穴から次々と後ろからゴブリンは入ってくるが、入り乱れる無秩序な戦闘にはならず、効果的な援護を受けながら闘う帝国のゴブリン達に次々に打ち取られていく。

オークも同様だ。オークリーダーの二名は生き延びているが、それ以外は対オークの訓練を積んでいるゴブリン達に打ち取られていく。

アードルフはそんな状況でも臆さずに戦っているが、焦りの表情は隠せなかった。

「エリク、クラウド！ 俺の背後をなんとかしろ。俺はルートヴィッツヒを殺る！」

「は、りよ、了解！」

降り注ぐ矢の雨を諸共せず、彼は戦い続ける。

数本の矢を受け、それでもゴブリンの援護を受けるタマと互角以上の戦いを演じ、味方の士気を上げていた。

「ぐう……く……く……やっぱ洒落にならん」

「くくつ！ 面白いぞお前。殺すのが惜しいな！」

このまま続けばアードルフは強引にタマを突破したかもしれない。

昨日のうちにこの作戦を取っていれば。

いや、そうでなくとも、もう少し早く決定的な差が出来ていれば。

この先の結果は変わっていたかもしれない。
そんな僅かな差。

タマが相手の腕の負傷と引き換えに鋼鉄の槍を落とし、アードルフが勝利を確信した瞬間……彼等の後方で爆発が起きた。アードルフ側の戦士達の全員が味方しか居ないはずの後方を振り向く。

その隙にタマは近くのコブリンから、予備の槍を受け取り、安堵の息を吐いた。

「大変です！ アードルフ様！ 後方からも敵！ ラウフォックス族です！」

「間に合ったか……キジハタの旦那。よっしゃ！ 包囲したぞ！」

押され気味だったタマの側の戦士が勢いを盛り返し、完全に立ち直る。

「な……何が……何が起こっている」

「旦那がお前の本拠地、『サーフブルーム』を陥落させたんだよ！」
「馬鹿なっ！」

何本矢が命中しても、いくつ傷を負っても、不利に陥っても動じなかったアードルフの表情に困惑の色が広がる。その間にもキジハタ率いる精鋭は後方から襲いかかっていた。

「駄目です！ あのゴブリン達は……止められません！ つ、強すぎるっ！」

「魔法が……弓が……どうすれ……ぎゃあああああ！」

「武器を捨てた奴は命を取らない！ 武器を捨てろ！」

啞然とし、完全に立ち尽くしているアードルフを見た部下達は次々に武器を捨てて行く。

ただでさえ低かった士気は完全に崩壊し、要塞の外の者は四散したが、要塞内の者は逃げ場も無く慌てて武器を捨ててしゃがみこむ。

「アードルフ殿」

タマとゴブリン達、そしてコボルトの弓で傷だらけになっているアードルフの前に、一匹の背の低い血まみれのゴブリンが立つ。

コボルト達の射撃は止み、生き残っている全ての者が武器を捨てている。

「決着は付いた。貴公には降伏しろとは言わん」
「賢明だな」

キジハタは赤く染まった……それでもなお輝きを失わない剣を真っ直ぐに彼に向けた。

「拙者は『剣聖』キジハタ」

「……よく覚えてるぜ。変り種。まさかお前一人で殺るってか？」

憑き物が落ちたかのように、穏やかな表情でアードルフは笑う。
長年の友人と再会した。そんな笑みだった。

「ルートヴィツヒといい、お前といい、お前らの国は戦りがいるな」

「五分の条件で戦いたかったが……お主の片腕、使い物にならんだらう」

「丁度いいハンデだぜ。お前とは本気で戦ってみたかったんだ」

二人のために、全ての者が場所を空ける。
言葉を誰も漏らさない。

静かにお互いの武器を構え合う。
勝負は一瞬。

キジハタは相手が動こうとした瞬間、先に距離を詰め、突きを放つ動作と自分の身体を入れ替えるように内に入り、アードルフの心臓を貫いた。

「……………ごふっ……………」

「すまぬな。お主の癖は前に十分見せてもらった」

剣を引き抜くのと同時にアードルフは音を立てて崩れ落ちた。血糊を払い、剣を納め、キジハタは呟く。

「それでも怪我が無ければ突きの方が速かったな。いい勝負であった」

「無茶するぜ。キジハタの旦那」

「許せ。剣士として、ハイオークとは戦わねばと思っていたのだ」

呆れるタマにキジハタは苦笑しながら頭を下げる。

「ただのゴブリンでもハイオークを破ることができる」

「そんな旦那だけですぜ」

「拙者は特別ではない。努力次第で誰もがそうなる。まあその話は後にしよう」

キジハタは武器を捨て、座り込む敵と誇らしげに立っている味方を見渡す。

「狼の牙は敵を噛み砕いた！ 我々の勝利だっ！」

キジハタの宣言と同時に歓喜の大歓声が沸き上がる。

この日、『サーフブルーム』を拠点とするアードルフの軍勢は壊滅した。

ハイオークの初めての戦死は、モフモフ帝国を軽く見ていたオーク族の魔王候補に大きな衝撃を与えることになる。

第十七話 それぞれの戦後

激しい戦いを続けていたウィペット要塞の近くでは、その戦況を見つめる三名の姿があった。二人は楽しそうにそれを眺めており、残る一人は深刻そうに見詰めている。

コボルトリーダーのバセット、彼女の主であるハイオーク、コンラート。

そして、北東部のもう一つの拠点、『コモンスヌーク』の主であるカロリーネは、アードルフとモフモフ帝国の戦いを観戦しに来ていたのである。

「ちよつとちよつと！ 何が起こったの？」

「これは驚いたな。まさかこんなことが」

「楽しそうですね」

カロリーネは興奮しながら隣にいるコンラートをガクガク揺らし、大はしゃぎで一気に戦況が変わった戦場を指指していた。そんな彼女をバセットは冷めた目で見詰めている。

彼等の目の前では戦いが佳境に入り、背後からゴブリンとラウフオックスが襲いかかっていた。このような戦い方は彼らの知らない代物だったのである。

「箆っているだけの退屈な戦いだと思っていたが……全滅だなこれは」

「初めから狙っていたのかしら」

「バセット。どう思う？」

背の高いハイオーク二人の腰くらいしかないバセットは、少しだけ考えるように俯いて、しばらくしてから顔を上げる。

「ラウフォックス族に彼等が近づいていることは私も掴んでいました。直ぐに現れなかったのは時期を待っていた……いや、手薄な『サーフブルーム』を落としていたのかも……」

「狙っていたのは間違いないということか」

「はい」

バセットは頷く。

カロリーネはそんな彼女の頭に手を置いて、感心するように驚いていた。

「賢いわねーその子、やっぱり私にukれない？」

「駄目だ」

一言で断り、コンラートは食い下がるカロリーネを無視して、戦場を思いを馳せるように薄笑いを浮かべながら見つめる。

「攻撃を受けながら手薄な場所を落とし、更に後ろから攻めるか」
「恐らく一戦目で、守備に徹したのもアードルフの油断を誘ったの
でしょう……ですが」

バセットは冷静に続ける。

「成功させたのは見事です、危険な作戦です」

彼女はその理由として、情報が漏れた場合には各個撃破される恐れがあり、逆用される恐れがあることを上げた。

「弱い奴なりの戦い方ってわけだ……アードルフは死んだか……」

ウィペット要塞から剣戟の音が止み、やがて大歓声上がる。

「アードルフ……本当に負けるなんてね」

「わかったろ。奴らの強さが」

「ええ、認めるわ。惨敗もいいところだしね。面白い」

カロリーネは美しい顔に獰猛な笑みを浮かべ、要塞に視線を向けた。

戦うことが楽しみで仕方がないといったように。

コンラートも血が騒いでいたが、彼女ほどではない。
彼の戦いたい相手はここにはいないからだ。

「さて、バセット。チャガラに連絡しろ。『サーフブルーム』を奪還する」

「……放っておいて良いのでは。どうせ奴らに維持は出来ませんし、維持をしようとすればこちらが有利になります」

冷徹なバセットの意見を聞くと、コンラートは笑った。
彼もそれくらいの計算は出来ている。

「わかってている。だが、負けっぱなしだと舐められるからな」
「考えがおりなですね」

バセットは主であるコンラートに頭を下げ、去ろうとして……コンラートに呼び止められる。

「お前がもし、うちの魔王候補ならどうする？」

「エルキーなど無視して、全軍……全力でモフモフ帝国を潰します。
なるべく早期に」

「なるほどな。行っていていいぞ」

今度こそバセットは去っていく。

「ま、現場を知っている俺達ならそうなんだがな」

コンラートは目を細める。情勢は楽観できるものではない。

アードルフが死んだ事でオーク族はモフモフ帝国を明確に敵と考えるようになる。だが、オーク族の魔王候補、フォルクマールは思い切ったことをしないだろうと彼は考えていた。

「だからこそ、面白くなる余地もあるか」

そう笑うと彼もまた、戦場へと向かうためにバセットが去った方向にゆっくりと歩いていった。

ウィペット要塞の医療所では、この戦闘での負傷者の手当を行うため、看護隊の制服である白服のコボルト達が忙しそうに走り回っている。

元々敵であった降伏した者達の治療もしなくてはならず、彼等にとつての戦争はどちらかというが始まったばかりといったような様相を示していた。

だが、戦闘そのものは終わっているため、負傷者達には安堵の空気が漂っている。

そんな中、包帯でグルグル巻きにされた白い毛並みのコボルトは一人、不機嫌そうにシートに横たわっていた。

「マルさん。僕達勝ちましたよっ！」

「そうか……」

見舞いに来た黒い毛並みの少年、グレーの顔を見ず、彼は短く答える。

「アードルフはどうなった？」

「キジハタ様が一騎打ちで打ち取りました。格好よかったなあ」

「何！ どうやって、あの化物を？」

マルは倒せたとしても集団で取り囲むしかないと考えていた。それが自分達と同じく、強さに恵まれないゴブリンが一人で倒していたことを知り、驚きで思わず立ち上がりそうになる。

「だ、駄目ですよ！ マルさん……ざって槍をかわしてガツと剣を突き刺したんです」

「お前の説明はさっぱりわからんな」

身体を動かして説明するグレーに、シートに寝転び直したマルは苦笑する。

「グレー。俺は勝った気がしねえよ。俺の弓は全然効かなかった」
「でもあの時もアードルフは逃げたじゃないですか」
「それが精一杯だった。だが、キジハタはあいつを仕留めた」

コプリンはハイオークに勝利した。
ならば、コボルトも……出来るのではないか。

マルは感触がない左手にそつと手を置き、目を瞑る。

「だが……もう、怪我で俺は弓を使えん。死んだほうがましだな……」

「マルさん……」

正確無比の射手であるマルは左手が殆ど動かなくなっていた。
オーク族を恨み、敵を倒すことを生きがいとしていた彼にとって、
これは死んだ事と同じである。

老け込んだように見えるマルを慰めるように、勤めてグレーは明るい声を出しておどける。

「で、でも！ ほらえつと……どうやってたら僕達でも一発でハイオークを倒せるんですかね！」

慰めるつもりで、まずい発言をしてしまったと気付き、少年のコ

ボルトはあわあわと慌てる。だが、それを聞いたマルは、驚きの表情で彼を見ていた。

「おい、グレー……お前なんて言った？」

「あわわわ！ ごめんなさい！」

「怒っちゃいねえ……頼む！ もう一回言ってくれ」

「え……どうやってら僕達でも一発でハイオークを倒せるんですかねって」

「そうか……そうか……そうじゃないか……くくくく……」

マルの瞳に『狂犬』と呼ばれていた頃の憎悪の色が戻り、表情にも生気が戻る。

「まだ終わってねえ……俺に弓はいらん……あんな弓じゃどうせ奴は倒せねえ」

「えええー！ じゃあ、どうするんですか？」

「そう。それだ」

彼はしばらく考えるように髭を弄っていたが、手をつ打って笑う。

「コボルトでもハイオークを一撃でぶち殺せる武器を作ってやりやいい」

「そ、そんなことって可能なんですか？」

「わからねえ。だが、クレリア様なら何か知っているかもしれん。

くくつ……絶対に作ってやる。例え誰も知らないものでも俺が……絶対に！ その時コボルトは……」

グレーには何が何だかわからないが、マルが元気になったことに安心の息をこっそりと漏らす。何だかんだで彼はマルに世話になっていたし、弓の腕は尊敬していたのである。

「じゃあ、静かにして、身体を治してくださいね」

「ちっ、わかってら。つくづくお節介な子供だな」

「僕はもう大人です！」

そこはしつかり主張して、グレーは医療所を後にする。

彼の適当な言葉が未来に引き起こした結果を今の彼は知る由もなかった。

第十八話 軍事と政務

数日後、モフモフ帝国ウィペット要塞会議室には緊迫した空気が漂っていた。

原因は要塞の責任者であるキジハタの隣に座る、犬耳の付いた冷たい印象の小柄な女性……彼女の存在にある。

彼女……彼等全ての上司であるクレリア・フォーンベルグは死の森中央部のオッターハウンド要塞の構築に一段落が付き、周辺集落の協力を取り付けたことで短い間なら時間が取れるようになったのだった。

キジハタはハイオーク、アードルフの撃破と『サーフブルーム』の奪取と失陥を報告し、クレリアの反応を黙って伺っていた。

繊細な氷の彫刻のような彼女に、慣れていない者達は圧倒されている。

慣れている者でもシルキーなどは青ざめており、タマの影に隠れるような席に逃げていた。

第二次ウィペット要塞防衛戦に協力したラウフォックス族の族長、ロルトも、重たい雰囲気に着かない様子で居心地悪そうに身体を竦めている。

クレリアはシルキーが作成した報告書を読み終わると、小さく頷く。

「みんなご苦労様。よくやったわ」

隣に座るキジハタ以外の幹部達から安堵の息が漏れる。

「シルキー」

「ひゃ！ ひゃいつ！」

「『サーフブルーム』が奪還されたことは気にする必要はない」

「うっ……はい」

涙目で両手を併せているシルキーを横目で見ながら、タマは呆れるように小声で呟いた。

417

「……姐さんには弱いんだな」

「タマ。貴方もよくやったわ。偉いわね」

「はっ！ 光栄でありますっ！」

「あんたも私のこと言えないじゃないですか……」

「う、つい癖で……な」

席を立ち、直立不動で敬礼したタマにシルキーは白い目を向ける。聞こえているのか聞こえていないのか、クレリアは二人の小声は気にせず、ラウフォックス族の族長を、目を細めてじいじいと見詰めた。

びくうつと黒い毛並みのロルトは震え、椅子からずり落ちそうになる。

「クレリア殿」

「ごほんと咳払いし、キジハタが助け舟を出すとクレリアは、渋々と見詰めるのを止め、彼に対して小さく頭を下げた。

「ラウフォックス族の協力に感謝する。同じ国の同士として、これから宜しく頼む」

「わかった。同胞が不当な扱いをされない限りは協力させてもらう」

よくわからない圧迫感に震えながらもラウフォックス族の族長として、彼は主張する。

クレリアはそこで始めて少しだけ微笑む。

「帝国は特性に応じて仕事をさせる。そして、平等に扱う」
「信じよう。タマ殿の扱いを見ればそれはわかる」

髭を弄りながら、ロルトは頷く。

獲物を狙う猛獣のようだ……と、内心彼は考えていたが、優秀な戦士だからだろう……そう、好意的に取ることになっていた。

「それで、クレリア殿はどう思われる？」

話が落ち着くのを待ってからキジハタがクレリアに問い掛ける。キジハタはクレリアが中央部を離れ辛いことを理解しながらも、今回は来てもらうように頼んでいた。

彼はシルキーを信じていたが、予想外の出来事に彼女が取り乱していたため、彼女を落ち着かせる意味でも、クレリアにある程度の方角性を示してもらおうと考えたのである。

シルキーは作戦担当であるため、責任は重い。強気そうに見えて彼女もコボルトラしく気が弱いことをキジハタは察しており、責任を分散させることで、少しでも負担を減らせるよう、氣遣っていた。

もちろんそれだけでなく、降伏者の処遇や逃げてきた『サーフブルーム』の一部の住民達のことなど、様々な戦後処理も考えてのことではあったが。

「コンラートは予想外。だけど、特に問題はない」

「何故？」

「奪還はされているけど誰も死んでいない。残る住民に絶対抵抗しないように指示してから逃げたことは正しい判断ね。何より……」

クレリアはそこで一度切り、全員を見回す。

「オーク族は侮れないと、要塞の全員が考えている……これは大切なこと。純粋な戦力を考えれば我々がまだ劣勢であることは、忘れてはならない」

「なるほど。慢心してはいかんということか」

「そう。私達の負けは彼等以上に重いからだから」

納得したように全員が頷く。

この場にいる、特に士官教育を彼女から受けた者はクレリアから、相手よりも有利な条件で闘うこと、無駄に部下を死なせないことを徹底されている。

「戦うときには九割勝負が決まっているように準備する……ですね」
「理想はそうね。準備が大変なのだけど」

ようやく顔色がよくなってきたシルキーにクレリアは頷いて答える。

「今後の作戦だけれど……相手は交易は止める気はないのね？」

「あ、はい。通行を認める代わりに幾らか持つて行かれていますけど」

「それなら、次の収穫……そうね。三ヶ月くらいは守備と周辺の調略に徹しなさい」

クレリアの発言にタマが太い腕を組み、むむむ、と唸る。

「もし勝機があってもですかい？」

「そうね。戦うのはリスクが高い」

「なんでだ？」

「シルキー」

首を傾げているタマに応えず、クレリアはシルキーに振る。
急に振られたシルキーの方はびくつと震えて立ち上がった。

「はっ、はい！ 私達の戦力が下がっていますし、物資も減っていますし、カロリーネはアードルフよりも戦士が集まりそうだからですっ！」

「彼女は何もしていない。それは、苛烈な圧政もしていないということ」

「アードルフのように恨まれてないってことか」

付け加えるなら……とクレリアは続ける。

「政務の者からの要望でもあるわ。ことオッターハウンドは消費が多いからね。戦闘をしていない者も別の形で懸命に戦っている。忘れないであげて」

「わかったぜ。じゃあ、俺らも待つだけじゃなく、楽になるよう工夫しないとな！」

理解したタマは明るい笑い声を上げ、隣に座っているシルキーは

そんな彼を煩いと叩く。

ただ、彼女も同じことを考えていたため、ばつが悪そうに顔を彼から背けていた。

「収穫期がくれば、パイルパーチも落ち着くはず。その後、追加戦力を送るから」

「了解した……何か外が騒がしいな」

話合いをしている会議室にまで若い少年と年配の男が言い争う声が聞こえてくる。

キジハタは首を傾げ、入口の方を見た。

声は徐々に近付いて来て……全員の視線が扉の方に向く。

「マルさん！ まだ寝てなきゃダメだつて！」

「馬鹿やろう！ 離しやがれ。今日行かなきゃ何時行くんだ！」

ばたん！ と扉が開き、べちゃつと真つ白なコボルトが転び、その上に黒い毛並みのコボルトが乗っかっている。
全員の視線は二人の方に自然と集まっていた。

「マル。グレー。どうしたの？」

他の者が呆気にとられている中、クレリアは二人の名前を呼ぶ。

彼女の視線は折り重なっている二名に真っ直ぐ、射貫くように注がれている。

「あわわ、す、すみませんっ！」

視線を浴びて慌てるグレーと異なり、マルはグレーを背中に載せながら、静かな表情でクレリアを見つめ返していた。

彼はグレーを退かせて立ち上がる。

そして、クレリアはちよっと残念そうな顔をした。

「クレリア様。俺は武器を作りたいんだ。そのために力を貸して欲しい」

「武器を……？」

「ああ。コボルトでもハイオークを一撃で倒せる武器を」

全員が彼の言っていることの意味を理解できずに顔をしかめる。だが、クレリアだけは平静に彼の言葉を聞いていた。

「怪我が治ったら私の所に来なさい。詳しい話を聞きましょう」

「本当かつ！　ありがてえ！」

「ほ、ほら、マルさん、医務室帰りますよ！　もう……」

クレリアとて、ハイオークを一撃で倒せるなどということが出来

ると思っただけではない。

上手くいく可能性は低いと考えている。

だが、彼女は何かを始めたいと考える者を止める気はなかった。そこから自分の常識にないものが生み出されるならば、歓迎すべきと考えたのだ。

全ての種族の可能性を彼女は信じていたのである。

—— 第二次ウィペット要塞攻防戦について

第二次ウィペット要塞攻防戦を語る際に同時に説明しなくてはならないのが、『ウルフフアング』作戦である。

この作戦はウィペット要塞を下顎、別働隊を担う北東部司令官『剣聖』キジハタを上顎と看做し、罠に嵌った獲物を噛み殺すという作戦であった。

ハイオーク、アードルフがウィペット要塞攻略のために動き出したことを察した『剣聖』キジハタは事前に交渉を勧めていたラウフオックス族と合流。アードルフが殆どの戦士を連れて攻めた隙に、拠点『サーフブルーム』を陥落させた。

その間、ウィペット要塞は司令官代理クーンの指揮の下、アードルフの猛攻を支えきることに成功。

『サーフブルーム』から全力で駆けたキジハタはラウフォックス族と共に後方から奇襲。折しもアードルフは内部に侵入し、三方向からの攻撃を受けながらも突破しようと図っていたところであり、四方からの攻撃についてアードルフ軍の士気は崩壊した。

尚も戦いを止めないアードルフを『剣聖』キジハタは一騎打ちにて討ち取っている。

激しい戦いで負傷していたとは言え、ハイオークを倒した『剣聖』キジハタは、その勇名を『死の森』全土に轟かすことになる。

『モフモフ帝国建国紀——反撃の章——』 二代目帝国書記長 ボーダー 著

第十九話 オーク族の戦間期

北東部に置けるハイオークの拠点『コモンスヌーク』では、その主であるカロリーネが椅子に座ってスラリとした長い足を組み、珍しく不快な表情を浮かべていた。

彼女には嫌いなものが三つある。

一つ目は舌にぴりりと辛味が走る、ハルガスの実。

二つ目はハリアー川で取れる生臭い魚、クリウオ。

そして、三つ目……上記の二つ以上にオーク族の魔王候補、フォルクマールが大嫌いであった。

伝令のオークはそのフォルクマールからの伝言を届けに来ていたのである。

オーク族の間では彼女のフォルクマール嫌いは有名であったが、不幸なことにそれを魔王候補に伝える度胸のある者はおらず、不毛な片想いは続いていた。

そんな彼女はオークからの連絡を受け取った後、彼女は秀麗な眉をひそめながら、不機嫌そうに黙り込んでいる。

他のハイオークとは違い、そこから暴力には発展しないが、連絡したオークの表情は完全に青ざめ、生気がない。

「あいつめ……余計なことを……死んでくれたらいいのに……」

「カ、カロリーネ様っ！」

静かに……しかし、深い怒りに満ちた様子でカロリーネは呟く。
伝令役のオークが慌てて周囲を見るが、彼女がそれを気にする様子はない。

「フォルクマールは本当に私を愚弄するのが上手いわ。ここまでくると感心するくらい」

「あ、あのお方はカロリーネ様を心配しておられるのです」

「余計な心配」

忌々しそうにカロリーネは吐き捨てる。

魔王候補であるフォルクマールの命令を彼女は断ることが出来ない。
い。

以前、妻になれと言われた際には、『命令』を使えば自害すると宣言したために事なきを得ていたが……それも何時まで持つのか。
無理矢理、意思のない眷属にされてしまうかもしれない。

「コンラートの中央への召還とは。血迷ったとは思えない」

今回の件で一番怒りを感じているのがこの件である。

アードルフが死んだ今、戦力、勢力も減少しつつある状況で、死の森北部と連絡の取りやすい『サーフブルーム』を抑えており、相

手の手口も理解しているコンラートに対し、懲罰を与えるとして引き戻した理由。

明らかに下種な勘ぐりをされた……彼女はそう考えていた。それでいて彼女の誇りを尊重していると言わんがばかりに、北部からの援軍を出さないことを告げている。

しかも、その代わりとして、一度負けたら占領地を放棄してでも中央に戻るようにとのおまけ付きである。魂胆は透けて見えていた。

カロリーネは、そんな男を自分達の長として仰がねばならない自分の立場を思い出し、齒軋りしながら立ち上がると、伝令のオークを睨みつける。

「フォルクマールに伝えなさい。コンラートはアードルフが失陥した地を取り戻した功績がある。功績に報いないなら、私もそれ相應の対応を取る……と」

「わ、わかりましたっ！」

伝令のオークが姿を消すと、彼女は大きく息を吐いた。

カロリーネはコンラートが何かを企んでいることはわかっていたが、戦闘という同じ趣味を持っており、からりとした性格の彼のこととは嫌いではなかった。

死の森北部を収めているコンラートの妹とは友人関係でもあるため、彼女も何とかしたかったが、出来ることはフォルクマールの八つ当たりで彼が殺されないように釘を刺し、配慮するくらいだった。

性格はともかくとして、魔王候補とハイオークでは実力に差があるのだ。

借り物の力ではあるが。

「ま、一戦だけでも出来ることは喜ぶべきかしらね」

カロリーネはすぐに不快な出来事を脳裏から追い払うと、今後に控えている楽しみについて考えることにした。

「さて、どうするか……」

負けは許されない。と、なれば相応に考えなければならない。
無策で力攻めをすれば……アードルフのように負ける。

「うつつうつつ、もう！ 面倒ね！ がーっとやってばーっと終わらせられればいいのにつ！」

十秒程考えた後、彼女は艶やかな自慢の黒髪を掻きむしった。
今まで力尽くで敵を倒してきた彼女にとって、そのことは理解できても対策を考えることは残念なことに苦手だったのである。

「攻めてくる様子もないし」

基本的に仕事もしないために暇な彼女は、たまに一人でウィペック要塞に攻めてくる様子があるかどうか、今か今かとわくわくしながら確認しに行っていた。

だが、要塞にそんな様子はまるでなく、戯れに狩りを行っているコボルトを掴まえて色々聞いてみたりもしたが、難しいことは幹部が考えているらしく、何も知らなかった。

ちなみに情報を得た後は無益な殺生をせずに放っている。その結果、わかったことは食料を蓄えている……ということだけであった。

「やっぱり、コンラートにバセットちゃん貰っておくんだった……」

部下もいない自室でカロリーネは一人腕を組みながら唸る。

彼女は自分が難しいことを考える程、頭は良くないことを自覚していた。

そして、彼女の部下であるオークもその点に関しては頼りない。そんな風に悩んでいると、部屋にノックが響く。

「誰？」

「は、はい。その……新しい服が出来ましたので」

「入きなさい」

中に入ってきたのは、茶色い毛並みのコボルト族の少女だった。カロリーネはこの拠点に赴任してから、初めてコボルト族が実際に織物を作るのを目の当たりにし、奪ったものを着るのではなく、自分用に自分好みのもを作って貰うことを思い付いたのである。

女性らしく着飾ることも好きだったカロリーネは彼らの仕事に満足しており、それが自分が治める地域での寛容さにも繋がっていた。

「……うん。今回のも素晴らしいわ。紅い華の刺繍を入れてあるのね」

「は、はい。カロリーネ様には、明るい花がお似合いです」

「ふふ、好みをちゃんと把握しているわね。あ、小さく髪を飾るのとかは作れる？」

恐縮しているコボルトに彼女は身を乗り出すように詰め寄る。

「えーっと……はい。大丈夫です」

「アマーリエにも何か贈って上げましょう」

友人が喜ぶ姿を想像しながら、カロリーネは満足そうに頷き……ふと、目の前の彼女もコンラートの部下、バセットと同じコボルトであることを思い出す。

お針子の少女をまじまじと見つめ、彼女は少しだけ思索に耽る。

（バセットちゃんと同じ種族。あの子は特別だろうけど……）

「な、な、な、なんでしよう」

「うーん……貴女は戦いに向いてなさそうだしねえ」

黙り込んだカロリーネをコボルトの少女が不安そうに見上げた。
だが、明らかに戦闘とは無関係な少女を、唸りながらカロリーネ
は見つめ続ける。

しばらく悩み、少女が恐怖でぺたんと座り込んでしまった頃、カ
ロリーネは、ぱん！ と大きく手を叩いた。

（敵の魔王候補はコボルト族なんだし、コボルト族ならいい考えが
思い浮かぶかも！）

それがあまりにおかしければ自分が止めさせればいい。

決定権は自分にあるのだから……カロリーネは自分の思わぬ名案
に、

（私って天才じゃないかしら）

と、自我自賛しながら妖艶に微笑み、座り込んでいるお針子に手を
貸して立たせる。

「ハウ。『コモンスヌーク』にいる全コボルトに連絡を」

「は、はい！」

「コボルトみんなでウィペット要塞の落とし方を考えなさい」

ハイオークであるアードルフが全力を尽くし、敗死した鉄壁の要塞である。

お針子の少女は一瞬ぼかんとして、

「ええーっ！」

あまりの驚きに、カロリーネの前であることも忘れて大声を上げた。

「出来なくとも罰しはしないわ。とにかくやりなさい」

「わかりました……」

余りにも無茶な主人の要求に、お針子の少女はしょんぼり肩を落としながらも命令を実行するべく、コボルト仲間に声を掛けることになった。

「面白くなってきたわね」

自分の考えに目付のオークリーダーやオーク達は不満を抱くだろ

うとカロリーネは考えている。だが、そんなものは小さなことだ。

彼女にとって大事なのは楽しい戦いを行うことであり、その困難を全て排し、歯ごたえのある相手から価値のある勝利をもぎ取るところにある。

無茶な命令を受けたコボルト族達は、生真面目に命令に対して取り組み、要塞をつぶさに観察し、喧々諤々の話合いを行いながら幾つかの提案を考えていく。

その職人気質な仕事ぶりはカロリーネを満足させ、軍議において彼らの提案をベースに用い、準備を整えてから攻めることを告げる。

モフモフ帝国における収穫期の一ヶ月前の出来事であった。

第二十話 戦争の風

時は流れ、モフモフ帝国に収穫期がやってきた。

作っている作物は保存の効く芋類が多く、味はそれ程良くはないが、食料を安定供給できるという点では役立つている。

また、他の作物の栽培の研究も勧められていて、今年からは実験栽培された野菜や果物など、僅かながら彩りも考えられ始めていた。

それらの特典には現在、殆どが最前線の戦士達が預かっている。研究用に残したりはされているが、それが戦わない者達の総意であつた。

「これは美味しいですね」

「うーん、俺には甘すぎるから、お前が食べ」

「えーいいんですか？」

「タマさん、シルキーばかり鼻屑ですねい。私も欲しい！」

「俺はハルガスの実みたいなの辛いのが好きなんだよ。落ち着け！わけりやいいだろ」

会議室でも試食会が開かれ、タマがシルキーに苦手な物を押し付けようとして、クーンから非難を浴びていた。

彼らや他の戦士達の感想は、報告書にまとめられて農業の政務官に渡される。

これも一応彼らの立派な仕事なのである。

軍議中の会議室には実験で作られた果実の甘い香りが漂い、タマと同じく甘いものが苦手なキジハタは顔をしかめていた。

だが、タマと違って真面目な彼は報告書に詳細を書くべく、黙って果物をかじっている。

「拙者には見当も付かないが……このような物に意味はあるのか？」

クレリアは止めなかったことから、意味はあるのだろう。

そう考えながらも、あまりの甘さにキジハタがぼやく。

「美味しい食べ物があれば幸せじゃないですか？」

「せやせや」

そんな彼とは違い、女性陣は幸せそうに果物を頬張っている。

「ま、本気で美味いんなら取引にでも使えるんじゃないか？」

「ふむ。拙者達の武具にこれになるわけか……」

少しだけ齧った果物をキジハタは感慨深そうに見詰める。

「そんなに嫌なら私達に下さいよ」

「せやせや」

「馬鹿者。これも仕事だ。軍議を始めるぞ」

食い意地の張った彼女達をキジハタは叱り、シルキーに作戦の説明を促す。

シルキーは表情を切り替え、地図を指し示した。

「カロリーネはウィペット要塞から半日くらいの場所に、前線基地を構築しています。彼女自身がその防衛に当たっているため、それを邪魔するのは難しいかもしれませんが。これは非常に厄介です」
「何だかあいつらしくねえなあ」

カロリーネの性格を良く知るタマは腑に落ちないと腕を組んで唸る。

良くも悪くも単純なサバサバした性格で、こういう地道な攻め方には向いていないはずと彼は考えていた。

「どうもここに物資を運び込んで、攻めるための準備をしているようですね」

「どんな準備をしているかは？」

「警戒が厳しくて、内部までは確認できんらしい」

ヨークがいない時の諜報担当であるクーンは困ったように目を細める。

情報は少ない……だが、北東部の拠点をウィペット要塞しか保持していない以上、ここを落とすつもりであることは、容易に想像が出来ていた。

「ふむ……」

「前の手を使うのは難しいかもねい。こちらの戦士が何名か彼女に捕まり、話をさせられたそうだし。前回の戦いに付いては詳しく知ってるはず」

「ならば、この要塞の攻め難さも相手は知っているだろうな」

キジハタの言葉に全員が同意するように頷く。

同じハイオークであるアードルフが敗死しているこの要塞を甘く見る……ということは、流石にありえないだろうというのは共通認識だった。

それでも、侮って無策で攻めてくる……そんな相手なら頭を悩ませる必要もない。

だが、カロリーネはそんな相手ではないと全員が考えていた。

タマを除いてカロリーネをよく知らない幹部達は、一人で物見遊山のように偵察に来るカロリーネを全く理解出来ず、かなり警戒を強めていたのである。

「もう一つ重要な情報。こっちは朗報かな？」

「どういう情報だ？」

「コンラートが本国に戻ったらしいんよ」

「この状況で？ 罨ではないか？」

両手を広げてわからないとクーンは肩を竦める。
皆が真偽を悩む中、一人だけ納得したように頷いていたのはタマだ。

「有りうるぜ。folkマールなら」

「どうしてだ？」

「嫉妬だ。男女の関係ってなやつさ。オーク族では有名なんだぜ？」

タマは笑いながら手の平で顔を覆い、シルキーは嫌そうに顔をしかめる。

「えー……そんなのあるんですか？」

「シバ様と違って人気は無いからな。ま、用心しつつ調べるってとこじゃないか？」

「あ、はい。そうですね。彼がいなければ北東部を抑えることは不可能じゃないです」

具体的には……と、シルキーは説明を続ける。

「今のままでは自由に動けないので、前線基地を何とかする必要があります」

現状のウィペット要塞は喉元の剣を突きつけられている状態である。

これを放置して『コモンスヌーク』を落として行くことは出来ない。

「そこで、これを攻め落とし、逆に我々の拠点として利用します」

「ほう……」

「勿論攻めるのは相手の戦力をしっかりと確認することが前提ですが」

第二次ウィペット要塞攻防戦で降伏した者達のうち、半数はある程度の戦力化に成功しており、本国からの援軍も期待できるため、現在、北東部に置ける戦力差は縮まっていた。

カロリーネが攻めてくる時、どの程度の戦力で攻めてくるか。余力を持たせるか全力で来るか。

こちらから攻めるという選択肢を考えると、この情報が最も重要だった。

「要塞から動かない。そう考えられてしまつのも困ります」

「ふむ」

「だがよ。カロリーネはどうすんだ？」

「はい、それも考えています」

タマの疑問にシルキーは数種類のパターンにわけて説明する。
シルキーの意図はこの攻撃により、可能な限りの敵戦力を削り、

継戦能力を無くさせた上で中小集落を降伏させ、拠点である『コムスヌーク』を包囲するというものであった。

「ゴブリン達の強さは相手よりも上です。数でも勝れば森での乱戦は優位に立てます」

彼女はそう結論づける。

森での戦いは、戦力の集中が困難であるために個人の強さが大きく影響する。

臆病であり、集団戦を得意とするコボルト達には不利な戦場であるが、彼等が助力に徹し、ゴブリンが前衛を務めることで同数くらいなら勝てるとシルキーは計算していたのである。

441

「今回はタマさんは留守番です。よかったですね」

「おいおい、何でだよ」

「コンラートに対する抑えです。サーフブルームみたいになると困りますから」

苦々しい顔をしてタマが「なるほどな」と呟く。

そんな彼にシルキーは勝ち誇ったように胸を張った。

「毎回タマさんばかり危ない目にあわせちゃいけませんしね」

「やれやれ、ちゃんと上手くやれよ？」

「当然です。作戦名は……どうしましょう」

呆れるタマを無視して、シルキーが全員に確認する。

「先程の説明では、相手に罠を仕掛けるとのことだったな」

「はい。単純なものです」

「作戦名は『ラビットトラップ』で行こう。相手は美しい女性らしいからな。まあ、作戦名にこだわる必要性はない」

キジハタが軽い調子で提案し、前回の反省から全員が苦笑しながら頷く。

「だがよー。あれは兎なんてもんじゃねえよ……とびっきりの猛獣だぜ」

「わかつている。油断はしない」

表情を引き締めてキジハタは頷き、全員で作戦の細かい詳細を詰めるために話を再開した。

ささやかな休息の時は終わりを迎え、再び戦いが始まる。

この時、モフモフ帝国の幹部達はオーク族の変化には気付いていない。

オーク族も敗戦から学び、変わろうとしている。

これまでの原始的な戦いから一歩進んだ本物の『戦争』。

その第一歩目となる激戦が始まろうとしていた。
それに気付いている者はこの時点では誰もいない。

第二十一話 兎の罠

『ラビットトラップ』作戦は、それほど複雑な作戦ではない。柵で覆われた相手の拠点に対して、キジハタが正面から攻め、偽りの退却を行うことで相手を引きつけ、側面からシルキー、クーンの両名が攻撃を掛けるというものだ。

シルキーは事前に相手の戦士の数を大体把握しており、その辺りは慎重に進めている。

攻め手であるモフモフ帝国側は歴戦のゴブリンが50名、新兵が100名、コボルトが50名、ラウフォックスが10名。援軍と降伏者からなるゴブリン達も数ヶ月訓練を積んでおり、ハイオークを倒した同族、キジハタへの畏敬の念もあることから士気は低くない。

「おかしいですね……」

事前の調査ではこの拠点には、カロリーネが100名程の戦力で守りに付いているという話であった。だが、キジハタの退却予定地に潜んでいるシルキーは、不安に胸が締め付けられている。

何かを見落としている……彼女が感じているのはそんな不安だった。

キジハタが歴戦の戦士だけで前線の拠点へと攻撃を仕掛ける。

「静かすぎる」

わざとらしく大声を上げながら拠点に寄っても、散発的に矢が拠点から返って来るくらいで、相手から攻撃してくる様子はない。少数に見せ掛けての攻撃なのに、相手は長時間経っても出て来ない。

挑発にも乗らない。これは……。

「おかしい。ハイオークの性格なら……………」

シルキーは恐ろしい可能性に気付き、戦慄する。

これまで自分達が相手を罠に掛けることだけを考えてきた。

だが……もし、罠を仕掛けたのが相手側だったとすればどうか。兎の罠に引っ掛かったのが自分達だとすれば。

（タマさんはこの拠点での準備はカロリーネらしくないと言っていた）

その言葉からこの拠点が罠だとした場合、目的は……。そこまで考えたことで、シルキーはようやく状況を把握した。

「はっ！ まさか……やられた！」

思考を走らせ彼女は相手がやったことを理解する。

難しいことではない。ようするに相手は自分達をそのまま真似ただと。

足の速いコボルトを呼び出し、二人への伝言を頼む。

「……っ！ クーンとキジハタさんに連絡を。ここにカローリーネはいない……作戦を変更します。一度合流して話し合いを……と」

悲鳴を上げそうになるのをシルキーは必死に堪えて冷静さを装い、不安げなコボルトに言葉を伝える。

「完全に見抜かれていた……でも、まだよ」

悔しそくに歯噛みしながら、シルキーは葉に覆われて光の差さない空を見た。

シルキーからの伝言は直ぐに二人へと伝えられ、戦闘は一度中断された。

キジハタとクーンはシルキーから説明を受け、納得しつつも困惑する。

「カロリーネは一人で抜け出し、本隊と共に攻勢に出ている……か」
「はい。『ウルフフアング』と同じ状況に今度は此方が置かれているのです」

『ウルフフアング』は相手に全力で攻めさせ、本拠を落とした上で背後から襲った作戦である。今回のオーク族の作戦は戦力の大小は異なるものの、その性質は似ていた。

落とす拠点の重要性は異なるが。

キジハタとクーンも相手の挙動には不可解なものを感じており、あまりに予定と異なる相手の行動に頭を悩ませていた。だが、問題は今後どう動くかであり、その手段が思い付かなかったのである。

「退却するか？」

「いえ……単純に退けば、足止めのために追撃されます。ここは……」

シルキーは真剣な表情で、キジハタとクーンが揃うまで考えていた方針を二人に話す。

変更した作戦を聞いたキジハタは暫く考え込んだが、頷くと直ぐに指示を飛ばした。

一方、カロリーネは本隊を率いてキジハタ達とは違う場所を行軍

し、ウィペット要塞の目前まで辿り着いていた。

「さて、空っぽだといいわね。ここを攻めるのは面倒だし」

連れてきたウィペット要塞攻略担当のコボルトに彼女は笑いかけ
る。

コボルトの方は、緊張で身体を固くしながらコクコクと頷く。

「拠点を餌に相手を吊り出して、要塞を掠め取る……か」
「そ、その、正攻法じゃ絶対無理ですから」

彼ら『コモンスヌーク』のコボルト達が出した結論がそれだった。
力攻めをするには要塞の作りは固すぎ、装備も違うために圧倒的
に守備側が有利になってしまう。攻撃手段を色々と考えても、同数
がいればまず落とすことはできない。

そこで、モフモフ帝国側の戦闘の詳細を聞き、同じ手を用いるこ
とを考えたのである。

つまり、囷に主戦力を食いつかせ、動けない間に戦力を減らした
相手の急所である要塞を落とす。

当然引き返して来るだろうが、どちらにしろ主導権を取ることが
できる。

この場合要塞は攻略するのは難しいが、戦力を減らせる。

そうすれば落としやすい……コボルト達はそう判断していた。

「いい仕事ね。ここを落とせば北東部の戦争も終わったようなもの」
「は、はい。ですが、時間は限られています。三日……いや、二日が限界かも」

「わかつているわ。ここからは私達の仕事」

カロリーネは表情を引き締め、部下達を見回す。

今回、彼女は『コモンスヌーク』や周辺集落から戦えるものを根こそぎ連れて来ていた。オークが20名、ゴブリンが200名、コボルトが20名……彼女が用意出来るほぼ全軍である。

「私の好きな展開ね」

小さく彼女は笑う。時間を置けば攻めている者達が戻ってくる。その間の僅かな隙を突く、一気呵成の短期決戦。

失敗した場合の手も考えられている。そちらも短期決戦だ。

コボルト達が考えた作戦のうち幾つかを採用したカロリーネは、この日のために戦うことを我慢してきていた。ようやく、その我慢が報われると彼女は喜びに身を震わせる。

強敵だとカロリーネは考えていた。

部下のコボルトは二日と予想していたが、彼女は樂觀視していない。

そして、そんな相手だからこそ楽しいと考えている。

「じゃあ、あの要塞を落とす準備をしましょうか。本当に大丈夫なの？」

「は、はい！ 水深は浅いし、幅も狭いので……計算では」

「よし、全員。配った袋に土を入れなさい！」

まず一つ目の準備はハリアー川の水を引いた堀への対処。

橋ではあまりにも足場が悪く、また落とされればまた準備をし直さなければならぬ。

そこで大きめの袋を無数に準備し、堀を埋めて道を作るといふことを考えていた。

これならば橋のように落とされる心配もないし、足場も狭い木の上よりはましである。

袋だけであれば軽くて持ち運びがしやすいのも大きい。

「楯隊は埋める者を護る。逃げては駄目よ」

二つ目に準備したのは前を見るための穴を空けた大きめの楯である。

これにより危険な堀の側での作業の被害を減らす。

この楯は戦争を直接見ていたカロリーネの案だった。

「あれの準備も進めておきなさい……さて、防ぎきれるかしら？」

そして、三つ目の準備を指示し、カロリーネは不敵に笑う。

絶対にウィペット要塞を落とすと誓いながら、自分が予測もできない善戦をしてくれることに期待をしている。矛盾しているとは彼女はちなりとも考えない。

それが最も彼女がやりたい戦いなのだから。

第三次になるウィペット要塞防衛戦が始まる。

モフモフ帝国にとっては予想外の……そして最悪の形で。

——ラビットトラップ作戦について

第二次ウィペット要塞攻防戦に勝利したモフモフ帝国は北東部を守護するハイオーク、カロリーネを打倒するため作戦を練っていた。モフモフ帝国が直ぐに攻勢に転じることが出来なかった事には三つの理由がある。

第一に激戦による戦力の減少。

第二に物資の減少。

第三に純粋な戦力の差。

これらの条件を対等にするまで攻勢に出ることは自殺行為であり、『サーフブルーム』もハイオーク、コンラートに占拠されたまま我慢するほかなかった。

これら三つの条件が満たされた頃、コンラートのオーク族本国への召還という大事件が発生する。この事により、ウィペット要塞司令官『剣聖』キジハタは北東部の完全奪還を決意する。

一方でハイオーク、カロリーネはウィペット要塞を攻略するべく前線基地を構築。

まずは後顧の憂いを断ち切るべく、これを落とすべく作戦が立てられた。

本来この作戦はモフモフ帝国が罾を仕掛けるという意味合いで名付けられたが、この拠点そのものが罾であり、結果として我々の方が相手の罾に掛かってしまうことになった。

相手の作戦は敵本拠『コモンスヌーク』のコボルト族が考えたものであり、我々自身がコボルト族の恐ろしさを思い知る事になったのである。

『モフモフ帝国建国紀』——反撃の章—— 二代目帝国書記長 ボーダー 著

第二十二話 宣戦布告

ウィペット要塞を守るタマは、状況の変化を敏感に察していた。

「森の様子がおかしいな」

探索を続けているコボルトからの報告はまだ彼の元には届いていないが、常に最前線で戦い続けている彼は大人数の移動に伴う森の変化を感覚で覚えていたのである。

現状、彼の元に残る戦力はゴブリンが60名、コボルトが70名、ラウフォックスが10名と、決して少ない戦力というわけではない。

だが、それに指示を出す幹部がタマしかない。

タマは自分が指揮官というよりは『戦士』であり、柔軟な指揮が出来ない事を自覚していた。

迷ったのは一瞬。

近くを歩いていたコボルトをひょいっと掴み上げ、彼は決断を下す。

「おい、確かグレーって言ったな。お前ちょっとサーゴに援軍を要請してこい」

「え、え？」

「敵だ。カロリーネかコンラートか……どちらかはわからんが……本気で落としにくるぞ。援軍は戦士じゃなくても構わん。『帝国を守りたい奴は誰でも来い』これでいい」

「えーっ！」

黒い毛並みの若いコボルト、グレーは宙で揺れながら大声で叫んだ。

「援軍は第二防衛線で待機。お前が指揮を取れ」

「そ、そ、そんな無茶な！」

「訓練通りやれば問題無い。要塞にいる亡命者にも伝える。やる気のあるやつだけでいい」

そこまで命令を出してタマが手を離すと、しゅたつとグレーは身軽に足を降り、不安そうにタマを見上げる。

彼はこの要塞でも一番最年少であり、指揮の経験などはない。当然の不安だったが、タマは畳み掛けるように続ける。

「ここが落ちれば、攻めている奴等はどうなる。全滅だ」

「で、でも、僕は……」

「無茶はわかってら。だが、出来るかどうかは聞いていない……やれ。思い出せ。お前は初めの帝国人だろうが……守りたくねえのかよ」

「え……」

「俺は守りきるぜ。意地でもな。お前はどつすんだ？」

意地の悪そうな笑みをタマが浮かべると、グレーの表情から怯えが消え、耳もピンと立て、毛並みも力を取り戻していく。瞳には決意の光があった。

「やります！ 絶対守り切ります」

「それでいい。時間がねえ……急いで準備しろ」
「了解です！」

元気のいい返事と共に、グレーは駆け出していく。

そんな彼の後ろ姿を眺めながらタマは苦笑を浮かべていた。

「若えっていいな。さて……援軍が来るか、味方が戻るか……」

表情を引き締め、敵がいるであろう森の奥を厳しい表情で見詰める。

「我慢だな。どっちが相手か知らねえが……」

ふん、と鼻を鳴らし、部下全員に戦闘準備を行うよう伝えると自らも鋼鉄の槍を取り、一度力強く振った。

「簡単に落とせると思ったたら大間違い。俺達はしぶといぜ」

タマは陽気に笑う。それが部下の不安を除くことを知っているから。

アードルフとの戦闘経験のお陰で、防衛戦術の種類は増えている。それに残るゴブリンとコボルトの半分は歴戦の戦士だ。

それでも厳しい戦いになる。

彼はそれを理解しながらも、不安など一切感じさせないように明るく振舞っていた。

完全に防衛の準備を整え、ウィペット要塞は相手の出方を待ち構える。

歴戦の要塞の戦士にはタマの判断を疑う者はいない。

戦場に慣れた者は多かれ少なかれ、タマと同じ判断を下していたのである。

そして、静かに戦争は始まる。

ウィペット要塞に一人で近付いたハイオーク、カロリーネによって。

要塞を守る戦士達が全員彼女を見つめ、タマも眉をひそめる。

「そちらのリーダーは出て来なさい！」

よく通る実力に裏打ちされた自信に満ち溢れた高い声。
アードルフとは違い、そこに暗さはない。

彼女は身体の大きなタマの姿を見つけると、好戦的な笑みを向ける。

「ルートヴィツヒ！ 殺りがいのある、いい男になったらいいわね」
「おう、カロリーネ。相変わらず美人だな。わざわざ愛の告白に来てくれたのか？」

柵の内から彼女にタマは強気の笑みを返した。
基本的に種族内での上下関係は絶対だ。

だが、オークリーダーである彼は今、ハイオークであるカロリーネと高い場所から余裕の表情で……対等の立場で見つめ合っている。

「無駄な死者は出したくないわ。昔のように地に頭を付けて謝れば、命だけは助けてあげるから大人しく降伏しなさい」

「断るぜ。お前より怖え女がこっちにやいるからな。それに、俺はルートヴィツヒじゃねえ。モフモフ帝国の幹部、要塞司令官代理のタマ様だ！」

タマは槍の柄を地面に強く叩きつけ、ふふん、と笑う。

「カロリーネ。お前の本当の望み通り相手になってやるぜ」
「ふふっ……面白い変わりようね！ 臆病者のあんたが」
「うちの大將はフォルクマールとは格が違うんでな。やる気も出る
つてもんだ！」

カロリーネは愉快そうに笑みを浮かべる。
要塞にいるタマもまた、彼女に気後れすることなく堂々と真っ直
ぐに立つ。

「交渉は決裂ね。直ぐにその首、落としてあげる！」
「交渉？ わははっ！ 宣戦布告の間違いだろ！」
「……楽しい戦いになりそうね」

最後にカロリーネは小さく呟くと背を翻し、味方が待つ場所へと
歩いて戻っていく。

去り際に一瞬だけ、タマに対して羨望の表情を向けて。

一方、その頃グレーは川を渡り、全力で走り続けてウィペット要
塞から一番近くの集落、サーゴへと辿り着いていた。

東部においてパイルパーチが陥落した後、この集落は三つの集落
に繋がる重要拠点として、急速に整備が進められている。

北部から持ち込まれる商品とモフモフ帝国の生産品も集められる

ため、一年の間に首都やパイルパーチとはまた違った発展を遂げていた。

「ふむ……援軍か」

「はい。戦士でなくてもいいとタマさんが
なるほどな」

サーゴでは幹部達が集まって相談を行っている。

その中には、収穫後のサーゴの方針を考えるために訪れていた生真面目なエルキー族の青年、コーラルの姿……そして、もう一人。普段はここに居ないはずの者が、彼を護衛として共に視察に訪れていたのである。

「で、どうするんだ。皇帝」

「当然、行くよ」

「非戦闘員まで総動員……相当まずい状況だと思うが……それでもか？」

「だからこそ……だよ」

長身の青年からの問い掛けに、皇帝……穏やかな表情の少年、シバは迷いなく頷く。

「コーラルは残っていいよ。約束は国内での護衛だし」

「馬鹿言え。そんな格好悪いことが出来るか！ お前が行かなくて

も俺は行く」

きつそうな印象を与える切れ長の目でコーラルはシバを睨み、強い口調で言い切った。だが、シバはそんな彼に少しだけ困惑した表情を向けて首を傾げる。

「エルキー族で問題になるんじゃない？」

「あー……そう……だな。そ、そう！ 戦争の視察だ。後で役に立つ」

強引な言い訳に、シバはくすりと笑い、コーラルはばつが悪そうにそっぽを向き、照れたように頭を掻いた。

「たまには良い所も見せたいよね」

「お、俺は別にあいつは関係ないぞっ！」

「誰にとは言っていないよ」

「……何かお前、俺にはきついよな」

腕を組み、いたずらに成功した少年のように笑っているシバをコーラルは苦々しく見下ろす。しかし、すぐに顔を見合わせて頷いた。

「グレー。今からみんなに声を掛けるから、すぐに動ける人と先に行って準備を」

「は、はいっ！」

「後は……ラルフェルドとパイルパーチの戦士達に伝令を」

シバはテキパキと指示を出していく。

皇帝としての経験が彼の中にも生きていた。

「コーラル、後でクレリアと一緒に怒られてね」

「怒られるのは不条理だな。だが、軽蔑されるよりはましか」

苦笑しながらコーラルは頷く。

「ありがと。それじゃ、僕達の仲間を守ろう……怖いけど」

シバは小さく手を震わせながら、静かに宣言する。

その場にいる様々な種族の幹部達は、皇帝に頷きを返した。

第三次ウイペット要塞攻防戦の最大の特徴は、双方共に予想外の要素を持っていたことにあった。

カロリーネはコボルトを活用することにより相手の意表を付き、守備側のタマは自分の戦力だけで守りきることを諦め、援軍を要請している。

そこにパイルパーチの視察を終え、続けてサーゴの視察を行った皇帝が滞在していたことは、どちらにとっても不測の事態であったのである。

第二十三話 第三次ワイト要塞攻防戦 前編

「さて、何をやってくるやら」

カロリーネが去った方角をじっと見つめながらタマは呟く。

既にコボルト達は弓と大量の矢を準備し、ゴブリン達もそれぞれの武器の調子確かめている。

新兵は緊張した様子で落ち着きがなく、歴戦の者ほど静かに敵が来るのを待っていた。

今回の戦いに先手はなく、確実に相手次第となる。

防衛戦は長丁場になるため、可能な限り疲労を抑えなくてはならないと、防衛戦に参加したものはしっかりと学んでいた。

「タマ様。グレーが戻りました。『こちらの準備は時間が掛かる』と」

「そうか。出来るだけ急ぐように伝えてくれ」

「それから、シバ様とコーラル様が来ると」

「はあ？　なんでだ？」

伝令のコボルトからタマは報告を受けると口を開けて呆気にとられていたが、頭をぼりぼりと掻いて苦笑する。

「運が良いのか悪いのか。姐さんが怖いぜ……さて……全員良く聞け！ サーゴから我らが皇帝が援軍に来る！ それまで耐え切れ！ 格好悪いところを見せるなよ！」
「おおおおおおおおおっ！」

周囲のコボルト族とゴブリン族から歓声が上がる。ラウフォックス族は、きよんとしていたが、援軍が来ることがわかると、真っ青に染まっていた表情に生氣が戻った。

「やる気は大丈夫そうだな」

「タマ様、敵が来ます！」

「よっしゃ！ 敵が近づいたら矢の雨を降らせてやれ！」

大きな楯を持ったゴブリン達が駆け寄って来るのを確認し、タマは命令を下す。

堀を渡るための木材を持っていないことに、不審なものを考えながらもそれを少しも顔には出さない。

ウイペット要塞側の守備はコボルト族、ゴブリン族、ラウフォックス族で十組に分け、集団戦の得意なコボルト族の戦争経験者をそれぞれのリーダーとして、現場判断を任せている。

そして、タマ自身はその組に入らないコボルト族とゴブリン族を予備戦力兼防衛時の工作活動を行う者として指揮を行っていた。

これは彼自身が敵の最高戦力であるハイオークと戦うことを覚悟しているからであり、そうなれば指揮をしている余裕など無くなる

ためである。

「まじかよ……そうきやがったか……コボルト弓兵隊、引き付けて射て！」

関の声と共に身体を覆うほどの大楯を持ったゴブリン達が堀の幅が比較的狭い部分の手前で整列して正面と側面をカバーし、その後ろを隠れるように土嚢を持ったゴブリン達が次々に土嚢を堀に放つて行く。

「射角を付ける！ 真上は防げん！」

「はいっ！ コボルト弓兵隊、狙いますっ！」

楯は前回のアードルフ戦の結果、様々な対策が考えられた。

その時の経験からコボルト達は楯同士の間隙から、土嚢を運ぶゴブリンを撃ち、角度を付けて楯を狙い撃つことでそれに対応する。

それでも、カロリーネの配下は怯まず、楯のゴブリンが倒れれば他の者が楯を拾い、怪我人は仲間が引つ張って下がり、少しずつ堀を埋めていった。

「道を塞ぐ準備、しとけよ！」

「了解！」

橋を掛けられた時の対処も考えられている。

道が出来たところを木材で蓋をするように塞ぎ、後ろに土嚢を積むことで簡易の壁を作る……奇しくも彼等は同じものを攻防の道具とすることを考えていた。

「まさか埋めるとはな。コボルト弓兵隊、長い戦いになる。交代で休みながら射て！」

コボルト族は体力のある種族ではない。

タマは彼等に掛かる負担と矢の本数を計算し、指示を出す。

射程内ではあるものの、楯で防がれ、それなりに距離があるため威力が削がれていることから判断だった。

気力が残っていても体力は無限ではない。

本番はまだ先だと、タマは押し寄せる相手を睨みながら考えていた。

コボルトの作戦を取り入れ、命令を出し続けているカローリーネもまた、タマと同じように秀麗な顔をしかめ、相手側の要塞を睨んでいた。

「コボルトは怪我人の手当！　これが戦い？　……酷いわね」

オーク族は早くにゴブリン族の魔王候補を降したにより、あっさり『死の森』における均衡を自分達に傾けている。

そのため、オーク族の魔王候補、フォルクマールは相手よりも圧倒的な戦力を準備し、押しつぶす……もしくはそれにより降伏させるというやり方で勢力を広げていた。

そこに必死に抗う者は存在せず、抵抗された場合でもその中でも強い者をハイオークが倒すことにより、相手の戦意を失わせ、降伏に追い込むことが出来ていたのである。

「フォルクマールのやり方は慎重すぎて面白味は無いけど、被害は少ないし正しいわね……いえ、正しかった……わね。過去形になってしまふけれど」

カロリーネは小さく息を吐く。

確かにフォルクマールは一度エルキー族には敗れたが、予定通りコンラートが東部を完全に制圧していれば、前面、側面から膨大な戦力を集め、エルキー族の打倒も成功させていたに違いない。

そういう意味では彼が魔王候補に選ばれたのは間違いではなかったと彼女は考えている。

だが、モフモフ帝国はエルキー族とは違う。

少数でも抵抗できる力があるエルキー族とは違い、場所を利用し、的確な指示により統制し、生産物を質のいい武器と大量に交換することにより戦力を充実させ、手段を選ばぬ戦術を用いることで粘り強い抵抗が続いている。これらによる被害はカロリーネの想像を超

えていた。

フォルクマールの物量作戦が通用しない相手が現れたとき、果たしてどうなるのか。

しかし、カロリーネはその結末を理解しながらも笑みを浮かべる。

「モフモフ帝国は時を置く程に強くなる……か。コンラートめ……上手く言ったな。面白い」

「カロリーネ様、もうすぐ堀が埋まります！」

最前線に出ていたオークがカロリーネに膝を突いて報告する。彼女は伝令を行ったオークに頷くと、よし！ と声を上げた。

「予定通り、ハリアー川で待機している者達に伝令を送りなさい」

「はっ！」

「尻を蹴り上げてやりなさいってね。私もそろそろ行きましようか」

いたずらっぽく笑うと伝令のオークの肩を叩き、近くで休んでいるオーク族の者達に顔を向ける。

「埋まったらオーク族は全員で柵を破り、内部に侵入する。今日中に落とすわよ」

「りよ、了解！」

そう命令し、自身の獲物である使い込まれた巨大な鉄塊……ぼろぼろの両手剣を手に取ると、彼女は前線へ向かって歩きだした。

生産に携わっていた中でも若いコボルト、ゴブリンを連れたグレイはウイペット要塞に戻ると、タマから戦力として預けられた一組に第二防衛線での守備を説明を任せ、荒い息を吐き、崩れ落ちるように座り込んでいた。

途中、サーゴで少しは休めたものの、全力に近い速度で走り続けたこともあり、流石に彼も疲れたいたのである。

それでも座りながら、次々と到着する非戦闘員を筏で運ぶための指示を出し、効率的に守備体制が取れるように働いていた。

だからこそ、彼はその異変にも一番初めに気付くことが出来たのである。

「あれは……筏……僕達のじゃない……敵だ！」

緩やかなハリアー川をウイペット要塞は背にして建てられている。カロリーネはその川の流れを利用し、背後から襲うことを計画していた。

当然ながらウイペット要塞の背後も土が盛られ、柵も張り巡らせているが、前面に比べれば備えは薄く、守備兵も出せる状況ではない。

「そっちのコボルト三人は生活区域に残っている人に第二防衛線への避難の指示を！ そっちのゴブリンさん二人は、入口を閉めて！ 後続の人にはシバ様が来るまで対岸で待機と声を掛けて！」

挟み撃ち……グレーはそのことに思い当たると、咄嗟に叫ぶように指示を出し、第二防衛線へと走る。痛む足を動かしながらそれでも全力で走り、武器を配っている仲間達を見つけると、息を荒らげながら、川を利用して攻めて来ていることを伝えた。

「ゴブリンが見えただけで20くらい……オークはいない」
「で、どうする？」

タマにより振り分けられた中で、グレー以外で唯一戦争経験を持つ壮年のゴブリンが彼に問い掛ける。グレーは少しだけ迷うそぶりを一瞬だけ見せたが、しっかりと頷いた。

「川に近い生活区域で防ぎます……僕達だけで。タマさんには正面に集中してもらわないと」

「ふん、貧乏籤を引いたと思ったが……キジハタ様直伝、ゴブリン流剣術をオーク族側の奴等に見せる最高の機会があるなんてな。嬉しいぜ」

ゴブリンは笑みを浮かべ、彼から離れてゴブリン族の本来戦闘に

加わらない者達の所へと歩いていく。グレーも戦闘員以外の不安げなコボルト達に近付き、声を掛けた。

「背後から敵が来ます。弓を使える方は弓を、使えない方は石を持つて下さい。シバ様が来るまで地形を利用して防衛します。僕達がちゃんと指示を出します」

彼は丁寧さを心がけて説明したが、コボルト達は怯えており、反応は無い。

そこでグレーは今、正面で戦っているタマの顔を思い出した。彼ならどうするだろう……どうやって、やる気を引き出すだろう……。

「難しいよ。大丈夫！ 僕達の仕事は敵の嫌がらせ。石を投げて、襲いかかってきたら、みんなは走って逃げればいいんだ。逃げ足ならコボルト族が一番なんだから」

答えに思い至り、グレーは気楽そうに笑う。
するとコボルト達はほっとしたような表情になり、頷いた。

正面での戦い……そして、川を利用した背後での戦い。
ウィペット要塞攻防戦の第二幕はオーク族の両面攻撃で幕を開けることになった。

第二十四話 第三次ウィベット要塞攻防戦 中編

川から要塞内部へと入る重い扉を閉じること、ある程度の時間をグレーは稼ぐことは出来たが、既に相手は柵をよじ登って侵入を果たし、生活区域で家の中を物色している。

生活区域もただ雑然と作られている訳ではない。

幾つかの家から屋根へと登ることが出来るよう、作られている。

屋根もなるべく平らに作られており、これらはコボルトが高所を利用出来るようにとの設計からである。

屋根から屋根へはある程度は飛び移って移動ができるため、登った場所がすぐに相手にばれる心配もない。このように生活区域も防衛を考えられて建てられていた。

グレーが正規兵と非正規兵を振り分け、防衛のための指示を出し終えると、ゴブリンの戦士が彼の肩を叩く。

「おい、こっちの準備は出来たぞ。素人には槍を持たせてある」

「10名……こっちも10名くらい。それに正規兵を合わせて30名。そこまで差はないかな」

「いや奴らはかなり人数を用意してやがる。オークがあまりいないのが救いか」

「なら時間を稼げればいい。狭い場所で防ぎましょう」

「援護は頼むぜ」

「わかりました。オオセさん」

壮年のゴブリンは笑みを浮かべ、手を振って仲間の下へと戻っていく。

「じゃあ、作戦通りに。僕達も行くよ」

正規兵一名に非正規兵二名、コボルト族の素人には矢筒を背負ってもらい、石の入った袋を持たせている。皆で訓練を受けた者達は防衛訓練に従って、生活区域での防衛を行うべく、安全な第二防衛線から戦場である生活区域へと走っていった。

グレー達はゴブリン3名、コボルト3名からなる小隊を5つ作り、統制の取れているオーク族に2組を当てて時間を稼ぎ、その間に生活区域の家に釣られてばらけているゴブリン族を連携して潰していく作戦を立てていた。

「多い……50はいるかな……だけど、楯はない」

土で出来た建物の屋根の上でグレーは、仲間のゴブリンと対峙を始めた敵を見下ろして呟く。側にいる二名の若者は震えながら見下ろしているが、彼は落ち着いていた。

狩りで使うコボルト用の小さな弓の弦を引き絞り、ゴブリンを狙

う。

先行している敵は二名……オークは後方で戦士をまとめていて狙い難い。

「……っ！」

声を抑え、グレーは息を吐きながら右手を放す。

「ぎゃぎゃっ！」

狙い通りに足を止めているゴブリンの首に命中し、周りのゴブリン達が騒ぎ始めた。

その隙に、もう一名を六名掛かりで帝国のゴブリン達が仕留める。

「す、凄い」

「クレリア様は言ってたよ。コボルトは強いって」

感嘆の声を上げる同じくらいの年頃のコボルトにグレーは笑い掛け、下で敵を探すゴブリン達に指示を出しながら、屋根の上を駆けていく。

しかし、しばらくすると敵は各個撃破されていることに気付き、ばらけるのを止め、木製の扉を破壊して楯代わりにしながらオーク族の元へと集まっていく。

それを確認したグレーはもう一人の正規兵のコボルトに伝令を頼んだ。

「思ったよりオーク族の対応が早い。こっちも集まろう。場所は6番。手近な相手を倒したら集合で。下がりながら時間を稼ぐよ」
「うん、わかったよ」

長毛種のコボルトは頷いて屋根を飛び移り、伝令に走る。
生活区域は場所に番号が振られており、数字を言えば訓練をした者は場所が理解することが可能になっていた。

「思ったより大丈夫だね。僕達は嫌がらせをしてから戻ろう」

グレーは下のゴブリン達に、方角を指示しながら何名かのゴブリンを協力して倒し、それが出来なくなると合流地点まで下がっていた。

「ここからだけど……耐え切れるかな」

合流するまでに多少の相手は倒すことに成功している。それでも相手には数十の戦力が残されていた。しかも、オーク……オークリダーは無傷。

こちらはまともに戦えるのは実質10名。まともにあたればあっさり蹴散らされるだろう。考えるだけの足止めをしなければならぬ。

「時間だけは……稼いでみせる」

グレーは焦りを顔に出さないように歯を食いしばる。彼には理解できていたのだ。

一方的な時間は終わり、これから長く厳しい持久戦が始まるのだと。

ウィペット要塞のグレー達が戦闘を初めて一時間近くが経過した頃、シバ達もようやく志願した大勢の者達を引き連れて対岸へと到着していた。

「筏が無数に……背後から攻められているな。入れないぞ」

エルキー族のコーラルはすぐに状況を把握し、シバにどうするかを確認する。

「中に入るのは問題ないよ」

「だが、武器はどうする。俺の魔法とお前の剣しかないんだが」

「要塞の地図は頭に入ってる。戦場を避けて武器庫を目指すか……他の手段を考えるかは中に入れてからにしよう。今は急がないと」

「無茶はするなよ」

苦笑いをしているコーラルにシバは頷くと、土に手をそつと添える。

「土の精霊さん、少しだけ力を貸して」

落ち着いた口調で土に話し掛けると、土に触れているシバの腕が目も眩むような光を放ち、轟音と共に周囲の土が集まって固まり、要塞までの大きな橋を作った。

「物凄い力だな。そっぴや魔王候補だったか。忘れてたぜ」

「さあ、みんな行こう」

その場にいる全員が緊張した面持ちで頷き、シバとコーラルは戦闘に立って、ウィペット要塞へと入っていく。

「戦闘の跡だな。転がっている敵の武器は頂いておこう」

「うん。近接用の武器はゴブリン族に持ってもらおう」

生活区域であるはずの入口付近には幾つか、矢に射抜かれたり斬られたゴブリンが倒れており、仲間が抵抗を続けていることを彼等に理解させていた。

「それで、武器庫に行くか？」

「ううん。遠いし真っ直ぐ行くよ。この分だと、倒されている敵はそこそこいるはず」

「だな。ある程度、武器があれば俺の魔法も活かせる」

そして、全員に前進の指示を出し、彼等は闘いの続く第二防衛線へと走っていく。

そこでは、最後の防衛線をグレー達が必死に守っていた。越えられれば、後が無いというところでグレー達は踏ん張り続けている。

コボルト達は矢を射て、石を必死で投げ、ゴブリン達は槍や剣を振るう。

敵も味方も無数の亡骸がそこには転がり、無傷の者は殆どいない。

グレーも矢が尽き、必死の形相で拾った剣をゴブリンと並んで振るっている。

戦歴のあるゴブリン、オオセも倒れ、敵を二名抱えて壮絶な死に様を見せていた。

後少しシバが遅ければ第二防衛線はオーク族に占拠されていたかもしれない。

コーラルは安堵の息を吐き、シバは真っ直ぐにオークリーダーを見る。

「オーク族のリーダー。出来れば降伏して欲しい」

「なっ！ エルキー族と魔王候補だと……！」

ピタリと守備側に止めをさそうとしていた相手の攻撃が止み、全員が援軍の先頭に、落ち着いた様子で立つ少年の方を向く。

「し、知っているぞ。コボルト！ お前には力はない。お前を殺せば戦いも終わりだ！」

「そうだね。僕には君を倒す力はないよ。それからごめん。僕達は支配されたくないんだ。だから……戦争はまだ続く。悪いけど……降伏しないかい？」

「誰が！ 俺達の勝利だ。魔王候補を殺せっ！」

守備隊を攻撃していたゴブリンをもオークリーダーは呼び戻し、非力そうな少年を全力で殺すべく、命令を下す。

「出来ればやりたくないんだ。どうしても降伏しない？」

「馬鹿を言え！」

慌てながらも拒否するオークリーダーに、シバは悲しむような瞳を向けた。

「クレリアがいなくてよかったよ。残酷なモノを見せなくて済む。そう、確かに僕に力は無い」

「全員、皇帝を守れ！」

咄嗟にコーラルが指示をだし、武器を持ったゴブリン達が出
る。

「武器を捨てた者は殺さない」

「な、何を！」

「僕はさ。魔王候補で皇帝なんだよ。僕は皆の命を預かっているんだ」

静かな……だが、不思議と彼を見る者全てに届く眩き。

シバの身体から暗い光が沸き上がり、コーラル以外の帝国側の戦士達へとその光が吸い込まれていく。

「僕達は弱い。臆病なんだ。だけど、戦いたい。戦わないといけな
いことはわかってる。だけど、恐怖で身体が動かない」

「何だこれは……」

「その枷を……外すよ。もう一度言う。武器を捨てない者は……皆
殺し。ごめんね」

「は、早く殺せっ！　まずいぞ！」

死の気配を察したオークリーダーが必死に叫ぶ。
そして、シバは普段通りの優しい口調で『命令』した。

「皇帝シバの名に置いて命ずる。帝国の勇者達よ……『武器を持ち帝国を侵す者を倒せ』」

前に出たはいいが怯えていたゴブリン、震えて動けなかったコボルト達から怯えが消え、その代わり、彼等は瞳を不気味なほどにぎらつかせ、静かな闘志を放っている。

一人冷静なコーラルは、突然の変化に戸惑っていた。

長時間の戦いに疲れきり、立っているのがやっとのはずのグレー達にもその薄暗い光は吸い込まれ、彼らもまた力を取り戻したかのように狂気掛かった闘志を漲らせ、武器を構える。

「な、なんだ……？」

オーク族の側も、無言で近づいてくる相手に得体のしれないもの覚え、動揺をしていた。

感じるのには理解の出来ない根源的な恐怖。

「何かはわからんが、戦いに集中するか」

コーラルは気味の悪さを感じつつも、これが自分達に有利なこと

なのだと判断し、攻撃用の魔法の詠唱を開始する。

「帝国軍、攻撃開始！」

クレリアから貰った片手剣を振り下ろし、シバは全員に『命令』を下す。それは一方的な闘い……降伏を拒否する者に対する虐殺の合図だった。

第二十五話 第三次ウィベット要塞攻防戦 後編

「無数の屍に民からの畏怖の視線。これが魔王だよ。コーラル」

敵対する者は全て地に伏し、咄嗟に武器を離したゴブリンは助けはしたものの、打ちひしがれるように座り込んでいる。

オークリーダーの持っていた槍には自分の身体で押さえ込んだゴブリンが突き刺さり、無数の武器がその代わりとして巨体に突き刺さっていた。

『命令』が解けた帝国の民はシバに対し、畏れの視線を向けている。

そんな視線を受け、少年のように見えるシバは哀しみの表情を浮かべながら、それでも、超然と顔を上げて無数の屍の上に立っていた。

「驚いたな。これが敵にもいるわけか」

「魔王の力は民の数次第。フォルクマールはもっと強いよ」

一人、魔王の民では無いために冷静でいたコーラルは、それまでの甘い少年だと考えていたシバが、目の前の光景を躊躇なく作り出した事に驚きを隠せないでいた。

ただ、それを認めるのが嫌で、冷静に彼は振舞っている。

「巨龍ガルブンやエルキー族が何故中立なのか、理解出来た気がするな。魔王の部下をやるには俺達の寿命は長過ぎる」

頭を掻き、苦笑しながらコーラルはシバに近付いて背中を叩く。

「俺は寿命までお前とクレリアにずっと付き合ってやる。そんな泣きそうな顔をするな」

「コーラルの寿命までだと、相当長生きしないといけないね」

「ああ。途中で負けるなんて許さん。まずはここを勝つ」

照れるような顔で腕を振り上げ冗談を言うコーラルに、シバは仕方なさそうな笑みを返し、守備の責任者であるグレーの方を見た。

「これからどうするかは考えてる？」

「は、はい！ みんなで第二防衛線の配置に付きます！」

「タマは苦戦してるんじゃないかな。怪我人は治療を、残りは準備を急いで」

「了解です！」

シバはグレーに細かい指示を任せ、自らは無事な者達を引き連れてタマが戦っている前線へと歩いていく。防衛戦が続いている仲間を助ける為に。

要塞前面で攻撃を防ぎ続けているタマは後方の戦況を知ること
も出来ず、カロリーネの軍を相手に必死の防衛戦を続けていた。

兵力で倍、遠距離攻撃を一方的に出来る有利はあるものの、近接
戦闘を行う戦士の数だけであれば約四倍の差があるため、全く気を
抜くことも出来ず、背中を気にする余裕もなかったのである。

「よし！ 返したな。今のうちに木材で入口の補強だ」

既に様々な手段で侵入しようとする敵ゴブリンによる攻撃を幾度
も退けている。

だが、被害がなるべく出ないよう相手の動きは慎重で、落とされ
る恐怖感は少ないものの、その不自然な攻撃にはタマは疑念を抱き
始めていた。

「また来やがったか。休ませてはくんねーか」

「タマ様！ ハイオークが来ますっ！」

「ちっ……これからが本番ってわけか。勝負所だ。全員踏ん張れよ
！」

オーク族を中心とした部隊が、要塞に入る場所の柵を打ち倒す為
の槌を持って、土嚢を駆け上がりながら突進する。

「防げっ！ 押さえ込めっ！」

「甘いわよ！」

「ぐっ……くそ……全員散れっ！ カロリーネが来るぞ！」

一度の突進では柵を壊されることはなかったが、全員の意識がそこに向かった隙を狙い、カロリーネが先頭を走っていたオークライダーの背中を蹴って要塞内部へと飛び込み、両手剣を力任せに横薙ぎに振るう。

タマの警告でゴブリンは退避していたが、二名がその剣風に巻き込まれ、両断された。

そして、その間に、はい登るようにゴブリンが内部に侵入し、オークも勢いを付けた攻撃で柵を壊すべく、一度引いていく。

「盾を持った者は前列に。この場所を確保するわよ。数が不利なうちには守りなさい」

「よう、カロリーネ。えらい遅かったな。待ちくたびれたぜ」

戦いは乱戦になりつつある。

カロリーネ側は巧みに膠着状態を作り出し、侵入地点を橋頭堡にするべく、内部に次々と侵入する部下に、足場が良くて戦いやすい場所を確保させていた。

そして、彼女自身はタマと対峙して笑みを浮かべ合い、得物を突きつけ合っている。

「ご機嫌ようルートヴィツヒ。殺しに来てあげたわよ」

「俺はタマだって言ってるんだろ」

「……こうして目の前に立つても強気でいられるなんてね」

「褒めても何も出ないぜ。それともご褒美でもくれるのか？」

タマは不敵な笑みを浮かべながら、腰を落として槍を構える。
そんなタマからカロリーネは口だけではない覚悟を感じ取り、気を引き締めていた。

「私に勝てたら何でも聞いて上げるわ」

「そりゃいいな。やり甲斐があるってもんだ。ゴブリンは近づくなよ。コボルト弓兵隊！ 援護は頼むぜ。悪く思っなよ。こりゃ戦争だからな」

「いいわよ。それくらいで丁度いいわ」

先手を取ってカロリーネが動く。

鉄の塊のような巨大な両手剣を軽々と振るい、タマの頭を割ろうとするが、彼はそれを鋼鉄の槍で受け流した。

「相変わらず早いな」

「防いだか。やるわね！」

カロリーネが攻撃し、タマがコボルトの援護を受けながら粘り強く防ぐ。

不用意な攻めには転じず、隙が出来たときに牽制するように攻撃し、自らは隙を作らないように注意しながら彼女を自分に引き付け続けている。

「守ってばかりじゃ私には勝てないわよ」

「同じことをアードルフも言ってたぜ。生きてる奴の勝ちなんだよ！」

時間が流れても二名の戦いは続く。コボルトの援護は敵に阻まれて次第に少なくなっていく、それに伴ってタマは徐々に後ろへと下がり、追い詰められていった。

戦況そのものも不利なものへと変わっていき、数に劣るゴブリン達は第二防衛線の狭い入り口でかううじで踏み留まり、コボルト達はその後ろで矢を打ち続けている。

ラウフォックス達も必死に魔法を使い続けている。

タマにもカロリーネの攻撃が掠り始め、彼の巨体は血で赤く染まっていた。

「タマ。褒めて上げるわ。私相手にこれだけ持つなんて。貴方が初めてよ」

「自分より強い奴とは戦い慣れてるんでね。お前にやないだろ。そんな経験」

「なるほどね」

それがタマが実力に勝るカロリーネを相手に耐える事が出来る理由だった。

クレリアを初めとしてキジハタ、アードルフと強敵相手に何度も訓練と実戦を積み重ねており、ボロボロになりながらも生き延びた経験が、彼の耐える上手さに結び付いていたのである。

鋼鉄の槍を杖のように地面に付きながら、それでも瞳には戦意を灯らせて、タマはカロリーネを一步も通すまいと、立ち塞がっていた。

そんなタマをカロリーネは哀れむように見詰めている。

「だけど、もうそれ程耐えられないでしょう。勝負は付いたわ。降伏なさい」

「甘いな。これは戦争なんだぜ。最後まで何があるかわかんねえ」

「背後からそろそろ私の部下が来るはず。別の場所の侵入ももうすぐだし……この残酷な戦争も終わり。私の勝ちよ」

「あー……そういうことか」

今までのカロリーネの消極的な攻め、グレーの準備が終わらない理由、それらの理由をはつきりと理解してタマは大きく息を吐き、そして……大声で笑いだした。

「くくつ……ははは！」

「……何がおかしいの？」

「つくづく運がないな。カロリーネ。運が良ければお前の勝ちだったろうよ」

タマは笑いを堪えるように口を閉じ、力を取り戻したように槍を再び構える。

「何故か知らんが、うちの皇帝が援軍で来ているんだ。負けるはずないだろ」

「コボルトの魔王候補は戦えないのでしょう。結果は変わらない」

降伏する気はないのだと理解したカロリーネは、タマに止めを刺すべく、剣を構える。

「そりゃあどうかな。あれで中々、胆が座っているんだぜ」

「羨ましいわね。死になさい」

カロリーネも疲労はしているが、タマ程ではない。

彼女は一気に決着を付けるため踏み込もうとして……第二防衛線の奥から連続で上がった悲鳴で立ち止まり、表情を歪ませる。

対峙しているタマも何事かと後方へと耳をそばだてた。

「……デイルクの悲鳴……？」

「なんだなんだ？」

尋常ではない絶望感と恐怖の混じった凄まじい悲鳴に、全ての者が戦いを止め、その場に立ち尽くす。

明らかにおかしい叫びだった。

「何が……起こったの？」

「川から攻めてきた敵は全部倒したよ」

高めの位置にある第二防衛線の柵の側にシバは立っていた。

カロリーネは落ち着いた様子のハイコボルトの方を見て、顔をしかめる。

シバの側にはエルキー族のコーラルも立っており、同じように彼女を見下ろしていた。

「エルキー族まで。あいつが……いや、エルキー族でもあんな恐怖は……」

「おい、カロリーネ。どうすんだ？」

タマは油断せずに槍を構えながらカロリーネを伺う。

彼女はその言葉ではっと我に返ると、後方に飛び下がる。

「勝負は預けて置くわ。部下を無駄に死なせられないしね。全員退却！」

「ずるいぞ。俺の勝ちだろうが！ ……ったく」

カロリーネはそれに答えず、自らが攻め上がった場所から迷うことなく引いていった。
敵が全て引いたのを確認すると、シバはタマの側まで駆け寄ってくる。

「タマ。ご苦労様。大丈夫？」
「なんとか。手間掛けてすみません。助かりやしたぜ」

タマは屈んでシバに恐縮しながら、礼を伝える。
だが、直ぐに背筋を伸ばした。

「要塞を暫く頼みます。俺は無事な奴を連れてカロリーネを追撃するんで」
「わかったよ。無理は駄目だよ？」
「なあに、嫌がらせするだけなんで。戦ったらやばいし無理しないつもりでさ」

タマはそう言つて槍を肩に載せ血塗れの顔で朗らかに笑う。
彼はカロリーネが引いたのが、シバとコーラルへの警戒もあるだろうが、それ以上にキジハタ達が帰るまでに落とせないと判断したからだと考えていた。

だから、なるべく邪魔をする。

「じゃ、俺は北東部の戦いを終わらせて来るんで」
「任せたよ、タマ。ご馳走を用意しておくから」
「おー！ そりゃ楽しみだ。部下の分もよろしく」
「うん。任せて」

そして、戻ってくるはずのキジハタ達と挟撃する。
向こうにはシルキーがいるため、何かしら考えているだろうと、
彼は考えていた。

上手くやれば要塞攻めで疲労している相手を完全に倒す事も出来るだろうと。

「よっしゃ聞いたな。動ける奴は付いてこい！」

痛みを少しも見せずにタマは大声を張り上げる。
そして、動ける戦士達を手早くまとめると、彼は駆け出した。

闘いの幕引きを行うために。

第二十六話 追撃戦

真昼でも薄暗い死の森は木々や草が生い茂っているために視界が悪く、これが人間であれば相手の背中を追うということは難しい。それでも魔物達は相手を見失うことは少ない。

視界に頼らず、漂う血の匂いを辿ることが出来るからだ。

「無理はするな。相手が反撃体制を取ったら後退だ」

タマはそう指示を出しながら、先頭で匂いを辿っているコボルトの後を追う。

コボルトは狼に近いという出自から、他の種族に比べて嗅覚に優れていた。

「匂いが近いです。休憩を取っているかと」

先頭で先導している特に鼻の効くコボルトが立ち止まって後続を待ち、敵の位置を全員に知らせる。

「よし。弓を射た後に遠吠えだ。全員で騒ぎたてろ」

「わかりました」

タマはこうして休憩の邪魔をし、昼夜を問わず不定期に攻撃を繰り返し、遠吠えで位置をいるかもしれないコボルトに伝え続けた。

コモンスヌークはウィペット要塞からはかなりの距離があり、その間に有力な集落も無く、逃げ切るまでにはかなりの余裕が存在する。

そのために追撃は執拗に続けられ、二日目の朝には目に見えてカロリーネの軍は離散していた。

タマは複雑な気分で、それでも脅すためだけの追撃を続ける。そしてついに、それも終わりを迎えようとしていた。

「タマ様。キジハタ様の偵察隊と接触することに成功しました」
「終わりだな。旦那の方は俺達より元気だろう。背後に回ってもらえ」

「了解です」

タマは部下達と共に休憩を取り、どっかりと座りながらカロリーネの事を思う。

元々はコンラートの部下であり、北東部、東部で転戦を続けていた彼は彼女とも接することが多かった。彼女は横暴だ。だが、タマはそれほど嫌ってはいなかった。

美人だというのは勿論あるが、アードルフやコンラートに比べれ

ば扱いはましであつたし、性格が無邪気であつた。個人としてはその強さを尊敬すらしていた。

もし、彼女の部下として配属されていたなら、こうしてオーク族の敵として、ハイオークの中では一番敬意を持っている相手と対峙することもなかったであろうと、タマは自分の運命の数奇さに苦笑いするしかなかったのである。

「よし、休憩終わり。見失わないように追うぞ」

すくつと立ち上がると彼の耳に、遠くからの吠え声が聞こえてきた。

これが間近から聞こえたとき、戦争は終わる。

タマは自分を鼓舞するように顔を両手で叩くと、疲労の色が濃い戦士達を率いて、カロリーネを追いかけていった。

追い掛けられている側のカロリーネには、要塞を落とすのには失敗したが、犠牲を抑えていたお陰で退却した時には半数以上の戦士は生き残っていた。

彼女は強く、これまで負けた経験はない。
そして彼女は負けても心が折れることなく、取るべき手を打っている。

だが、圧倒的に強いが故に彼女は知ることが出来なかった。

劣勢時の弱者の気持ちを。その恐怖心を。

「まさか、この私がコボルトの声に怯えることになるなんてね。甘かったわ」

要塞を落とすために戦闘をした後に、一昼夜逃げ続け、まともに食事を取ることも寝ることも出来なかったカロリーネは苦々しく呟いた。

無尽蔵な体力を持つハイオークと言えども、流石に疲労は隠しきれない。

そして、コボルトの遠吠えである。

他の種族以上に彼等は嗅覚に優れている。そして、その遠吠えは遠くまで届く上に、声を発している個人を特定することが出来るのだ。

彼女はそれを一緒に逃げているコボルトから説明され、自らの油断を悟ったのである。

コボルト族は単体としては確かに弱い。

彼等は元々群れで行動する者達であり、そのための能力に優れているのである。

「遠吠えが二種類……方角から考えて、これは捕捉されたかな。まさか、コモンスヌークまで逃げ切れないなんて……ここまで厄介とはね」

カロリーネは乱れた髪を手櫛で直しながら静かに微笑む。
立つことが出来ているのは彼女一人で、部下は立ち上がることも
できず、座り込んでいる。

コモンズヌークまで逃げ切らねば、殺されると言う恐怖心。
そして、間断なく続く嫌がらせのような攻撃……疲労は頂点に達
している。

部下も今では数えるほどしか残っていなかった。
どれだけ逃げても付かず離れず聞こえる遠吠えに恐怖して、殆ど
のゴブリンは四方に逃げ去り、同族のオークも夜が明ける頃には半
数が消えていた。

「貴方達は降伏しなさい。魔王候補と同族だから大事にされるでし
よう」

力無く座り込んでいる十数名のコボルトに、カロリーネは優しく
声を掛ける。

彼女と共にウィペット要塞まで付いてきたコボルト達も何名かは
逃走していたが、その殆どが彼女に付き従っていた。

だが、彼等は声も出ないほど疲れているにも関わらず、首を横に
振る。

「貴方達は臆病な癖に本当に律儀ね」

カロリーネは呆れるように苦笑し、諦めて敵の本隊が近付いている方向を向く。

声は彼女達を追い詰めるように、徐々に近付いている。

「流石の私もあのタマにアードルフを殺したゴブリン、100名以上のコボルトとゴブリンの相手はちょっと無茶ね。どれくらい道連れに出来るか……というところかしら」

カロリーネは眼を閉じて、静かに時を待つ。

部下達に現状を打破し、コモンスヌークまで逃げきる気力は残っていない。

絶望的な状況にありながら、彼女は落ち着いていた。

そして時間が流れ、やがて目の前の草むらが音を立てて揺れる。現れたのはゴブリン。そして、その他の大勢のコボルト、ゴブリンが自分達が逃げられないよう、取り囲んでいることをカロリーネは理解していた。

「来たわね。ゴブリンということは、貴方はキジハタ？」

「如何にも。お主の前線の拠点は落とした。援軍は来ぬ。抵抗は無駄だ」

「ま、そうよね……他の者は降伏させるから命は助けてあげて欲しいのだけど」

カロリーネと対峙しているキジハタは頷く。

「抵抗せぬ者は斬らぬ。出来ればお主も降伏して欲しいのだが。戦いは無益」

「ふふ……心にも無いことを。貴方は私と同じ匂いがする。直ぐにわかった」

静かに剣を抜いたキジハタに、カロリーネは巨大な両手剣を向けて、疲労を感じさせない艶やかな笑みを浮かべる。

「貴方はタマとは違うわね。戦いに飢えたゴブリンさん」

「拙者は……いや、違わないな。拙者は真実の強さを追い求めている」

問答無用とばかりに、二人は斬り合いを始めた。
悩む時間もなく、唐突に戦いが始まる。

疲労で動きが鈍っているとはいえ、カロリーネの動きは野獣のようになやかで素早い。そんな彼女の攻撃を、キジハタは森という地形を利用して回避し、隙を作らない一撃離脱の攻撃でカロリーネに手傷を負わせていく。

「成る程。アードルフを倒しただけはあるわね。戦えば信じられる」

「修練を積みれば力の差は覆せる」

「そういう考え方、嫌いじゃないわ」

キジハタの剣が何度も身体を掠っているが、彼女には余裕があった。

相手の剣がハイオークである彼女に致命傷を負わせるには、死を覚悟した踏み込みが必要であるのに対し、彼女はまぐれ当りさえすれば致命傷になるからだ。

一方のキジハタの方にも余裕がある。

深い森では長大な武器は不利であり、地の利があつたのと、疲労困憊しているカロリーネと違い、彼は万全の状態で戦う事が出来ていた。

決着は容易には付かずに膠着し、それを打開するために同時に動こうとしたその時、両方の動きを野太い声が止めた。

「おい旦那！ そいつは俺が先約だ。譲れ！」

キジハタもカロリーネも警戒しながら距離を取り、顔を見合わせる。

「ルートヴィッヒ……いえ、タマ。二人掛かりでもいいのよ？」

「馬鹿やろう。負け逃げしやがって。褒美貰ってないぞ」

「弓の援護をもらっても私が勝っていたじゃない。貴方ボロボロだし」

カロリーネはキジハタを警戒しながら、タマを見て微笑む。

だが、タマは気にした風も無く槍で肩を叩き、泥臭い笑みを浮かべた。

「クレリアの姐さんが言うには、戦場じゃ生き延びたやつが勝ちらしいぜ」

「本当に随分図太くなったのね。で、そっちのゴブリンはどうする？」

「仕方あるまい」

キジハタは暫く考える素振りを見せた後、カロリーネから離れて剣を収める。

「馬鹿ね。勝ち目も薄いのに」

「口の悪い同僚にも良く言われるぜ。続きだ。カロリーネ」

鋼鉄の槍と両手剣が今度は真っ向からぶつけられ、高い金属の音が森に響く。

タマはキジハタと同じように木を利用して場所を取り、槍を大振りせず、狭い場所を利用して突きを多用する。

「速さじゃ適わねえが純粋な腕力ならそう大差はねえ。ここなら動き回れんしな」

「なるほど、あのゴブリンと一緒に腕を上げたのね。戦い方が似ている」

それでも分が悪い勝負だった。タマにとっては。

普段であれば一騎打ちなどせず、キジハタと組んで仕留めようと考えただろうと彼自身思っていたし、実際そうするつもりだったが、キジハタと戦う姿を見て、思わず叫んでしまったのだ。

（らしくねえな……だが、これでいい）

必死に相手の攻撃を防ぎ、反撃をしながら彼は不思議と後悔していなかった。

死ぬ可能性が高いにも関わらず。

「やるわね。大したものだわ」

「存分に満足させてやるぜ。お前を倒すのは俺だ。他の奴にはやらん」

「情熱的ねっ！」

カロリーネが大きく踏む込み、槍の懐へと入り上段から振り下ろす。

タマは更に内に入って槍を両手で持ち、大剣の根元で受け止め、体当りで吹き飛ばした。

「止めだ！」

体勢を崩したカロリーネに突き掛かろうとするが、タマは疲労と怪我で足が上手く動かずに前のめりになり、直ぐに体勢を戻したカロリーネに槍を跳ね飛ばされる。

「肝心な所で運が無かったわね……なっ！」

トス……。

武器を失ったタマに止めを刺そうとしたカロリーネの肩の矢が突き刺さる。

タマはカロリーネより先に矢が飛んできた方向に怒声を飛ばす。

「何やがる！ シルキー！ 撃つんじゃねえ！」

「これは戦争です。タマさんを死なせるのは帝国の損失。絶対に私は仲間を無駄に死なせはしません。全員、カロリーネを囲みなさい。近付き過ぎないよう。射撃で仕留めます」

冷たくシルキーは言い切り、自らの手勢に指示を出した。

「中々無粋な……だけど、度胸のあるお嬢さんね」

カロリーネは状況を把握すると苦笑いしつつ、両手剣を地面に突き刺し、諦めて眼を瞑る。

彼女もタマと同じく腕も足も既に限界だった。

どうしようもないのであれば、みっともなく足掻くよりは。そんな思いが彼女の心を支配していた。

「グルウウウウっ！」

だが、そんな彼女の周りを立ち上がり、仲間のゴブリンから武器を奪ったコボルト達が庇うように囲み、弓を構えるシルキー達を睨みつけ、殺気を放ちながら唸っていた。

「馬鹿っ！ 座ってなさい！」

カロリーネが初めて慌てて声を張り上げる。

だが、コボルト達は動かず、相手に飛び掛らんと武器を構えていた。

「武器を捨てなさい。敵対するなら同族であろうと容赦はしません」

シルキーもまた、醒めた口調でカロリーネを取り囲むコボルト達に告げる。

「おい、シルキー。馬鹿言っじゃねえ！」

「タマさんこそ……甘すぎますよ。そんなんじゃ生きていけないんです」

弓の弦を引き絞りながらシルキーは、タマに反論する。

帝国のコボルト達もまた、躊躇することなく弦を引き絞っている。

カロリーネは大きく息を吐く。

シルキーの行動は冷酷にも思えるが、カロリーネはコボルト達が形は違えど仲間の『オーク族』を護っている事に気付いていた。

自らの部下は自分を。一騎打ちを邪魔したシルキーという少女はタマを。

憎んでいてもおかしくないはずの仲間を。

目の前のコボルトは言葉通り、自身を殺すために抵抗する同族を皆殺しにするだろう。

それは彼女にとっては受け入れ難いことであつた。

「恐ろしい種族ね。貴方達、ありがとう……武器を捨てなさい。私も降伏する。私はどうなってもいいけど、この子達を含めて私の部下の命は保証して欲しい」
「承知した」

様子を見守っていたキジハタは頷く。

この瞬間、北東部の戦いは事実上終了し、帝国の勝利が確実なものとなった。

第二十七話 戦後処理とこれから

激しく続いた戦いも決着が付いた。

北東部を治めていたカロリーネが降伏したことにより、彼女の拠点、コモンスヌークは無血で降伏。残るサーフブルームもコンラートが去っていたために抵抗することなく、再度支配下に置かれた。

これにより、モフモフ帝国の北東部攻略作戦は終了し、死の森北東部はその殆どが帝国領へと編入されることになったのである。

そして、ウイペット要塞の会議室では腕を後ろで縛られたカロリーネがシバの前に堂々と立っていた。

「縄を解いて。その女性はちゃんと『降伏』しているから」
「わかりました」

シバの指示を受け、シルキーは縛っていたカロリーネの縄を切る。部屋ではシバの側にコーラルとキジハタが控え、タマもカロリーネの側に立っている。シバの安全を配慮した結果だった。

カロリーネの方は縛られていた腕をさすりながら、興味深そうにシバを見詰めている。

先にモフモフ帝国と戦ったコンラートの話ではクレリアの名前が上がっていたが、皇帝である彼の事は話に出ていない。戦う能力は

無いとの噂から、取るに足りないと判断していたのである。

戦う力が無いことは、この護衛体制と自らへの対応で明らかだ。

だが、シバは自分を遙かに上回る強さを持つはずの、エルキー族のコーラル、『剣聖』キジハタ、成長したオークリーダーのタマを自然と従えている。

彼女の価値観ではそれは不自然なことであり、好奇心を呼び起すには十分だった。

「ハイオーク、カロリーネよ。貴方が皇帝さんね」

「うん。シバだよ。よろしくね」

「部下はちゃんと生きてる？」

「約束は守る……と格好良く言いたいけどね」

シバは困ったように微笑みながら言葉を続ける。

「降伏してくれた者を殺す余裕なんて僕達の帝国にはないんだ。彼等は彼等でどうするか、選んでもらう。心配はいらないよ」

「なら、もう言うことは無いわ。覚悟は出来てる」

押し黙ったカロリーネにシバは困惑しながら、その場にいる他の面々に顔を向ける。

コーラルとキジハタは我関せずであり、タマはニヤニヤと笑って

いる。シルキーはシバの視線にも気づかず、不機嫌そうに立っていた。

クーンはそもそも落とした拠点の修復作業のために不在だ。

助け舟がないことを理解し、シバは大きく溜息を吐いた。

「一ヶ月、帝国の領内を見てもらうよ。その後、生産に付くか軍務に付くかを選んでもらう。同族が相手になるし、戦いを強制はしない」

「意外な答えね。最前線で使っのだと思っていたのだけれど。貴方にはそれが出来る」

探るようにカロリーネは秀麗な眉をひそめてシバを伺うが、シバは意外な事を言われたように驚いた表情を彼女に見せる。

「しないよ。そんな帝国の不利益にしかないことは」
「不利益？」

「オーク族が仲間になってくれなくなるし、嫌々戦うのが他の仲間に移っちゃうし、えっと……後は……軍も命令しにくくて戦いにくくなりそうだし……他にも……うー」

懸命に質問の答えを探すように唸りながら、シバはカロリーネに拙い説明を続けていく。彼女はシバの話を聞きながら、ふと、今回の闘いのことを思い出していた。

負けたとはいえ、要塞を落とす方法が間違っていたとは思えない。

勝負事にたられれば禁物だが、もし、皇帝がいなければ落とせていたかもしれない。

そして、その計画を練ったのは自発的に協力してくれたコボルト達だ。

確かに強い者がいただけで戦争に勝てるなら、自分やアードルフは負けていない。

彼等は彼等なりの新しい戦争の考え方を持っているのだろう。そう考えると彼女の常識ではない言葉の数々も、すんなりと伝わってきていた。

何にせよ……と彼女は微笑む。

「わかった。時間を貰えるのは嬉しいわ。見て回るのは領内ならいいのね？」

「え……あ、うん。必要なら案内も付けるよ。引退して退屈してるのもいるし」

「そうね。お願いするわ。少し考えさせてもらっ」

死ぬのはいつでも出来る。

不思議なこの帝国と、それを作り上げた女を見てからでも遅くはない。

話は済んだと振り返ろうとしたカロリーネにシバは声を掛ける。

「君の自由な意思で選んでね」

その言葉にカロリーネはハッと気付く。
真綿で締め上げるような鬱屈した拘束は最早ない。

忌み嫌うフォルクマールの鎖から完全に解き放たれていることに
それは同時に同士であった者達と敵対する陣営に所属しているこ
とを意味していたが……。

複雑な気持ちではあるが整理する時間は残されている。

カロリーネはそう考え、小さく頷くと会議室から退室する前に、
シバの側に立っていたタマの前に立ち、肩を叩く。

「貴方と戦うのは刺激的だったわ。また戦いましょう」
「おう、出来ればもうやりたくないぜ。いや、金輪際ごめんだ」

カロリーネは企むような艶やかな笑みを浮かべ、ちらりとシルキ
ーの方に視線を向ける。
そして、タマの首に腕を廻して深い口付けを交わした。

「ななっ！ 何やってるんですかっ！」
「おー？」

シルキーが甲高い声を上げ、シバは楽しそうな声を上げる。
他の者は状況が理解できずに呆気にと取られていた。

たっぷり数十秒程後にカロリーネはタマの身体を離し、からかうように口を歪める。

「約束だからね。私に勝てればご褒美を上げるって」

「な、なっ。お前何考え……っ！」

「ふふっ、成長したのは槍の腕前だけだったのね。さて……それじゃ失礼」

そして、カロリーネは優雅にシバに一礼し、軽やかな足取りで今度こそ会議室を後にする。

退室する前にシルキーの方に嫌がらせに成功した悪ガキのような笑みを向けて。

戦後、死の森北東部の統治は、安定するまでキジハタが務めることとなった。

軍事に関してはキジハタをシルキーとクーンが補佐し、タマの代わりに新人の幹部が三名配置されている。

彼らの経験を新人達に教え込むための人事だった。

タマは入れ替わりでオッターハウンド要塞へと異動している。

政務官は、コーラルと共にパイルパーチの復興に携わった政務官達の一部が任命された。

北部に近いサーフブルームはアードルフの暴政で荒れ果てていた

ため、この集落の迅速な復旧が必要とされたのである。幸い、以前周辺に住んでいた者達も戻り始め、他の地域からの移住も積極的に受け入れ、計画的に復興は進められている。

また、サーフブルームはシバの力による防衛能力の強化、新しく加わったコボルト技師達による強化も行われ、北東部の重要拠点としての地位を占めることとなった。

比較的被害の少ないコモンズヌークにも、何名もの政務官が派遣され、モフモフ帝国の統治体制へと徐々に移行していくことになる。

北東部の制圧により、北のガルブン山地から南のエルキー領までの街道を引くことが出来るようになり、ビリケ族を通じた取引も安定して行うことが出来るようになった。

街道は取引量の増加も促し、様々な商品が様々な形で交換されるようになり、新たな生産物の開発もこれまで以上に進んでいる。

また、この一連の戦いでモフモフ帝国は、クレリアという絶対の存在に頼らずともハイオークに打ち勝てるのだということを死の森全域に示すことに成功している。

これにより、モフモフ帝国はオーク族の支配に真っ向から対抗できる勢力として、死の森において認知されるようになった。

——第三次ウィペット要塞攻防戦について

第二次ウィペット要塞攻防戦、『ウルフファング』において、敵

ハイオーク、アードルフを撃破することに成功した北東部司令官『剣聖』キジハタは、死の森北東部の完全制圧を目指して戦力の充実に力を注いでいた。

死の森東部の復興も順調に進み、着々と準備を進めていたモフモフ帝国であったが、北東部を完全に制圧するには、問題が残っていた。

第二次ウィペット要塞攻防戦において奪取したサーフブルームが、オーク族の元東部司令官、コンラートに再奪取されていたのである。

また、ウィペット要塞近郊にオーク族の前線拠点が構築されたことにより、モフモフ帝国の行動の自由は著しく制限され、情報を集めることも困難になっていた。

ウィペット要塞に対する楔が打ち込まれたのである。

だが、この時、オーク族の方では異変が起こっていた。

サーフブルームを奪取し、そのまま防衛に当たっていたコンラートの本国召還である。この事件に関しては様々な憶測が流れたが、結局のところ、この情報は事実であり、皮肉にもこのオーク族の魔王候補の行動が北東部におけるモフモフ帝国の勝利の一因となった。

ここで、参謀シルキーがカロリーネの前線拠点を奪い、逆にコンスヌークへの楔とすることを提案し、司令官キジハタはそれを了承。

コンラートの事件に未だ確信を持てなかった首脳部は、防衛の司令官として、オークリーダーのタマを残して出陣した。しかし、この前線拠点はカロリーネの罠であった。

本軍がこの拠点を攻撃している間に入れ違うようにカロリーネはウィペット要塞を強襲。川を利用し、要塞に対して挟撃を行った。

このように第三次ウィペット要塞攻防戦は敵の思惑通りに始まり、二度までもハイオークを退けたウィペット要塞はついに深刻な陥落の危機を迎えることとなった。

だが、皇帝シバがウィペット要塞に近いサーゴの視察を行なっていたことは、モフモフ帝国に取っては幸運であり、オーク族に取っては不運な出来事であった。

皇帝シバが率いる援軍は後方より魔王候補の魔法の力で要塞に入り、後方から攻めていた援軍を倒し、皇帝自らが要塞の第二防衛線に立った。

これにより、ハイオーク、カロリーネは要塞を落とすことを断念し、退却を選択。

要塞の防衛司令官、タマはこれを追撃した。

一方で、『剣聖』キジハタは敵前線拠点を全力で攻略。拠点に籠もる敵が自由に動けないよう、徹底的に叩いた上でウィペット要塞に向かおうとしていた。

だが、要塞での戦況を偵察隊の報告で知るや追撃へと移行。

要塞の防衛隊と連携してこれを捕捉し、コモンスヌークに逃げ切るまでに打ち破った。

敵ハイオーク、カロリーネは降伏。

ここに北東部攻略作戦は決着し、死の森北東部は帝国の支配下に

入った。

後にモフモフ帝国大元帥、クレリア・フォーンベルグはこの戦いの勝利を幸運の産物であると述べており、賞賛と共に過信することなく、失敗の原因を考えるようにとの言葉を北東部を戦い抜いた幹部達に伝えている。

『モフモフ帝国建国紀——反撃の章—— 二代目帝国書記長 ボーダー 著』

第二十八話 選択

轟音と共に木に掛けられた的に矢が突き刺さる。

間隔を開けずに、二度、三度。

後になる程、中心に近い場所に矢は命中している。

矢を射ていたのは、茶色の髪の一見ハイコボルトに見える少女。彼女は大きく息を吐き、自分の背丈の半分程はある長大な弓を持った腕をゆつくりと降す。

緊張した面持ちでその光景を見ていた真っ白な毛並みの中年のコボルトが、試射が終わったことを確認し、彼女へと駆け寄った。

「クレリア様。どうだ？」

「最後の弓は中々。ただ、コボルトにこれは扱えない。力が必要」「いいんだ。まずは威力と射程。もっとこれよりも威力と射程を上げて、その後、徐々にコボルトにも扱えるように調整する。色々と武器の実験をするためにも、まずは出来る事で結果を出さねえと、鉄を廻してもらい難いからな」

左手をだらんと垂れさせている白いコボルト、マルは豪快に笑う。彼は新しく発足したばかりの武器開発班の主任であり、その試作武器第一弾の試験を行うため、クレリアのいるオッターハウンド要塞に足を運んでいたのである。

「マルさん、量産っすか！ 量産ですよ！ 量産しましょうっ！
すぐしましょう！」

そして、副主任の黒い毛並みの青年のコボルト、テリーが目をきらきらさせて、マルの腕を掴んだ。そんな彼の頭をマルは動く右手で叩く。

「馬鹿やろう。威力と射程を可能な限り維持して軽くしてからだ！」
「うっ、そんな殺生な」

怒られてしょんぼりとしているコボルトを見て、クレリアは苦笑いする。

彼はアードルフの治めるサーフブルームで普通のコボルトとして暮らしていたのだが、ウィペット要塞攻略のための準備を短期間で何度も無茶振りをされる内、変な覚醒を起こして、日常生活を送ることが不可能になったコボルトだった。

何でも同じものを際限なく大量生産したがるので、クレリアは悩んだ末、マルと組ませることにしたのである。開発そのものには向いてないので、普段はマルの命令で色々と必要な小道具を量産していた。

「噂には聞いていたけど、見事な腕ね」

「貴女がカロリーネね。報告は受けている」

途中から試写の様子を見ていた長身の美女、カロリーネはクレリアに対して拍手を送り、ゆっくりと彼女に近付く。

特徴だけ見ればハイコボルトに見えるが、カロリーネは見た瞬間、この小さな少女がコボルトではなく、違う何かであることを察していた。

所作には一切の無駄がなく、コボルトにしては表情が鋭すぎる。長大な弓を簡単に引く臂力もコボルトには有り得ないものだ。

「ええ。初めまして。コンラートから聞いていた以上に強いみたいね。貴女」

賞賛されたクレリアは、表情を変えずに背の高いカロリーネを見上げて答える。

「私は眷属だからな。シバ様の力が増せば、当然強くなる。ただ…

…」

「ただ？」

「個人としての強さはそれ程重要ではない」

クレリアは持っていた弓を興味深そうにそれを見ていたカロリーネに渡し、彼女に弓を引かせる。その瞬間、マルの表情が陰悪なも

のとなったことにクレリアは気付いていたが、無言で肩を一度だけ叩いて納得をさせた。

結局、射た矢は明後日の方向に飛んで行き、カロリーネは苦笑いを零す。

「私には弓は向かないわね。使えば便利そうなのに」

「貴女なら慣れれば引ける。だけど、オーク族は基本的に弓は向いていない」

「そうね。皆、正面からの殴り合いを好んでいる。だけど、弓も重要なよね」

弓を受け取りに来たマルにカロリーネは礼を言つて弓を渡し、考え込むように腕を組んだ。だが、クレリアは首を横に振る。

「勝敗を決めるのは手持ちの戦力を扱う方法。そして……何より『数』」

「数とは意外な答えね。常に少数で相手を打ち倒しているのに」

「徹底した戦闘訓練とオーク族の油断のお陰。どちらも、そろそろ気付くでしょう」

「そうね」

カロリーネは頷きながらも内心驚いていた。

奇跡にも思える勝利を手にしても、クレリアは全く驕っていない。それどころか喜んですらおらず、当たり前のこととして、その勝利を受け取っていることに。

その驚きを隠し、微笑みながらカロリーネはクレリアを見下ろす。

「全て貴女の予定通りってことかしら？」

「いえ……キジハタ達は私の予想以上だったわ。そこに隠れている
タマ、貴方もね」

クレリアは微笑み、その後ろの建物の陰に視線を向けた。
すると、がたと大きな音を鳴らし、タマがばつが悪そうな表情
をして身体を竦めながら、すごすごとそこから出てくる。

「や、いやあ。姐さん、お褒めに預かり、こ、光栄だぜ」

「覗き見の罰として、貴方がオッターハウンド要塞の案内を彼女に
しなさい」

「しょ、承知いたしやしたっ！」

ビシツと直立不動の構えで返事をしたタマを見て、カロリーネは
笑い声を上げた。

「ウィペット要塞でのふてぶてしさと、全然違うわね」

「あーいやもう、条件反射でな……」

クレリアも困ったような笑みを漏らし、そして、真剣な表情に引
き締めてカロリーネを真っ直ぐに見詰める。

「これからオーク族のフォルクマールも本気になる。戦争は激しくなり、両軍共に今までとは比較にならない程、多くの者が死ぬでしょう。だから、強制はしない。貴女も自由に決めなさい」

「ふふ、貴女も皇帝と同じことを言うのね……ねえ、質問してもいいかしら？」

ふと、カロリーネはクレリアが魔王候補の眷属であることを思い出し、同じ女である彼女にしか聞くことが出来ない問いがあるのを思い出していた。

「好きでもない異性の眷属になる……としたら、貴女ならどうする？」

クレリアは質問の意図を掴みかね、返答に詰まったが、少し考えてから彼女に答える。

「シバ様の眷属になった事を後悔した事はないが、昔、好きでもない相手から強引に迫られたことはある。大貴族……魔物で言うところの魔王候補だと思ってもらえればいい」

「それで……どうしたの？」

興味津々のカロリーネに、クレリアは笑って答えた。

「丁寧に断ったわ。相手の顔が原型を留めなくらいに」

「……それ、問題にならなかったの？」

「国を丸ごと敵に回したわ。だから私は今、此处にいる」

カロリーネが呆れるような表情になり、タマはうわあと呻いて顔をしかめる。

「そんなに嫌だったの？」

「心底嫌だった。好みじゃなかったし、脅迫してきたしね」

「なるほど……ね。でも、貴女にも仲間はいたんじゃないの？」

クレリアはその質問に対しても、ふふ……と小さく笑みを返す。

「仲間達もまた、私とその強者とで天秤に掛けるのよ。その結果、全てが敵に回ったわ」

「そうなるわよね」

folkマールがもし自らを望めば、他のハイオーク達は逆らわないだろう。

そうは思ったからこそ、彼女は一旦は死を選ぼうとしたのだ。

だが、クレリアはそうではなく……全てを敵に回してでも……そのことが招く結果を理解していても相手を徹底的に拒絶した。

「私は後悔していない。全ては自分で選んだのだから」

「思ったより無鉄砲でとんでもないわね。貴女」

「そうかしら」

カロリーネは自分の胸くらいの高さの背丈しかないクレリアに、少しだけおかしい敗北感を覚えながらも、楽し気に笑った。

「ね。その大嫌いな馬鹿男殴った時、どんな気分だった？」

「最高の気分だったわ」

微笑んでいるクレリアにカロリーネは頷く。

思えば強者を相手にして逃げ回することは自分らしくない。

自分は何故、フォルクマールに逆らっても拒絶しなかったのかと。

「それは楽しみね」

強い相手もオーク族になら無数にいる。

退屈しない相手も多い。戦いたくない相手もいるにはいるが……。

カロリーネは拳を握り締める。

彼女はこの時、心の中で今後の生き方を決めていた。

第二十九話 束の間の平穩

しばらくの時が流れ、モフモフ帝国首都、ラルフェルドの執務室ではこの部屋の主であるクレリアが、各地の幹部達から届けられた報告書の山に目を通していた。

静かに、それでいて真剣な表情で。

彼女だけを見ていると、時が流れていないのではないかとも思えるような静謐な雰囲気を崩したのは、執務室の扉を叩くノックの音だった。

「ちわー！ お手紙配達ですー！」

「ご苦労様」

軽い言葉と共にクレリアの前に現れたのは、彼女と同じくらいの背丈を持つ、服を着た巨大なひよこだ。

そのひよこは器用に羽で報告書の入った袋を取り出し、クレリアに手渡すと頭を下げてシバの館から走り去っていった。

バルハーピー族。木の上に住む彼等は領土問題でオーク族と敵対することもなく、戦争とは無関係に生きていたのだが、モフモフ帝国の北東部制圧を受け、旧知のシバに協力することになったのである。

彼等にとってシバは魂の友人であり、協力するのは当然だということ、彼等はモフモフ帝国に対し、非常に友好的であった。

現在はその足の速さと持久力を活かして、手紙の配送をやってもらっている。

シバは彼等が空を飛ぶんだ！ と、楽しそうに語っていたが、実際にクレリアがその光景をみた感想は、羽を動かしながら落ちていくというものだった。

しかも、彼等は飛ぶよりも走った方が数段早い。

羽の存在意義にクレリアは少々頭を悩ませることになったが、彼等は黄色くてふわつとしており、彼女の的には中々の当たりだったので、気にしないことにしていた。

ぱたぱた落ちていくのも可愛いし、わざわざ指摘することはないと。まいと。

北東部制圧から三ヶ月が過ぎ、クレリアはカロリーネへの幹部教育をオッターハウンド要塞で済ませると、彼女とタマ、元々守りについていたカナフグに要塞を任せ、彼女自身はラルフェルドで政務や訓練、幹部教育などを行っていた。

忙しいことに変わりはないが、皇帝であるシバも北東部での街道作成を終えて首都に戻っており、クレリアは久々に穏やかな日々を過ごしている。

「クレリア、そちらの調子はどうか？」

「中央部はハリアー川の手前までは確保。川越えは危険ですので、対岸にあるゴブリン族の元魔王候補が治める拠点、『バードスパイン』には、圧力だけを掛けています」

テーブルを挟んでシバと二人きりの昼食を終え、ゆっくりと休みながら彼等は話をする。休憩時の話題も仕事のことになってしまうのは、二人がそのことに力を注いでいる故だろうか。

だが、表情は明るく、久々に過ごせる二人の時間を楽しんでいる。

「なるほどね。切り崩しを始めている北部の方は敵の動きはなさそうだったよ」

「おそらく大規模な攻勢の準備を本国で行っているのでしょうか」
「来るとすれば川を超えない北東部から？」

シバがテーブルの上で両手を組んで、クレリアに問い掛ける。
しかし、彼女は首を横に振った。

「北東部から攻められれば、中央から北部を分断し、サーフブルームとの間で挟撃が可能です。魔王候補のフォルクマールは慎重な性格。危険は冒さないでしょう」

「でも、北東部は重要だよな」

「はい、私達にとっては。ですがオーク族にとってはどうでしょうか」

本格的な戦争になったとき、北東部はモフモフ帝国の命と呼べるほど重要な地域となる。だが、オーク族にとってはただの一地域に過ぎない。

そして、タマ達に命令し、相手に対してさせていること、それが相手の行動を制限するだろうとクレリアは考えていた。

「そして今、降伏しているとはいえ、元魔王候補のゴブリンの力は強大です。苦境に陥ればフォルクマールも助けざるを得ない」
「なるほど、クレリアがそう仕向けるんだね」

穏やかに微笑むシバにクレリアは頷く。
オーク族との戦力差は縮まっているが、未だ決定的なものとは言えない。

勝利を得るには地道な敵の攻略と同時に、決戦での勝利も必要となるのだ。

そうしなければ、無闇に戦争状態が続き、『他の魔王候補』にオーク族もろとも飲み込まれてしまうかもしれない。

魔王候補はシバやフォルクマールだけではないのだから。

しばらく二人は黙り込み、静かに飲み物を口にしていたが、やがて部屋の外から騒がしい声が聞こえ始める。二人のよく知る老コボルト、コリーの声だ。

「二代目！ 何処ですじゃ！ 勉強はまだおわつとらんですぞ！」

その声にシバは扉の方を向き、くすくすと笑い声を洩らす。

「また二代目が逃げたみたいだね。コリーも大変そうだ」

「二代目？」

聞きなれない名称に小首を傾げたクレリアに、シバは楽しそうに説明する。

「キジハタの息子だよ。ハーディングって長いからね。皆、二代目って呼んでるんだ」

「なるほど。私がない間にそんなことに」

「とにかくやんちゃだね。学ぶことより、剣を振る方が好きらしい」

キジハタの息子、コボルトとゴブリンのハーフであるハーディングは、コボルトの器用さとゴブリンの力を合わせ持っていると、クレリアはターフェから報告を受けていた。

ターフェの推測では、彼は種族の上位種であるリーダーであると言ったが、サンプルが少なく、確定するまでには至っていない。

しかしながら、彼女達にとってはそれは比較的どうでもいいことである。

現在はシバの館で、シバの世話役だったコリーが、最前線に赴任

しているキジハタに代わって教育しているのだが……。

しばらく、シバと二人、騒がしい扉の向こう側を見るように、そちらを見つめていたが、扉が勢い良く開かれ、慌ただしい音と共に部屋の中に小さな侵入者が入ってくる。

普通のコボルトより長い鼻。

円らかな瞳。ふわふわの茶色を基本に、白の筋が入った毛並み。

「はーっ！ コリーのじっちゃんてば、しつこいぜ」

少年はシバとクレリアには気付かず、扉に背をもたれさせ、荒い息を吐いている。

「ハーディング。何をやっているの？」
「う、うわっ！」

シバが優しく声を掛けると、少年はようやくここが何の部屋なのかに気付いたらしく毛をびくつと逆立たせて身体を震わせた。

しかし、彼は動けない。直ぐ近くではコリーの声が響いているからだ。

少年は口を抑えながらシバの後ろにこそこそ隠れ……室内にノックの音が響く。

「失礼するですじゃ。シバ様、クレリア様、二代目が来てませんかの？」

「来ていないわ」

扉の外にいるコリーにクレリアは答えながら表へと出て、彼の肩を軽く叩く。

「コリー、今日は私に任せなさい」

「む……わかったですじゃ」

複雑な表情をしながらもコリーは頷き、立ち去っていく。

クレリアはそれを確認すると部屋に戻り、ハーディングの分も椅子を用意した。

「大きくなったわね。ハーディング」

「クレリア様、お久しぶりです！」

コリーがいなくなったからか、嬉しそうに尻尾を振りながらハーディングはぺこりと頭を下げる。

ここ一年はオッターハウンドに籠もることが多かったが、それ以前は彼に名前を付けた縁もあり、クレリアも彼の面倒を見ることがあった。

キジハタの剣を学んでいるハーディングは、同じく正規の剣を扱

うことが出来、父親にも勝利したこのある彼女を尊敬していたのである。

「あまりコリーを困らせては駄目よ」

「うー、だってつまないんだもん」

足をぶらぶらさせ、ハーディングは不服そうに唸る。

「強い剣士になりたいんだ！　それで、お父さんみたいに大活躍する！」

「ふむ……」

シバはクレリアが話をしている間にハーディングの分の飲み物を用意する。

クレリアは暫く考え、小さく息を吐いた。

「強い剣士にはなれても、今の貴方はキジハタみたいにはなれないわ」

「えっ！」

落ち着いた口調でクレリアはそう断言する。

「キジハタが強いのは、彼があらゆる困難から逃げず、勇気を持つ

て戦っているから。だからみんなが彼を信じている。コリーから逃げていたようじゃ駄目ね」

「うっ……」

「それに、戦いに知識は必要なの。知っていれば仲間を死なせなくて済む」

少し涙目になっているハーディングに、クレリアは厳しい表情で続ける。

「一緒に剣を修行している仲間が死ぬのは嫌でしょう」

「やだっ！」

「なら、学びなさい。剣を鍛え、知識を蓄え、戦いを覚え、皆を守る術を身に付けなさい」

厳しいクレリアの言葉に、ハーディングは神妙な表情で頷く。

まだ子供な彼には難しいだろう……でも、少しでも伝わっているならそれでいい。クレリアはそう思い、口元を緩める。

「本来、キジハタが貴方を叱らないといけないのだけだね。彼を最前線から外すことは現状の帝国では難しいの。だから代わりに……私が貴方を叱るし、鍛えるわ」

「ほ、ほんと？ クレリア様が？」

「ちゃんとコリーの言う事も聞けたらね。私は見込みのない子に時間を割く程、暇ではないわ」

「聞く聞く！ ちゃんと勉強する！ それですごくになる！」

興奮して声を上げているハーディングにクレリアは頷き、静かに席を立つ。

「いい子ね。じゃあ、今日はコリーに伝えてあるから、剣を教えてあげる」

「やったー！」

「いつてらっしゃい」

彼女を追いかけるようにハーディングも椅子を蹴飛ばすように立ち上がる。

そんな二人をシバは穏やかに見つめ、微笑みながら手を振った。

クレリアの心中は複雑だった。

出来れば今の子供達が戦場に出る前に、戦争を終わらせたい。

そう考えていたのである。

そして、そのための機会は間近にあるのだ。

絶対に勝利をもぎ取る。どんな手を用いても。

クレリアは優しくハーディングや他の子供達に指導を行いながらも、心の中ではそう決意を固めていた。

反撃の章 エピローグ

モフモフ帝国が北東部を支配してから一年半の時が流れた。

この間、国境地域では小競り合いが頻発していたが、モフモフ帝国もオーク族も前線を強化しており、戦闘の無秩序な拡大を警戒し、大規模な戦闘が起こることはなかった。

前線の戦士達を除けば、モフモフ帝国にとっては久し振りとなる平和な一時だったのかもしれない。

だが、それも会議室での『隠密』ヨークとケットシー族の族長、ブルーの報告により、終わりを告げようとしていた。

会議室には各要塞に詰めている者も含め、帝国の主要幹部達が全て揃っている。

軍関係だけでなく、政務の関係者達も。

全員の表情に緊張の色がある。

皇帝であるシバやクレリアも。普段は図太いターフェでさえも。

全身ボロボロで、傷だらけのヨークとブルーは顔を見合わせて頷き合い、ヨークが代表して席を立ち、全員に対して説明を始める。

「オーク族の最大拠点、西部の『エルバーベルク』に動きがあった。

それと連動し、オーク族支配下のそれぞれの地域から、戦士達が移動を始めている。集結地点は西部と中央部の境界付近。その数……」

拳を握り締め、緊張した様子で黒い毛並みのコボルト、ヨークはその数字を告げる。

「最低でも二千以上！」

この数字はヨークの探索隊とブルーのケットシー諜報隊で、同様の結論に達していた。

これまでにない本格的なオーク族の侵攻に会議室はどよめく。ヨークはそこで一度発言を切り、シバの方を真っ直ぐに見た。

「ハイオークも北部の司令官、グレーティアを除いて全員が集まっている」

「当然、フォルクマールも来るだろうね」

落ち着いた雰囲気、シバの言葉に、オーク族領に部下と共に潜入していたヨークとブルーは頷く。それを確認した上でシバは隣に座るクレリアに顔を向けた。

彼女はシバに小さく頷き、静かに口を開く。

「敵は我が帝国のたった三倍。これまでと何ら変わらない」

彼女の言葉に会議室は静まり返り、出席者の殆どが驚きの表情で彼女を見詰める。

例外の者達……古い幹部や豪胆な者は緊張の色が抜け、薄ら笑いを浮かべていたが。

「モフモフ帝国は皆の力でオーク族に並んだのよ。次は追い越さなくてはね」

クレリアが微笑み、周囲を見渡すと全ての者が自信に満ちた表情で頷いた。

彼女はそれを確認すると、表情を引き締める。

「これよりモフモフ帝国は戦時体勢に移行する。政務官達は所定の補給計画を正確に遂行するように。貴方達は戦わないけれど、前線の戦士達の命を預かっていると考えなさい」

「はっ！」

この時に備え、物資補給の案を練っていた政務官達は揃って声を上げる。

次にクレリアは末席に座っている唯一、帝国の民ではないエルキ族出身の気難しそうな雰囲気青年に顔を向けた。

「コーラル。エルキー族にこの情報を報告し、死の森南部の通行権を認めてもらって欲しい」

「む……いや、わかった」

コーラルは何かを言おうと口ごもらせたが、結局、何も言わずに頷く。

彼はクレリアの言葉の意図を察していた。

クレリアは黙り込んだコーラルに頷くと、今度は三毛柄のケットシーを見る。

「クーン。貴女はサーフブルームに残っているアカタチ、ブルと共に北東部を守りなさい。やり方は任せる」

「留守番了解っ！」

三毛柄のケットシー、クーンは細い目をさらに細めてぴよこつと元氣よく敬礼した。

クレリアはそれを一瞥すると、久しぶりに会う、愚直に道を追求し続けている剣士を見詰める。

「迎撃に際して軍を四つに分ける。キジハタ」

「はっ！」

「北東部司令の任を解く。第一軍は任せる。副将はグレー、アロイス、スフィン」

「承知」

キジハタは短く答える。

そのまま続けてクレリアは、ふてぶてしい表情で座っているオー
クリーダーの方を向く。

「タマ。第二軍はお前だ。副将はブリス、エツ、ハウンド」
「わかったぜ」

次にクレリアは探索から帰ったばかりで服がボロボロのケットシ
ー族の族長、ブルーの方を向く。

「第三軍はブルーに任せる。副将にはカロリーネとシルキーを付け
る」

「……了解」

ブルーは困ったような表情で耳を触り、ちらりとカロリーネとシ
ルキーを確認した。

カロリーネは楽しそうに笑みを浮かべ、シルキーは複雑そうに顔
をしかめている。

「第四軍は私が指揮を取る。副将はカナフグ、アベル、サイン」

クレリアは言葉を切り、周囲を見渡す。

「総司令官はシバ様だ」

会議室にいる全員からどよめきが上がる。

魔王候補であるシバは直接戦闘には不向きだからだ。

「無理はしないよ。クレリア、ありがとう」
「いえ」

クレリアはシバを横目で見て、短く返事して続ける。

彼女はシバを前線に出すことに対しては反対していた。

皇帝の仕事は闘うことではない。政を行うことであるのだから。

ただ、魔王候補としてのシバが前線に出る意義と有効性は理解出来ていた。

悩み抜き、何度も話し合った上でシバの出陣を認めたのである。

「間違いなく厳しい戦いになる。だが、ここで勝利すればオーク族との戦いに決着が付く。そして、我々の勝利条件はそう難しいものではない」

感情の籠らない静かな口調で、淡々とクレリアは話す。
そんな彼女を周りの幹部達は、あるものは真っ直ぐに、ある者は緊張した表情で、ある者は微笑を浮かべながら見詰めている。

「奪う事しか知らぬ者達に、我々が無力で無いことを示す時が来たのだ」

帝国が建国されて、既に数年の時間が流れていた。

会議に執事とメイドとして出席していた初代書記官と事務長、コリーとポメラが目頭を押さえる。

「私一人が皆を守るのではない」

クレリアは立ち上がる。

「我等の帝国は一名一名、全ての者が抗う者だ」

クレリアは言葉を止め、身体をシバに向けて一礼する。

シバは頷いてクレリアの隣に並んで立つと、表情を引き締めて言い放った。

「フォルクマールを迎撃する！ 僕達の楽園を守るために！」

「我等の楽園を守るためにっ！」

熱気の籠もった大歓声が会議室に響き、全員が立ち上がってシバ

の言葉を唱和する。

その表情は一樣に明るいものであり、未来への希望に満ちていた。

死の森北東部、北部の一部、そして中央部のハリアー川の内側を領土としたモフモフ帝国は静かに牙を研ぎ澄ます。しかし、小規模な戦闘しか起こらない一年半は、オーク族にも与えられていた。

この時間を利用してオーク族もまた牙を磨き、準備を整え、今度こそ確実に敵を仕留めるべく、機を伺っていたのである。

帝国とオーク族、双方が全力を尽くす戦いの第一幕が、今、始まる。

逆襲の章 地図

二章終了時、もふもふ帝国勢力図

> i 3 4 9 0 3 — 4 1 8 9 <

死の森の現状の勢力図です。

もふもふ帝国の中央の勢力圏は川の手前まで及んでいます。但し、比較的大きなゴブリンの集落であるカベゾン、ゴブラーは勢力を失いつつも抵抗しており、二章終了時点では完全な支配には至っていません。

南はエルキー領ですが、彼等は統治にそれ程興味がなく、自分達の領域を侵さないならば、居住は自由に認めています。

それ故、オーク領との境界はあいまいで、前回の闘いの際に川までオーク族は追いつまされていますが、実質的には死の森南部の半分、ゴブラーの辺りまではオーク族の領域となっています。

エルキー族が絶対不可侵としているのは南東部の一角だけで、後は重視していません。

北はガルブン山地で、中立種族である巨龍ガルブンが収めており、良質の鉄鉱石から鉄製品を作る種族や商売を生業とする種族が生活しています。

逆襲の章 地図（後書き）

友人K氏に作っていただきました。
地図、本当に感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7489t/>

もふもふ帝国犬国紀

2011年11月15日01時52分発行